ごとより自由に離れつゝの輪ちやう作りしもの。

つきあかし【月分明】（秋）さやけし。

つきあらし【月荒】（冬）冴ゆるを見よ。

つきしぐれ【月時雨】（冬）月夜に時雨ふる〻こと。

つきしま【築島】摂津国兵庫に在る島。名称は島（シマ）とも云ふ。平清盛の造営に成るといふ。

つきしろ【月代】さゝやきの〻こと。又、月の上り際に空の白むを云ふ。

つきしろ【突合】つき合ふこと。

つきすま【付通】びたつけに同じ。連句作法季語。

つきすゞし【月涼】（夏）夏の月をいふ。圏月涼し馬洗ひゐる川の音　蕉石。

つきだい【接木】（春）接木。

つきだし【突出】遊女の初めて披露されし者を云ふ。

つきだし【突】連俳の用語。詠のゝゝらゐ句を補ずる語。

つきてんし【月天心】月が空の中天にある〻こと。

つきなし【付無】便なし、又は野なしの意。＝不相連。

つきなみ【月並】歌、或俳諧など毎月行ふこと。又、明治の俳句界にては、蕉風の宗匠の稚ふ俳句を嘲りて月並と云ひ、多く巧緻滑稽なる句題を別る語となる。

つきなみのまつり【月次祭】（夏）（冬）六月、十二月の十一日、神今食（ジンキン）を行ふ前に神祇官に、伊勢大神を始め三百四座の神祇に御幣を奉らせ給ふ式。圏　連歌にもけふ月次の祭らなり　野梅。

つきのあゆみ【及己】（夏）フォリシダカ。

つきのいで【天道経】大和より山城に至る道をいふ。多く峠を越ゆる意にて、山城にいふ。多く枕詞。

つきのあき【月秋】（秋）秋の月と同じ。圏月の秋や二百十日の二十日のこと　無腸。

つきのあめ【月雨】（秋）名月に雨ふる〻こと。＝中秋無月。圏降りいはで今宵になりぬ月の雨　尚白。

つきのあるじ【月主】（秋）月見の宿の主をいふ。

つきのうさぎ【月兎】（秋）俗説に月中に兎と三足の蟾蜍と棲むといふより、轉じて月の異名となす。＝玉兎。

つきのえん【月宴】（秋）月見の酒宴をいふ。

つきのかがみ【月鏡】（秋）満月を鏡にたとへていふ。

つきのかぶき【月華】（秋）水蒸気の月の周囲に見ゆる環の如き影をいふ。＝名月暈。

つきのかつら【月桂】（秋）俗説に月中に桂樹あり、高さ五百丈、栄剛といふ者常に之を斫るに、枝に栄剛を桂男といふ。一説に月の桂は月光をいふこと。

つきのかつらのみ【月桂子】（秋）十五夜に月中より桂の実落つるなりといふ故事。前中俳句を見よ。

つきのかぐや【月輝】（秋）月の兎を見よ。

つきのかほ【月顔】（秋）月のかしで、又美人の顔をたとへていふ。

つきのくも【月雲】（秋）月にゝゝる雲をいふ。圏いろいろの形やゝしや月の雲　清水。

つきのこほり【月氷】（秋）月の霜柱。

つきのこよひ【月宴】（秋）望月。

つきのさま【月座】月の定座。

つきのしほ【月潮】（秋）月の出潮。

つきのしも【月霜】（秋）月の照り出たる所霜、又は月水なるもある知べ白く見ゆるをいふ。〇月の雪。月の水。

つきのやうす【月定座】連俳の用語。連句の句作法季題。

つきのこと【月創】（秋）新月の細くして尖さをいふ。

つきのしほ【月出潮】（秋）月の昇る頃に満潮のさすをいふ。＝月の潮。圏江の島や潮くさしこむ月の沙　千吟。

つきのとも【月友】（秋）月見の友を吟ず。圏先一人我影来たり月の友　存義。

つきのねずみ【月鼠】（秋）月日の鼠を見よ。連俳に月の鼠を秋とす。圏月の鼠荒てやさしき圃屋敷　重頼。

つきのはな【月の華】（秋）名月の異名を見よ。圏練絹の色もうるむや月の華　汶村。

つきのひる【月昼】（秋）月の兎を見よ。

つきのふね【月船】（秋）月の空ゆくさまを船にたとへていふ。又、月見の船にたとへていふ。＝月の船。圏女貴る浮世わしたりや月の船　祥禾。

つきのみふね【月御船】（秋）月の船。

つきのみやこ【月都】（秋）古へ支那の説に、月の都に宮殿あり仙女棲む、之を月宮殿と稱す。

つきのやど【月宿】（秋）月見の宿をいふ。

つきのゆき【月雪】（秋）月の霜を見よ。

つきよ【月夜】（秋）つきよ。

つきわ【月輪】満月にたとへ丸き形、又、説話に仏の輪。

つきんだい【月額】馬の額の毛の白きをいふ。

つきのねずみ【月日鼠】俗説に或人、虎に追はれて野中の井に陥ちんとし、藤の根を摑むもとさいふ。黒白の鼠昼夜月に喰へ光陰の速かなるを訓へたること。連俳に月の鼠を季とす。

つぎほ【接穂】（春）接木。

つぎほこ【月鉾】（夏）祇園会の鉾の一、鉾頭頭に三日月の形を頂き月鉾の神像を置く。圏月鉾や兒の額の薄化粧　春耳。

つきまち【月待】（秋）廿六夜待。

つきみ【月見】（秋）八月十五日の月を賞する、清を活け、煮手、圏子寺を供へ、或は菜を献ずること。俳語には八月十五夜の月見をのみいふ。九月十三夜を後の月見といふ。＝観月。圏船頭さま月見あかしや春さに　几董。

つきみぐさ【月見草】（秋）待宵の異名。

つきみだい【月見台】（夏）高さ三尺の亭。夏の夕、四脚の黄花を開く、一に待宵草といふ。一種白花にて明に淡紅色に変ずるものあり、之を夕化粧といふ。圏待宵の宿ここそさけ月見草　雪月。

つきみづき【月見月】（秋）八月の異名。

つきみぢづき【月不見月】（夏）五月の異名。

つきん【頭巾】（冬）冬季、寒を防ぐため頭に戴くもの。其製頗多し。○丸頭巾。大黒頭巾。スミ頭巾。袖頭巾。投頭巾。キマヽ頭巾。ガンダウ頭巾。ボロ頭巾。目バカ頭巾。ホッソ頭巾。熊坂頭巾。真頭巾。宗十郎頭巾。鮫頭巾。モモリ頭巾。折頭巾。置頭巾。藤頭巾。ぶくれて圏寺詣つゞきんかな　几董。

つきゆき【月雪】月と雪をいふ。

つきよ【月夜】（秋）月の夜。圏山寺に米つくほどの月夜かな　芭蕉。

つきよがらす【月夜烏】月夜に、月の光に乗じて烏の鳴くをいふ。

つきよだし【月夜茸】（夏）イヌシメジ。

つきよだけ【月夜茸】（秋）蕈の一種、茸より丸で食ふべからず。

つきよのもり【月讀森】伊勢国度会郡にある名所。

つきよみをとこ【月讀男】（秋）つくよみをとこ。

つきあか【月赤】清酒"薩摩(ゾイ)"に出し人物。其條を見よ。

つきのこだま【櫛尾鷺】(季)春に至り桐蔭の故山に歸ら人ごとする雁を防ぐため、其尾に鶴"鶴等の白羽を飾ぎ"鷺の目に似たる知鶴"に見せしもこと。又捕獲し蓄たる羽を他の鷺の羽にて繕ふ事もいふ。＝白尾鷺。圖引すえて靜まる鷺の白尾淀　南峰。

つく【木兎】(冬)ふくろう。

つくばね【筑波嶺】(秋)つくばいも。

つくし【土筆】(春)つくつくしの略。

つくし【筑紫】九州"筑前"筑後邊の古稱。

つくしかな【筑紫琴】音頭に用ゐる十三絃の琴の稱。又"琴の琴の一名。

つくだじま【佃島】江戸隅田川の河口にある島。島中に住吉社あり。

つくだじますみよしのまつり【佃島住吉御祭】(夏)六月晦日"江戸佃島"住吉神社にて行ふ御祭の式。圖年淸の夏祭に劣り佃島旨夏。

つくだに【佃煮】鯨"海老"蛤などの極小なる魚を醤油にて煮付たるもの。

つくづくし【土筆】(春)杉菜の花をいふ。形狀筆頭の如し"故に筆頭菜といふ。ツクシ。圖川舟や

手を伸べてつむ土筆　冬文。

つくづくぼし【紐鰹】(秋)ツクツクボシ。

つくまつり【筑土祭】(秋)九月十五日"江戸辺八幡宮の祭禮(大田道灌を記る)及び同所八幡宮の祭禮。

つくばね【筑波嶺】(秋)芋の一種"形やゝ山の芋に似て"根茎大く"味美なり。＝つくね芋。圖つくね芋や水盤にちらと置て見る　二芳。

つくばね【筑羽根】(夏)淺木の名"多く深山に生じ"葉はイボタに似て"立夏の後は四節の淡綠花を開く。秋實を結ぶ。實は白豆の如くにて麻蒔し食用ゐす。＝コキノキ。ハゴノキ(古事談に春ゐすゐは誤)

つくばねうり【筑波根売】(夏)シャクナゲの花。

つくばねのあき【筑羽根實】(秋)つくばねを見よ。＝コキノキ。圖切鬼の實の吸物病にすはりけり　北枝。

つくばね【筑波】茅蜩の鳴なごに掛えし手水鉢の所。

つくばみち【筑波道】(和歌)筑波の道。歌島の道(和歌)に詠していふ。

つくばやま【筑波山】常陸筑波郡にある山。

つくも【月毛】清曲"薩摩(ゾイ)"に出し人物。其條を見よ。

つくもがた【櫛尾鷺】(春)春に至り桐蔭の故山に歸ら人ごとする雁を防ぐため、其尾に鶴"鶴等の白羽を飾ぎ"鷺の目に似たる知鶴"に見せしもこと。又捕獲し蓄たる羽を他の鷺の羽にて繕ふ事もいふ。＝白尾鷺。圖引すえて靜まる鷺の白尾淀　南峰。

つく【木兎】(冬)ふくろう。

つくばね【筑波嶺】(秋)つくばいも。

つくし【土筆】(春)つくつくしの略。

つくし【筑紫】九州"筑前"筑後邊の古稱。

つくしかな【筑紫琴】音頭に用ゐる十三絃の琴の稱。又"琴の琴の一名。

つくだじま【佃島】江戸隅田川の河口にある島。島中に住吉社あり。

つくだじますみよしのまつり【佃島住吉御祭】(夏)六月晦日"江戸佃島"住吉神社にて行ふ御祭の式。圖年淸の夏祭に劣り佃島旨夏。

つくだに【佃煮】鯨"海老"蛤などの極小なる魚を醤油にて煮付たるもの。

つくづくし【土筆】(春)杉菜の花をいふ。形狀筆頭の如し"故に筆頭菜といふ。ツクシ。圖川舟や

併用男體"女體の二峰に分る。常に不二ごと併稱せられる。

つくもがた【木兎の鷺】(冬)木兎の鷺を捕ふたる図を描えおき"他の木兎を誘ひ捕ふ二ごと。

つくもぐさ【筑摩蓬】(夏)筑摩祭の蓬をいふ。

つくまつり【筑摩祭】(夏)四月朔日(或は四月初午日)近江國筑田郡筑摩社(祭神御食津神(ウカノカミ))の祭禮。此里の女子婚姻りを定したるもの"蓬を神に獻ずる習あり。之を蓬祭ぎつゝ清幸の後に從ひ參詣ず。其始緣に依り"蓬の數を增すこと。又始緣に依り"蓬の數を增すこと。＝蓬祭。圖筑摩社(祭神御食津神)の祭禮。此里の女子婚姻りを定したるもの"蓬を神に獻ずる習あり。之を蓬祭ぎつゝ清幸の後に從ひ參詣ず。其

に十二回、高欄四方には灯籠三十個を點ず。かなり一年一月の數に樂ろになりそこを選び、數艘打揃して津島川に浮む。之を提灯祭と呼ぶ。即祭も又華浮樂、山車等を出し、其裝飾華だ美なり。（津島祭）

つこまつる【前髪祭】文字を音にて讀む、こまつる。

つこまる【靖意】心靜に、情ろ深く祥光の意ある語。

つた【寸法】すに同じ。

（祭島津）　鉾灯提（一）

つた【蔦】

つたかつら（秋）蔦の紅葉。圖 夫紅し小き實を着く、熟すれば黑し。秋紅葉。圖 何人か住みて頻出す涼の蔦紅葉。

つた【頭陀】圖國巡業すること。

つたかつら【蔦蘿】（夏）山野に自生する蔓草。蔦の如く木石に絡ひて長ず、葉は

（二）

つたかつら

葉港に似て三葉づゝ集り生じ、王六月、葉面に黃白花を開き、小實を結ぶ。花實共に高に似たり。＝山津。

つたかつら圖【蔦蘿】（秋）蔦こいふに同じ。

つたこ【井出】宿船を港より出すこと。

つたのはまえ【蔦原濱】尾州字井山にある同濱にて古來有名の地。

つたもみぢ【蔦紅葉】（秋）蔦の紅葉。圖 夫吹えて葉に人なし蔦紅葉　言水。

つたのめ【蔦芽葉】（春）二月頃、蔦の芽生じ嫩葉を出したるもの。

つち【土洲】伊國新治郡の地。度々洲に面する前に出して、土屋氏の酒藏地。

つちだいば【土大根】大根（ダイコン）をいふ。往然京ひしし故事あり。

つちあずり【土芋】（夏）アサヤヅケ。

つちかべ【土公】居の語。春は竈、夏は門、秋には井、冬は庭に在る土の神にて、其時節前（ノチシ）に其處の土を動すを凶とす。＝土公神。

つちぐも【土蜘蛛】（夏）クロムモ。

つちぐも【土蜘蛛】新潟、土蜘蛛の精に變ずと作りし謡曲。

つちこ【土蔵】土を運ぶ車をいふ。

つちこえ【土車】遇世の君父を尋れられたり、孝子、忠僕、土車を挽き若役して逢に遇り逢ふ者の謡曲。

つちぐれば【蓮鳩】いかるがに同じ。

つちだいこん【土大根】（冬）土の付きしまゝの大根。圖 口上に落落しけり土大根　桃青。

つちだけ【桃菌】（秋）土中より生ずる茸、春あり。俗に春虫の變に化するものさす。

つちぢや【土殿】土にて塗りし家屋。

つちばち【土蜂】（春）蜂の一種。地に穴を掘りて巣を營む。形、山蜂の如く、又、蜜を作らず。＝穴蜂。

つちばりのはな【土針花】（夏）深山に生ずる草、一根一莖にして、葉は莖端に數葉集り出て生じ、羽子（ハネ）の如し。夏莖上數葉出の綠花を開く。春の頃、金鍋八樣に四長く出づ。＝王孫花。

つちぶり草。圖 つちぶりや我いさしチの旅返り　笑濱。

つちぶな【土蘭】（春）土にて作りし蘭。圖 土蘭の開もゆくこと稲荷前　青蘿。

つつ【十】數量の名。十をいふ。俗に十九の數さす。

つつ

動作の引樣くさまをいふ語。「賣引の清は過きつゝ酒は口壁」の知し。

つつかなのこと【筒粥講事】（春）三保祭を見よ。

つつきのはら【鶴原】貞享五年、岡村不卜の編かし句合の集の名。

つつじ【躑躅】（春）灌木。山野に自生し又、人家にも植う。高さ二三尺より丈餘に至るもあり。葉は柳に似て小く、春夏のこの交、五瓣の花を開く。色は紅白を主とし、紫、黃、絞り等あり。○白躑躅。紅躑躅。赤躑躅。紫躑躅。落葉躑躅。鳥躑躅。平戸躑躅。雲谷躑躅。段躑躅。淀川躑躅。淺黃躑躅。岡躑躅。もち躑躅。（サツキ躑躅を見よ）圖 つゝじ野やあらゆる所に春山　業村。

つつじのまゆ【躑躅茧】（春）カサネの色目の名、表スハウ、裏青又は表白、裏紅。

つつしりうたふ【筒吹謡】笛を吹つゝ謡ふこと。又、一口づゝ謡ふこと。＝囃謡。

つつじたち【躑躅立】（夏）サナツヽジ。

つつちまま【筒綜】（夏）古く座の代の綜の名、カクシヨの條參照。

つつどり【筒鳥】（夏）常に水邊の蔭多き處に居る鳥、形やゝ鶏に似て黑し。其鳴くこと數多の紋を吐くこと云ひ傳ふる

より紋母鳥といふ。一說に呼子鳥のことなりと。＝鶯鶯。時鳥。都々鳥。國 筒鳥や木曾の裏山木蔭に似て　白雄。○父と呼ぶ聲を見て子紋母鳥　蓼太。

つつらお【筒蛭】（夏）山野を司る神の名。佐保姫の立田姫の夏の山野を神ほこらびて清水なる蛭　重辭。

つつま【疋】はづかしに同じ。

つつみがき【焼梅】（秋）醋梅（ガキ）の類。

つつみぐさ【綻草】（春）タンポポの異名。

つつみぶみ【包文】清書などに包みたる文。後朝の別れの後に贈りしものこいふ。

つつみぶ【包井】（冬）大雪日に井戸を閉じて、若水を汲む準備をすることを云ふ。圖 包井や大屋が祝詞口の内　雪鈴。

つつみぶいらく【包井問】（春）若水をいふ。

つつみをのだら【包尾鯛】（春）掛鯛を見よ。圖 鯛釣の業に見よ包尾の鯛の反り　耕雪。

つる【葛蔓】（夏）山野に多き蔓草。蔓極て長く延び根毛ある葉を有し、四月の初、三分許の白花を開く。後結實す。其蔓は繩を綯るべし。＝ツヅラノ木。葛の巳。國 引は動く手引の石や葛蔓。

つるおき【葛笠】明暦頃、流行したる女笠、

つつみ

市女笠には紅色の紐を附す。

つつみ 【丸折】縦横に曲りたる坂道のこと。＝羊腸。高折。九十九折。

つつゐ 【筒井】丸き井戸をいふ。

つと 【苞】みやげ。＝土産。苞。

つと 【苞】女の髪の後の部の名。＝ヘボ。

つと 【苞】金に、低に、などの意を含み、動詞に添て用ゐる語。

つとこ 【苞人】（春）正月廿日、伊勢山田辺の人、手土産を苞にして神職の家へ行き、賀物の拜領を乞ひしこと。大候いの衝突と混ずべからず。 圏 苞人や いつ迄もさうに椿の葉 里鳩。

つとこ 【衝突人】（秋）七月十六日、家々に秘蔵する寄附、素姓などを見むとて、何人にでも其家に深く入りて見、其家に何物は之を拒むべからざる俗。これ平常に古へ節圏に行はれ伊勢山田などの盛なりし。 圏 つとこ入や知る人に逢ふ拍子抜 蕪村。

つとこ 【苞鮒】（夏）飯を包みたる魚を藁にて包み、縄にて幾重も巻き、涼き所に釣り置きて鮒すしとしたるもの。又之を柱に巻付け置きたるを柱鮒といふ。 圏 まれ人の蔵深水ぶれ柱鮒 月居。

つとめて 朝早くの義なる語。

つとめまで 【苞山伏】能狂言の名。

つなで 【綱手】船に繋ぎて引く綱をいふ。

つなぎ 【綱貫】（冬）皮にて作りし雪沓。裏に釘を並べ打ちたるもの。 圏 綱貫の足あとまた人雪の朝 少蕉。

つなびき 【綱曳】（春）正月十三日より十四日の朝に至るまで、江州大津の人と三井寺門前の人とが、別れて大綱を引き争ひ、勝ちたる方、其年の福を得るといひ伝ふ。諸国にも又此類あり。古へ酒の世、清明の日に行ひたる拔河（バツカ）の戯と同じ。これを名く。 圏 綱曳や黄昏さそふ里童 蚊山。

つねお 【経尾】建長頃の人。藤原光長の子。初め春日有房といひ、土佐守となる、仏書に巧みなるを以て名あり。後、京に移りて、土佐源の姓を賜はる。

つねのぶ 【常信】狩野尚信の子、美朴と號し、古川史、寛永狩野といふ。夜の竹を画てより技倫大に進む。狩野家三大家の一に称せられ、又俳諧をよくす。正徳三年歿。

つねみち 【経政】但馬守経政は、蔵人の職に死したれば、生前の愛器を棺前に手向て供養せしに、其霊現はれ、昔を語る加の謡曲。

つねよ 【常世】佐野源左衛門の名。鉢の木を見よ。

つのかくし 【角隠】女の帽子の一種。幅狭き裂にて、頭髪の上より芋の角を覆ひ巻くもの。

つのかみ 【角髪】少年などの前髪あるもの、稚。

つのきり 【角伐】（秋）鹿の角切。

つのぐみし 【角組酒】（春）酒の名。

つのだいし 【角大師】元三大師の画像をいふ。角生えたる悪鬼の知き姿を付に抹ん、浴田の時に さし置き虫を除く呪とするもの。

つのだらい 【角盥】両方に二様の角なる様の出し塗盥。深くして底に栓あり。手洗、鼎漱等などに用ゐるもの。

つのはず 【角矢】俗楽器をいふ。伊勢の忌詞。

つのまた 【弁】あげまきに同じ。＝振分髪。

つのむし 【角蟲】（夏）蓮などに生ずる赤褐色の小虫。羽あれど飛ばず、走ること速し。＝ツノアブラムシ。

つばめ

つのむし 【角虫】（秋）カミキリムシ。

つばいち 【椿市】大和城上郡の地。初瀬寺に至る道。

つばいもち 【椿餅】椿の葉にて包みたる餅。古へ歳朝の時の饗とす。

つばいもち 【椿桃】（秋）桃の一種。実深赤色にして毛なきもの。＝油桃。

つばいもちのはな 【椿桃花】（春）桃花を見よ。

つばきうち 【椿打】手に椿を掛け夫々はにきて其力角によりて吉凶を占ふこと。

つばき 【椿】（春）源木、山茶花（サザンカ）に似て樹葉大く、稠厚く、鬱美なり。其花は単葉大、向状にて蕚は分る。色紅、白、淡花等あり。二月頃開花す。実は圓くして無花果の如く、老て落つるときは裂て四裂す。皮を剥き仁をとりて油を採いる。一種冬開くものを冬椿といふ。＝二階椿。伊勢椿。山椿。彼岸椿。深椿。八重椿。つらつら椿。落椿。 圏 音なして重く落る椿ぶな 呂蕉。

つばきうゑ 【椿接】（夏）夏の土用に椿の接木すれば良く根づくと云ふ。 圏 椿接 青々。

つばきのみ 【椿炭】（冬）カサネの色目の名、表スハウ、裏赤（春にも用ふ）

つばきのみ 【椿實】（秋）椿を見よ。 圏 実椿や立ちにはまぼ雄の針 野坡。

つばくらめ 【燕】（春）つばめ。

つばくろ 【燕】（春）つばめ。

つばくろぐち 【燕口】三方を覆ひ一方を開けたる布の袋。書類などを入れて携ふるに用ゐるもの。

つばす 【津走】（夏）六月頃の鮎（ツバ）をいふ。（こにツカナとも）。＝初鮎。 圏 鐵衛のすがれに走る津走かな 月東。

つばた 【茅花】（春）茅の花をいふ。チの項参照。＝茅針。 圏 川島や茅花乱れて日は斜 蕪村。

つばなかす 綿屑などを綴ぎ合ること。

つばのはな 【木瓜花】（冬）つばき（石榴）の花をいふ。其葉薬路に似て堅く厚く、色、蕚は厚くして深紅色、光沢あり、冬早く開く。形やゝ小菊の花に似たり。＝寒海棠。 圏 石目の破れてお、しや石榴の花 胡及。

つばめ 【燕】（春）人家、又は堂宇の軒に巣くふ小鳥。羽は紫黑にして、翅と尾長く、尾は叉をなす。飛ぶこと迅速なり。春分の頃暖地より来り、秋分に至りて去る。＝つばくらめ。つばくろ。乙鳥。 圏 鎌倉の街道なのすがらな宿白。

つばめおくる 【燕送】（秋）秋分の頃、燕の北地に帰ること。 圏 澤山になりて燕の別れに我 大路。

つばめまたる 【玄鳥至】（春）七十二候の一、二月中の第二候。此頃、燕来ることいふ。 圏 燕来て紋横鈎簾の面るなり 鷹物。

つばめ 【燕津】奥州宮城郡岩切村に花り、燕津峠は元禄の道程碑に云ひ傳ふ。

つばめうち 【燕受用】春の頃に金を借りて遠々に秋まで、に返すこと。一説に春秋二季に仕拂の勘定すること。

つばめ 【燕子月】（秋）八月の異名。

つばめ 【燕子】（夏）燕は春来り夏、産育して、其雛ない。 圏 巣の中や身を縮くして親燕 峰風。

つばめ 【燕巣】（春）燕はよく害虫を食ふを以て、農家之を保護し、軒に小板を挿み置きて之に巣くはしむ。 圏 乙鳥や巣の中せまうさまの言 そのの。

つば 【鍔瓶】紙張の初期にあたりて起る一種の粉氣。＝澤倉。

つばくら 辛貝（ニシ）に似て、角ばりたる蓋ある

つまさき

つまづき

つまどりがね

目。

つまさき【爪打】（動）ゐんちうち。

つまだち【爪立下駄・下駄を云ふ古語。

つまだる【圓】丸き形のこと。

つまだる【壺】こりで。壺。

つまだる【鶴】農家にて小兒を入置く籠。藁にて編しもの。

つまだる【竹井】雖れたる井戸のこと。

つまどり【竈入】注連飾の通語。竈に注ぎ入る主方く手り迎置すること。

つまどり【投壺】こりこを見よ。

つまどり【壺切】歴代の皇太子く傳ちる、寶劍の名。淡の源頁の帝たる劍なりしこ云ふ。

つまどりぞめ【壺裾模】古語、婦人の外出に市女笠を被り、清衣を着たるを云ふ。

つまどり【壺裾】大和國高市郡壺裾寺を云ふ所。ゆ本尊は千手觀音にして西國三十三所ふ。ゆ札所なり。

つまど【可愛】かはゆ。こと。

つまなれ【壺菫】（春）菫を云ふ。花の形壺裾婦人の如くなれば名りこ。

つまべにのまめ【壺菫菫】（春）カサキの色目の名、表紅、裏紫。

つまぼうき【壺前箒】固ひしたる前箒。森に或種の草花なこに云ふ。

つまべ【端々】小兒の弄ぶ玩具。又、伏見新町の初午に賣るもの。

つまま【間】宮中或は邸宅中の用部屋。轉じて間に居る官女の稱。

つまはじき【間弾】は端女の稱。京には端女部を集めたるものなれど、江戸には河岸女部こ稱する下等の者を云ふ。

つまはら【間町】其間のこと。

つまびらと【端書】武州多賀（今の宮城郡市河村）に大鳥ある石碑。寛武帝の時建て問、大鳥英人多賀城を攻めし時、建て多賀城を修したる時建てしものこ云ふ。

つまべにのまめ【妻紅梅色】（春）カサキの色目の名、表紅、裏紫。

つまべにのまめ【妻紅梅衣】（秋）カサキの色目の名、表紅、裏紫。

つまや【端屋】母屋に附屬したる建物の名。物置の如きこと。

つまやき【端焼】（春）サザエの肉を刺み、殼のまゝ醤油にて煮たるもの。圖 壺焼の壺屋にて火の消れ 嘉書。

つまやまり【弁井祭】（春）三月三日、河内國古市郡、弁井八幡宮（源頼義を祀る所こ云ふ）の祭禮。

つまれ【端田】水田の水深くして田植するこ能はざるこ、苗を植ゑて後、其苗を生長せしむるもの。

つみかさり【津村祭】（秋）九月十七日、攝王訓寺鎮守津村の產土神、御靈社（菅原道真）の祭禮。

つみ【塔婆】土の盛上りて小高くなりし處を云ふ。

つみ【詰】茄切に同じ。

つみこみ【ツンツク踊】（秋）七月十三日より十五日迄、伊勢國三重郡日永村（東海道の須田こ追分の中間にあり）にて行はるゝ盆踊を云ふ。小童手を取合て古潮なる唱歌を謳ふ。圖 古き世を忍ぶツンツク踊、なに 三川。

つみこみ つゝし上りたる知き丈の短き衣服を着たるを云ふ。

つみこまち【壺座頭】能狂言の名。

つめたし【冷】（秋）ひやゝかなり。圖 試たてゝ冷たき今朝の水面かな 正芝。

つめれば【爪蓮華】（夏）原野に生ずる草、又は古き瓦屋の上にも自生す。岩蓮華に似て、葉厚く尖り長さ二寸ほど、夏、七八寸の莖を出し黄色の花を開く。＝瓦松。昨葉同草。圖 瓦屋寺に

つまはな

つみた

つゆ

實の小さき梁のこと なり。

つまはな【爪紅花】（秋）鳳仙花。

つまべに【爪紅】指の爪きは紅をさすこと。手先を白く見せるために紅なり。

つまみな【摘菜】（秋）まびきな。

つまむかへぶね【妻迎船】（秋）七夕に牽牛の織女を迎へに出づる船なりこ云ふ。妻の島（ごう）船こも云ひ、又之を送りゆくを妻送船こ云ふ。世俗、七夕祭に七種舟こ云ひ、ひで、船の形を作りて供ふるも之を迎へ舟。圖 一葉やさゝが岸に妻を迎へ舟。

つまめ【詰】連俳の用語。春秋雜こ、夏冬は三句續けば其以上は續くること能はざるを云ふ。

つまりがさ【爪折傘】古く官人なこの用ゐし長柄の傘。其骨の端内の方へ曲りしもの。

つも【茶臼】（秋）蛇苞（ヒツ）（茶筅）の雛。小鳥詩に用ゐる。＝すゝめだか。すゝみ。

つもだか【鳥】の目の小鳥に通ふ木陰なかたかな 其角。

つゆ【草】（春）春、野にて蔓、井、嫁菜、土筆等を摘む こと。＝草摘。圖 ○草摘の田螺の殼 おはぎ摘。ぬるく摘。圖 ○草摘の注香の田螺 ぬるうち 遠彦。

つゆ【津守】攝津の國住吉一帯の異名。住吉の神官を業とし、其家を津守氏こ云ひし古稀。

つゆのこと【津守国基】攝津國住吉の人。

つゆのみや【港花園】（夏）中古、京都北野の梅花園にて興行あり、連歌會。

つゆ【梅雨】（夏）ばこ云ふ。

つゆ【露】（秋）秋、草木の葉なこに宿る水滴。單に露こ云ふこの外は秋の季なり。面く又は玉。露散る。朝露。夕露。露けし。露の中にも置く秋の露 遠彦。

つゆあめ【梅雨時雨】（夏）つゆあめ。

つゆあめ【梅雨間】（夏）梅雨（ばい）の終りを云ふ。＝梅雨時。梅雨の雲を吸出る蚊やつゆあめ 西國。

つゆあらし【梅雨嵐】（夏）ゆうち嵐。

つゆいり【梅雨入】（夏）梅雨（ばい）の初を云ふ。＝入梅。圖 こゝ、くしてつゆ梅雨に入りし雨請かな 祐昌。

つゆくさ【露草】（秋）原野に布生する草、葉は形小鮒の如くにして厚く、葉の節毎に五枚生じ、夏三節の深碧花を開く。早曉に五月ある頃開き、朝を過ぎすでに萎む。

つきかた

形に因て蓮華ともいひ、蓮華の名に依りて休憩とす。古は月華と稱して、衣服に摺り放れとす。＝蓮華。有花。圖蓮華や茎中の兄の剃ったし　几董。

つきかき【蓮】（はす）蓮に下語あるっこと。＝蓮けし。蓮けっこ。圖蓮けしや芋の葉蓮の葉の蔭　樗堂。

つきこいづき【蓮水月】（冬）十二月の異名。

つきこいみず【蓮水】（冬）蓮の水りて蓮の知んなるっこと。

つきこいもの【蓮茎】（はす）蓮の茎りて蓮こなら人こすする頃をいふ。圖蓮茎や夜もますらをが四時雨　重茎。

つきこがれ【蓮甘煎】（はす）蓮茎へ蓮茎へし て蓮甘煎の蓮りたる知へなるをいふ。圖山路や蓮の蓮を打つ蓮甘煎　沂故。

つきこがら【蓮殼】（はす）蓮にて物の殼るへっこと。

つきこがり【蓮殼】（はす）蓮林の蓮の牛に焼りて蓮こなるをいふ。＝水蓮。圖蓮殼に蓮蓮ともや蓮殼　蓮茎。

つきこもり【蓮籠】（夏）蓮籠に下蓮に「蓮し」の語を附すこと は夏季こと で、又稱して蓮籠こと。圖蓮籠し忘れ咲すこる社若　蓮茎。

つきだけ【五月茸】（夏）梅雨中、生ずる菌なり、食用こなるものなし。

つきたくさ【蓮華草】（夏）蓮の異名。

つきたき【蓮敷】（はす）物の上に置きし蓮の落ちて敷るっこと。圖蓮ちるやとさい此世に用なしこ　一茶。

つきこんどん【蓮天蓋】大炭、寺堂等にある天蓋注。

つきこのてがま【蓮王部兵衛】蓮實天和時代、京の祇園、鳥羽、北野等に出でノ活語なるなしたる人。社語の元祖なり。

つきだま【蓮玉】（はす）蓮こ いふに同じ。圖蓮の葉を蓮びあり けっ蓮の玉　風雪。

つきたん【蓮月】（はす）人の月の蓮の知へはっなるっこと。現体に季こ す。

つきたん【蓮華未】（夏）清洗国井生山田、東花洗左衛門、宅地の内にある穴。入蓮＝より稱水勢ず、蓮華時こ の穴。圖入蓮の未の田菜　鳥酔。

つきたる【蓮殺】先時して蓮こ蓮こ。

つきたれ【蓮華時】（夏）つゆあめ。圖雨はれ やっ三軒蓮人で蓮殺　一茶。

つきつき【蓮根】（春）蓮の地下茎。蓮の蓮根より蓮へ。蓮の蓮根より蓮へ。

つきつき【五月雨】（夏）梅雨の異名。皮にて作り蓮に出づ。圖蓮蓮ちら へ梅雨にけり　青蓮。

つきつくり【蓮作】武具の名。皮にて作り蓮に蓮へるもの。

つきつけ【刺】茶店にて下蓮なるこの茶菓に蓮茶なる文句を刺れいふ蓮語。

つきつこ【蓮蓮】れんこが。

つきつこ【面蓮見】（冬）蓮見せ。

つきつこ【貫之日】紀氏、字多朝の歌人、土佐こなりて生所より帰る 日記を、今和歌集を撰す、勅命の序文なり。

つきつる【水柱】（冬）樹上、新梅こ蓮こる水をいふ。＝たるひ。蓮来。蓮れた

つきつる【釣船】（はす）蓮釣の牛蓮こ て蓮釣こ、蓮こ月蓮に蓮こ皮 蓮こ蓮こ蓮こ

ごくらくじ　ごくそつ　ヒ

ごくらくじ【極楽寺】（冬）天狗の業を見よ。

ごくり【獄】連俳の用語。連句のうちに囚人の縁のことを言ふ。例は春、秋、雜の句は二句にて結ぶを定とされば、其規定の如ッルルン、又は四句續くことをそなをいふ。

ごくれつし【獄死】（秋）れいし。

ごくれ【獄】詩曲、能にてシテ又はツレキを連立て出る役。

ごくれだち【獄】つるるに同じ。

ごくれごろも【極樂寺】家社法師の著たる國學の名。

ごくれごろも【極樂寺】（雜）連の異名。

ごくもん【獄衣】連を厚く綴りてこれに彫刻したるもの。金、銀、青、白などに多し。

ごくりん【獄人】人を吊ふこと。又、連歌のため使ひ俳諧。

ごくな【連歌】（冬）庶の頃より行はれし行事。我國にては十二月廿日、空中に下駄やらふこと等し、一年の穢氣を祓ふ。

ごくなを【極月】古く京都東國社の使令なりし健者。代々、建仁寺町に住み、牛馬の行列をなし、常時は弓矢を製して之を賣る。＝大蔵人。

ごくなをのあり【極月家】（春）天狗の業を見よ。

ごくま【連】連俳の用語。連句に同類のものの續くを言ふ。例は春、秋、雜の句は二句にて結ぶを定とされば、其規定の如ッルルン、又は四句續くことをそなをいふ。

ごくれ【獄】詩曲、能にてシテ又はツレキを連立て出る役。

ごくれだち【獄】つるるに同じ。

ごくれごろも【極樂寺】家社法師の著たる國學の名。

ごくれごろも【極樂寺】（雜）連の異名。

ごくもん【獄衣】連を厚く綴りてこれに彫刻したるもの。金、銀、青、白などに多し。

ごくん【連歌

ふ人。（羅浮仙女の後裔説）

てんじつ【蕃武】（秋）七月の異名。

てんじゅう【紙手洲】下總淀上郡に在り、謝の洲嶋さして名あり。又、木綿織を産出す。

てんじんまつり【紙手沙干】（夏）六月十五日下總紙手の渚、沙干して近郷の諸人多く集る。同日祭禮あり。

てんすいきょうは【朝顔朝顔】（秋）草の名、莖の高さ四五五尺、葉は掌に似て、秋、六瓣の白花を開く、狀朝顔に似たり。實は圓くして大さ寸餘、殼に刺あり。花實を食ふは狂乱す、故に キチガヒナスビともいふ。＝曼陀羅華。 圖 朝顔の別名三日入日なり 秋部。

てんたい【雑説】（夏）眞金蟬。＝蝉殼。

てんぢゅう【手打】（冬）顔見世を見る。 圖 在山を、こゝ、てゝ、むし手打の人數、な 蔵在山。

てんちゅうし【光殿司】名は明光。美濃國の産、東福寺の衆主たるを以て世人、光殿司といふ。俳諧に名あり。慶長時代の人。

てんつ【丁寸】支那にて事なきの時、產而て餘殺のために用ゐし銅錢。

てんとう【紙手沙干】（夏）六月十五日下總紙手の渚、沙干して近郷の諸人多く集る、同日祭禮あり。

てんとうさいは【朝顔朝顔】（秋）草の名、莖の高さ四五五尺、葉は掌に似て、秋、六瓣の白花を開く、狀朝顔に似たり。實は圓くして大さ寸餘、殼に刺あり。花實を食ふは狂乱す、故に キチガヒナスビともいふ。＝曼陀羅華。 圖 朝顔の別名三日入日なり 秋部。

**てんたつ

てんぐのうちわ

てんぐのはな【天狗の花】（秋）高さ五七尺の淮木、葉は空木（ギク）の如し。夏小花開り咲き圓形なす、色青くして後に白し。＝紡圓花。圖 明鑑のこころが落けりてまり花　乙峯。

てんぐのまる【出丸】本城の側に突出して造りし遠城。＝出城。

てんがは【天河】（秋）あまのがは。

てんがい【天蓋】佛家にて用ゐる、長き柄のつきたる絹傘。

てんがく【田楽】饗宴時代に行はれし法師舞。鼓、ささら、銅鈸子などを用て拍子とす。

でんがく【田楽】豆腐、茄子などに味噌を塗りて焼きたる料理の名。

てんがやきや【天下茶屋】攝津西成郡住吉街道にあり。豊臣秀吉、堺へ往復の途時、此茶屋にて茶を喫したこと、ふ。

てんかん【天漢】（秋）あまのがは。

てんきゆう【鳴鏑】鏑矢の鏑々を抜き離すること、ふ。

てんく【俳句】連詩の発句の第三句をいふ。前の意を轉ずる意にして韻脚を踏まざるなり。

てんくだし【天狗風】つむじ風をいふ。

てんくだけ【天狗茸】（秋）蕈菌の一種。圖 菌すき淡白の味や中善寺　有盛。

てんぐつぎ【天狗礫】何方よりとも知れず降なく石の來ること。

てんぐやま【天工岩】美濃武儀郡よりの名。時々て沸くして白し。＝天具岩。天都峯上。

てんぐのはうき【天狗茶】（春）正月二日の夜、京都清水の法召寺、愛宕寺の客殿に集り南北二行に座して茶を飲り、茶碗茶なる事をなし、茶了つて堂に登り大に門扉を敲き又は法螺を鳴し、其間に等身の王を貼し、以て惡鬼を祓ふ。これ年の王加持の法なり。一説に其年の祈願事の事を定むる爲なりといふ。＝法召茶。圖 愛宕（ギ）寺天狗茶。圖 法召茶　つちの酒もり更ゐ松の内　重厚。○酔狂づくしの天狗に似たり愛宕寺　車蓋。

てんぐはいかい【天狗俳諧】二人以上寄集りて句の上中下の三を鈴々勝手に作り後に調合せて一句を仕立る戯。又、婦樂のものの集りて俳諧を爲す。

てんぐまい【天狗舞】（秋）蕈菌の一種。

てんぐまつ【天狗松】（秋）蕈菌の一種。

てんぐのうちわ【天狗の団扇】（夏）黄烏瓜の根を水煮して製したる菓子。＝白し天瓜粉　召波。

てんぐまつり【天狗祭】（夏）六月六日をいふ。決の眞宗が勅定したる祖日。

てんけい【傳教】ヤイヤヨカを見よ。

てんけいだいし【傳教大師忌】（夏）かなづき忌。

てんけいえ【傳教會】（夏）回前。

てんし【天蓋】法華の時、天蓋といふ者を蓋す、爲之を召せしも蓋せず、後に蓋さ、其父王伯、内裏に蓋され、蓋をう、ち、天蓋を成佛することいふ節の讃嘆。

てんじ【天師】道術者をいふ。

てんじ【典侍】内侍の次に位する女官。

てんじ【天心】天空の真中をいふ。

てんじん【天神】天神は菅丈夫に次ぐ道女の稱、梅の神也。こ云云【天神】菅は延喜中五年なりし故、天神の縁日に因み命けしこ、京、大坂の外にて江戸に此名稱なし。

てんじん【鳴鈴】三味線の頭の曲りたるところをいふ稱。

てんじんまつり【天神御忌】（春）北野御忌日。

てんじんはじめ【天神始】（春）初天神を見よ。

てんじんばな【天神花】（春）初天神を見よ。

圖 天神花貫うてほゝ笑待ちし心　錦朗。

てんじんみず【天神水尾】（夏）天神祭の時、式島の旅所前の河中に水尾杭を打つこと。

てんじんやま【天神山】（夏）祇園會の一、山の中に社あり菅公の像を安す。圖 天神山立るやこれも一夜松　政信。

てんしやうり【天正月】（冬）十一月の異名。

てんしやうのまつり【殿上淵酔】（冬）十一月中寅日（五節（ギ）の翌日）宮中清涼殿に月酒宴を賜りて、所々の殿に主ちを誘ふ。

てんしゆ【天守】城の本丸のうちに殿層にも高く築くし建。＝天主。

てんしゆ【鳴手】荒磯の頭に貫きし絃を巻きつくる所の名。

てんじゆん【殿参】（春）三月の異名。

てんじゆく【殿天部】（夏）かイコ。

てんす【典主】寺院にて寺内の式法、禮法等を主裁する役僧。

てんせん【天穿】（春）支那の俗に正月廿日をいふ此日紅鏡を以て煎餅を穿ち屋上に置く補天穿といふ。＝煎餅つなぐ。圖 天穿や柿にうけたる春の色　去甫。

てんせんぐわ【天仙果】（夏）いぬびは。

てんそ【典座】禪家の茶所を司る役僧の稱。

てんた【田員】むぐらもち。

てんそう【天窓】引窓のこと。又、頭のこと。

てんそう【傳奏】禁裏に武家よりの奏聞を傳達せし職の名。

てんそうだい【傳奏下】（春）新年、朝廷より貴族の傳奏を幕府に請はさに、其役の人東海道を江戸に下ること。圖 傳奏の雲井にうくる鶴見ゆ　沾徳。

てんそうのうえた【田員雲鶴】（春）田員化して鶴となるを見よ。

てんそうのうえたのうえた【田員化鶴成】（春）七十二候の一、三月節の第二候。此頃、田員、鶴に化する なりこと。圖 鶴さしなら田員で参会員うな　前鶴。

てんたいのいはいおう【天台禮拝講】（春）禮拝講。

てんたうはんぐう【天道参詣】（春）てんこうはんぐう。

てんたうぶね【傳道船】通常舟より小なる舟にて、河港に用ゐる荷船。＝運搬船。天道船。

てんちのはる【天中節】（夏）五月五日午の刻をいふ。支那の古俗。又、入月二日を天中節といくこ、傳説には多く五月こ。天中除蠱家の言に、此日凶惡なるを以て天中礼を貴護の門戸に貼ること云ふ。

てんぢくぐさ【天竺花】（秋）菊の異名。

てんちやうこうこくこうこう【天長国忌】（冬）十二月三日、近江國志賀郡崇福寺（天智天皇の國忌を行ふこと。圖 御國忌や・・・れよ

り後な戸さゝぬ代　貞室。

てんちやうせつ【天長節】（秋）新暦八月卅一日、今上天皇陛下御誕生あらせられし日を祝ふ。宮中にて御宴を行はせられ、外務大臣夜會を催し、民間には酒を酌み國旗をかゝげて祝し奉る。　國　軍艦に天長節の夜會哉　五城。

てんてき【點滴】雨水のたるゝこと。

てんでんむし【蝸牛】（霞）かたつむり。

てんとう【傳燈】禪家などにて世々、其教旨を傳ふること。一燭の火を百燭に移すも皆煌々として同じ光明を發つの意。

てんとうねんぶつ【天道念佛】（春）二月十日より十二日まで、下總國千葉郡谷津村、西光寺にて行ふ踊躍念佛。八日より村内の小兒、各戸に藁を乞歩き、之を同寺本堂前に敷き、中央に棒へたる壇を取巻きて念佛踊をなすといふ。

てんとり【點取】點取俳諧ともいふ。點を取るためにする俳諧。

てんなんぴやう【天南星】（霞）草の名、春宿根より生じ、高さ二三尺より六七尺に至る。一根一莖にして莖圓く直立し、淡綠にして白斑あり。夏初、莖頭に花を開く、其下部筒狀にて、上部は蒲花の一瓣の如く開き、綠と紫篤の線あり、筒中に圓き黃白色の葉あり、花の後南天に似たる赤き小實を結ぶ。根を藥用とす。＝蝮草。　國　天南星澤水臭き寛かな　昆六。

（天南星）

てんぷ【田麩】鰹節を細末とし煎りて、甘く煮たる食品。

てんぼう【手棒】双手、又は片手の無き人をいふ。

てんぼふ【傳法】無錢にて興行場へ立入ること。淺草傳法院の下人より起る。

てんぼふせがき【傳法施餓鬼】（秋）七月十六日、攝津西成郡傳法の正蓮寺にて行ふ施餓鬼會。

てんぼふぶね【傳法船】攝津國傳法の名より起る。多く小舟にて屋形船もあり。＝佐太平舟。

てんぼふやき【傳法燒】山城伏見稻荷の初午に賣る土器。

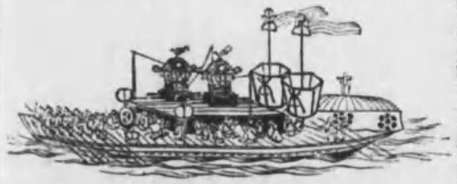
てんま【傳馬】荷物運送などに用ゐる船。

てんま【天滿】大坂の北にあり。天滿宮の社あり。近傍に青物市場あり。尤も繁華を極む。

てんまのみそぎ【天滿御祓】（夏）天滿祭。

てんまのやすまめ【天滿流鏑馬】（秋）九月廿五日、大坂、天滿天神社にて行ふ流鏑馬の式、同社の社家之を勤め、鳥居の邊より天滿橋に向つて馬を驅せ的を射るといふ。　國　やぶさめに顔並べたる茶店かな　來山。

てんまつり【天滿祭】（夏）六月廿五日、大阪天滿の天滿宮の例祭及御祓を行ふ。神輿二基、羅波橋より舟にて夷島の御旅所に幸し、同夜五つ過に至り



（天滿祭神輿船）

還幸す。往還の水上に諸物、車樂の船多く出で水陸甚だ賑ふ。之を鉢流しの神事といふ。＝船祭。○船ダンジリ。神輿船。天滿御祓。賣ひ汐。水錢。天神水尾。　國　鉢巻の紅絹吹く天滿祭かな　來山。○追かけて跡のが先か舟祭　杉候。

てんみやうがま【天猫釜】下野安蘇郡天明村にて製せしと云ふ鐵製の釜。茶人多く珍重す。＝天明。

てんもく【天目】抹茶の名稱。盆立を云ひ、或は茶碗の名とす。

てんもんだうのはな【天門冬花】（霞）草の名、海邊の砂地に多し、春の末、宿根より生じ、葉は杉に似て柔く長し、刺あるものとなきものとあり、夏葉間に小白花を開き、圓き小實を結ぶ、熟すれば白くして、中に黑子透き見ゆ。根は長さ二三寸

（天門冬）

砂糖漬として食ひ、又、藥用とす。　國　月窓。

てんやく【奥藥】醫藥を司りし役の名。

てんらふ【天牢】（春）元日の異名。

てんりうじ【天龍寺】山城葛野郡嵯峨にあり。京都五山の第一。

てんわうさん【天王山】山城乙訓郡山崎村の傍に在る山。＝山崎山。

てんわうじ【天王寺】四天王寺を見よ。

てんわうじいちじようぶ【天王寺一乘會】（秋）九月十四日、或は十五日、大阪四天王寺太子堂に安置せる、聖德太子の木像を六時堂に移し、供養を行ひ舞樂を催す式。一に挿祭ともいふ。　國　未來記のこれも一つや一乘會　淡々。

てんわうじうしいち【天王寺牛市】（冬）十一月、攝津四天王寺の門前に牛市立ち、諸國より來り來り博勞す。價きまれば牛に米を咬まして手打の證とす。　國　牛市に朝の霜や天王寺　貞意。

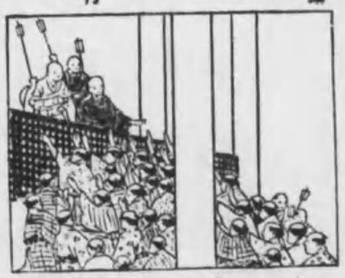
てんわうじかばう【天王寺蕪】（冬）攝津天王寺村に產する蕪、形極めて大にして味好きを以て名あり。

てんわうじきやうながし【天王寺經木流】（秋）經木流。

てんわうじきやうくやう【天王寺經供養】（春）三月二日、大阪四天王寺にて、聖德太子の像を夢殿より堂にて西の口に出御し、經を供養し、聖靈院にて樂人等舞樂を奏す。之を樣の下の舞といふ。

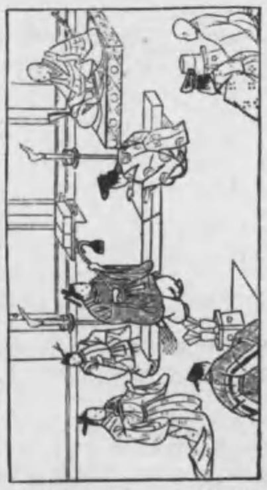
てんわうじけちえんぐわんややう【天王寺結緣灌頂】（秋）昔時九月二十日、攝州四天王寺にて行ほれし會式。後世絶ゆ。　國　灌頂に來合ふも緣よ天王寺　徳元。

てんわうじのだせ【天王寺午王出】（春）正月十四日、攝津國四天王寺六時堂にて修正會を行ひ、村民集りて堂の樣を踏み鳴らし、大音にゴダセ〳〵といひて午王を賜ふれば、僧等堂上より午王



（天王寺ごだせの圖）

司出仕し、てそを奉す。こに聖徳太子が「愛
ふ。正春匠黒宛を始し、其他、曙春匠副
大工、時次大鼓を奉す。秋の切金彫、愛



（圖之始幷手堂金寺王天）

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺金堂手幷始】 ＝六時金堂正會。

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺金堂手幷始】（春）春匠の事を初めて執く給ひし趣意によ
り言ふ。

てんのうじはじめ 【天王寺生身供】（春）正月五日より十四日迄、大阪天王寺太子
堂に於て修する會式。其式、別所にて七
て十菓餅類の供物を調し、公人、白洲に立ち
来僧堂上に坐居で修供して賞前に至れば
ふ。之を生身供といふ。太子の御誕生供
會のためなりといふ。

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺寺業會】（春）1月十五日未刻大阪四天王寺六時堂に行
ふ造築會。寺業を行ふ。圖ニノ名さ
れ、こは、こは、さめ花御堂。

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺寺講會】（春）
寺講會。

てんのうじはじめたのまつり 【天王寺手日祭】（秋）
七月十日、大阪四天王寺の西、石鳥山新
清水寺に詣づる。ここ。京都清水の手日
詣と同じ意なり。

てんのうじのとうば 【天王寺土塔會】（夏）土塔
會。

てんのうじはじめ 【天王寺金堂會】（秋）九
月十二日、大阪四天王寺六時堂に於て
行ふ會式。

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺金堂手幷始】（春）春

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺金堂手幷始】（春）正
月五日より十四日迄、大阪天王寺太子
堂に於て修する會式。其式、別所にて七
て十菓餅類の供物を調し、公人、白洲に立ち
来僧堂上に坐居で修供して賞前に至れば
ふ。之を生身供といふ。太子の御誕生供
會のためなりといふ。

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺寺業會】（春）1月十五日未刻大阪四天王寺六時堂に行
ふ造築會。寺業を行ふ。圖ニノ名さ
れ、こは、こは、さめ花御堂。

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺寺講會】（春）
寺講會。

てんのうじはじめたのまつり 【天王寺手日祭】（秋）
七月十日、大阪四天王寺の西、石鳥山新
清水寺に詣づる。ここ。京都清水の手日
詣と同じ意なり。

てんのうじのとうば 【天王寺土塔會】（夏）土塔
會。

てんのうじはじめ 【天王寺金堂會】（秋）九
月十二日、大阪四天王寺六時堂に於て
行ふ會式。

てんのうじはじめのてのどう 【天王寺金堂手幷始】（春）春
匠の事を初めて執く給ひし趣意によ
り言ふ。

てんのうじはじめ 【天王寺生身供

開基松山宗誠、寛永十五年、淨尾和尚の開基なり。

そうあう【東春】椿花を宗誠、紀州新宮の産、金物を以て春に志深し。又、常に鶴を愛し、詩を留し、賞びしこいふ。

そうがん【宗願】尾州の人。

そうい【宗意】尾州の人。

そうあん【宗庵】（鈍）こうこん。

そうあんじ【東岸居士】京東山東岸寺の僧、自然居士の弟子なり、常に有業にして、而て賣り、貴賤を打て問法すること、人其故を問へば、素より住所なければ出家に非ず、知識を尋ぬる為なし、唯衆骨の柳を以て、一の事を作りし詩曲。

そうあう【宗鶴】スッポンのこと。

そうい【宗衣】（冬）上着と下着の間に着る衣、冬の衣服。

そうえん【宗春】（春）春の異名。

そうこうう【宗九郎】あはうの異名。

そうか【冬瓜】（秋）瓜の一種、春の末、苗を生じ蔓を延べ、葉圓く大くして毛あり。秋瓜を結ぶ。形圓く大くして、皮に白粉をつく。肉は白く、煮て食ふ。＝むかうが人。（名によりてこのこと曾師すべ、むかうも冬瓜なり）。國　きくのこと召波。

そうい【投書】浦頁のこと。

そうけい【國鶴】（春）鶴合（かくり）。

そうこ【投窓】支那周時代に行はれし遊戯。花瓶の如き物に、矢を投げ込み、勝負を決するもの。壺は高さ一尺餘、口徑二寸、底に小豆を入れ、矢の間り出さるやうにし、筒を去ること二尺矢を中にして行ふ。＝つぼうち。

そうそう【蒼三郎】宮村こと誠。元禄頃、尺八の名人。

そうそうのにおう【東三條御前藤】（冬）ヒカシ三條御前藤。

そうこ【東流】椿心（ツバキ）を見よ。

そうこ【社氏】酒を造る人。酒造家。＝醸兒。

そうこ【刀自】ここ。

そうこ【冬至】（冬）一月十四氣の一、十一月中（新暦十二月中二日）に當り、晝最も短く夜最も長く、一年の陰氣盛の日なり。其十十一月朔日に當る朔日を冬至といひ、二十年に一度なれば古は神祭こして、宮中に中南殿にて節會を行ひ、諸卿文章を獻じて賀すること、あり。民間にても冬至にには、餅・團子等を製りて食ふ、又蕎麦を献ぜ、日なりこ云傳ふ。＝一陽の高始の節。冬至の賀。國　一寸の蕪に冬至の日影来る　召波。

そうこ【東寺】京西八條の南、修学院、又、教王の開基國寺こ稱す。延暦十五年、僧空海こ勅せられ有名なり。

そうこう【蒼狐】（秋）七月の異名。

そうこう【蒼狐】（冬）冬の一種、花紅なり。他の冬至梅に先ちて冬至の頃より開花す故に名あり。國　雪は北國は南に冬至梅　乙州。

そうこ【宗子格子】組子格子の變樣

そうこ【宗衣】服の名。

そうこ【東寺灌頂】（秋）九月十五日、京都東寺にて行はれし會式。空海より始り、後世繼ぐ。

そうこう【宗子家】宗鑑の教を流文にて、者、京、寺屋に多く繁榮せしもの。醫安樂の作なりこいふ。

そうこう【同字訓】連俳の用語。連句同じ字は三句隔てて用ゐるべき規を云ふ。或に字手こも云ふ。

そうこう【冬至頁】（冬）冬至の條を見よ。

そうこは【冬至梅】（冬）こうこう。

そうこう【蒼十郎】坂田藤十郎こいふ。歌舞伎こ誠す。江戸の俳優にして、和事の元祖なり。寛永六年歿。

そうこう【同字訓金】連俳の用語。異字にて書けば同字なれども、讀方も意味も全然異なるもの。例之ば春日こ書いて、すがこ讀む場合こ、はるひこ讀む場合こは去嫌せざるを云ふ。

そうこう【同字訓心】連俳の用語。連句に、同音にして意味の異なるを云ふ。春水（シュンスイ）を、春の水こ解する時こ、人名に解するこきこの知し。五句去を捉こせり。

そうこえ【東寺御影堂】（春）三月廿一日（今新暦四月廿一日）京都東寺にて行ふ弘法大師の忌なり。（みえいこの條參觀）。

そうこ【同心】德川時代に與力の下に屬して、諸なこを捕ふ役の名。

そうこう【燈心草】（夏）ゐのはな。國　白雪や灯心草の頂に　天花。

そうこ【蒼湖】中江藤右衛門こいふ。近江高島郡小川村に住し、王陽明の學を唱ふ、德行世に聞え、近江聖人こ崇ら行半に國を、近江聖人こ崇ら

（草薫燈）

シノ花＝リ仮なるこ。ウ清澄。

そうたこ【東大寺】奈良の東七大寺の一、華嚴宗なり。大佛殿、鐘樓、正倉院、二月堂等有名の建築多し。

そうたこじうにん【東大寺華厳會】（春）三月五日、奈良、東大寺にて行ふ會式の儀。

そうたこじうあ【東大寺來】（冬）年の暮、奈良東大寺こ遊ぶ。寺院つつ所建立のため入唐し、開祖東大寺を建立し、開祖なりし故、其資財を以て之を故かしに繁すること殆なりこ。

そうたこじうあう【東大寺授戒】（春）三月中吉日に、奈良東大寺にて戒壇を立てて、天子以下善男善女を受行給ふ式。後鳥羽ゆ。

そうたこ【蒼龍坊】京都三條の時の僧名。三年間を終こず、夢に龍が、後大に孔子の

そうたこ【宗祇】連歌師、紀州の人、周文及び雪舟の門に學び、能書の名高し、永正頃の人。

そうたこう【宗長四郎焼】加藤四郎左衛門、入宋して陶工の秘訣を伝授し、歸て宋人に名を惜ず、之を藤四郎焼こ云ふ。

そうす【東司】寺院の便所のここ。

そうす【蒼炭】（冬）茶家に用ゐる炭の稱。大へ大に切りたるもの。

そうす【宗鑑】（春）京に住したる俳諧師、名高く、相を乞ふこの常に門に市の如くなりこいふ。

そうす【洞簫】笛の一種。竪にして吹くもの。唐時代の製なり。

そうすこ【蒼鷹】高さ六七寸の長方形の箱の上に、鷹形の的を置せ、四五尺の距離より銃を撃つて的を落す戯。其落さまに由り勝負を、百首名を附し點取す。

そうたこ【蒼苔亭】（夏）温地に生ずる草、一根一茎にして高さ七八寸、夏茎頭に花を開き、後實を結ぶ。花形燈蓋に

そうたこ【蒼龍寺院】中江藤樹が其居、近江國高島郡小川に作りし講堂。

そうたこ【宗春】俳諧師の人、周文及び雪舟の門に學び、能書の名高し、永正頃の人。

そうたこ【蒼龍寺】京都の名。

道を鼓吹す。

とうもんかう【透頂香】元人、陳宗敬の傳へし藥方。痰に功あり。又の名、外郎(ラウ)と云ふ。小田原の名物にして、今なほ同地にて賣る。

とうじゐん【等持院】山城國葛野郡衣笠山の南にあり。足利尊氏の創建にして夢窓國師の開基なり。

とうとまつり【登宇斗祭】(春)イソシ祭。

とうないしのすけ【藤内侍】源氏物語中の人物。惟光の女にて、昔て五節の舞姫となる。後、夕霧大將と通ず。

とうながかも【胴長鴨】(冬)鴨の一種、ブキサより大にして首黑し。

とうにようらん【童女御覽】(冬)わらはごらん。

とうのちうじやう【頭中將】源氏物語に出たる人物。攝政太政大臣の長子にして、源氏と友とし好し、其同母妹葵上は源氏の室となる。藏人頭にて近衛中將を兼ね、才學源氏に降らず、昔て紅葉の賀宴に源氏と共に青海波を舞ふ。後年其女、雲井の雁を源氏の長子夕霧に娶す。

とうば【東坡】蘇氏、名は軾、字は子瞻。東坡居士と號す。詩文を善す。宋の神宗帝に仕へしが、黄州に謫され、赤壁賦前後を著す。哲宗の時再び召されて侍讀となる。

とうばう【潤房】れやのこと。轉じて妓樓を云ふ。

とうばう【童坊】足利義滿の時、細川頼之婿風の爲め、俳優の徒を剃髮せしめて士庭に列せしもの、後之を同朋と稱す。

とうはうさく【東方朔】漢武帝に仕へし人。王の左右に侍して諫諍す。又、仙術を得て西王母の桃を盜み喰ひしといふ。

とうばた【幢幡】佛家に用ゐる旗。＝佛幡。

とうはれ【胴服】京都山科十禪寺村の茶屋にて賣る餅の名。

とうび(秋)九月廿五日より卅日迄、伊勢國山田、教王山金剛院神宮寺(俗に世義寺といふ)にて、勤行者、如法經を書寫して山田墓地へ納むる式。之を送る僧は絹布を着す、紙衣を肌に着、藁を束ねて三に組し沓を穿き、音樂に伴ひて神輿の如きものを舁きゆくといふ。

とうびん【銅瓶】鉢をいふ。伊勢の方言。

とうぶ【童舞】舞樂の名、胡蝶、迦陵頻などの舞をいふ。

とうふう【東風】(春)こち。

とうふうこほりをとく【東風解凍】(春)七十二候の一、一月節の初候。(氷解く、凍解の各條參照)

とうぶく【胴服】古制の服。筒袖の長さ胴までの羽織。下に袴を着す。

とうふくじ【東福寺】京都、伏見街道に在る天台宗の巨刹。惠日山と號す。建長九年、九條道家の創立に係る。寺内に通天橋あり。

とうふくじかいさんぼ【東福寺開山忌】(冬)聖一忌(シヤウ)。

とうふくじせんぼふ【東福寺懺法】(春)二月初午日、京都惠日山東福寺方丈にて觀音三十三幅の像を掲げ、懺法を修し、疫病火災除の守札を出すこと。圖 觀音の像し懺悔よ東福寺 越人。

とうふくろ【胴服】中部のふくれて兩方の狹まりし形を云ふ。

とうふぐり【胴根】(春)實引を見よ。

とうほう【董奉】古へ支那にありし名醫。よく不治の病を治し、人を蘇生せしむ。而して一錢の謝を受けず、病癒る者をして杏樹一株つゝを植ゑしむ、數年にして千萬株の林をなす。杏林の故事は之より起る。

とうぼく【東北】京の東北院の梅に就きて、和泉式部の古事を叙せし謡曲。

とうぼくゐん【東北院】京都堀河にある寺、和泉式部が軒端の梅あるを以て名あり。

とうまる【胴丸】胴の右脇にて結び締め、全部を糸にて縅したる鎧。

とうらん【胴亂】革にて横長き形を作り、肩より腰に提ぐる袋。藥品などを入る、もの。

とうりようくわ【東陵瓜】(夏)古へ秦の東陵侯邵平、秦の滅亡後、民間に下り、貧くして瓜を長安の東に植ゑし故事。又、眞桑瓜の一種。色甚美なり。

とうれん【登蓮】徒然草に出でし僧の名。ますほ(まそほ)なる蓮のことを、渡邊聖が知ると聞て、簑笠を借りて直に傳受に往きしと云ふ。

とうれん【銅蓮】寺院の堂前などに置き、用水を湛えたる蓮形の銅器。

とうろう【燈籠】(秋)七月朔日より晦日ころまで、新佛供養のため家々にて燈籠をかゝぐること。其製種々あり、多く木を組み、紙を張りたるもの。一に盆燈籠といふ。○切子燈籠。高燈籠。檐燈籠。花燈籠。折掛燈籠。舞燈籠。舟燈籠。影燈籠。廻り燈籠。岐阜提灯。禁裏御燈籠。新吉原灯籠。圖 中庭の簾見えすく灯籠かな 白雄。

とうろううり【燈籠賣】(秋)盆市を見よ。

とうろうにいじん【灯籠大臣】平重盛のこと。

とうろうながし【燈籠流】(秋)水灯會を見よ。

とうろうをどり【灯籠踊】(秋)盆踊の一風。京都岩倉村及花園村の嫁、同所八幡宮の社前にて、頭上に種々の飾ある燈籠を點して踊をなす。男子は太鼓を打ち、笛を吹く。其灯籠は春の頃より製作し、互に其衣裝を競ふ。又、踊手の製は前より其灯籠を張り與ろといふ。＝花園踊。圖 灯籠踊顔見えぬこそ床しけれ 瓜流。

(燈籠踊)

とうろん【東園】用里(ヨウ)を見よ。

とが【樗】つがに同じ。

とかう【杜康】支那にて初めて酒を作りし人。又、酒の異名。

とかたをし【皆落】酒の座にて例に違ふ時、罰盃を呑せること。

とかき【斗掻】五七寸の圓く短き棒。桝にて穀を量るとき、其緣をならすため用ゐるもの。

とかくしやま【戸隠山】信州水内郡にある山。戸隠明神(手力雄命を祀る)の社あり。

とかげあなをいつ【蜥蜴出穴】(春)冬土中に蟄伏せし石龍の春になりて出るをいふ。圖 石龍出る伊勢の寮家春寒し 此柱。

とかも【兎禍】兎の毛と糸を交へ織りし織物。

とかの【兎餉野】大阪天滿、北野邊の舊稱。

とかのを【樗尾】山城、葛野郡高雄山の東北にある山。紅葉の名所として名あり。山腹に高山寺あり。

とかのをむしくやう【樗尾虫供養】(冬)十月廿八日、山城國樗尾、高山寺附近の農家にて耕種の時、諸虫を多く殺し、殺生戒を犯しゝを恐れ、東西の兩村より寺へ米穀を供へ供養すること。

とかへりのはな【十返花】(春)松の花。

ちんくま【鳥回】（秋）ちやでの異名。

ちんぶん【椽】くらゐ戸の上にある横木をいふ。＝鼠走り。

ちんぷんけ【元附】連俳の用語。連句に前句なしーすず、理屈めきて若めたるやうの題ある付方を言ふ。

つ【笹】僧の食事をいふ。又、僧侶の在家に頂鉢にゆくことをいふ。資を振舞はるゝ意なり。

つ【鶏】（秋）水邊に住む鳥。鶫に似て背灰色に、翅の裏淡江なり。＝雉花鳥。朱鷺。　圖　鶏鳴で空に露ある山路かな　蕪村。

つあの【寸牛】北斗星と牽牛星の二星をいふ。

つあのまつりをたつ【土牛堂子祭立】（冬）大寒の日、宮中にて土牛の形を作り、王者色に彩りて、之を紫宸の十二門に立つ。氣及疫鬼を祓ふ爲なりと。　圖　かたき代に立ますす土牛童子哉　眞淵。

つあのつち【寸牛堂】前中書王、洛陽城空の逆也し給ふ時書し賦。其子伊尹(コヽ)言の　村上帝に笑はれし故事。

つあ【寸】時間の一ニを言ふ俗語。

つあは【寸陰】光陰の一ニを言ふ。

つい【椎】（秋）栗に似て栗より小さく、殼に刺多し。　圖　椎の実の拾はれ顔や小坂路　蕪村。

ついかの【追加の部】

ついくま【鳥回】（秋）ちやでの異名。

ついぶん【椽】くらゐ戸の上にある横木をいふ。＝鼠走り。

ついぶんけ【元附】連俳の用語。連句に前句なしーすず、理屈めきて若めたるやうの題ある付方を言ふ。

つ【笹】僧の食事をいふ。又、僧侶の在家に頂鉢にゆくことをいふ。資を振舞はるゝ意なり。

つ【鶏】（秋）水邊に住む鳥。鶫に似て背灰色に、翅の裏淡江なり。＝雉花鳥。朱鷺。　圖　鶏鳴で空に露ある山路かな　蕪村。

つあの【寸牛】北斗星と牽牛星の二星をいふ。

つあのまつりをたつ【土牛堂子祭立】（冬）大寒の日、宮中にて土牛の形を作り、王者色に彩りて、之を紫宸の十二門に立つ。氣及疫鬼を祓ふ爲なりと。　圖　かたき代に立ますす土牛童子哉　眞淵。

つあのつち【寸牛堂】前中書王、洛陽城空の逆也し給ふ時書し賦。其子伊尹(コヽ)言の　村上帝に笑はれし故事。

つあ【寸】時間の一ニを言ふ俗語。

つあは【寸陰】光陰の一ニを言ふ。

つい【椎】（秋）栗に似て栗より小さく、殼に刺多し。　圖　椎の実の拾はれ顔や小坂路　蕪村。

ついかの【追加の部】

つい【椎】信州園原山の麓に木賊を刈る老翁、童子の行方を尋ひて咲き居し、伊勢物語曲。

ついかり【木賊刈】（秋）木賊は山谷水邊に生じ人家にも植うる事、叢茎くく、節の多く一根より叢生し、中空にして高さ二三尺、寸餘毎に節あり、秋之を刈りて干し、物を磨くに用ふ。夏穂頭に土筆の如き花を生ず。　圖　物いはぬ男なりけり木賊刈　蕪村。

ついかやま【木賊山】（夏）武蔵国の山の一、信州園原山にて老翁、木賊を刈る像を作る。

ついさい【追歳子】（冬）清楽歌の曲の名。＝神送子。

ついたち【正月】（夏）しぶき。

ついぼん【椎本】夏或切の名醤。永田氏、甲斐に住す、常に牛の背に醤を掛け、賣宿を問はず往来を行ふ。故行年多し。

ついぼん【椎本】田伏氏、紀伊の人、江戸浄土宗一行院の住僧となる。一云廻豆善薩佛の外なく、文政元年、年六十一にして寂す。

ついまんい【追万歳】唄(ハヤ)したる後直に唱ふる呪言。多く正月元日になす。

つう【木賊】信州園原山の麓に木賊を刈る老翁、童子の行方を尋ひて咲き居し、伊勢物語曲。

つうかり【木賊刈】（秋）木賊は山谷水邊に生じ人家にも植うる事、叢茎くく、節の多く一根より叢生し、中空にして高さ二三尺、寸餘毎に節あり、秋之を刈りて干し、物を磨くに用ふ。夏穂頭に土筆の如き花を生ず。　圖　物いはぬ男なりけり木賊刈　蕪村。

つうかやま【木賊山】（夏）武蔵国の山の一、信州園原山にて老翁、木賊を刈る像を作る。

つうさい【追歳子】（冬）清楽歌の曲の名。＝神送子。

つうたん【通草】（夏）しぶき。

つうぼん【椎本】夏或切の名醤。永田氏、甲斐に住す、常に牛の背に醤を掛け、賣宿を問はず往来を行ふ。故行年多し。

つうぼん【椎本】田伏氏、紀伊の人、江戸浄土宗一行院の住僧となる。一云廻豆善薩佛の外なく、文政元年、年六十一にして寂す。

つうまんい【追万歳】唄(ハヤ)したる後直に唱ふる呪言。多く正月元日になす。

つうり【通利】（秋）ちやでの異名。

つうりん【椎林】椎の実の拾はれ顔や小坂路　蕪村。

つえ【杖】（秋）ちやでの異名。

つえ【杖】（秋）ちやでの異名。

つえ【杖】（秋）ちやでの異名

ねんぷ

り　書紀。

ねんぷ【土佐日記】紀貫之が土佐守の任果てゝ京に歸る時の日記を、假名文にて記しゝもの。

ねんぶつ【土佐祭祀】（夏）土佐國土佐郡にて年々、稲を二回收穫する處あり。其一番稲を六月に刈るをいふ。

ねんぶつ【土佐洗濯石取】（春）三月三日千濱の利、土佐國四寺の御崎といふる處の港底より、視に十ゞき石を取る。西寺の僧侶、港上に出でゝ、法を講じ法師も十なり行ふ。國　取り法師も十なり　土佐の港　鏡川。

ねんぶつ【土佐尼】春日の詩主、大中臣峰雄の女。後國成帝の宮人、藤を好し、右名詩を書へ。

ねんぶつ【土佐節】土佐少掾といふ人の詩ひ初めし俗曲の名。

ねんぶつ【土佐節】土佐藩光より起りし藩風。丹青彩彩色の繪畫にして上品なる色を以て宮中の書所に用ゐらる。光信、光貞、光起を武藩の三傑と稱す。

ねんぶつ【土佐踊】（秋）盆踊の一種、七月十四日、土佐國多度浦光明寺にて行ふ。其明故は弘法大師の作なりといふ。

ねんぶつ【土佐日記】紀貫之が土佐守の任果てゝ京に歸る時の日記を、假名文にて記しゝもの。

ねんぶつ【土佐祭祀】（夏）土佐國土郡にて年々、稲を二回收穫する處あり。其一番稲を六月に刈るをいふ。

ねんぶつ【土佐洗濯石取】（春）三月三日千濱の利、土佐國四寺の御崎といふる處の港底より、視に十ゞき石を取る。西寺の僧侶、港上に出でゝ、法を講じ法師も十なり行ふ。國　取り法師も十なり　土佐の港　鏡川。

ねんぶつ【土佐尼】春日の詩主、大中臣峰雄の女。後國成帝の宮人、藤を好し、右名詩を書へ。

ねんぶつ【土佐節】土佐少掾といふ人の詩ひ初めし俗曲の名。

ねんぶつ【土佐節】土佐藩光より起りし藩風。丹青彩彩色の繪畫にして上品なる色を以て宮中の書所に用ゐらる。光信、光貞、光起を武藩の三傑と稱す。

ねんぶつ【土佐踊】（秋）盆踊の一種、七月十四日、土佐國多度浦光明寺にて行ふ。其明故は弘法大師の作なりといふ。

ね

ね【刀自】一家の主婦をいふ。又、一般に婦女の稱。

ねあけぼの【年明】（春）新年。　國　年既に明けて曙色の尻眼がな　嵐雪。

ねあけ【後醍】字都宮物語中の人物。六歳にして書に學ずるの法に感風に會ひ、流所に流寓し、仙人より學の秘曲を授けられ、歸朝して其女に之を傳ふ。

ねいおん【盛衰】（春）盛衰無常。

ねいおんぜつ【盛衰明】（春）ニヘウヤナ。

ねいぎ【年木】（冬）年の暮、春の用にする薪を積り貯へおくこと。＝年の薪。年ある　みよし野や櫻のそばに年木積　月居。

ねいぎうち【年木積】（冬）年木を見よ。

ねいぎうむ【年木積】（冬）年木を積み貯ふこと。

ねいぎやま【年木山】（冬）年木を切る山をいふ。　國　年木山麓に釣の小舟かな　蕪村。

ねいこし【年越】（冬）節分に年を一つ越すをいふ。轉じて節分、又は大晦日のこと。＝年取る。　國　年越や唯業平の御稚びき　其角。

ねいこしかい【年越貝】（冬）大晦日に伊勢大廟に詣して參らをいふ。本來は年乞參りと云ふ。年籠に同じ。

ねいこしまつり【新年祭】（春）二月四日、天神全子、豐年を祈る爲、神祇官に出御して、神宮國三千餘座の神祇を拜し給ふ式。＝神宮所年祭。新年祭祈年祭。　國　八百萬＝ノ＝に集りて新年ぶな　去來。

ねいこしまつりはくい【新年祭祈年祭】（春）新年二月三日、宮中にて行ふ新年祭をいふ。皆神國祭の各社に、幣帛を奉ノめられる。

ねいこもり【年籠】（冬）十二月晦日夜、其信ずる所の社寺に參籠し、年越の勢、元朝拜を行ふこと。京都では伊勢、熊野、などくも諸で、近くは藤國、清水、八幡、愛宕などに籠る也。　國　月も　なる杉籠の夢や年籠　召波。

ねいこもり【年仕舞】（冬）年の暮。

ねいこやぐま【年立遊】（春）新年。　國　年のたちやくれば椿も梅の花　嵐雪。

ねいこだち【年立】（春）新年。　國　年立つや　家中の霞は是月夜　其角。

ねいこだな【年棚】（春）歳方棚。

ねいこまつり【年玉】（春）新年の賀に贈答する物品。　國　年玉や花鳥の座の枕上　召波。

ねいこづき【年積月】（冬）十二月の異名。

ねいこ【年籠】（冬）十二月の異名。

ねいこ【年籠】（冬）十二月の異名。

ねいこ【年籠

としのなごり

し等に逢くは年のちり　清彦。

としのなごり【年名殘】（冬）年の暮。　圖　年の名殘圓の灯見ゆるかな　其雀。

としのはて【年瀬】（冬）年の暮。

としのはじめ【年始】（春）新年。

としのはて【年果】（冬）年の暮。

としのはな【年花】（春）新春をいふ。花は眺望なり。

としのふゆ【年冬】（冬）年の暮。

としのまめ【年豆】（冬）豆まき。

としのみや【年宮】（冬）江人心。　圖　羽織着て馬追ふ年の宮詣　白圓。

としのみなと【年湊】（冬）年の暮をいふ。（春の湊ニ其語原同じ凖く見よ）。

としのみね【年峰】（冬）年の暮をいふ。

としのや【年矢】（冬）年の暮ろゝを矢に比べていふなり。　圖　夜を籠て年の矢走比や簡り船　一狐。

としのやま【年山】（冬）年の暮。圖　至ちりこ暗にふすら人年の山　地貫。

としのよる【年圍】（冬）同上。圖　年の間烏の夜鳴聞えけり　月村。

としのよ【年夜】（冬）大晦日の夜。＝除夜。　圖　月雪や炉端涼江て年一夜　白雄。

としのりい【年用意】（冬）年の暮に新春の諸事を準備するこゝ。（年取物。門松等）

としなみ【年波】（冬）年の暮。　圖　焼焔は いつも ちらつに年用意　清彦。

としのよる【年淀】年の暮に今宵。　圖　年の淀春さく一夜代見まで　鬼貫。

としのわかれ【年別】（冬）年の暮ろゝをいふ。

としのわたり【年渡】（秋）七夕星の相逢ふこゝ。一年に一度なりこの意。古歌より出たる語。　圖　背の同じ蕎けさ年の渡り　なな　山古。

としのを【年緒】（冬）年の過ぎ行くこゝ。

とし【年尾】なほいふ語にかけて用ゐる。＝年の尾。　圖　年の尾や水の流も人の見し　其角。

としのをはり【年終】（冬）年の暮。＝終年。

としのをはりのだいこうり【年終大行】（冬）十二月晦日、各家組先の遺祭をなすこゝ。に遺ろこゝいふ。＝古は樣要を敷き て供物の を供へたりこゝ。＝終の遺祭。　圖　行年年の暇ありる身の遺祭　去來。

とばこ【鳥籠】（冬）鷹狩にて使ふ鳥を木の枝に連に掛けて人に贈るもの。

とばつき【年端月】（春）一月の異名。

とばつけ【年設】（冬）年用意。

とまがは【登戸川】武蔵國隅田川の上流を

としまつり【年待月】（春）一月の異名。

としふ【詩選注】古語。詩選を了りて後に先生頭を食ふこゝ。

としふ【杜子美】名は甫、杜工部と云ふ、盛唐の詩人にて李白と名を等うし、後代詩聖と崇められる。

としみ【年末】（冬）年の暮をいふ。

としもち【後基】藤原氏、日野資朗と共に後醍醐帝を補佐し、北條を誅らんとして事露はれ鎌倉に斬られる。太平記に出る。こゝ入の東下りの事有名なり。

としもり【年守】（冬）除夜に夜を徹して春を待ち迎ふこゝ。＝守歳。　圖　年守る夜宅は暮く見えに けり　横村。

とそ【屠蘇（ソ）】（春）御薬を供すを見よ。

としわすれ【年忘】（冬）年事に親戚友人集りて互に宴を催すこゝ。其一年の苦を忘れ人たのなりこゝいふ。今、忘年會と同じ。　圖　年忘三人寄つて宿唐詩　芭蕉。

としをしむ【年惜】（冬）年の暮ろゝを惜むこゝ。＝冬惜む。　圖　人並に年や惜めり　る尼法師　盧中。

とそ【年男】（春）家々にて節分、追儺の豆を撒く事より始りて、正月の儀式

としをとこ【年男】（春）一月の異名。

とせ【詩選注】古語。詩選を了りて後に先生頭を食ふこゝ。

とせ【杜子美】名は甫、杜工部と云ふ、盛唐の詩人にて李白と名を等うし、後代詩聖と崇められる。

とせ【年瀬】（冬）年の暮をいふ。

とせ【後基】藤原氏、日野資朗と共に後醍醐帝を補佐し、北條を誅らんとして事露はれ鎌倉に斬られる。太平記に出る。こゝ入の東下りの事有名なり。

とせ【年守】（冬）除夜に夜を徹して春を待ち迎ふこゝ。＝守歳。　圖　年守る夜宅は暮く見えに けり　横村。

とそ【屠蘇（ソ）】（春）御薬を供すを見よ。

とそ【年忘】（冬）年事に親戚友人集りて互に宴を催すこゝ。其一年の苦を忘れ人たのなりこゝいふ。今、忘年會と同じ。　圖　年忘三人寄つて宿唐詩　芭蕉。

とそ【年惜】（冬）年の暮ろゝを惜むこゝ。＝冬惜む。　圖　人並に年や惜めり　る尼法師　盧中。

とそ【年男】（春）家々にて節分、追儺の豆を撒く事より始りて、正月の儀式

とそのこと

一切を行ふ役に當りし人。　圖　白魚の産も祭りけり年男　言水。

とそをもむ【年惜】（冬）年惜む。　圖　年をしや丙雞上げも今年きり　一夏。

とそのかみ【十束髪門】髪の毛の少なきを云ふ、轉じて老人の頭を云ふ。

とそのはら【鹿原】（夏）夏、上總下總地方にて田川の鹿の狩場に囲ひ、夜は篝を上にして浮ひ居る故に、松明を照し竹故なしにては さ ひ ゐ 居る故 ふこゝ。

とそ【屠蘇】（春）山椒、肉桂、防風、桔梗白朮等を調合し、紅帛の囊形の袋に入れし もの。元日之を酒に浸して飲めば一年の邪氣を祓ふこゝいふ。又、三箇日、七日なども用ゐる、年賀の客にも出すこゝ。＝屠蘇散。屠蘇酒。○屠蘇袋。圖　こそ酌むや雨降る道の駅守り　八重櫻。

とそうん【屠蘇散】（春）こそ。

とそもち【屠蘇酒】（春）こそ。

とそりこん【兜率天】佛語、喜足と譯し、王欲の境に於て足るこゝを知る意にて、極樂淨土のこゝなり。

とそのかう【屠蘇調合】（冬）十二月廿八日、新年に用ゐる屠蘇散を調合するこゝ。

とそのこ【屠蘇袋】（春）こその條を見よ。

とたまつたち【鳥立蓮】（冬）鷹狩に狩人、鳥の飛び立つを見て追ひ行くこゝ。圖　したふ方も吹雪にくもる鳥立かな　宋國　阿。

とたつ【土塔會】（夏）四月十五日、攝津四天王寺土塔会、今頃天王を記るの祭事、昔時は天王寺七村より餅を出し、大法師なりしが、後世は同寺の僧、仁王經を誦し法會を修するのみとなる。　圖　國　来記にそれもこゝめたり土塔會　蹲人。

とち【栃】（秋）こちらのみを見よ。

とちかがみ【栃】（秋）水草、池沼に多く生ず。葉大さ寸餘、圓く厚くして光り黄色なり。秋葉を出し三瓣の白花を開く。＝水葵。

とちのはな【栃花】（夏）こちの實を見よ。　圖　世にうこそ名所にあちこちの花　湖國　堂。

とちのみ【栃實】（秋）栃の樹、大木にして葉大さ七八寸、夏の初頃、穂をなして五瓣の黄花を開き秋實を結ぶ。栗より大く皮は厚さ二分ほど、茶褐色にして熟すれば自ら三裂す。餅又は粉とすげて林まで　一茶。

とちはこだ【東西舞】能狂言の名。

とちもち【栃餅】（秋）栃の實を粉にして米の穴の狩祭　鶴老。　圖　栃餅や狸の穴の狩祭　鶴老。

とちやり【寸鉄】鉾槍なごに垂たる等の短かきものを云ふ。

とちやりのはな【栃茶】（夏）こちうはこむ。

とつかのつるぎ【十握劍】伊弉諾、伊弉冉の淤磯原を探り給ひし寶劍の名。

とつかは【十津川】大和、天川の下流の名。紀州に入り熊野川こなる。

とつかまきしぐり【登鳥】（秋）キキ、イ。

とつこ【屠苏】こゝ。

とつこかるび【屠苏雞首】諸説こ寝覚こ注解、五に新説を論ずるこゝ、屠苏は屠を押立ひ、雞首は雞苏こいふ故事。

とつたり【摘手】こりてのこゝ。

とつひやくん【十百韻】連句の一體。百韻を十座にてなすもの。千句の條參照。

とつてう【土手馬】元祿の頃、吉原通ひの客を駕にて大門まで通ふ馬をいふ。一に三谷馬こいふ。寛政頃には日本堤にて船から船へこ呼ぶ乘合船の船頭を土手馬こ云くりこ。

とつてのうしろ【土堤下兵衛】江戸吉原土堤

の非常取締の役人をいふ。

をてまちやう【土手八丁】江戸浅草、日本堤以てなり。吉原大門まで東西八丁あるを

をてもて【土手節】吉原通ひの男達などが謡ふ小唄の名。寛文頃の流行にて、尾張名古屋地方に盛に行はれたる土手節と云へり。

をてら【袈裟】僧侶に用ひて厚く綿を入れたる衣服、多く天鵞絨の牛皮をかくる。夜着にもし又は冬の服にす。

をとこ【殿】壁炭の一ニ。

をとこ【男】男の名。オラの年を延て長したるもの。

をとこがら【度々通】一つの所にて通り歩行く一ニ。＝ごうごうのくり。

をとこがら【止鳥】（春）鶯の異名。

をとこや【魚屋】魚を商ふ家。

をとこやこだま【鳴瀬】河内港部郡にある港布。又伊勢国多郡にも同名あり。

をとがい【鶴嶺】虎の一種。形度に似て大、雄雌共に大なる角あり。鹿黄牛大等の美味に產し、よく人に馴れて、雪車なども引くに使用せらる。

をとこがら【日長無賀】よつでつ。

をとなこだま【月無瀬瀬】京都、嵐山の麓にある瀬。落口の川を月無瀬川といふ。

をとなはな【鳥鳴瀬】坂の枕詞。

をとなやま【峰山】越中国に在り、頂を俱利迦羅峠といふ。

をなかま【陰】ニなりのニ。

をなりをこ【陰男】業平のニをいふ。

をな【刀鞘】鄙士或は里正の所。

をながは【利根川】上野の文禄山より出て下総銚子港に注ぐ大河。坂東太郎とも云ふ。

をなり【舎人】禁裡に仕ふる雑役の所。又、牛飼のニ。

をなりりこばな【桑皮花】（夏）樹の名、業平生して醍醐あり。樹は松に似て小なり。樹株の皮花を桑皮（ジン）といひ、藥用とし、又、鬱とす。

をなりしんのう【舎人親王】天武帝第三の皇子。博学にして日本書紀を撰す。

をなりの【鳴瀬】雪の銀引鳴るを云ふ。＝たなびくもり。

をのつかさ【主殿司】宮中の供物、灯油、奥ある女官。

をのの【殿守】宮中日用の事を主る官。

をのよしお【都良香】京の人。初の名は言道、菅原道真のうなり。弘仁中、姓を都に改む。

詩文を博士に学び、元慶三年没す。尤も詩文を博士なり、元慶三年没す。尤も詩文に長じ、其吟峰元慶三年没す。

をのおとこ【宿直人】（春）夜言院部修法の時、禁裡の内外を守らしむる武士。

をのがきつ【宿直袋】古く宮中の宿直人、其名字を書く為付置き、用具などを入るゝ袋。文代の時、釣上げかくしの。

をのおり【殿居守】禁中にて夜中、左近衛の司は午夜の時、右近衛の司は丑寅の時、殿中を廻り、名のり合て守護する役。

をは【鳥羽】山城紀伊郡の地。伏見に隣り、上下に分れたり。

をはおり　それにこの外の意、又、解脱の義。

をはやこ【鳥羽僧正】名は覚縁、天台の山城鳥羽に居りしより鳥羽僧正と呼ばる。宗猷なる絵画を描き、能書家、人を驚かす。世に鳥羽絵といふ。

をはた【鳥羽田】山城鳥羽にあり。

をはの【鳥羽殿】山城国紀伊郡鳥羽にありし離宮。白河帝、崩御のため建めらるにしたがふ。

をはに【赤久】良く人しるいふ。

をはたち【鳥羽刀】（冬）太刀魚をいふ。

活つる。其大出は六出にして大さ五分ばかり。其實は黄にして香あり。

をはなはぎ【遠部成始】（春）薫野始。

をはなはな【飛花】（春）散る花。

をはびの【飛火野】大和添上郡にある野。或、若草の名所として屢々和歌に詠まる。

をはるる【部府樓】若公配所に在る時の詩中の語。太宰府の館にありし樓をいふ。

をはるる【鮫鷹荒】（秋）もろか。ごびろく。

をくい【寸胡】蕗草是のニ。

をくばえに　同は蓮にして圓潔する事。

をくのはな【海胡花】（夏）海胡は、高さ丈餘、夏に枝を出し、葉は花の周囲に白花を開く。

（花のちべ）

をくはな【海部成始】（春）薫野始。

をくり【飛出】能面の名。眼丸くして口大なるもの、大小の二つあり。

をくりんとんを【飛天神山】（夏）アラレ天神山。

をくりす【飛茶】（春）蕗は多く樹上に樹枝を組合せて巣を作る。鳥の巣を見よ。

をくりの　蕗の巣や山へ入日の照り返し　木芳園

をくりのはな【飛栗花】（春）蕗生の雄木。花は丈餘、枝に刺多く、葉は五葉一茎なるし、春の末青白き花を開く。八重一茎なるして大さ二寸ばかり。山伏の鈴掛の紋に似たり。＝トキンバラ。

をくりの【鳴拍子】寺にて用ふる樂器。形鉢の如く左右の手を鉢の中央の紐に形かけ、左右二面を持てすり鳴すしの＝鳴鈴子。

をくりくりん【十百鶴】こつびやくるん。

をくりく【飛鳴荒】（秋）もろか。圓ごびろくや升なき宿の小雨びん　蕗松。

をくりの【井筒】能狂言の名。

をくたち【飛立】蕗が木を伐るこき山神を祭るため、其木の切株に木の枝を切りて立てかくニ。轉じて神を切の枕詞。

をくりすがる【十布苧麻】紵を十布にして

をくり【飛出】能面の名。眼丸くして口大なるもの、大小の二つあり。

をくりとんとんを【飛天神山】（夏）アラレ天神山。

をくりす【飛茶】（春）蕗は多く樹上に樹枝を組合せて巣を作る。鳥の巣を見よ。

をくりの　蕗の巣や山へ入日の照り返し　木芳園

をくりのはな【飛栗花】（春）蕗生の雄木。花は丈餘、枝に刺多く、葉は五葉一茎なるし、春の末青白き花を開く。八重一茎なるして大さ二寸ばかり。山伏の鈴掛の紋に似たり。＝トキンバラ。

をくりの【鳴拍子】寺にて用ふる樂器。形鉢の如く左右の手を鉢の中央の紐に形かけ、左右二面を持てすり鳴すしの＝鳴鈴子。

をくりくりん【十百鶴】こつびやくるん。

をくりく【飛鳴荒】（秋）もろか。圓ごびろくや升なき宿の小雨びん　蕗松。

をくりの【井筒】能狂言の名。

をくたち【飛立】蕗が木を伐るこき山神を祭るため、其木の切株に木の枝を切りて立てかくニ。轉じて神を切の枕詞。

をくりすがる【十布苧麻】紵を十布にして

とぼく 【杜牧】字は牧之、樊川と號す、晩唐の詩人。阿房宮賦を作りて名あり。

とぼまのさと 【遠里小野】攝津國住吉郡墨江村にあり。古へ萩、櫻の名所。＝をりたの。をりうの。

とぼまのかりひ 【遠待】古へ武家の中門の傍に設けし廊の如き處。番待の居るところ。

とぼしがも 【遠鴨】(夏) 黑鴨、蘆鴨、車鴨等の春を過ぐれども北地に歸らず、水澤に巢ひて產卵し、雛を孵化するものをいふ。＝鴨の子。カルの子。 ◎日の永い頃してゐるや遠鴨　雄黛。

とぼそ 【扉】もとは戸の開閉の爲に附し、くるるの轉なりしが後、門戸の汎稱となる。

とぼのはや 【遠矢蔵】兵庫和田岬をいふ。本間孫四郎が弓勢を現はしゝを以て名あり。

とぼやまさくら 【遠山櫻】(春) 遠山の櫻。◎平地ゆきて殊に遠山櫻かな　蕪村。

とぼりく 【遠句】其人の詠として有名なる句。

とぼりんく 【遠輪廻】遠俳の用語。遠句に前に出でし句と酷似せる心の附句を云ふ。捨べき淀なり。

とぼる 【融】河原の左大臣、鹽釜の景を愛して都に移し、舊跡にてその鹽、海士となりて旅僧に由來を語る筋の謠曲。

とまり 【取手】秋の田を刈ることをいふ。

とまりかり 【泊狩】(春) 泊り山。

とまりくさ 【塩子の異名。

とまりやま 【泊山】(春) 春の鷹狩をいふ。山野に泊して宵の間に雉子の鳴くを聞き、其場所を知り置き、翌日未明に鷹を放ちて之を捕らしむこと。＝泊狩。朝狩。鳴鳥狩(ナイトカリ)。○聞すえ鳥。鈴子さす。◎泊り山枕に寒き木の根かな　蘆白。

とみがをかはちまんまつり 【富賀岡八幡祭】(秋) 八月十五日、江戸深川、富賀岡八幡宮の祭禮。

とみくさ 【富草】(秋) 稻の異名。

とみたまれ 【富草】京の東寺に在る、鐵鉢を持ちし大師の像の手に載せし錦裂の名。

とみみ 【玲】耳鬘とさきをいふ。

とみもと 【富本】江戸節の一流。寶暦頃、河東の門人福田豊州より起る。

とん 【壕】陶製にて太鼓形の腰掛。多く支那人の用ゐしもの。

とんあ 【頓阿】二階堂真宗と云ふ。制髪して頓阿と名告る、爲世の門に學び、二條派の歌道を究む。和歌四天王の一人にして兼好と名を齊うす。

とんぐり 【團栗】(秋) クヌギの實。形圓く尖りて、熟すれば黃褐色を帶び、實の本に椀(ワン)ありて實の半を包む。之を綠の五器と云ふ。＝椀。又、樫の實をもいふ。◎團栗の落ちたまゝなり谷の坊　雨谷。

とんぐつ 【遯月】(夏) 六月の異名。

とんじき 【屯食】元服する人の祝賀に、飯を賜ふことなりといふ。又、下賤のものに賜はる包飯をいふと。

とんにんえび 【富田蝦】攝州島上郡玉川に生ずる蝦の名。

とんぢく 【鳴竹】(春) 左義長のこと。◎餅やくな御暇乞のどんどかな　太祇。

とんぼう 【蜻蛉】(秋) ヤマメといふ水虫、夏の頃、水を出でゝ蒲、菅の葉などに上り、其背より裂けて羽化したるもの。頭大く、體細く六脚四翅ありて常に空中を飛行す。＝アキツ虫。トンボ。エンバ。○ヤンマ、青蜻蛉。赤蜻蛉。鹽蜻蛉。蜻蛉釣。◎とんぼうや歎さしもなき眼玉　大江丸。

とんびだこ 【鳶凧】(春) とびだこ。

とんぼ 【蜻蛉】(秋) とんぼうの略。

とんぼつり 【蜻蛉釣】(秋) 小兒の餌に、蜻蛉の雌を捕へて絲に繫ぎ雄を釣ること。◎猩兒の蜻蛉釣りけり靈の辻　蘭更。

とんらん 【曇鸞】支那梁武帝の時、淨土宗の僧。汾州の玄中寺に住す。始め陶隱居に仙術を受け後、佛に歸依して仙經を燒く。

とんゐやく 【留伽羅】衣に香を焚きこむこと。＝留木。

とんどかし 【尋來】尋れ來よとの意。

とんどかしのうめ 【尋來梅】(春) 京上加茂の堤南、四念寺にある梅。四行の歌「とめこかし梅盛なる我宿をうときも人は折にこそよれ」より名けたり。

とも 【鞆】古へ射術を行ふ時、左の腕に掛けし革製の具。弓弦の觸彈して臂を打つを避くるためなりとも、又、弦音をよくせんためともいふ。

ともあきのり 【知章】知盛の息、武藏守知章の靈、平家の沒落を語ることを作りし謠曲。

ともきりまる 【友切丸】鋸切(ヒキリ)に仝じ。又、筥王丸が、工藤祐經より受けしといふ短刀の名。

ともし 【照射】(夏) 夏の狩獵で闇夜山中に篝火を焚き、又は火串をともして其火に鹿の寄り來るを待ち打取るなり。＝獸狩(ケモノガリ)。鹿狩(シカガリ)。○火串(ホグシ)。照射笛。◎雨雲や闇をいるさの鹿狩　寬車。

ともしつま 【乏妻】(秋) 櫛女の異名、遇ふこと稀に乏しと云ふ意。一說に灯姫(ホシヒメ)の轉訛なりと。

ともしびひめ 【灯姫】(秋) 七夕星の異名、七夕七姫の一。

ともしぶえ 【照射笛】(夏) 照射の時、鹿笛を吹くこと。◎谷木(カヅキ)の鬼を恐れそ照射笛　其角。

ともちどり 【友千鳥】(冬) 群れゐる千鳥。數多きことをいふ。◎荒磯や走り馴れたる友千鳥　去來。

ともつ 【鞆津】備後沼隈郡の海邊、瀨戸內海に臨める港。古へは遊女屋多しといふ。＝鞆浦。

ともなが 【朝長】源義朝の二男朝長、平治の戰に敗れ父と共に落ち行き、美濃青墓の宿にて自害せるが、跡吊ふ行脚僧に、其靈現はれ軍物語することを作りし謠曲。

ともなり 【朝成】村上朝の歌人。體容肥滿にして多食家なり。筆に妙を得、官、中納言に至る。

ともなり 【友成】備前の刀工、一條帝の勅により、御護刀をうち君萬歲の銘を打つといふ。

ともなり 【友成】謠曲高砂に出でし、阿蘇の宮の神官。

とものうら 【鞆浦】鞆津に同じ。

とものみやつこ 【伴宮奴】古へ宮中主殿寮の下役。禁中の掃除などせしもの。

ともまつり 【鞆祭】(夏) 六月廿五日(一說に十四日)備後國鞆浦の祇園天王社の祭禮。

ともり 【吃】能狂言の名。

ともゑ 【巴】今井兼平の妹にして源義仲の妾なり。常に義仲に從ひて勇戰す。義仲の戰歿後尼となる。又、この事を作りし謠曲。

とやかへる 【鳥屋返】(夏) 鷹の鳥屋入。

とやすれ 【鳥屋際】(春) 夏近くなりて鷹の疲れて鳥屋に入らんとする頃をいふ。

とやだち 【鳥屋籠】(夏) 鷹の鳥屋入。

とやだのたか 【鳥屋出鷹】(秋) 鷹の鳥屋出なり。

とやふむ 【鳥屋踏】(夏) 鷹の鳥屋入を見よ。◎山雀もむすべ增出を親ふ鷹　籠物。

とやだち 【鳥屋籠】(夏) 鷹の鳥屋入。

とやふむ 【鳥屋踏】(夏) 鷹の鳥屋入を見

よ。

ぎぎ 【外山】外山の略をいふ。

ぎぎ 【宮山】宮山の略。

ぎぎ 【鳥屋出】（秋）鳥屋出の蟲の動ひ出るをいふ。　圖　此蟲や初の蟲えも鳥屋出　蕪子。

ぎぎ 【鳥屋籠】（秋）蟲打ち。

ぎぎ 【鳥屋籠】（秋）油蟬の一種（アブラゼミ）の異。蟬は蟬に類し、蟬は三尺又は五七尺にして、蟬は圓く、蟬は長く、内に羽あり。春あれども油多きを以て、蟬共他雜林の代用とす。

ぎ 【社頭】青の同時衆の時の名臣、左傳の註を著し、左傳の衛の時の名臣にて、左傳の註を著し、左傳の衛の時の名臣。

ぎぎ 【土用】（夏）立秋前十八日間（夏の土用）をいふ、四季の土用の中央にあれば、夏なり。○土用三節。　圖　人の思ひやらるゝ土用波　紋足。

ぎぎ 【土用蟲】（夏）土用中に虫風吹くを云ふ。　圖　つゝりくゝ表の句や土用あい　鹿村。

ぎぎ 【土用丑日鰻】（夏）東都の人、土用の丑日に鰻を食べて、暑さを拂ふといふ。市中の蒲焼店繁昌す。

ぎぎ 【土用寒】（夏）土用中に寒風吹く。　圖　土用寒風天の川より吹落りゝ　乙川。

ぎぎ 【土用三節】（夏）土用の三日目をいふ。農家にて厄日とし、此日の天候により其年の豊凶を卜す。

ぎぎ 【土用芝居】（夏）江戸の劇場にて土用の頃、興行する狂言。

ぎぎ 【土用波】（夏）土用の頃、海上風なくして波の立つをいふ。　圖　雲の峯うはり上せよ土用波　百里。

ぎぎ 【土用干】（夏）虫干。

ぎぎ 【土用見舞】（夏）暑中見舞。　圖　月かけて人訪ひぬ土用見舞　湖鷹。

ぎぎ 【土用講】（夏）江戸時代の俗に、土用の入に講を設くは疫を除くとて、市中業手所にて土用講をひらが為の業　圖　土用講誠にひらが為の業　許六。

ぎぎ 【重陽祭】（秋）九月十五日、東門園東京都鶴山の八幡宮、及赤日社の祭禮。古は八月十五日なり。

ぎぎ 【土用水】（夏）夏水。

ぎぎ 【重陽月】朝日の射るを形容していふ言語。

ぎぎ 【重陽祭】（秋）六月晦日、大阪東區。　圖　土用東風天の川より吹落りゝ　乙川。

ぎぎ 【土用三節】（夏）土用の三日目をいふ。農家にて厄日とし、此日の天候により其年の豊凶を卜す。

ぎぎ 【土用芝居】（夏）江戸の劇場にて土用の頃、興行する狂言。

ぎぎ 【土用波】（夏）土用の頃、海上風なくして波の立つをいふ。　圖　雲の峯うはり上せよ土用波　百里。

ぎぎ 【土用干】（夏）虫干。

ぎぎ 【土用見舞】（夏）暑中見舞。　圖　月かけて人訪ひぬ土用見舞　湖鷹。

ぎぎ 【土用講】（夏）江戸時代の俗に、土用の入に講を設くは疫を除くとて、市中業手所にて土用講をひらが為の業　圖　土用講誠にひらが為の業　許六。

ぎぎ 【重陽祭】（秋）九月十五日、東門園東京都鶴山の八幡宮、及赤日社の祭禮。古は八月十五日なり。

ぎぎ 【土用水】（夏）夏水。

ぎぎ 【重陽月】朝日の射るを形容していふ言語。

ぎぎ 【重陽祭】（秋）六月晦日、大阪

九月十五日秋祭あり。

ぎぎ 【重明節會】（冬）古く新嘗祭の翌日（十一月中辰日）に行はるゝ節會。新嘗祭に參くたる新穀を、主上聞食し、翌朝院にて群臣に も賜ふ。＝新嘗會。○小忌衣。　圖　新土の米くゝ頭も重の明　伯英。

ぎぎ 【重陽】仲秋外宮のこと。

ぎぎ 【重陽赤祭】（春）正月十三日、三河國東郡吉田宮八幡宮の社前に天狗（鼻高の怪を著、或刀を持つ）と、赤鬼（赤木を持つ）と戰ひ、赤鬼怒られて市中を逃走りつゝ、鉦を敲くと上下を著け、人皆驚し、鬼方には切に青鬼既出る。

ぎぎ 【重箱】拵の如く重し、重けるを言ふ。

ぎぎ 【重成紙衣】だつあさを見よ。

ぎぎ 【動搖】物揺り動しをいふ。

ぎぎ 【動動】ぎゝもに同じ。

ぎぎ 【重陽祭】（秋）ぎゝうらまつり。

ぎ 【蓮蘭】佛家に用ふる鉢。皿の如くに、淵に拔あり。掛木に吊りて鳴らす。

ぎぎ 【虎面】（夏）五月中八日に虎面を云ふ。古く此日、大藝の虎御前、曾我兄弟に別る、其頃、虎面を被る。＝曾我の面。　圖　虎がるも面のゝ中いふ。名や虎が面　一茶。

ぎ 【虎渡風】（冬）渡風の一種、蟹の色黃にして、皆、虎渡に似たれば名く。

ぎぎ 【虎頭蓮】蓮華の曲名。李謨調に重し、樂家は大曲として奏す。＝しゝ　こちらで人。

ぎぎ 【虎月】（春）一月の異名。

ぎぎ 【虎皮草】（夏）原野湿地に生ずる多年草、莖は三尺、葉は三四寸、夫々分岐して、葉は圓く、葉は長く、葉端に五瓣の細小白花を綴り、開くと、瓣の夫々分りて蝶の尾に似たり。　圖　虎の尾を踏んで通行く蝶かな　友元。

ぎぎ 【虎尾草】（春）草の一種、樹枝思嚙し、花蕊ならなゝ虎蘭の如くなれば名く。花は淡紅にして千手蘭、枝に著れば名く。

ぎ 【虎河豚】（冬）河豚の一種、背上に虎あるもの。　圖　虎河豚の頭をつ

ぎぎ 【虎渡】（夏）夜の月日の夜の時を、其間の夜を、一回に四人にて、其言のまゝ刻限を知らせる待明すゝこと。

ぎぎ 【鐵合】（春）支那の古俗、清明の日、宮中にて牡丹を、門戸に、鐵貨をかけ、家庭にては三月三日、禁中清涼殿の前庭にて之を行ふ。其鐵は公卿中より出す。仙鐵鐵市といふ。＝鐵鐵。○鐵鐵。　圖　三合にして生ずゝ　し鐵合　五明。○鐵鐵の業祖の神にうたひけり　鳳州。

ぎぎ 【鳥屋】鳥を捕らんために張り置く網。＝とあみ。

ぎぎ 【鳥賣】道具の仲賣する人をいふ。

ぎぎ 【鳥賣】（秋）かがしに同じ。

ぎぎ 【鳥追】（春）京の俗、元日より十五日迄、左右人、笠を著り白巾に面を覆ひ、手を打ち唱詞を唱へ、門々に鎖を乞ふ。之を厳（カキ）の祭因節といふ。田畑より鳥を追ひ豊作ならんことを祈るより起りて、鳴笠を著り、女三社を頭に、鳥追や村が廻りて三日の月　春水。○鳥追や村が廻りて三日の名とす。　圖　鳥追の

（追鳥）

ぎぎ 【鳥追船】遊州の日蓮宗の人、鳥追の事に、花笠の留守中、左近將の妻及花若といふ若君を拐し、その夫人、乳母、自分の侍婢の鳥を追はしむる所に、日蓮聞知りて、鳥追の物に、不圓寺手の苦を知らの面白さを見せ、鳥追の詩曲。

ぎぎ 【鳥風】（春）鳥曇りを見よ。

ぎぎ 【鳥賣】（アヤ）の略語。

ぎぎ 【鳥貝】（春）貝の名、形赤貝に似て大さ三寸ほど、殼は黃白くして、内の形、鳥の嘴の如し、味美なり。

ぎぎ 【鳥冠】農家に用ふる作人の冠の名。

（ぎぶか、鳥）

＝ヰヤ　尺、葉五

に似て互生し、深緑にして光る。秋莖頭に紫碧色の花を開く、深碧、白、淡紫等の數種あり。蕚形にして形舞樂の冠の如し。其根塊を烏頭(ウヅ)、附子(ブシ)といひ藥用とす。＝かぶと菊。 圖 紫の花のみだれや烏兜　素牛。

とりかへばや 【取替物語】古き物語の名。男女の性質相反したる子を取かへんとすることを作りしもの。

とりかへる 【鳥歸】(春) 三月、雁、鵝、鴨其他小鳥類の渡り鳥、北地に歸るをいふ。○小鳥引。引鶴。引鴨。雁歸る。 圖 與謝蕪村 蛙とて立てば水行き鳥歸る　車蓋。

とりくも 【鳥雲】(春) 鳥曇りを見よ。

とりくもにいる 【鳥雲入】(春) 春日、諸鳥の空高く飛びて、雲中に入るが如く見ゆるをいふ。＝雲に入る鳥。 圖 鳥雲に入て關屋の夕かな　遊路。

とりぐもり 【鳥曇】(春) 北國にて雁鴨等の來る羽音を、天の曇りて風などあるかと疑ふなり。鳥風、鳥震も同じ。 圖 行春や佐渡や越後の鳥曇　許六。

とりけずらむ 【鳥羽毛】(夏) 羽拔鳥を見よ。

とりこ 【取子】養子のこと。

とりこえまつり 【鳥越祭】(夏) 六月九日、江戸浅草、鳥越明神(日本武尊を祀る)の祭禮。

とりさかる 【鳥交】(春) 諸鳥の交尾期をいふ。俳諧にて春季とす＝鳥つるむ。 圖 海士が家の塀垣に高し鳥交る　道彦。

とりさへづる 【鳥囀】(春) 春日、諸鳥の鳴くこと。＝囀り。○水鳥囀る。 圖 囀りやの【鳥自物】鳥の知さものと云ふ義にて、浮くと云ふ語の枕詞。

とりつるむ 【鳥交】(春) 鳥さかる。

とりて 【雲】本城の外に築きし壘をいふ。

とりなしづけ 【取成附】連俳の用語。附方の名。緣語、又は掛詞によりて附くること。例ば神を髮に取成し、衣を竹の節に取成す等なり。又、或る一語へ聯想を以て他の語を附くることにもいふ。是には俳諧と連歌とやゝ異り、例ば獨といふ語に淋しきことを聯想して鼠、盜人等を附るは俳諧にて、紅葉、櫻、躑躅などを附るは連歌なり。

とりのいち 【酉の市】(冬) 十一月酉日、武州葛飾郡花又村、大鳥明神社に諸人群參して福を祈り、熊手、宇頭等の土產を買求む。東都市内にては、淺草千束の鷲明神社參詣多し。此月第一の酉を一の酉といひ、二の酉、三の酉まであり。＝酉詣。○熊手賣。 圖 拔がけの曉寒し酉詣　拈華。

とりのこがみ 【鳥子紙】雁皮と楮とを合せて製したる卵色の上品の紙。越前敦賀の產を最とす。

とりのす 【鳥巢】(春) 諸鳥の巢を營むこと。俳諧にて概れ春季とす。○巢立鳥。古巢。雀の巢。燕の巢。鳶の巢。鷲の巢。鷹の巢。時鳥の巢。 圖 何事もなきにあはてる巢鳥かな　葛三。

とりのまち 【酉町】(冬) 酉の市。

とりはちかふ 【取鉢買】(秋) 賣の市。

とりぶつし 【鳥佛師】其頭鳥に似たりといふより名く。用明帝時代の木工。聖德太子の伽藍造營の棟梁となり、又、勅を受けて東國を治む。

とりべの 【鳥部野】京都清水の西南にあり。古より茶毘所にして墳墓多し。

とりまうで 【酉詣】(冬) 酉の市。

とりんぼう 【取坊】寛文頃、吉原などを徘徊し、人の妨げをなす鬼を云ふ。

とりもちつく 【鵜搗】(夏) 鵜の樹の皮を剝き、水に浸し柔にして、石などにて之を搗き鳥刺に用ゐるモチを採ること。 圖 鵜つくや蒼蝿の賦に書もらし　鬼水。

とりもの 【採物】(冬) 神樂の時、神前に榊、幣、杖、篠、弓、劍(タチ)、鉾、杓(ヒサゴ)の八種を取り揃へ、其一つを採りて舞ふこと。其品名を以て歌曲とせるを採物歌といふ。 圖 雪風や採物うたふ聖こもる　普求。

とりものうた 【採物歌】(冬) とりもの。

とりやまけんげう 【鳥山檢校】安永頃、江戸に住みし楊弓の名人。

とりゐのひ 【鳥居火】(秋) 七月十六日、京都愛宕山に、薪にて鳥居形の火を點ずること大文字の如し、施火(セ)の一種。

とりゐりう 【鳥居流】芝居の看板、番附等を畫く肉太き畫の流義。鳥居清信を祖とす。

とれあひ 【私合】野合の男女をいふ。

とろいた 【泥板】(夏) 鷹の鳥屋入の時に、鳥屋の內に水を流して、古き餌を洗ひ流すこと。一說に鷹の餌を載する板なりと。

とろくびまつり 【泥クビリ祭】(冬) 道祖神祭。

とろこ 【藻】銑なる人を云ふ。

とろみ 【東呂子】紙のこと、東詞。

とろめん 【兎羅綿】舶來の織物の名。古きものは綿糸に兎毛を交へて織る。後は毛を交へず。

とろゆ 【泥湯】(夏) 住吉の潮湯。

とろろ 【黃蜀葵】(秋) わうすげ。

とろろじる 【薯蕷汁】山芋を擂りおろして、汁を加へたるもの。多く麥飯にかけて食ふ。

とろ 【洞院】京三條の東西にある町の稱。

とろぼん 【斗爲巾】箏の琴の糸の名。七絃の終にあり、第五の糸を斗、第六を爲、第七を巾とす。

とわぶき 【土居葺】瓦屋根の瓦を敷する前に、板葺に泥土のみを置きしないふ。

とをかえびす 【十日夷】(春) 正月十日、大阪今宮廣田神社なる蛭兒神の祭禮あり。(摂津武庫郡四宮太神宮を本社とす)南買の鯛參詣して祝福を祈る。傳說に此神は鯛ひに坐すとて參詣の人、社殿

(十日夷賣物)

とをかがの 【十日の菊】(秋) 後日の菊。 圖 佛壇に十日の菊の匂ひ哉　蝶夢。

とをだんご 【十團子】駿河國宇都山の上り口に家毎に賣る名物の團子。大さ小豆位にて麻の緒に繫ぎて。十粒を一連とす。

とをちの 【十市野】大和十市郡にありし地。

な

な 行くな、見るな等の如く命令的に動作を禁ずる辭。又、そといふ語を添へて、動詞を挾み用ゐることあり。例へば「盃に泥な落しそむら燕」の如し。

なな 【汝】なんぢ。

ないえん 【内宴】（春）古く正月廿一・二・三日の日、子の日に宮中紫宸殿にて文人等に題を賜ひ、詩を作りて奉る。その前に講ぜし時、宮中七殿（ツ）に出でて文人等に題を給ふこと。＝れ、現在、天皇公卿の詩歌を作り奉る。 圖若菜の羹を給ふこと。＝れ、現在、天皇公卿の詩歌を作り奉る。 圖若菜の羹を給ふこと。

ないき 【内侍】人の妻をいふ敬語。＝うちうと。

ないきのすけ 【内侍輔】（夏）六月十七日、中務内侍（皇太后宮）の官職をいふ。

ないきのまち 【内侍町】禁中にて前栽・諸歌等の業技に女業を教へらるゝ所の名。

ないし 【内侍】宮中女官の命婦、典侍、掌侍をいふ。又、昔より掌侍をこふ。

ないしどころ 【内侍所】宮中温明殿をいふ。八咫の神鏡を安に内侍之を護す。＝賢所。

ないしどころのあがらの 【内侍所御神楽】（春）十二月吉日を撰び、宮中内侍所の御神殿の面の庭上にて御神楽を奏せられ、主上之に臨みて賢人に講物、勅答（実）なども講ぶ。一説院の昔より始まること。（神楽の項参照）

ないしのすけ 【内侍佐】内侍の次官に入りし尼になりしをいふ。又、小原御幸（謡曲）に出し同じ内侍をいふ。

ないしのおん 【尚侍】内侍の長官の名。

ないしのすけ 【典侍】内侍の次官の名。

ないじょう 【内裏】宮中殿上の間足に来てられし小寝。

ないせんのつかさ 【内膳司】古く宮中にて御膳の事を司りし官。

ないでん 【内典】仏教にて善ずる経文をいふ。

ないとのあり 【鳴呼侍】（春）こまりやま。

ないの 【内裏】馬の病名。＝内闕。

ないり 【泥梨】地獄。地獄のこと。＝奈利。

ないり 【奈瓜】（夏）瓜の一種、白瓜に似て やゝ小く、漬物として食ふ。

なえれん 【服度】のれん。

なえたうり 【種蒔祭】（春）なほまつり。

なかいも 【長芋】（秋）やまのいも。

ながうた 【長歌】五音七音を繰けて廿一音以上に及び、終りを七音二句にて結びし和歌。奈良時代には歌こゝろ、ばて多く長歌なり。

ながうた 【長唄】寛永頃、中村勘五郎より起りし俗曲。

ながえ 【轅】車の前に長く出たる柄。多く二本相並べし牛馬に負す。

ながえ 【長柄】傘の柄の長きもの。貴人の後より、ぞす。又、柄の長き鏡子の名。

ながおか 【長崎】陰陽家の記る神の名。＝天一神。

ながおか 【永程】（夏）暑清をいふ。

ながおび 【中帯】（春）春清をいふ。

ながおび 【永日】（春）春の永くして暮るゝこと遅きをいふ。＝日永。遅き日。 春遅し。 圖永き日や大仏殿の春詣要 芋田。

ながおもて 【中京】上京を見よ。

ながおもて 【長夜】（秋）夜長。

ながかん 【中酒】（秋）酒のッハスニヨドミニこの間を酒取りしもの。＝酒汁。 圖中前の頃もすゑ月の事 柳荒。

ながこし 【中腰】腰ありて結ぶ腰をいふ。

ながつきまえんくわい 【長崎観月会】（春）正月十日、十五日、中日（新暦三月十日）。肥前国長崎にて行ふ遊宴。大きさ六尺四方の風前に新子屏を張りたる糸をつけ、新月の合にて詩歌を作り、当日会場に酒肴を携へ見物する人多し。 圖観月会定紋の 春始ひまはし 森林。

ながつきはつか 【長崎諏訪祭】（秋）九月九日（新暦十月六日）肥前国長崎、諏訪明神の祭礼。町々に九日諏訪祭といへる注連縄を張り。又、笠鉾にて大なる笠の上に種々の作り物を乗せ、町々の印をしるし

（ソロイヤ崎長）

色を ロリ髪那で印宛し、十六歳の時、二船の渡り人出々 ゆに 波夕バの日イ なに 実に 鏡 ン 圖 し 観 走 大 ば、 機 ン 走 す。 ば 人 ロ 人 ば 人 ば 人 ば

幸若丸を討て美女丸を救ふ話の謡曲、

なかやま【中山】下總葛飾に在る地。法華經寺の鬼子母神は參詣多く、又、名物の蒟蒻を出す。

なかやまでら【中山寺】攝津河邊郡中山に在る寺院。世三所巡禮の札所の一なり。

なかやまでらむえんきやう【中山寺無緣經】(春)三月十五日より廿一日まで、攝津河邊郡中山寺にて修する無緣經（窓持寺無緣經の條を見よ）の法會。

なかやまほけきやうじせんぶ【中山法華經寺千部】(春)三月九日より十七日まで、下總國中山、正法華經寺にて法華經千部會を修すること。

ながらがは【長柄川】攝津西成郡にあり。一に中津川と云ふ。古昔は長橋を架し人柱などの事ありしが後絶えて渡船となる。

ながらのかはなづ【長瓦川】美濃岐阜の北端を流ゝ川。大日嶽より出でて木曾川に入る。鵜飼を以て有名なり。

ながらのかんなづ【長柄鉋屑】加久夜長帶刀節信、能因法師に初見參の時、能因、錦の小袋より鉋屑を出し、こは長柄の橋造の鉋屑なりとて引出物としければ、節信も又、懷中より乾たる蛙を取出し、こは井堤の蛙の千物なりとて贈りしといふ故事。

ながるるかすみ【流霞】(春)霞返むを見よ。

ながれくわんぢやう【流灌頂】水邊に塔婆を四柱とし白布を釣りひろげ樣、水などを手向けて水死者、或は溺死にて死せし者の靈を祭ること。

なかね【仲居】京阪の遊女屋にて座敷の取持などをする婢女。

なぎ【椰】高さ丈餘の樹、葉は竹葉に似、古きものは幹皮落て赤材を露はす。

なぎ【水葱】(秋)水邊に生ずる草。水葵の類、秋、紫花を開く。古へ植ゑ作りて蔬とせり。同種に小ナギあり。圖池錆びて水葱咲きほこる草家哉　吹井。

なきあま【泣尼】說法の時、尼を賦ひて泣かす。こを作りし能狂言。

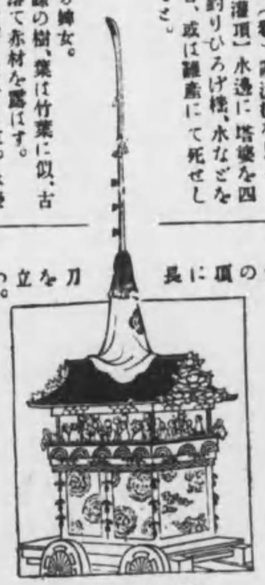
なぎさ【渚】波の打ちよする所。

なぎさのゐん【渚院】今の河内國北河内郡牧野村大字渚にありし、惟喬親王の別業。

なぎなたあしらひ【長刀扱】人の談話を受つ流しつゝあしらふこと。

なぎなたばうず【薙刀坊主】無學文盲の僧を云ふ。

なぎなたぼこ【長刀鉾】(夏)祇園會の鉾の一、鉾の頂に長刀を立つ。其長刀は三條小鍛冶宗近の作なりと傳ふ。例年、諸鉾の先驅たり。圖皆月や長刀鉾の轡もの　泥足。



（長刀鉾）

なぎなつり【泣祭】(夏)四月廿日、奥州平泉なる、安部宗任の女（清原基衡の妻となる）の墓に男女參詣し、供養を行ひ、白衣を被りて踊ること。圖新尼の泣上手あり泣祭　素文。

なくはし【名橋】名の良きこと。又、吉野の枕詞とす。

なくれ　海のシケ日和なるをいふ。

なげぎや【投鞘】槍の刃の鞘の末を長くし、後に折りかへして垂らせしもの。

なげし【長押】鴨居の上に横に長くわたしたる材。槍など掛おくところ。＝承塵。

なげつぼん【投頭巾】(冬)四角にやゝ長く畳ひたる頭巾。烏帽子の如く端を後方に折りて被る。圖米買ひに雪の袋や投頭巾　桃青。

なげのなさけ【閑情】等閑なる情事をいふ。

なげぶし【投節】貞享頃、京都より行れし小唄の名。隆達節の流れにして、二十六文字の文句より成る。後世都々一の源ともいふべきもの。元祿頃には吉原遊ひの者などに專ら行はる。

なご【海市】(春)蜃氣樓。

なごしのはらひ【夏越祓】(夏)六月晦日夕、諸社にて行ふ御祓の式。（一に名越祓とも書す、實は神を和(ナゴ)す意なりと）多く河邊に五十串(シダ)を立て祝詞を唱へ、形代(カタシロ)を流す。又、茅の輪を作り、諸人に之を潜らしむ。＝水無月祓(ミナヅキバラヒ)。荒和祓(アラニコバラヒ)。大祓。夏祓。夕祓。御祓(ミソ)〇御祓川。小堀聲神(サバヘナ)。川社。夏神樂。茅輪(チワ)。形代。麻の葉流す。圖鬼宜一人御祓するなる野川哉　几董。

なごやぜき【勿來關】常陸多賀郡と岩城菊多郡との堺にあり。源義家が櫻花の詠に名高し。

なごのうら【那古浦】伊勢國四日市の海邊。

なごやおび【名古屋帶】袋打の眞田紐の兩端に絡(ナ)をつけて帶としたるもの。肥前名護屋にて製したるより起り、慶長頃、多く花柳界に遊行す。男帶は幅四寸、女帶は巾二寸五分程なりといふ。

なごやか【和】やはらかなること。

なごやかぼ【名古屋顔】名古屋の人らしき顔したること。

なごやぎをんまつり【名古屋祇園會】(夏)六月十六日、名古屋市の三郡天王社、末廣町若宮社の祭禮、神輿、車樂等出づ。

なごやまんざ【名古屋山三】慶長頃、出雲の御國と共に歌舞伎を起せし人。又の名、山三郎、山左衛門といふ。

なごりのうら【名殘裏】名殘の折を見よ。

なごりのこしも【名殘霜】(春)別れ霜。

なごりのそら【名殘空】(冬)大晦日を云ふ。

なごりのつき【名殘月】(秋)後の月。

なごりのはな【名殘花】(夏)殘る花。

なごりのゆき【名殘雪】(春)雪の果。圖吳竹や名殘の雪に打しぼり　屋鶴。

なごりのをり【名殘折】連句一卷の終の一折をいふ。もと百韻には四の折といふべきを、四は死に音通ずる故忌みてかくいふなり。表裏に分つ。

なし【梨】(秋)梨の實をいふ。樹は高さ五六尺より二三丈に至り、葉は互生して圓く尖る。春の末、桃に次ぎて五瓣の小白花を開き、花衰へて葉を出し、秋實を結ぶ。形圓くして味甘し。其種類甚多し。＝アリノミ。〇犬殺梨。紅瓶子梨(ヒサウヘイ)。觀音寺梨。松尾梨。水梨。圓梨。空閑梨(コガ)。軒の妻梨。なふの浦梨。山梨。沫雪梨(アハユキ)。圖冷かや小柄を傳ふ梨の水　蝶夢。

なしうちぼし【梨打烏帽子】烏帽子の一種。柔らかに揉みて作り、其巖、梨の皮の如きもの。

なしつぼ【梨壺】一に昭陽舍と云ふ。內裏六殿舍の一。

なしつぼのひかせん【梨壺五歌仙】和泉式部、紫式部、赤染右衛門、馬內侍、伊勢大輔の五人をいふ。

なしつぼのごにん【梨壺五人】大中臣能宣、清原元輔、源順、紀時文、坂上望城の五人

なしのはな

なしの花 月に香潤む夜あり　素村。

なす【茄子】（夏）なすび。

なすしもべ【那須七郎】武者の勇士。隠岐氏の臣、下なり。大鷹、武者の勇士。隠岐氏、大鷹、武者の勇士。

なすの【那須野】下野那須郡の曠野。殺生石の故事あるを以て名あり。

なすび【茄子】（夏）水木(すいき)の実。秋蔬菜、二月頃、畝に種を下し、苗三寸尺、幹黒く夏よ後、瓜形の実を結ぶ。紫花を開き、五瓣相連る。○瓜形の実を結ぶ。＝ナスビと。○茄子の花。初光流星子。きゝうしスビと。○茄子の花。初光流星子。　園　暦想し茄子の蔕の小葉　長翠。

なすびの小葉【茄子植】（春）茄子苗を見よ。

なすびのつゆ【茄子漬】（夏）茄子を見よ。

なすびのつゆ【茄子漬】（夏）茄子を醤又は辛子などに漬けし香の物をいふ。夏の茄子の食品。　園　人家の一これも茄子なす茄子の漬　召波。

なすびなへ【茄子苗】（春）三月、茄子の苗を植うること。＝茄子苗。　園　栄や植えし茄子植る。

なすびの多【茄子島】（秋）瓜の島。

なすびのはな【茄子花】（夏）茄子。　園　こゝかしこ一つ二つ花茄子　琴風。

なすびまき【茄子蒔】（春）二月頃、茄子の種をまくこと。　園　蒔茄子し蒔れたる茄子種　渡口。

なぞの【那覇利】青色、緑色の絹織にて紀多き男面の二人にて舞ふ雅楽。

なだいかん【名詩面】（冬）名詩(ニウ)。

なだいかつき【名尚月】（秋）名月。

なたね【菜種】（夏）あぶら菜の実をいふ。菜の花の蜂蜜語。

なたねかり【菜種刈】（夏）菜種手すを見よ。

なたねつき【菜種搗雨】（夏）菜種入梅。

なたねにゅうばい【菜種入梅】（夏）四月の頃吹く黄梅の風。＝菜種入梅。○菜種入梅。

なたねのにくい【菜種卸伝】（春）北野卸忌日を見よ。

なたねふき【菜種麩】（夏）夏、菜種を刈る頃、焼ふ麩をいふ。

なたねぼす【菜種干】（夏）四月頃、油菜を刈り、其熟したる実を搾りて油を取ること。其油は燈用、食用等に用ゐる。○菜種刈る。

なたねまき【菜種蒔】（秋）八月の頃、菜種を種蒔くこと。　園　蝶鳥の夢や見つら人菜種蒔　樗良。

なたまめ【鉈豆】（秋）蔓草、種を下す、夏生に花して実は蔓ごとけり。彩豆大大にして夏、紫花を開き秋実を結ぶ。彩豆大大にして夏、紫花を結ぶ。＝名あり。彩豆大大に、知や紅なり。＝刀豆。鉈豆の実。　園　刀豆豆やのたりこと下る花炎　太祇。

なたまめのはな【鉈豆花】（夏）ナタマメ。

なちやま【那智山】紀伊国熊野郡にある山。有名なる那智瀑あり。

なつ【夏】（夏）〔異名〕朱明。昊蒼。炎帝。朱夏。炎夏。三夏。仲夏。　園　夏が来ましらやこゝは九月夏　又　冬が来ましらやこゝは九月夏。

なつ【夏】雅楽曲。　園　夏の清人但馬国の清十郎こと通の清十郎こと性光すで、其事蹟、西廻り、近松等の作に出づ。

なつあさがほ【夏朝顔】（夏）朝顔の一種、六月の頃開花す、花小なり。　園　巻頭に夏の分限なる　恒丸。

なつあさし【夏浅】（夏）初夏のこゝろをいふ。　園　夏浅し朝々かはる香の物　青牛。

なつあつし【夏暑し】（夏）夏の烈風をいふ。　園　夏風机上の白紙飛書す　子規。

なつあつし【夏暑し】（夏）夏の暑帝をいふ。　園　夏暑し蝉の花　青牛。

なつあつし【夏暑し】（夏）夏の暑帝をいふ。　園　夏暑し蝉の花　青牛。

なつあつし【夏暑し】（夏）夏の暑帝をいふ。　園　夏暑し蝉の花　青牛。

なつあつし【夏暑し】（夏）夏の暑帝をいふ。　園　夏暑し蝉の花　青牛。

なつあつし【夏暑し】（夏）夏の暑帝をいふ。　園　夏暑し蝉の花　青牛。

なつあつし【夏暑し】（夏）夏の暑帝をいふ。　園　夏暑し蝉の花　青牛。

なつあつし

なつあつし

なつあつし

なつだいこん【夏大根】(夏) 夏時に採取した食用になる大根をいふ。 園 本書はまだ花科こすする大根をいふ。 夏大根 支考。

なつだち【夏立】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつづきん【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏大根】(夏) 夏時に採取した食用になる大根をいふ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつなぶし【夏蕗】(夏) 夏の行に使ふ竈。 書 後ガジを指すものにして皆小型なり。 ○書 竈。

なつまち【夏近】(春) 夏待つ。

なつまくら【夏頭巾】(夏) 麻頭巾。 園 麻頭巾木綿の袋の袋被 雑月。

なつな【納豆】(冬) 冬の食品。(納豆豆腐を見よ) ○納豆汁。 園 寒の月に分ち蒸や煮納豆 旨原。

なつなこしる【納豆仕込】(夏) 納豆作る。

なつなじる【納豆汁】(冬) 納豆を擂り、又は板上にて叩きて、之を味噌に和して汁にしたるもの。 園 冬季、簡素な味噌汁ゴに用ゐる。 納豆汁 蕪村。

なつなとうふ【納豆豆腐】(夏) 納豆は大豆を清水にして、麹に鹽を混じて作り込みしもの、よく二三年を経て保つ。 園 納豆多く作り食用こす。 ＝納豆仕込も。 園 納豆を仕込過たり山の寺 南蕉。

なつなのはし【納豆鳥前子】 待ゑ庭しのこ。 園 頂の折目、寺納豆を入れる、曲物の折目に似たるより納すこ。

なつのあさ

なつのあさ

なつのあさ

夏衣にたるもの。　圖　青草や畑畦にみく夏若草　風高。

なつのあさぎ【夏浅葱】（春）支那の古俗に寒食の日食ふもの。桃の粥の類なり。

なつのあさがほ【夏朝顔】（夏）朝顔を朝の字なき事に寒さすらは（誤なり）。圖　夕暮　夏花ちる古屋敷　鳴雪。

なつのあさがほ【夏朝顔】（夏）早咲（サキ）。圖　夏旅や代見とそきけば子規　夏原。

なつのあさぶね【夏休】（夏）夏季、學生官吏などの休業すること。昔は土用休と云ふ。＝夏中の休暇。土用　夏中の休みを語暇の意なり。＝夏中暇。圖　一日まで土用休や夜の雨　一茶。

なつのあさ【夏麻】（夏）夏季、麻をのたれ林の頃ふるといふ。圖　夏麻の乱れ骨探　和夫。

なつのあさぶね【夏船】（夏）涼船。

なつのあさやま【夏山】（夏）夏山の緑なるをいふ。○山涼る。圖　夏山や窓開きけりて下駄の音　凡る女。

なつのあさがほ【夏朝顔】（夏）卯の花の異名。

なつのあさがほ【夏朝花】（夏）樹の名、高さ丈餘に至り、葉つめしてどきの如く互生のし、仲夏、五瓣の白花開くべし。淡紫色の如く、食ふべし。秋實を結ぶ。色小豆の如くにして、食ふべし。

なつのあさぎ【夏浅葱】（夏）夏、葉のほうけて其くなりしもの。圖　若しくは雨蛙ゆる　詩や夏わらび　白雄。

なつのあさぢ【夏浅】（夏）夏に別るゝ、こゝ、晩夏。

なつのあさむ【夏惟】（夏）夏の暮れ行くを惜む也。晩夏。

なつのうし【夏牛】（夏）素盞嗚の牛を祇園に祭り、吉事あるを待にその數頭を猶ゆくとの。

なつのえ【夏手】（夏）草名。山野に生じ、又圃に花開くこと。高さ尺餘、葉は行の葉に似て小く、夏、紅白又は種々の美き花を開く。花蕾深く刺まれて糸の如し。開後、小き莢を結び。内に黑子あり。＝櫻花。夢　朝夏手故に夕夏（ナツ）ともいふ。＝大櫻花。〔異名〕ときはり草。○蓮　蓮手。和蓮手。蓮蓮手。圖　蓮手や片陰出来て夕蓮　一茶。

なつのえのあか【蓮手炎】（夏）カサネの色目の名、表紅裏色、裏青、又は表スハウ、裏紅、裏蓮蓮等。

なつのか【蓮蔓】（秋）かたかくり。

なつのか【蓮蔓】（夏）形代（シロ）。

なつのがは【名取川】陸前仙田郡名谷峰より出る河。又、近江國大上川の別稱。

なつのがは【名取川】能狂言の名。

なつのかぜ【夏風】（夏）夏、葉のほうけて其くなりしもの。圖　若しくは雨蛙ゆる　詩や夏わらび　白雄。

なつのかぜ【夏風】（夏）夏に別るゝ、こゝ、晩夏。

なつのこころ【夏情】（夏）夏の暮れ行くを惜む也。晩夏。

なつのこま【夏駒】（夏）素盞嗚の牛を祇園に祭り、吉事あるを待にその數頭を猶ゆくとの。

なつのこと【蓮手】（夏）草名。山野に生じ又圃に花開くこと。高さ尺餘、葉は行の葉に似て小く、夏、紅白又は種々の美き花を開く。花蕾深く刺まれて糸の如し。開後、小き莢を結び。内に黑子あり。＝櫻花。夢　朝夏手故に夕夏（ナツ）ともいふ。＝大櫻花。〔異名〕ときはり草。○蓮　蓮手。和蓮手。蓮蓮手。圖　蓮手や片陰出来て夕蓮　一茶。

なつのこころ【夏心】（夏）夏季、學生官吏などの休業すること。昔は土用休と云ふ。＝夏中の休暇。土用　夏中の休みを語暇の意なり。＝夏中暇。圖　一日まで土用休や夜の雨　一茶。

なつのさと【夏麻】（夏）夏季、麻をのたれ林の頃ふるといふ。圖　夏麻の乱れ骨探　和夫。

なつのさぶね【夏船】（夏）涼船。

なつのさやま【夏山】（夏）夏山の緑なるをいふ。○山涼る。圖　夏山や窓開きけりて下駄の音　凡る女。

なつのさゆり【夏百合】（夏）卯の花の異名。

なつのさゆりはな【夏百合花】（夏）樹の名、高さ丈餘に至り、葉つめしてどきの如く互生のし、仲夏、五瓣の白花開くべし。淡紫色の如く、食ふべし。秋實を結ぶ。色小豆の如くにして、食ふべし。

なつのさや【夏莢】（夏）早莢（サヤ）。圖　夏旅や代見とそきけば子規　夏原。

なつのしなり【夏撓】（夏）夏季、學生官吏などの休業すること。昔は土用休と云ふ。＝夏中の休暇。土用　夏中の休みを語暇の意なり。＝夏中暇。圖　一日まで土用休や夜の雨　一茶。

なつのしの【夏篠

なのかのせんせもの【七日御節供】(秋) 七月七日、古へ五節供の一にして、宮中内膳司より御饌、索餅(サクヘイ)等を奉る式あり。圖 今日とても洗米調せん御清水　立圖。

なのかのまり【七日鞠】(秋) あすかゐのまり。

なのきもみ【名木散】(秋) 櫻、楓、櫨、柞等の葉の散るをいふ(名草枯る参照)

なのくさかる【名草枯】(冬) (名の草とは名ある草の意にて名詞に非ず) 冬の諸草の枯るゝこと。＝枯萩。枯荻。枯女郎花。枯葛。枯澤。枯尾花。枯蘆。枯鶴頭。枯藍。枯夕顔。枯葱。枯蓮。枯薇。

なのはな【菜花】(春) アブラナの花をいふ。秋分に種を下し、葉互生して緑なり。春、莖高さ三四尺に至り、三月頃、四瓣の黄花を開く。夏實熟す。菜種(ナタネ)といひ、搾りて油を採る。圖 菜の花や淀も桂も忘れ水　宮水。

なのはなとふにくわす【菜花化蝶】(春) 俗説に菜花は散りて蝶に化すと傳へらるゝこと。圖 菜の花の化したる蝶や法隆寺　青々。

なのりそ【神馬藻】(夏) 鹿角ともいふ。海藻。長さ三四尺、莖細く枝多くして細き葉あり、其實圓く大さ一分餘、食用とす。冬採りて蓬萊薔の風具に製す。(俳諧にては鹿角といへば新年の季にて、ナノリソは夏なり)＝莫鳴藻。圖 神馬藻に何ぞ咲くべき夜の雨　移竹。

なはしろ【苗代】(春) 稻の種を蒔き苗を生ぜしめ、長じて常の田に移し得るまでになすこと。○苗代田。苗代垣。苗代水。水口祭。圖 苗代に待つことありや鷺の首　才丸。

なはしろいもロ【苗代芋】(春) 亞濕木、山野に生じ莖五六尺、葉は三葉集りて生ず、形圓く長く鋸齒ありて背白し、春枝頭に四分許の紅花を開き、實を結ぶ、赤くして常の芋より大なり。(實は夏なれど、苗代の名により春とするか)。

なはしろかき【苗代垣】(春) 苗代に立つる粗なる垣。

なはしろぐみ【苗代茶莫】(春) 茶莫の一種。葉やゝ常のに異り、實の形菓の如し、二月苗代の生長する頃熟す。圖 月寒く苗代ぐみのこほれけり　一具。

なはしろだ【苗代田】(春) 苗代を作るに用ゐる田。＝苗代小田。○苗代水。圖 苗代水に支考。

なはしろみづ【苗代水】(春) 苗代田にせき入るゝ水をいふ。圖 松遠し苗代水に日の當る　召波。

なはしろそだ【苗代小田】(春) 苗代田に同じ。

なはて【畷】田の間の道。＝縄手。

なはのれん【縄暖簾】居酒屋をいふ。其入口に縄暖簾を釣りたればいふ。

なはむね【縄棟】(秋) 九月一日、奈良春日若宮御祭の假宮を造るため、轅木なかくるる式。假宮なれば縄にて結ぶ故かくいふか。其式甚殿なり。御祭の條を見よ。

(縄棟之圖)

なび【雉火】(冬) 追儺のこと。

なふりやう【納涼】(夏) すゞみ。

なへ【苗】(夏) 併諸にて專ら稻の苗をいふ。＝早苗。

なへいろのきぬ【苗色衣】(夏) カサネの色目の名、表裏共に薄き病黄。

なへかり【苗實】(夏) 諸種の苗を實るもの。圖 苗實や卯の時雨にぬれながら　屠龍。

なべこまる【鍋子丸】河内の人、初めて鍋を造りし人。

なべつる【鍋鶴】鶴の一種、羽灰色なるもの。

なべてならぬ【不並】尋常ならぬこと。

なべとり【鍋取】冠の纓の俗稱。＝おひかけ。

なべとりくげ【鍋取公家】おひかけなしたる冠を着し公家をいふ。

なべに【並】ともなひて云ふに同じ。

なべまつり【鍋祭】(夏) つくま祭。

なべやき【鍋燒】(冬) 冬夜、街上などにて雉鈍を平鍋に煮つゝ賣り歩くもの。圖 鍋燒の火をとろくして談る哉　紅葉。

なほぎりに【等閑】心とめざること。

なほし【直衣】古の官服の名。袍の知くにて烏帽子、指貫と共に着る。高官の着用するもの。

なほのぶ【尚信】書家、狩野孝信の次男。探幽の弟にて、父兄に學び更に一格を開く。慶安三年歿。

なほまさつり【直會祭】(春) 正月十二日、尾張國中島郡國府宮(コフノミヤ)の祭禮にて、神官往來の人、一人を提へ、之を機に擬し神前に居らしめ、翌日土の儒餅を頁はして之を放つ。現今は雛追(ヒナオ)祭と稱し村内にて四十二の厄に當る人、雛頁人となりて修祓潔齋し、雛追人(厄年の男にて雛を祓はんため社前の川に水垢離し褌鉢のまゝなるもの)に手足を觸れしめ以て其厄を追ふ。故に之を褌鉢祭(ハダカ)ともいふ。

なまがひ【生貝】(夏) 水貝。

なまくさもの【腥物】能狂言の名。

なまくるみ【生胡桃】(夏) 胡桃の油うくなりて青きもの。圖 生胡桃の油うくなり　春仙。○はげ山や人もすさめぬ生胡桃　北鯉。

なまこ【生海鼠】(冬) 本名コ。海中に產する長さ五七寸の動物、鱗骨踏尾なく、全體疣多く軟滑にして、口は刀疵の如し。旗扁にて白く、脊の黑きもの味最佳なり。冬を食季とす。○トヨコ。キンコ。イリコ。コノワタ。圖 いきながら一つに氷るなまこ哉　桃青。

なまず【鯰】古は生の魚肉を細く切りしもの。近代は之を酢に和へたるもの。

なまぜん【生禪】なま悟りの禪。＝野狐禪。

なまなり【生成】般若面に似て双角ある能面。

なまぶし【生節】(夏) 夏季、鰹の肉の蒸して生干さしたるもの。鰹節の柔きもの。なまりぶし。なまり。圖 生節に竹の子勾ふ旅籠かな　麥水。

なまぶみの【生弓】甲斐の枕詞。

なまりぶし【生節】(夏) なまぶし。

なみがへし【浪返】雅樂の青海波にある太鼓の打方の名。

なみだのしぐれ【涙時雨】(冬) 墮つる涙を時雨にたとへたるなり。＝猫時雨。

なみのやまと【浪千里】海の廣きを形容していふ。

なみのはな【波花】波の泡立ちて白きをいふ。又、鹽のこと。

なみまくら【波枕】船中に眠ること。船路の旅。

なんぎん【南瓜】(秋) ボウフラ。

なんくわ【南華】愚人を云ふ。俗語。

なんぐわ【南瓜】(夏) 五月の異名。

なんくわうばう【南光坊】天海僧正のこと。

なんくわうやう【南華經】一に莊子といふ。莊周の世界觀を識したる書、內外篇卅三あり。

なんけつ【雜月】(秋) 八月の異名。

なんげんぼくげん【南阮北阮】晉の阮籍、阮咸と道南に居り、諸阮は道北に居る、北阮は富み、南阮は貧し、七月虫干をなすに北阮は綺羅を列ねしに、阮咸は竿に褌を掛けて、世を嘲けりしといふ故事。

なんご【南湖】日光中禪寺湖をいふ。

なんご　碁石を摑みて双方より出し合ひ數を中る兒童の遊戲。

なんさう【南草】烟草のこと。

なんざんじ【南禪寺】京都東山の北に在り。京都五山の一。龜山法皇の御願にして、大明國師の開山なり。

なんぜんじまつり【南禪寺祭】(秋) 九月十日、京都南禪寺の門前、綾戸明神の祭禮。

なんせんぶしう【南瞻部州】佛經にいふ現世のこと。

なんだいもん【南大門】奈良興福寺の南門。金剛力士の像を置く。古へ、二月、此門前にて薪能を能す。

なんでん【南殿】紫宸殿の別稱。

なんてんのはな【南天花】(雲) 濕木、人家に植う。葉冬を經て枯れず。夏、五瓣の小白花を開き圓き實を結ぶ。秋實熟して赤く、冬に至りて尙存す。＝南天燭。黑圓。蜘の圍や南天の花ちりかゝる　黑

なんてんのみ【南天實】(秋) 南天の花の條を見よ。圓 南天やおのが實程の山の奥　其角。

なんと【南都】大和奈良の別稱。

なんど【納戸】衣服、調度を納めおく部屋ないふ。

なんばこつてんわうつなひま【難波午頭天王綱曳】(季) 正月十四日、大阪難波の午頭天王社の祭。

(難波午頭天王綱曳)

なんばほりえのつきみ【難波堀江月見】(秋) 八月十五夜、大阪難波堀江川の河に月見の船多く出づ。皆近傍遊所のものにて琴、三弦、笛太鼓の囃子賑しといふ。廷實頃の風俗なり。

なんばん【南蠻】足利氏の末に舶來したる器物を云ふ。又、料理の類などに惡な入れしものを呼ふ語。

なんびん【南瓶】ちんなんびんを見よ。

なんぷう【南風】(雲) みなみかぜ。

なんぶのわたくしだい【南部私大】(冬) 私大。

なんりよ【南呂】(秋) 八月の異名。

なんれう【南蠣】二朱銀の異稱。

なんゑんだう【南圓堂】奈良興福寺中にある堂。藤原冬嗣、藤原氏の興隆を祈りて建てしもの。

なめくぢり【蛞蝓】(雲) 夏季、降雨の時出る虫。長さ二三寸、頭に双肉角あり。全身粘液ありて水濕の處に棲む。＝ナメタヂ。圓 住吉の浦のみるめやなめくぢり　羅川。

なめずれ【無禮戲】無作法の戲事ないふ。

なめし【柔飯】柔の葉、又は大根、蘇などの葉を細く刻み、飯にまぶしたるもの。

なめす【鞣】獸皮を灰汁にて洗ひ晒し柔になし勝負を爭ふ。其綱甚巨大なり。

なめすすき【滑煙草】(秋) 多く榎に生ずる茸。榎茸に似てやゝ小し。＝なめたけ。圓 滑茸や見合の供のよい器量　牛林。

なめせんぎれ【錢錢切】錢文、賣惡しに唐草の模樣ある古代製地。

なめたけ【滑茸】なめすすき。

なめて【並】すべてと云ふに同じ。

なめりあるき【滑歩】邇々と氣どりて歩むこと。

なもでをどり【ナモデ踊】(秋) 八月廿七日、摂州河邊郡、多田神社(多田滿仲の靈廟にて多田院と號す)の祭禮に、村民白旗を立て一種の踊を催すをいふ。

なもみ(秋) 草の名、春生じ秋枯る。チナモミ、メナモミの二種あり。チナモミは高さ三四尺、葉は茄子に似て夏、白花を開く、實はブチキの實に似たり。＝菜耳。卷耳。蒼耳。「メナモミは原野に多く、春生じ高さ三四尺、秋の末細小なる黃花を開く。(季寄の書に春季とするは孝生の時を季としたるか)。圓 隆家に陰なく咲きしなもみ哉　以吉。

なや【魚屋】魚を賣る店。

なや【納屋】物置部屋のこと。

なやらふ【御道】(冬) つゐな。

なよし【名吉】(秋) コザラシエビナ。

なよしのかしらます【鰛頭掃】(冬) 終掃すを見よ。

なら【楢】楢の實を見よ。(楢とのみは雜也)

なら【奈良】大和國添上郡の地。＝南都。

ならいし　東北の風を云ふ。東京の語。＝ならひし。

ならうちは【奈良團扇】(雲) 奈良春日の社人などの作りて賣る團扇。同地の名產。

ならがたな【奈良刀】奈良の刀鍛冶の造りし刀。

ならぢか【奈良坂】奈良の北にあり。山城へ通ふ路に當り、時鳥の名所として名高し。

ならざくら【奈良櫻】(春) 古へ、南都興福寺東圓堂の前にありし櫻樹。上東門院、此櫻を召さんとしたるに、奈良法師の惜みて奉らず、終に花垣の庄を與へし故事。

ならさらし【奈良晒】(雲) 奈良より織出す麻の布。苧の皮を剝ぎ、其白きものにて織り、灰汁にて洗ひ砂場に晒したるもの。多く、夏服とす。圓 團扇が笠や涼しき奈良男　都雀。

ならしちだいじ【奈良七大寺】大和國の東大寺、西大寺、法隆寺、藥師寺、大安寺、元興寺、興福寺の七をいふ。

ならしばより【楢柴鳥】(冬) 鷹の異名。

ならじらう【奈良次郎】奈良東大寺大佛殿の巨鐘を云ふ。

ならじらう【奈良二郎】(雲) 鷲の峯の異稱。

ならちや【奈良茶】奈良東大寺等にて炊き始めたる故名く。茶飯に小豆、栗を加へし食品。

ならづけ【奈良漬】奈良漬造るを見よ。

ならづけつくる【奈良漬造】(雲) 六月土用中、白瓜、茄子等を酒糟に漬けて藏し、香の物とす。奈良漬とのみは雜なり。圓 奈良漬に伯父坊よぶや法華宗　淡水。

ならにんぎやう【奈良人形】もとは春日神社の杉材にて造りしと云ふ。丹絲にて彩色したる粗劣の人形。

ならのみ【楢實】(秋) 喬木、柏の一種、葉小く長さ三寸許、秋實を結ぶ。長さ八九分あり。圓 笠數で善ることしらす小楢の實　乙二。

ならはちまんまつり【奈良八幡祭】(秋) 九月二日、大和國奈良東大寺中の八幡宮(字佐八幡宮と同神)の祭禮。神前にて伶人舞樂を行ふ。

ならびし【長風】東北の風をいふ。

ならびがをか【雙岡】京都大辻法金剛院の西北にあり。三個の丘陵相並ぶ。蒙好法師の書蹟あり。

ならぶろ【奈良風呂】南都宗善の作り初めしもの。茶湯に用ゐる土風爐にして黑赤の二品あり。

ならほとし【奈良法師】南都興福寺の僧をいふ。中古、武器を携へ、武人の如し。

ならぼり【奈良彫】彫刻の一種。塗師、奈良宗貞といふもの、彫刻に巧みにして一家を創めしといふ。

ならも【奈良茂】享保頃、江戸深川の富豪。吉原中萬字屋の玉菊に通ひ、驕奢に耽りしこと紀文に亞ぐ。

ならもみぢ【楢黃葉】(秋) 秋季楢の葉の黃むなり。卓朗。

ならあがりもの【成上者】能狂言の名。

ならた【成田】下總下埴生郡にあり、新勝寺の不動尊を以て有名の地。

ならひさご【鳴瓢】許由、常に手にて水を掬ひ呑むを見て或人、瓢の水呑を贈りしに其器風に當れば著く鳴る。許由之を傾しとして瓢を捨て、再び手にて水を掬ひ呑みしといふ故事。

ならひらご【業平忌】(夏) 五月廿八日、在原業平(阿保親王の第五子、和歌に名あり。世に在五中將と稱す)の忌。

ならひらしじみ【業平蜆】(春) 武州隅田川、及、其附近の源森川などに產する名物の蜆。

なるかみ【鳴神】(夏) かみなり。

なるかみ【鳴神】市川家の歌舞伎十八番の一。元祖團十郎の自作にして、鳴神上人のことを作りしもの。

なるかみしやうにん【鳴神上人】戲曲などにて假作せし人物。昔、鳴神上人といふもの、時の天子の爲に、皇后の腹に太子を設くる秘法を修し、其報として其山に戒壇を建つる約なりしも帝、其約を踐まざりしかば、上人大に憤りて、天下旱魃の祈をし、龍神を瀧壺に秘封せしを以て、士民大に困む。時に大臣文屋豊秀一策を案じ、雲の絶間といへる才德兼備の女を遣し、上人を墮落せしめて、其法を破らしめて、龍神を瀧より出せしといふ。

なるかみつき【鳴神月】(夏) 六月の異名。

なるこ【鳴子】(秋) 引板(ヒキ)ともいふ。一尺位の板に竹を括し連れて田畑に立て、之に長き綱を附して家に引渡し、折々綱を引き音を立つ。秋田の實る頃鳥獸を逐ふ具。 圖 谷越に鳴子の綱や窓の中 丈草。

なるこゆり【鳴子百合】(夏) 山中の濕地に生する草、高さ三四尺、莖斜にて直立せず。葉は百合に似て夏の初、花を開く。筒狀にして末は五瓣に分れ、青白色なり。連り咲きて垂るゝこと、鳴子板の如し。實は南天に似て熟すれば黑く、根は白くして藷あり。堀りて食用とす。 ‖ 黃精。

なるさは【鳴澤】富士山頂に在り。藤原俊成、富士の鳴澤なるさと讀みてなるさの入道と呼ばれし故事あり。

なるさを【鳴竿】(秋) 鳴子竿の略。竿の先に鳴子板を付けたるもの。山田などにて、鳥獸を驚かし逐ふに用ゐる。 圖 鳴竿のしさりに月の入嶺哉 集二。

なるたき【鳴瀧】山城愛宕郡にある川。

なるたきにいとにのくやう【鳴瀧大根煮供養】(冬) 十二月十二日、京都鳴瀧村了德寺にて參詣の人に、大鍋に大根を煮て振舞ふ。

(現今は代物を乞ふ)昔、見眞大師(親鸞)此地に他力念佛を勸化の際、寒を防ぐため、大根を煮て捧しに甚だ喜れ、庭前の溝の嚏にて名號を書き與へられしより起る。當日の大根は村内の講中より持寄るといふ。 圖 大根を念佛いふて食ふ日哉。

なるたきまつり【鳴瀧祭】(秋) 九月廿八日、京都西山鳴瀧の鎭守、福王子宮(字多帝の御母后を祀る)の祭禮。 ‖ 福王子祭。

なると【鳴門】阿波板野郡と淡路三原郡との間の海にして潮水常に渦くといふ。

なるみ【鳴海】尾張國愛知郡にある驛。有松染を出すを以て名あり。

なれ【汝】なんぢに同じ。

なれひらを【馴衣】着馴れし衣。鑒馴衣などといふ。

なゐ【地震】ぢしん。

に

に【丹】赤き色、繪具。

にう 陶器などの疵を云ふ。

にうから【乳香】薫陸の乳頭をなせるもの。

にうめ【煮梅】(夏) 梅の實熟したるを砂糖にて煮て食ふもの。○餅梅。 圖 青かツし色としもなき煮梅哉 几董。

にうめん【煮麵】索麵を汁にて煮たるもの。

にえ【鈍】刀の刃の鍛へかたにて燒紋あるないふ。

にえた【甚多】ののしること。

にかいつばき【二階椿】(春) 椿の一種、花の形常と異るもの。

にがから【二更】今の午後十時頃をいふ。

にがうり【苦瓜】(秋) ツルレイシ。

にがしほ【苦潮】(夏) 極暑の頃、海水に雨水などの廣りたる水交りて、潮の味苦くなるもの。海魚之を飲めば死すといふ。 圖 苦潮に魚浮く濱の暑さかな 秋光。

にがな【苦菜】(春) 路傍に多き草、春芽を生じ葉の大さ二三寸、タンポポの如き花を開く。 ‖ 黃花菜。 圖 嬌溜て苦菜も雜る春の草 吳水。

にが、びやくだう【二河、白道】佛說に、地獄に喰虎火の河と貪慾水の河の間に一の白道あり、巾僅に四五寸なり。人此道を涉らんとき後より六賊追來る、川の向ひに人あり、川の此方に人ありて共に早く渡れといふ、此河を恐れず涉れば彼岸の善所に達するなりといふ。六賊は眼耳鼻舌身の六根、指導する二人は釋迦、阿彌陀なりといふ比喩。

にがよび【二合字】上の字に書き下を花押にて書く古への署名法をいふ。

にき【日記】につき。

にぎたへ【和栲】柔かき白布。

にぎて【幣】神に用ゐる幣束。

にぎりずし【握鮨】(夏) 飯と魚肉とを合せ、握りて製りし鮨。江戸にて多く賣る。(鮨の條參照) 圖 携へて餘花に遊ばん握鮨 召南。

にくうのだいきやう【二宮大饗】(春) 正月二日、禁中にて群臣、中宮(皇后)東宮(太子)の二宮に參り拜禮して饗宴を賜はる儀式。中宮の饗は玄輝門の西の廊にて行ひ、東宮のは東の廊にて行ふ。 ‖ 大饗。 圖 大饗に花くらべたる車かな 立圃。

にくぶね【荷輦】船の兩側を蓆にて包み涙を遮くるもの。

にくまり【二句去】連俳の用語。二句を隔てざれば同類の語を用ゐざる掟をいふ。詳しくは連句作法參照。

にくじふはち【二九十八】能狂言の名。

にくぶん【肉屏】唐の王忠嗣の臣、將軍心、月、夢に城郭らし城郭の大なるを取りて故事。＝肉屏。て冬肉風屏風。

にくぼそ【二句花】連俳の用語。心、花、や等の語は未に二句去りて附ける。

にがつ【二月】（春）〔異名〕花月。今月。仲春。陽中。去更春。梅見月。小草生月。初花月。雪消月。梅津月。

にがつたいこ【二月太鼓】（春）二月初日より十四日迄（現今三月）。本願寺大の寺の鼎り十四日迄（現今三月）。本願寺大の行法を修する。二に修二會とも いふ。火を焚り式は十四日の四、等夜行人、炬火を焚り式は十四日の四、等夜行人、炬火を焚り、初夜より 鼎に及び、七日、十二日の間夜は水取 ぐ出行法の前者、實説に、若狭國なる遠敷（おにう）明神が遠に閼迦なる井 行ふ。此日の夕水酒を出すは水を飲けれども 行ふ。此日の夕水酒を出すは水を飲けれども 水を取る。　圖水取や二もり の前の谷の音　梅青。

にがつたいこのあとのまつり【二月太鼓の後の祭】（春）二月 月堂の行ひ。

にがつうり【二月瓜】支那等諸の風俗 にて、二月の頃、早瓜を植せし故事。

にがつおれん【二月烈】（春）涅槃會をいふ。

にがつかんとう【二月寒】（春）二月に なりて年寒を感ずること。　圖正月の祝で 二月の寒さかな　白谷。

にがつ【二月】【二月】古、支那にて孟春、四月の二 人、蛟城を攻め落し、衛公の二子を捕て 美人、ゼ、故事。轉じて二人の美女をいふ。

にがつ【二月】【連歌】連俳の用語。連句の前句 に歌の詞のりたるに綴りて、連句後句を歌詞に綴きを其本の句即綴りて、三句目は後の 本歌に綴りて作りたる詩ことの云ふ、三句迄同 ことの云ふ。

にがつにんどうそう【濃溪正】武田の臣、高坂彈正 昌信の、ことの。善人、を見て道理し勝利 を得たるを以て此名あり。

にがはし【煮炊菜】相撲せ切。

にがみず【濃水】武藤新にあり。ことの。 夏の雨、草の茂れるを濃ゝ等ゆ、草の 葉末の風に動きて白々水の流るゝ如 く見え、近けば、ことなくして、又、濃 に見ゆること。＝珍濃。

にがやな【二軒茶屋】古、京都東國社の 参詣の田楽を賣りて有名なり。

にがゆ【粥】茶粥なる茶粥。豆の 茶を入れたるもの。

にげ【河毛】馬歌の歌。河毛を云ふ。＝ 毛。

にごり【濁酒】（冬）冬季、酒醸なる茶 ゝ折たる茶の等　凡等。

にごりざけ【濁酒】（秋）しるかを見よ。　圖 菜日に古今をくもや濁酒　百明。

にごりざけ【濁酒】（夏）夏、酒屋なるに て酒 の味を変はるかめ、醸せる酒を濁る ことの。京都の酒店にては酒家の屋を濁 し、此日諸人に酒を振舞ふ。　圖風薫る 井戸の前や茶酒屋　ふさ女。

にごりそ【茶合】（夏）冷し汁。茶ひやし。 圖茶合しや鶴の王おく等山　孝甘。

にし【西】京都西部、洛西の別稱。

にしかわのたき【西河瀧】相州吉野郡、吉野山 にある瀧。吉野川の上流にして一に清 明の瀧といふ。

にしきぎ【錦木】紅葉 にて白文の錦様 ある木。宮廷、世屋ある人の用ゐるもの。

にしきぎ【錦木】（秋）マユミ。

にしきぎ【錦木】古く奥州の風俗に恋ふ女 に酒は婦人すること時、文の代りに二尺計 の木を色々に彩り、恋ふる男の門に立つ、 遠に取入られ、は婦の皮袋すること 至ふ。遠く取入られ、は婦の皮袋すること 取入れまでも立つれば、ある立て、手束にい し詩曲の名。

にしきぎのもみぢ【錦木紅葉】（秋）秋、マユミ の紅葉すること いふ。

にしきぎのわかば【錦木若葉】（夏）マユミの若 葉をいふ。

にしきぐさ【錦草】（秋）紅葉の異名。

にしきぎ【錦月】東洲秀衡の嫡子、錦月國衡、 父弟の三郎義衡と義経の事に就き爭ひ、 父に弟を討て頼朝に聞すること を作り し詩曲。

にしきがり【錦鳥】（秋）鳥の異名。

にしきばなし【錦雨子】（冬）蕎麦の異。紅葉 の色深きを取て蕎麦の面を染ふもの。

にしきぶね【錦船】紀伊國名所歌の港。

にしきぶね【錦船】近江國にあり。紅葉の名 所。

にしきぶな【鯉寄】（春）鯉（こい）の肉を煮た もの。

にしきぶな【錦魚】（秋）マユミ。

にしきぶね【錦木】古く奥州の風俗に恋ふ女 に酒は婦人すること時、文の代りに二尺計 の木を色々に彩り、恋ふる男の門に立つ、 遠に取入られ、は婦の皮袋すること 取入れまでも立つれば、ある立て、手束にい し詩曲の名。又、此事を作りし詩曲の名。

にしきぶのもみぢ【錦木紅葉】（秋）秋、マユミ の紅葉すること いふ。

にしきぶのわかば【錦木若葉】（夏）マユミの若 葉をいふ。

にしきぐさ【錦草】（秋）紅葉の異名。

にしきぶね【錦月】東洲秀衡の嫡子、錦月國衡、 父弟の三郎義衡と義経の事に就き爭ひ、 父に弟を討て頼朝に聞すること を作り し詩曲。

にしきがり【錦鳥】（秋）鳥の異名。

にしきばなし【錦雨子】（冬）蕎麦の異。紅葉 の色深きを取て蕎麦の面を染ふもの。

にしきぶね【錦船】紀伊國名所歌の港。

にしきぶね【錦船】近江國にあり。紅葉の名 所。

にしぶね【西船】（夏）〔異名〕夜船。

にしぶね【西船】（夏）〔異名〕夜船。

にしぶね【西船】（夏）〔異名〕夜船

にじのこえ

水ゐる。始めて凍る。地大水にて屋ごとなる。

○小雪（陰十月節、十一月七日）水始て凍る。地大水にて屋ごとなる。

○行冬（陰十月節、十一月七日）水始て凍る。地大水にて屋ごとなる。

○立冬（陰十月節、十一月七日）水始て凍る。地大水にて屋ごとなる。

○大雪（陰十一月節、陽十二月七日）雪降て地凍る。

○冬至（陰十一月中、陽十二月七日）冬の極まる。

○小寒（陰十二月節、陽一月五日）寒氣至る。

○大寒（陰十二月中、陽一月十日）寒氣極る。

○立春（陰十二月節、陽一月十五日）春の始まる。

○雨水（陰十二月中、陽一月十日）雨降て草木潤ふ。

○啓蟄（陰十二月節、陽二月五日）蟄虫戸を開く。

○春分（陰十二月中、陽二月十日）晝夜平分す。

○清明（陰十二月節、陽三月五日）清明の風吹て草木潔し。

○穀雨（陰十二月中、陽三月十日）穀雨降て百穀潤ふ。

○立夏（陰十三月節、陽四月五日）夏の始まる。

○小満（陰十三月中、陽四月十日）草木満て穂を出す。

○芒種（陰十三月節、陽五月五日）芒ある種を播く。

○夏至（陰十三月中、陽六月十一日）夏の極まる。

○小暑（陰十三月節、陽六月五日）暑氣至る。

○大暑（陰十三月中、陽七月十日）暑氣極る。

○立秋（陰十三月節、陽七月五日）秋の始まる。

○処暑（陰十三月中、陽八月十日）暑氣止む。

○白露（陰十三月節、陽八月五日）露降て草に白し。

○秋分（陰十三月中、陽八月十日）晝夜平分す。

○寒露（陰十三月節、陽九月五日）寒露降て草に寒し。

○霜降（陰十三月中、陽九月十日）霜降て草木黄ばむ。

○立冬（陰十三月節、陽十月五日）冬の始まる。

○小雪（陰十三月中、陽十月十日）雪降て草木に積まず。

○大雪（陰十三月節、陽十一月五日）大雪降て草木に積む。

○冬至（陰十三月中、陽十一月十日）冬の極まる。

○小寒（陰十三月節、陽十二月五日）寒氣至る。

○大寒（陰十三月中、陽十二月十日）寒氣極る。

にじのこえ

○秀づ。○小満（陰四月中、陽五月十一日）若葉茂る。○芒種（陰五月節）芒ある種を播く。○芒種（陰五月節）芒ある種を播く。○夏至（陰五月中、陽六月十一日）夏の極まる。○小暑（陰六月節、陽七月五日）暑氣至る。○大暑（陰六月中、陽七月十一日）暑氣極る。○立秋（陰六月節、陽八月五日）秋の始まる。○処暑（陰六月中、陽八月十一日）暑氣止む。○白露（陰六月節、陽九月五日）露降て草に白し。○秋分（陰六月中、陽九月十一日）晝夜平分す。○寒露（陰六月節、陽十月五日）寒氣至る。○霜降（陰六月中、陽十月十一日）霜降て草木黄ばむ。○立冬（陰六月節、陽十一月五日）冬の始まる。○小雪（陰六月中、陽十一月十一日）雪降て草木に積まず。○大雪（陰六月節、陽十二月五日）大雪降て草木に積む。○冬至（陰六月中、陽十二月十一日）冬の極まる。○小寒（陰六月節、陽一月五日）寒氣至る。○大寒（陰六月中、陽一月十一日）寒氣極る。

にじのこえ

○行く。（以上夏）○立秋（陰七月節、陽八月七日）涼風至る。○白露（陰七月節、陽九月七日）露降て草に白し。○秋分（陰七月中、陽九月十一日）晝夜平分す。○寒露（陰七月節、陽十月七日）寒氣至る。○霜降（陰七月中、陽十月十一日）霜降て草木黄ばむ。○立冬（陰七月節、陽十一月七日）冬の始まる。○小雪（陰七月中、陽十一月十一日）雪降て草木に積まず。○大雪（陰七月節、陽十二月七日）大雪降て草木に積む。○冬至（陰七月中、陽十二月十一日）冬の極まる。○小寒（陰七月節、陽一月七日）寒氣至る。○大寒（陰七月中、陽一月十一日）寒氣極る。（以上冬）

にじのこえ

○虹（陰十月中、陽十一月十一日）虹蔵て不見。天地引別れ陰陽隔る。○閉塞冬ごもる。○日天不暖。虎始て交む。草枯出づ。○冬至（陰十一月節、陽十二月七日）雪降て草木枯る。○小寒（陰十一月中、陽十二月十一日）○雉雨を始ぶ。蟄虫穴を塞ぐ。○小寒（陰十二月節、陽一月七日）水泉動く。○大寒（陰十二月中、陽一月十一日）雞始て乳む。征鳥厲疾し。水澤腹堅。（以上冬）

にじのこえ

にじのこえ【十四節】漢句の一体。二十四句（春四句、夏八句、秋四句、冬四句）を以て春の二十四氣に象りしもの。

にじのこえ【十八節】漢句の一体。二十八句（春六句、夏八句、秋八句、冬六句）を以て一年を十八に分ち、夏の二十八宿に象りしもの。

にじのこえ【二十六夜】（秋）二十六夜待の略。

にじのこえ【十六夜】（秋）七月十六日の月出づる時、三尊佛の御影を置むこと云ひ伝へ、古俗にて月の出を待つ。

にじのこえ

にじのこえ

にじのこえ

に代る者。

にはたのまつ【二畑の松】（冬）正月、家
に歳徳神を取り納む。二月、真榊百足を飾の端
に挿す。（国にあるもの）は後
世よりの時のことにいふ。（国にあるもの）は後
世よりの時のことにいふ。（国にあるもの）は後
世よりの時のことにいふ

にふばい【入梅】(夏) つゆいり。

にふぼく【入木】書道のこと。

にふまい【入舞】(冬) 十二月一日、各府藏より、兵に徴せらるゝ壯丁の軍隊に入營する式。圖 入營を送る旗行く水立載 一柴庵。

にべ【鮸】いしもちの成長したるもの。形あまだひに似て、長さ三尺ほど、背は紅に淡黒の斑あり。腹中のフェにて膠を製す。

にへ【贄】にべの白鱗にて製したる膠ないふ。

にへの【贄殿】禁中にて諸國より、献進せし贄の魚鳥を料理するところ。

にほ【鳰】(冬) 水禽。鴨に似て小く、頭、背、蒼黑にして、胸黄に、紫斑あり、腹白く、嘴短く黑く、尾も短し。脚は赤くして尾に近く着けり。水を潜ること巧にして、藻、水葉などを集め、其巢を水上に浮べ造る。＝かいつふり。鷿。圖 かいつふり浮出る迄見て過ぬ 曉齋。

にほてる【鳰照】近江の湖の枕詞。

にほのうす【鳰浮巣】(夏) 水鳥の巣。圖 内川や鳰の浮巣に鳴く蛙 其角。

にほのうみ【鳰海】琵琶湖の異名。

にほひぐさ【匂草】(春) 梅の異名。

にほひすくる【匂櫻】(春) 櫻の一種、花八重にて香氣あり。

にほひどり【匂鳥】(春) 鶯の異名。

にほひのはな【匂花】連俳の用語。連句の名殘の折の花ないよ。詳しくは連句作法參照。

にほひぶくろ【匂袋】(夏) 掛香。

にほふみや【匂宮】源氏物語中の人物。當帝の第三子。母は源氏の女、明石中宮なり。性、好色にして、薫大將の扮裝して浮舟に通じ宇治の悲劇を起さしむ。

にほんまつつばね【日本松】奥州安達郡の地。丹羽氏の舊領地。

にほんや【二本松】

にまか【匂】美しく香高きこと。

にまのさと【二万里】佛中下道郡に在り、古昔、貢として壯丁二萬の扶役を出せしより名とす。

にまんひせんにやまつり【二萬五千日詣】(秋) 清水千日詣。

にんじん【人參】藥草の名。又、胡蘿蔔の本名なる芹人參を略して人參といひ、專ら其名となる。

にんじん【胡蘿蔔】(冬) 葉は芹に似、春の末、五瓣の小白花を綴り開き笠の如し。根細長く赤黄色にして、冬引きて蔬とす。味淡く甘し。圖 胡蘿蔔や胡人王化に霑はず 大魯。

にんじんのはな【胡蘿蔔花】(春) 前條を見よ。圖 誰か見ん櫻の頃の野人參 素堂。

にんじんひく【胡蘿蔔引】(冬) 同前。圖 申風や手足も赤き人參引 淚水。

にんどうのはな【忍冬花】(夏) 山野に生ずる蔓草。葉は橢圓にして光り、毛多し。初夏、香氣ある花を開く。一蔕に二花、一節に四花、同日に開く、形筒狀にして、苔は淡紫、開けば白黄にして、後白に變じ、一枝に白黄相交る。＝金銀花。すひかつら。圖 谷々や草の枕も金銀花。

(忍冬)

にんとくせいまつり【仁德祭】(秋) 九月廿一日、大阪上難波博勞町、仁德天皇社(祭神仁德帝)の祭禮。此日、神渦の神事あり。布團太鼓の車樂を引き出し市中甚だ賑ふ(布團太鼓の條及圖參照)又、氏子の

家々に甘酒を煮て相贈る。一に須花祭、上難波祭といふ。又、博勞稻荷祭といふは、同社に稻荷社を合祀する故なり。但し例祭は六月廿一日にて九月は秋祭なれど俳季には之を用ゐる。

にんなじ【仁和寺】にんわじ。

にんにく【大蒜】(春) ヒルの類、葱葉蒜に似て大く、夏白花を開く。葱の花に似たり。春、苗を食用とす。根は皮赤くして六七瓣に裂る。皮を去りて一瓣づゝを分ち植う。臭氣甚しく薫に藥用とす。＝おほびる。圖 蒜や畑の隅に貯る 土俵。

にんにくのはな【大蒜花】(夏) にんにく。

にんわうゑ【仁王會】(春)(秋) 三月及七月の開度に、宮中大極殿、紫宸殿、清涼殿等にて仁王護國般若經を讀ずる式。

にんわじ【仁和寺】山城葛野郡御室にあり。光孝帝の仁和四年に創立し、宇多帝御落飾の後、寺内に宮殿を造營し、大内山又は御室といふ。又、朱雀帝の宸居あらせ給ひし故世々、法親王の管する所となる。寺内櫻樹多し。

にんわじまつり【仁和寺詣】(春) 三月廿一日、京都仁和寺にて伽藍を開放し、諸人の拜觀を許す。宛も花時に方りて同寺の櫻樹開せるを以て花見の人大に賑ふ。＝御室詣。

にゐうげつ【二陽月】(冬) 十二月の異名。

にやくいち【若市】能狂言の名。

にやくぜく【若俗】男色のこと。

にやくだう【若道】男色のこと。

にやくわうじ【若王子】京都東山鹿谷の北にあり。若王子權現社を祀る。昔は正東山若王寺と稱する寺あり。花、紅葉の名所として稱せらる。

にやけ【若氣】男子の女々しく色めかしきないふ。素と男色の若衆より出でし語。轉じて紅門のこと。

によい【如意】佛家の具、玉、鐵、竹などにて造り、長さ尺餘にて蹟の手の如き形をなす。

によいがたけ【如意嶽】山城國愛宕郡比叡山の南方鹿が谷の上に聳え近江國に跨る山。大文字を焚くを以て大文字山ともゝふ。

によいりん【如意輪】六臂にて如意寶珠を捧ぐる觀世音を云ふ。

によいりんじ【如意輪寺】大和國吉野山中にある寺院。本堂を如意輪堂といひ、楠正行が(返らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名なぞとゞめむる)の遺詠を壁板に記したるを以て名あり。

にようぐ【女御】女官の名。中宮の次ぎの紀の名目。

にようじゆ【女爐】女官の名。内侍所にて掃除、點油等を掌る。

にようゐん【女院】國母の佛門に入り給ひて門院の號を贈られし時の稱。

にようご【女御】にようぐ。

にようじゆ【女爐】にようじゆ。

にようじゐん【女叡位】(春) 正月入日、天子清涼殿に出御して、内親(ナイシン)王を始め、多くの女官等に位階を賜ふ儀式。五日の叡位に對して女叡位といふ。持統天皇の時より隔年に行はれ、後世は正月吉日を擇びて行はる。＝女(ナヨ)叡位。圖 おとなしきこと宣びめ女叡位 莊角。

にようせつ【如雪】摩永頃の高僧。明の人にして、我國に歸化し京に住み、衞を明光に學び、花鳥人物をよくす。我國漢畫の宗たり。

にようにんや【如法暗夜】如法は素よりの義。眞の暗夜なること。

にようはんまつゑん【如法經會】(夏) 四月廿日より廿九日まで、山城、泉涌寺靈龜院にて行ひし會式。

にようらいじ【如來寺】磐城國夏井村山城にあ

る淨土寺。名鑑派四本山の一なり。

によらいはだ【如來肌】美しき女の肌の温さないふ。

にら【韮】(春) 野菜。葱に似て葉扁く一根に叢生す。之を刈れば復生す、一畝に四五回割りて食用とす、葱の如き臭あり。夏、數莖を生じ、梢に小枝數十を出し、上に三分餘の白花を開く。六瓣にして野蒜の花の如し。實は圓く內に小黑子あり。〔異名〕二文字(モラジ)。 ㊀紙漉も雨乞ふ暮や韮刈る　道彦。

にらぐ【萍】刀鍔を銀ふとき、湯加減するを云ふ。

にらのはな【韮花】(夏) にらを見よ。㊀草になりて韮の花咲く島かな　文路。

にらみだい【白眼鯛】(春) 掛鯛。

にらやまがさ【韮山笠】紙捩にて編み漆を塗りたる編笠。德川氏の銃卒などが被るものにて、伊豆韮山の代官江川太郎左衞門の創めしもの。

にらを書る【剪韮】後漢の人、郭林宗といふもの、友の訪ひ來りし時、雨を冒し韮を切て、餅を造り饗せし故事より、友情の厚きをいふ。

にわう【二王】王蘂之、王獻之の親子の筆跡を稱する語。

にわう【仁王】佛法を守護する二神の名。又、能狂言の名。

ぬ

ぬ 入りぬ、消えぬなどの如く動詞に添ゆる助辭にて、現在を顯はす辭。「木瓜翫旅して見たく野は成ぬ」

ぬえ【鵺】(秋) フクロフの類。大さ鳩の如く、色黃赤にて翅に黑紋あり。翅の上は黑く下は黃にして足は黃赤なり。深山に棲み、晝隱れ夜出づ、鳴聲小兒の如し、世人其聲を忌む。＝鬼ツケミ。

ぬえこどり【鵺】源三位頼政が近衞帝の內裏に怪獸を射し事を、鵺の靈出て、物語る筋の謠曲。

ぬえくさ【委草】しなれたる草をいふ。

ぬえどり【鵺】(秋) ぬえの異名。

(鵺之圖)

ぬえのしたきる【鵺舌去】(夏) 傳說に鵺(鵺鳥)は能く人語を解する鳥。五月五日、其舌の尖を切れば最能く語るといふ。支那の古俗。㊀去るとても鵺鳥にしかじぬえの舌　梅盛。

ぬかか【零餘子】(秋) むかご。

ぬかつきりし【叩頭虫】ハタハタ(鰲魚)に似たる小鳥。

ぬかぎり【額鳥】(秋) 鶸(ヒワ)に似たる小鳥。灰白色にして青みを帶ぶ。善く囀り其聲清朗なり。㊀額鳥の來て鳴く井戸の桃かな　白雪。

ぬかぼし【糠星】細かき無數の星をいふ。

ぬかみそ【糠味噌】じんた。

ぬかみそつぼ【糠味噌壺】糠味噌を作りおく壺。

ぬきがは【貫河】催馬樂の曲名。

ぬきかつがるる【殿展雷】密通する女の客は自から重りてぬげるといふ俗說。

ぬきす【貫簀】盥の上に掛渡す簀にて手洗ふ水の外へ散らぬためなりと。

ぬきたつどり【拔立鳥】(冬) ぬす立つ鳥。

ぬくし【温】(春) 春日の温暖なるを云ふ。＝ぬくい。ぬくとい。㊀山鳩の聲にぬくさき野山かな　後川。

ぬくとい【温】(春) 同前。

ぬくし【温】(春) 同前。

ぬくぬくどり【懷鳥】(冬) 寒き時、小鳥を捕へ、其鳥の羽にて足を暖め一夜を明し、翌朝之を放つ。後に其鳥の飛びし方には行かず。これ其恩を思ひて其鳥を捕らさらむ爲なりと。㊀暖め鳥共に身ふるふ旭哉　關更。

ぬけがけ【拔駈】人より先に窟に出發すること。

ぬけがら【拔殼】能狂言の名。

ぬさぶくろ【幣袋】旅行の時、道守神に手向くる幣を入るゝ袋。其幣は絹布を細に切りししものにて、袋は透きたる帛にて造るといふ。

ぬしへいろく【塗師平六】能狂言の名。

ぬすたつどり【偷立鳥】(冬) 鷹狩にて追はれたる鳥の、草などに隱れて密に逃るゝこと。＝ぬきたつ鳥。㊀野を越すやぬす立鳥の差なく　氷鶴。

ぬすびとせんが【盜人泉】能狂言の名。

ぬすみず【盜泉】支那廣州の貪泉の名。此水を呑ば賊となるといふ俗說ありて、吳隱之が之を嘲りし詩古文にあり。

ぬた【沼田】醋味噌にて魚肉、野菜を和へし料理。

ぬた【白膠木】(秋) ぬるで。

ぬたな【蓴】(夏) 池沼に生ずる水草。葉厚く病圓にして、やゝ馬蹄の如く大さ寸餘、水面に浮び、根は水底にあり。莖紫を帶び長く莖の如し。夏の末、細瓣の紅紫花を開く、採りて食用とす。＝蓴菜(シユン)。蓴菜。㊀引く程に江の底知れぬ蓴哉　尙白。

ぬた【布子】(冬) 綿入。

ぬのさらし【布晒】(夏) さらし。

ぬのびきのたき【布引瀧】攝州兎原郡砂山にあり。

ぬばかま【奴袴】さしぬきのこと。

ぬばかま【野袴】のばかまを見よ。

ぬはりぐさ【王孫】(夏) ツチバリの花。

ぬひあん【縫庵】京都上鳴に住し、琴を愛して理の旗鼓と合せて樂みしといふ畸人。

ぬひそめ【縫初】(春) 新年に結女、裁縫を初むること。㊀縫初の色糸賣や祇園町　華村。

ぬぼこ【瓊矛】玉にて飾れる鉾。

ぬまたらう【沼太郎】近江美濃の方言にエドヒシクヒのこと。雁の一種の大なるを云ふ。又「廣澤やひとり時雨るゝ沼太郎」といへる句は、坂東太郎、曾根太郎の例に倣ひ、沼の大なるを形容せしに過ぎしに非ず。

ぬまづかま【沼津垣】細き竹を割りて網代形に編みし垣。

ぬめり【滑】歌、連俳などの平凡なるものを嘲りていふ語。

ぬめりぶし【滑節】なまめきたる小唄の節をいふ。

ぬめりをとこ【滑男】なまめかしき男。

ぬりあふぎ【塗扇】(夏) 扇の柄(エ)の塗りたるもの。

ぬりがさ【塗笠】女笠の一種。寬永時代は若き女の冠りしが、萬治後は老女のみ冠るといふ。

ぬりこめ【塗籠】家の奧まりし所にありて、厚く土にて塗りめぐらしたるところ。又、古くは寢室などの內にありて器財を納めおくところ。

ぬりで【白膠木】(秋) ぬるで。

ぬりべのせんなん【漆部仙女】大和漆部の遠の妾。藤を編て衣とし、栗草を摘て食とし、常に琴を彈ず、七人の子ありしが、孝德の朝登仙するといふ。

ぬりもぶち【塗壇緣】(冬) 木地壇緣を見よ。㊀商人の妻が雅びや塗壇緣　朱明。

ぬるたま【寢魂】夢のこと。

ぬるで【白膠木】(秋) 山野に多き樹。高さ丈餘に至り、枝四方に茂る。葉は漆の

ねぎやまみち【根岸道】江戸上野の北にある閑谷の地。

ねぎもち【根岸】江戸上野の崎、山麓をいふ。

ねぎま【葱汁】（冬）ネブカ汁。

ねぎのはな【葱花】（春）ネギ。圖蘭のつゝしのこゝにはさびし葱の花　其白。

ねぎまつり【葱山伏】能狂言の名。

ねくたれ【寝髪】正結なく寝たるこゝろ。

ねくたれがみ【寝髪髪】寝てかたむし髪。

ねこあし【猫足】猫、手などの意味で、低きもの。

ねこあるき【猫歩】（夏）夏、江戸の町に猫を遊び、花嫁などを敷き用いるもの。

ねこいらず【猫嫌】（夏）夏、江戸の町に猫を飼ひ歩くもの。

ねこうり【猫売】（夏）猫のこゝ。出産よりこの猫を取ることを禁じ方にて、人を呼ぶ。

ねこじゃ【猫足】（夏）猫の足をむこゝなり。（猫の猫を見よ。圖はは木々の百目なき足に訪ふなり　其角。

ねこじゃら【猫の蓼】（春）猫の交尾期をいふ。多く初春のこゝろにして、其状、互に爭ふ如く情こゝ。＝猫さかり。○猫の つるゝ猫から猫の恋　桃青。

ねこつま【猫恋】（春）猫の恋を見よ。

ねこのこ【猫の子】（春）猫の子。圖猫の子の日しに鈴く行かん大し用なる。

ねこのこのひ【猫の子日】（春）古く正月、初子の日の流に春用する衣をいふ。圖人

ねこのこ【猫の子】（春）猫の子。圖猫の子の日しに鈴く行かん大し用なる。

ねこのつま【猫恋】（春）猫の恋を見よ。

ねこのつき【子月】（冬）十一月の異名。

ねこのひ【子日】（春）子の日すなはちこゝの初の子の日しに鈴く行かん大し用なる。圖子の日しに鈴く行かん大し用なる。

ねこのひのこ【子日の子】（春）古、正月、初子の日の流に春用する衣をいふ。圖人

ねこのまつ【猫の松】（春）猫の恋を見よ。

ねこまた【猫股】（秋）猫の恋を見よ。

ねこまたぎ【猫跨ぎ】（秋）猫の恋を見よ。

ねこまつ【猫の松】（春）猫の恋を見よ。

ねこまつり【猫祭】（春）猫の恋を見よ。

ねこやなぎ【猫柳】（春）猫の恋を見よ。

ねこやなぎ【猫柳】（春）猫の恋を見よ。

ねこやなぎ【猫柳

々に独ひかるゝな子の日衣　光舟。

ねのひつぎ【子日月】(春) 一月の異名。

ねのひのあそび【子日遊】(春) 正月初の子の日、野に出でゝ小松を採り、千代を祝ひて歌宴を催す。宇多天皇の寛平八年、閏正月六日、北野雲林院に行幸し、子の日の宴を行ひ給ひしに始まり、世々殿上の行事となる。○小松引。子の日の松。初子の日。子の日衣。圖 手を添へて引かせまゐらす小松かな　几董。

ねのひのまつ【子日松】(春) 子の日の遊。

ねはんかぜ【涅槃風】(春) 二月十五日前後、一七日の間、最も穏かに吹く風の名。

ねはんざう【涅槃像】(春) 涅槃會に釋迦如來寂滅の圖(佛西面北枕にして横はり、天地間の生物皆愁歎せる様を描く)を掲げ、諸人に拜さしむるをいふ。＝寂釋迦。寂佛。圖 泣きやうな書き盡したり涅槃像　稲育。

ねはんゑ【涅槃會】(春) 二月十五日、釋迦牟尼佛の入滅せし日なりとて諸寺に行ふ法會。＝常樂會。○涅槃像。佛の別れ。二月の別。去りし佛。響の果。圖 御佛に花ものいはぬ別れかな　白兒。

ねびえ【寝冷】(夏) 夏の夜など、眠れる間に冷氣に侵さるること。圖 月よさに

ねびたもの

よべの蕎麥より寝冷哉　江南。

ねびたもの【年寄御達】年老ひたる女官をいふ。

ねびまさる【寝日増】老ひゆきて容形の次第に尤しらしく成ゆくこと。＝ねぶ。

ねぶ【老】年の老ひたること。又は顔形の大人びること。

ねぶか【根深】(冬) ねぎ。

ねぶかじる【根深汁】(冬) 葱(ネギ)の汁なり。圖 下僕等のよよと盛りけり根深汁　召波。

ねぶのはな【合歓花】(夏) 合歓木、ねむの茂く、ねぶ又はねむといふ。高二三丈、枝其葉夕に至れば閉ぢ相合ひて眠るが如く、朝に至り再び開く。仲夏、枝の端毎に寸餘の淡紅花を開く。形絲を紮めたる如し。後、莢を結ぶ、子は米粒の如し。

(花のぶれ)

ねぶもみぢ

＝夜合。トコユスリ。圖 舟虫の妻の唱歌かれむの花　千那。

ねぶもみぢ【合歓紅葉】(秋) 晩秋ねぶの葉の紅葉するをいふ。圖 山中の納骨堂や合歓紅葉　露絞。

ねぼとけ【寝佛】(春) 涅槃像。

ねまちつき【寝待月】(秋) 臥待月(フシマチ)。

ねまつり【子祭】(冬) 十一月子の日(甲子日)大黒天を祭り、二股大根、黒米、黒豆等を供ふ。皆福を得るの爲なりと。各家此日燈心を買ひ灯せば厄氣を拂ひ、又、燈心を貯ふれば福ありと稱す。之を子灯心といふ。＝甲子祭。圖 子祭や梅待つ宿の小豆飯　山店。

ねみだれがみ【寝亂髪】ねくたれがみ。

ねみづぐさ【根水草】(春) 柳の異名。

ねむしろ【寝産】(夏) ねござ。

ねむのはな【合歓花】(夏) ねぶの花。

ねむもみぢ【合歓紅葉】(夏) ねぶもみぢ。

ねむれるはな【睡花】(春) 海棠。

ねんが【年賀】(春) 年禮。

ねんぎょ【年魚】(夏) あゆ。

ねんぐ【年貢】(冬) 年の暮に農家より官に年貢米を納むること。＝年の貢。

ねんぐまい【年貢米】(冬) 年貢として納むる米。

ねんし【年始】(春) 年の始。又、年賀のこと。

ねんしじやう【年始狀】(春) 年賀を述ぶる書狀。圖 更科や蕎麥主よりす年始狀　青々。

ねんじん【念人】(春) 正月十六日、河内國吉田にて兒童互に石討合をなすこと。印地打の一種なりといふ。

ねんじや【念者】若衆を愛する者、即ち男色にて兄分となる人をいふ。又、男色にて寵愛されしものの、年老いて尚其人に從ひゐること。

ねんじやぶり【念者振】念者振ること。

ねんとう【年頭】(春) 年始に仝じ。圖 年頭に孫の笑を土産かな　一茶。

ねんないりつしゆん【年内立春】(冬) 年の内の立春を見よ。

ねんび【年尾】(冬) 年の尾。

ねんぶつしゆう【念佛宗】崇德帝のころ、天臺宗より出し僧良忍の始めし宗旨。

ねんぶつまるや【念佛丸屋】江戸吉原の遊女屋にて遊女が仕落ありし時、階子の下に立せて念佛を唱へしめし罰法。

ねんぶつをどり【念佛踊】(春) みぶれんぶつ。天王寺踊念佛。

ねんぶつをどり【念佛踊】(秋) 念佛を唱へ拍子として踊る盆踊。京都一乘寺村、川合村などにあり。

ねんれい【年禮】(春) 年始の禮。＝年始。

ねんれいぐわ【年賀】年賀。年頭。圖 年禮に少しの野路の氣晴れたり　千東。

ねものがたりのさと【寝物語里】中仙道の近江美濃の國境にある地。

ねらひがり【認狩】(夏) ししし。

ねりくやう【練供養】(夏) 四月十三日、十四日、大和國葛下郡當麻寺にて中將姫(俗ハ)の女、薩髪して善心尼法如射拱佩(ヨセキ)の女、蓮髪して善心尼法如といふ。寶龜六年三月十四日殺)の忌に法會を修し迎接會といふを行ふこと。圖 練供養祭り顔なる小家哉　蕪村。

ねりぬき【練素】藤蔓などを撚りて繩の代りに用ゐるもの。

ねりぬぎ【練貫】生絲を縱とし、練糸を横として織し絹布の名。

ねりひばり【練雲雀】(夏) 六月、雲雀の羽毛脱落して新毛生ずる頃をいふ。其飛ぶこと常よりも速かならざれば雲雀鷹を使ひて之を捕獲す。圖 練雲雀人の走ればぬ走る也　黄花。

ねりもの【雑物】祭禮の時、氏子の町々練行く、山車、屋臺の類の稱。

ねわたし

ねわたし【根綿】琵琶湖上の風の名。

ねを【根緒】三味線の胴の端にかけし組紐の名。天鵞絨と共に糸を結び付くるところ。

ねをなく【音泣】ねになく。音を出して泣くこと。

の

のあそび【野遊】(春) 春、山野に出で遊ぶこと。＝春興。圖 野遊の落合うて乘る渡しかな　風寶。

のいばら【野茨】(夏) 野生の茨をいふ。夏、白花を開き、香甚清らかなり。＝金櫻子。

のうあみ【能阿彌】名は眞能、春鶴齋と號す、東山義政に仕ふ。茶道に通じ又畫を善す。

のういん【能因】名は永愷(ヤスス)。橘氏にして剃髪の後、能因と改む。攝津國古曾部に居りし故、古曾部入道といふ。藤原長能に師事し、和歌をよくす。

のうげ【能化】僧の師の稱、又、人を教化すること。

のうせんかづら【浚井蔦】(夏) ノウセンの

花。

のうぜんのはな【凌霄花】(夏) 古名のうせう。のうぜん。のうぜんかつら。蔓生の灌木にして他樹に絡ひて繁茂す。葉は藤の葉に似て粗き鋸歯あり對生す。夏花を開く狀乘牛(ゲウ)花の如く、末は筒にて末は圓瓣五出す。色は内、緋黄にて外は黄なり。＝紫威。陵霄。 圖 凌霄の松を卷いたる暑もな 旨原。

(凌霄花)

のうたいふ【能太夫】能役者のこと。

のうはじめ【能初】(春) 能樂の舞臺初をいふ。翁、高砂を初番に出すを例とす。＝舞臺初。御能初。 圖 御能初目出度 納む尉の面 香村。

のうめ【野梅】(春) 梅の一種。原野に多く、花白く小にて草瓣なり。＝江梅。

のうり【能力】力役をなす僧家の僕。

のうるし【澤漆】(夏) 燈臺草。

のうをとこ【農男】(夏) 富士の野男。

のがん【野雁】(秋) 陸鳥、形雁の如く、頭頸、灰色にて腹白く、翅黑く、背に黄赤の斑文あり。嘴、脚共に鶴に似て距(ケヅ)、蹼(ミヅ)無く野に群飛す。＝鴈。

のきたひぐさ【軒生草】(夏) たちばなの花の異名。

のぎく【野菊】(秋) 原野に生ずる草。莖葉菊に似て細く、秋、薄紫の花を開く。草瓣の菊の如く小さく愛らし。 圖 折されば堂三寸の野菊哉 月居。

のきのあやめ【軒菖蒲】(夏) 菖蒲ふく。

のきのつまなし【軒妻梨】(秋) 軒端に生ひし梨。略して妻梨。

のきばのうめ【軒端梅】(春) 梅の一種。花六瓣なり。京都東北院和泉式部の墓前にありしもの名あり。

のぐちねんぶつ【野口念佛】(秋) 八月十五日、播州加古郡、野口の教信寺にて修する念佛會。古へ僧教信なるもの、此處に庵し常に念佛す。性仁慈にして旅人の荷を負ひなどして其勞を援くるを力めしが、一日盛の爲に殺さる。後人其庵を寺とし、忌日に念佛會をして之を吊ふといふ。

のこぎりいは【鋸岩】鋸の齒の如く高なりし岩。

のこぎりさう【鋸草】(秋) メドの花。

のこぎりやま【鋸山】越房の境にある山。山形、鋸の齒の如しとて名あり。

のこころ【野心】野に遊ばんと ふ心。又、塵の人になつかぬこと。

のこりぎく【殘菊】(秋) 後日の菊。

のこりてんじん【殘天神】(春) 初天神を見よ。

のこりふく【殘福】(春) 十日夷の翌日、尙參詣群集するをいふ。 圖 賣れ殘る十日 我や賣なり 琅々。

のこりあき【殘秋】(秋) 暮の秋。

のこりあつさ【殘暑】(秋) 殘暑。 圖 撫子の花にも殘る暑かな 風宮。

のこりか【殘蚊】(秋) 秋の蚊。

のこりぎく【殘菊】(秋) 後日の菊。

のこりこほり【殘氷】(春) 早春、氷の解け盡きざるをいふ。＝解けぬ氷。

のこりさむさ【殘寒】(春) 餘寒。

のこりつき【殘月】(秋) 殘月。

のこりはな【殘花】(夏) 櫻花の夏まで殘り咲くをいふ。＝殘花。餘花。名殘の

花。青葉の花。若葉の花。 圖 殘る花 御室の御所を拜みけり 礁嶺。

のこるはへ【殘蠅】(秋) 秋の蠅。

のこるはなび【殘螢】(秋) 秋の螢。

のこるゆき【殘雪】(春) 早春、雪の未だ解け盡きざるをいふ。＝殘雪。解けぬ雪。 圖 松陰やかき溜らせて殘る雪 蒲尺。

のさまのつかひ【御前使】(冬) 年末の幣帛を十陵(御歷代の天皇、及、天皇御生父母の山陵十箇所)八墓(外戚の御祖父母等の墓八箇所)に奉る使をいふ。十二月十三日、先づ奉幣使を選定し、吉日を選び諸國より貢したる米穀の初穂を幣物として遣はす。＝十陵使。 圖 草枯に 御前の櫃を下しけり 青々。○内證は 圖取でゆくか十陵使 野史。

のさまのいちやくわんなど【野里一夜官女】(春) 正月廿日、攝津西成郡野里村の鎭守の祭禮に鯉、鮒、鮎等の生魚を盤に盛り、いまだ經行なき女子四人、襦袗を着、下げ髮にて之を捧げ、行列して神前に備ふ。其扮裝官女の如くなれば俗に一夜官女といふ。

のさらし【野晒】野に捨てられて風雨に曝さること。又、骸骨のこと。

(野里一夜官女)

のさらしまかう【野晒紀行】芭蕉の著。貞享二年、東海道より奈良へ至る紀行を記したるもの。

のされ【野曝】(秋) 山中にて屯を營へて年を經し鹿をいふ。一説に生れて後、三月以内に捕りし鹿なりといふ。但、佛譜にては前説を以て季とまたるが如し。

のし【熨斗】(春) 鮑の肉を薄く長く剝ぎて干し延したるもの。長熨斗、打熨斗等等あり。新春、蓬萊臺などに用ゐるを以て季とす。 圖 大まかに水引飛へ 庵の熨斗 烏雪。

のじがさき【野島崎】安房國朝夷郡白濱村の南端の海邊。

のしめ【熨斗目】麻紙肝の下に着用する禮服。袖より腰の邊に縞を織出し五つ所の紋あるもの。

のしゆんぎく【野春菊】(夏) 俗にシユンギクといふ。ヨメナの類。多く山野に生じ、葉は大くして黑ばみ一根に叢生す。夏、ヨメナに似たる花を開く。＝六月菊。

のしろぬり【野代塗】羽後國山本郡野代より製出する春慶塗。漆の色淡くして黄なるもの多し。

のせ【鏑箭】(冬) 鶴(ハシ)の一種。

のせやう【野施行】(冬) 世俗、寒中に小豆餅、油揭、豆腐がうの類を夜中、田野に荷ひゆき、狐狸の穴の傍に置き施すこと。＝穴施行。 圖 野施行や大く提る 小豆飯 笠雨。

のせもの【能勢餅】(冬) ゐのこの條を見よ。

のだいこん【野大根】(春) 大根の類、根細く小なるもの。俗に細根大根とも云ふ。

早稲多く出つ。　圖　野大根蔓絡てられし　一茶。

のだのはつかぜまつり【野田御坊討死御祭】（春）三月九日、摂津国西成郡野田、願満寺に於て、天文元年、六角定頼が蓮如上人を攻めし時、上人の陣に防ぎて戰死せし人々を野田の土民等に、上人が聞てひたすら文章を取出し、供養のため讀誦すること。　圖　御祭むや夫婦の花も咲くら　蓮　山彦。

のだのたがは【野田玉川】六玉川の一。今の摂中九月郡に在る河。

のだは【荒畑】矢竹の反りゐたる直すこと。

のちじて【後ジテ】謡曲、能の一番中に主人公の二人あるる時、前なるを前ジテ、後なる時るなを後ジテといふ。例は弄鶯慶に於ては静るなは前ジテ、知盛は後ジテなり。

のちのあきぜ【後沼】（秋）秋の沼。

のちのぎく【後菊】（秋）後日の菊。

のちのこよひ【後今宵】（秋）后の月。

のちのこしのがく【後夏笠】（冬）夏笠を見よ。　圖　王獄の夏笠夏くること聞り花　宿冷。

のちのつき【後月】（秋）九月十三日の月を賞すること。荒年注重の頃より始まるる名。世俗、枝豆、栗を煮て供ふる故、豆名月又は、栗名月といふ。＝十三夜。

のちのはつかづき【後の二十日の月】二十日の月。名殘の月。後の今宵。　圖　野人帰戻りて後の月夜哉　維駒。

のちのやがはり【後の出代】（秋）秋の出代をいふ。　圖　出代や先の夜業は知らねども　涼帝。

のちのひがん【後彼岸】（秋）秋の彼岸。　圖　朝顔こ高座をたゝく彼岸かな　汝上。

のちのひな【後雛】（秋）九月九日、世俗に雛祭をなすこと。三月三日に對して秋の雛ともいふ。＝菊の雛。　圖　源氏よむ原もしちけり菊の雛　車美。

のちのふつかあき【後二日秋】（秋）八月二日秋に次ぐふつかあきの。（二月の二日に同じ）　圖　秋に次くふつかあきや二日秋　青々。

のちのやがいり【後飯入】（秋）七月十六日の飯入。（昔に對して後といふ）　圖　飯入の古鄙さびし虫の聲　蕉雨。

のちまど【後窓】後窓をいふ。

のづけい　大根、胡蘿蔔、里芋等に油揚、豆腐を加へ汁に煮、醤油にて、きたるもの。多く精進の時などに造る。

のまは【野馬】（春）春日の野くして遥和なること。（多くは「野馬なる」なる引の動詞を添ていふ）。　圖　野馬やや陸手に曇る山の音　黒十。

のまのこのつり【能登島祭】（冬）鵜の祭。

のも【乘鞍】嶽の耳。牛月形にして嶽の耳のごとくにあつるもの。

のやまのてんまんぐうのり【野中の神天祭】（春）三月十六日、京都嵯峨鳥山の南、野中の神社（京神嵯峨鳥神社と全じ）の祭禮。

のはな【野花】（秋）野草の花をいふ。草花（ばな）と同じく秋季とす。

のやき【野宮】山城国嵯峨郡嵯峨野の野宮社。古く、斎宮の伊勢に赴く前、三年間潔斎のため籠り給ふ齋宮（いみのみや）に、伊勢神宮を祀り、社前に黒木の鳥居、小柴垣を結ぶ。又、斎院として賀茂に赴き、野宮は紫野に赴き、ありたまふ皇女の居給ふ野宮は紫野に赴きしなり。

のやき【野宮】源氏物語に出づ。所の風景、住僧に其身の哀況を語ること、作りし謡曲。

のやきのおれ【野宮訪】（冬）九月十七日、斎宮の野宮を出で伊勢に赴き給ふこと。其前日、桂川に出て御禊を行給ふこと。十七日宮給ふ中ふこと。内して御禊の御禊をあり。主上手づから田豆（ゴ）の爪掛（ゴ）（訪れの御掛とも）を結び給ふ。是往古、斎宮馬の事がと云ふを諸行給ふ。東福寺、泉涌寺、御田原に諸行給ひし故事あるに因る。夫より直に後中を諸行（斎宮の

手訪に出ゝ）したまふ。　圖　人事に斎宮の今朝の別哀　仙蓬。

ののゝ【野】の　のゝこゝろ。

ののこ【野薊】野に生ずる薊を取り拾り類ある薊。春蕨行なるに生ずるもの。

ののはな【野花】野に生ずる草花。野草は花に似て、葉に毛刺りの白蘭けり又は葉ゝこゝ同じ。春、前に一つ者土筆ゝ春日出　几董。

のぼり【野蒜】小蒜ゝ蒜ゝ名ゝ又ゝ　し　蒜　の名。

のぼりがま【信貴窯】（夏）六月二日、夏刑名古屋堂見寺にて御田信貴のため法華経を行ふこと。　圖　今日の新法博ふる　貴し　寺の鐘　呉春。

のぼり【幟】（夏）さつき幟の略。端午に男子ある家にて、幟、甲冑等の武具に樂しむ。　圖　水際にて名書の家の幟　蕪村。

のぼりがは【上川】（春）春、川の下の川上に上りて行くこと。（若鮎を見よ）　圖　鵜の舟のぼる小鮎かな　右鵜。

のぼりつき【上月】（秋）前日より以後の今月をいふ。＝新月。

のぼりも【登能】はしゝ二回に。

のぼりやな【上柴簗】（春）春、鮎、其他の川筋の川下より川上に上るものを捕にて捕ふこと。　圖　春風の春にはなりけり上柴簗　文詰。

のまめは【野豆花】（夏）夏草。山野に多く、葉は八ヶ豆に似て小く、葉、葉面に微毛の多く、枝の花色なり。夏、葉面に微毛の多く、枝の花色なり。夏、葉面に微毛の多く、枝葉を結ぶ。夏を四月分、子は四月ゝ、枝葉ゝ黒ゝ。＝ナトトメ。＝豆葉草。

のみ【蚤】（夏）夏多く出でゝ人畜に附くゝ小虫。　圖　蚤蝨に来入る家のゆゝ哀　寒雲。

のみ【野守】野守鏡の古事を、鏡の持ちたる由なりしゝ、法師に寄りて作りし謡曲。

のみのこ【野守草】（秋）林の異名。

のみのかがみ【野守鏡】野中の池より水を鏡にたゝくゝ。

のやまのこ【野山の色】（秋）野山の紅。

のやまのにこ【野山紅】（秋）林の野山の草＝木は紅葉ゝして赤なるを紅くゝ。　圖　野に出に紅葉を重ん紅ゝなる　蛙貫。

のり【海苔】（春）水中の木石に附生する草。（海木、海水何れにも産し種類に依り

のりがは【海苔河】（春）海苔河、海苔

のりこ【海苔粉】（春）海苔粉、海苔

のりさく【海苔搾】（春）海苔を月、海苔搾を海苔に生ずゝ春の初頃より之に附着し成たる海苔を搾取るゝ。

のりとり【乘法】春、鶯の鳴囀の聞取を半眞目に聞りゝ人之に乘り鳴り行くゝ。

のりのり【乘尻】（夏）夏馬の鞍馬の鞍を乘ゝ。

のりまき【海苔巻】（春）海苔を巻の如く巻る。＝海苔手。

のりまき【海苔巻】（春）海苔巻を見よ。　圖　海苔巻も重ね巻くゝ春雨　乙二。

のりば【海苔場】（春）海苔ゝ。　圖　海苔場や春の雨に巻る家の中　三千。

のりまき【乘初】（春）海乘初、乘乘

初、翼象初等をいふ。

ぢんぢん【陣詞】陣に著る文詞。上古の文体にて作るもの。

ぢんぢんぢゃや【陣若日待】（春）二月二日同、武蔵の品川浦へ陣若鮫、品川中の茶々に日待するのち中時有り。此時、品川浦へ陣若鮫一日待のこと。

ぢんぢんぶね【陣若舟】（春）陣若を採取する舟。圖陣若を取る舟傾くや及び腰牛仔。

ぢんぢんもり【陣若干】（春）採取したる陣若を家に干して乾燥すること。○陣若すき。圖家畑し陣若干すき・こ。

ぢんぢんゆみ【陣弓】（春）正月十八日、弓場殿に於て射出師し、左右の近衛府、兵衛府の官人、射出師を行ひ、勝負を試む。勝方は賞を乗し、負方は罰を受く、了りて勝方の大将、負方の射手に賞を与す。勝方之を百度代にひきあげ、敗者に飲ませ。○立並び射入るる弓やこ人浪敗ゆ。圖立並び射入

ぢんぢゃ【陣屋】江戸、和泉大夫座に所属人形。恋なる能を演ず。幕じて恋人を いふ形。

ぢんぶん【陣分】（秋）秋季の春風をいふ。圖

すいぜん【酔仙】（夏）山蟻くを見よ。圖野を焼いて火の通りけり池の水　梅

す

すあう【羽蟻】（夏）蟻の一種。形蟻に似て四羽あり。身は淡赤黒色にて、初夏より羽を生じて飛び、羽を脱し、此空後死す。多く朽木に棲み、時に群して空中を飛ぶ。＝飛蟻。白蟻。時蟻。圖此家のちよき柱し羽蟻かな　蕉雄。

すい【淮蟹】貝の名。蟹の殻にして肉を食用とす。＝黄蟹。

すいう【梅雨】（夏）芒種の後庚の日より初の壬に至る。兄三十日間にて夏至の後庚に至る。此間は淫風にて温暖にして多雨に至り、雨を生ず。＝黄梅。○黄梅天。梅雨明つゆ。圖梅雨明つゆ。○梅雨天（ジメ）。梅雨明つゆ。

すいう【水夫】前に船生を業とし、後に高金に傾を出して女郎を業とせしめしといふ。

すいぎょう【水行】（秋）山蟻くを見よ。圖野を焼いて火の通りけり池の水　梅

すいぎょう【淮蟹】（夏）蟹の一種。

すいぎょう【水行】（秋）やはしまはし。

すいぎょう【水行】（秋）やはしまはし。

すいぎょう【水行】（秋）やはしまはし

至りても尚一部の俳人に行はる。

はいま【駢馬】鈴をかけたる駢路の馬。又、京都より五畿七道への使者に用ゐらるゝ馬をいふ。＝はゆま。

ばいまはし【海贏廻】（秋）九月九日に行ふ小兒の戯。海贏の空殼を上部の尖を除き、中を填めて獨樂の如くに作り、之を繩を卷きたる席の上に廻はして、二三個、相擊たしめ、席より彈き出すを勝負とす。＝ばい打。○ばいごま。圖 大ばいに彈かれて飛ぶ小海贏哉　笠雨。

はいみ【俳味】俳諧の趣味ある、こと。

はいむ【稟務】裏、服忌などある時、天皇、諸省の政務を行はざること。

ばいも【貝母】（巻）かたくりの花。

はいもんのろくてう【俳門六哲】宗鑑、守武、貞徳、宗因、貞室、芭蕉の六俳家をいふ。

はいらい【拜禮】（巻）院の拜禮。

ばいら【倍鱈】鉢と柄を持ちて舞ふ雅樂。

はいろん【俳論】俳諧のことを論じたる文。

ばいろん【水馬】（夏）戯波（ケイ）。

はう【袍】古へ高官の人の正禮束帯の時に用ゐる東の名。織紋の綾にて作り、色は位によりて異る。

ぼう【坊】僧侶の住むところ。又、京奈良などの市街を區劃して、五百十二戸を一坊といひし稱。

ぼう【房】部屋のこと。

ぼう【望】滿月をいふ。又、明月のこと。

はいつ【抱一】屠龍の別號。（人名譜參照）

はいん【寶印】梵字などを印行したる護符。

はううんあ【望雲騅】楚の項羽の乘馬の名の亡びんとせしときは膝を折りて一足も進まざりしといふ。

はうえいさん【寶永山】富士山の東面の中腹にある山。寶永四年、富士山噴火せし時現出せしもの。

はうえいまつり【寶永祭】（秋）九月十一日、京都八條、遍照心院の六宮權現社（院は古へ六孫王經基の住地にて、菟去後祠を立て六宮權現と稱す。又、源實朝の室、尼となりて當院に住せしを以て、一に尼寺とも呼べり）の祭禮。儀式壯嚴にして神輿渡御の行列、蓋だ古雅なり。此祭事は久しく絶えたるを、寶永年中、東林院南谷師が再興したるに由り、寶永祭の名あり。當日放生の供養を行ふ。＝六孫王祭。尼寺祭。

はうえんかう【報恩講】（冬）親鸞忌（シンラン）。

はうえんゆ【報恩忌】（冬）智積院開山忌（チシヤクヰンシ）。

（寶永祭神輿行列之圖）

はうか【放下】放下師をいふ。

はうがい【寶蓋】佛像の上などに置ふ傘。＝天蓋。

はうかし【放下師】田樂法師の類。稱詠、さゝらを以て唱ひ舞ふ僧。後世は僧に限らず、市中を歩行きて田樂の舞をなし、品玉などをつかふもの。＝放下。放下僧。

ばうかし【防鴨河使】古へ霖雨などにて鴨河洪水の時、臨時に其防を命ぜられしもの。

はうかそう【放下僧】放下師のこと。又、諧曲の名。牧野某の子、兄の禪僧と共に放下師となり、父の敵、利根某を討つことを作りしもの。

はうかばち【放下鉢】（夏）祇園會鉢の一。又、洲濱鉢ともいふ。鉢頭三光を像り、下に放下師の人形を置く。圖 ひかへ

はうかん【方干】字は玄英。唐の人。唇缺（チヨク）なりしを以て人、缺唇先生と呼びしを憂ひ、醫師に縫はせければ、補唇先生と呼ばれしといふ。

はうきぐさ【箒草】（夏）ははきぎ。

はうきぼし【慧星】星の名。軌道他の星と異ればに現はる。古へ其色青き時は王侯に災あり、赤き時は强國起り、白きは兵亂ありなど浮説せり。

はうぎょのいち【鮑魚市】惡人と交るをいふ喩。鮑魚は乾魚のことにて自然惡臭のつくを以てなり。又、莊子、道を行く時、渴したる鮒ありて水を求む、莊子歸途に與へんといへば、魚怒りてさらば我干物を市に尋れよといへり、すべて急に應ぜざれば役に立ぬといふ比喩。

はうぐわい【方外】浮世の外にあるをいふ。又、僧、醫、畫人などの稱。

はうくわうじ【方廣寺】京都の南にあり。大佛殿を以て名あり。豊臣秀吉の造立せしところにて其像の巨大なること比なけれども、火災のため半像のみを存す、其釣鐘は秀頼の鑄造せしものにて僧清韓の銘を以て名あり。

はうぐわん【判官】檢非違使の長官の稱。又、源花新町にて、大盡の客を呼ぶ語。

はうぐわん【坊官】皇太子に附仕する官。又、門跡の家司の稱。僧にして帶刀するもの。

はうぐわんどの【判官殿】源義經をいふ。

はうぐわんびいき【判官贔屓】弱者に對する同情の念あること。

はうけん【龐眞】晉の人。早く其父を亡ひ、母に隨て流落す。後、盧里といへる地に住みしに井を掘りて銅を得、家富み奴僕を買ふ。數日にしてその僕は龐に亡命せし父なりしを知り再び父子の契なをせしといふ。

はうけんいち【寶劍市】（秋）七月廿四日、備中國足守にて、大小、腦蕊の類の市たつをいふ。例年名劍一口づゝ出るといふ。

はうこじ【龐居士】唐の襄陽の人、禪を學び、家產を河流に沈め、其女、靈照女と共に竹婦人を造りて市に鬻ぎしといふ。（裏居士と書くは誤なり）

ばうこひやうが【暴虎馮河】虎を手打にし、河をかち渡りする知き無謀の行をいふ。論語より出し語。

はうさいぬんぶつ【泡雪念佛】寛永頃、流行したる物乞ひの一種にて、念佛を唱へつゝ踊りて門附をなすもの。

はうさうがみ【疱瘡神】俗説に天然痘を流行させ、又は其を祈れば癒すといふ神。其像は顏に痘痕ありて、幣を持ち、サンダラボフシといへる僧の畫に載るといふ。いもの神。

はうさうし【方相氏】つゐなを見よ。

はうざうゐん【寶藏院】覺禪坊胤榮といふ。奈良の僧。鎖術の名人にして鎖槍を用ゐ、寶藏院流を創む。慶長頃の人。

はうし【方士】方術をなす人。

はうじ【褒姒】周幽王の寵姫。常に笑を好まず、王、其笑を欲し、故なくして烽火

を擧げ、諸侯を集めしに初て笑たりしといふ。

はうしやうがは【放生川】(秋) 放生會の魚を放つ川。山城八幡の山下にあり。

はうじやうかは【放生川】八幡の放生會の功德を述べたる謠曲。

はうしやうぐも【寶生雲】寶生流の家にて用ゐる雲形の撫樓。王字形をなす。

はうしやうゐん【保昌山】(夏) 祇園會の山の一、一に鞍山とも、花盜人山ともいふ。平井保昌が和泉式部を戀ひて花を折るさまを作る。

はうしやうりう【寶生流】能樂の流儀の名。四座の一。觀世と共に上掛りと稱す。

はうじやうゑ【放生會】(秋) 八月十五日、八幡(やはた)宮に行ふ神事。捕へ置けるる鳥魚等の生物を放つこと。養老四年、征夷の事ありて後、宇佐大神の託宣に、合戰の間多くの殺生をなしたれば宜く放生をなすべしとありしより起る。諸國の八幡宮にでも之を行ふ。＝生るを放つ。○放ち鳥。放ち魚。放生川。 圖 山崎へあまれる鳩や放生會 召波。

はうしゆ【芒種】(夏) 二十四氣の一。

はうしゆく【鮑叔】支那戰國時代、齊の臣。管仲の友にして、よく仲が性行を知り、後、仲を桓公に勸じ。

はうしゆん【芳春】(春) 春の異名。

はうしゆんてう【報春鳥】(春) 鶯の異名。

はうすれも【坊主落】還俗せし僧。又、出家落に仝じ。

はうすかむろ【坊主禿】遊女に使はるる六七歳の禿をいふ。皆、頭を剃りゐるもの。

はうすとへあ【坊主小兵衛】天和、貞享比の中道の俳優、其髮糸鬢奴にて前より見れば頭の後につきて見えず、坊主の如く見えし故世人かく呼びしといふ。

はうそ【彭祖】顓頊の玄孫、周の穆王、大夫となれりとする。遠て、流沙の西に去る七百餘歳なりしと。謠曲に菊慈童といへるは是れなり。

はうた【燈明】俗間にて誘ふ短き唄。

はうたい【俳題】連俳の用語。連句の附句の爲め、發句の主題を打消すを惡むをいふ。(和歌にいふ俳題は專に和歌の題に逸れたるをいふ)。

はうちく【鳳竹】(春) 左義長。

はうちやう【方丈】寺の長老の居る室。又、住職のこと。

はうちやうき【方丈記】鴨長明の著。當時の災變を見聞し、無常を觀じたることを記せしもの。

はうつたくさう【他化會】(冬) カハラケ會。

はうつ【鮑】(春) 柳はえを見よ。

はうら【八講】八人の僧にて法華經を讀み、供養すること。

はうかかひ【馬鹿貝】(秋) 岐に似たる貝。秋最多し。淡褐色にして橢圓あり。肉は薄赤くして、舌の如き長き足あり。ハシラは色赤く指頭大にして、其味肉よりも美く、且、他の貝に勝る。 圖 馬鹿貝や蒔繪の浦の花漆 百水。

はかまうち【墓掃除】(秋) 盂蘭盆に各家、其墳墓を掃除し、全謝すること。

はかくれ【葉隱】葉がくるを用ゐて働詞となす。葉の陰になること。

はかしは【葉柏】(冬) 霜木の名。山林に多し、葉は長大にして六七寸、廣三四寸、粗き鋸齒あり、末廣く元狹し、春夏栗の花の如き穗をなす。俳諧には葉の茂りを愛して季とす。＝柏。 圖 葉柏や風と時雨の軟寄屋道 露章。

はかた【博多】筑前那阿郡の海邊の地、織物を產出して古來繁昌のところ。

はかたまつり【博多祭】(夏) 六月十五日(古へは十六、十七日とす)筑前博多、櫛田神社(奇稻田姫命、午頭天皇、天照太神を祀る)の祭禮。神輿三基、山鉾六基を出す。山鉾は大さ京の祇園會のに四倍し、其形上部次第に廣く組み上げ、階上には百人餘を居らしめ、一基を引くには凡千人にて、鉾の上には甲冑を着せたる人形を立つ。其甲冑は一々姓名を附けたる故、領主の家臣爭うて美しき鎧を出したりといふ。 圖 博多浦に祭もまれて小女郎 梅盛。

はかたぬ【博奴】(春) 新春、餅を神に供へて後、一家の人數により小さき鏡餅を作り折數にのせ、押鮎、大根、橙、蕪白等を添えて食ひ祝ふ。古へは元三の日に、猪鹿等の堅き肉を食ひしといふ。

はかたやり【博多百合】(夏) 百合の一種、花黃色にして赤斑の文理あり。＝爲朝百合。天香。

はかも 四北風をいふ。東京の語。

はかのり【信天翁】あほうどり。

はかのくさかり【墓草刈】(秋) 伊勢國の俗に、七月盆前に各家、墓所の掃除をなすこと。

はかばのまかもり【墓場宮】(秋) 長崎盆祭。

はかまぎ【袴着】(冬) 十一月十五日、五歳の男子初めて袴を着、氏神に詣で其家の

はうちやく【寶鐸】ふうたくに仝じ。

はうちやくのはな【寶鐸花】(夏) 草の名。莖高さ一尺餘、葉は矢車草に似て細く、夏、白花垂れ咲く、形堂塔に懸る寶鐸に似たれば名く。＝狐の提灯。 圖 火打にも似た寶鐸の花形かな 友靜。

はうぢう【寶幢】佛家に用ゐる旗をいふ。

はうねんくわい【忘年會】(冬) 年忘れ。

はうのそと【方外】はうがわい。

はうはち【忘八】くつわと訓す。遊女屋のこと。くつわの條參照。

はうひき【寶引】(春) 正月の遊戲。數本の長さ糸を集め持ちて、其中の一本に木製の鎗、又は檀子などを結びて印とす。(胴フケリといふ)之を競び引きて引當てたるを勝とす。一說に餅を二人して引あひ、多く取りしを勝とすること。○鉛寶引。福引。 圖 寶引の宵は過ぎつゝ遊はね戀 几董。○投出すや已れ引得し胴ふぐり 太祇。

はうふう【防風】(春) 芹に似たる菜。一根に叢生し、長すれば高さ三尺に至り、枝葉茂く生ず。夏、細叉毎に花を開く。春、嫩芽を摘み魚膾に加へ食す。根は藥用とす。○漢防風。 圖 防風の匂し花の頭哉 竹馬。

はうふうかゆ【防風粥】(春) 正月、干したる防風を刻みて、粥に和し食ふもの。邪氣を除くといふ。

はうふせき【望夫石】古へ支那の武昌の北山の眞女が、其夫と別るゝとき、悲歎のあまり見送りたるまゝ化石せしといふ故事。

はうふつ【髣髴】物の似よりたるをいふ形容。又、ほのかにて分らぬこと。＝彷彿。

はうべん【方便】佛教にて人を導くため假に言を設くること。

はうべんぼん【方便品】法華經第二品の名。

はうあんしゆ【保命酒】備後國鞆津より出だす銘酒。味醂に似て精氣强きもの。

はうもつしふ【寶物集】平判官康頼、鬼界島より赦免せられて歸洛の後、專ら佛心を起して書き集めし書。

はうもり【坊守】門徒宗の僧の梵妻をいふ。

はうれんさう【蔊菜草】(春) 野菜の一種。苗の高さ一二尺、葉は形三稜にしてヒルガホの如く、長大且、柔なり。夏初葉間に叢を出し、綠色白邊の花を開く。其莖根赤く味甘し。春若きを採りて蔬とす。 圖 まだ寒き堂の赤みやはうれんそ 植國。

はうろくうり【他化會】(冬) カハラケ會。

はかり【柳】(春) 柳はえを見よ。

はかりくらべ【八人の僧にて法華經を讀み、供養すること。

はかまうち【墓掃除】(秋) 盂蘭盆に各家、其墳墓を掃除し、全謝すること。

はかくれ【葉隱】葉がくるを用ゐて働詞となす。葉の陰になること。

はかしは【葉柏】(冬) 霜木の名。山林に多し、葉は長大にして六七寸、廣三四寸、粗き鋸齒あり、末廣く元狹し、春夏栗の花の如き穗をなす。俳諧には葉の茂りを愛して季とす。＝柏。 圖 葉柏や風と時雨の軟寄屋道 露章。

はかた【博多】筑前那阿郡の海邊の地、織物を產出して古來繁昌のところ。

はかたまつり【博多祭】(夏) 六月十五日(古へは十六、十七日とす)筑前博多、櫛田姫命、午頭天皇、天照太神を祀る)の祭禮。神輿三基、山鉾六基を

に裏を損る。昔武家にては社杵を着せ、刀を佩ばしめし故に杜杵着としいふ。 圖 袴着や蒲の冠毒の幼な顔　瀾水。

はかまおり【墓参】(秋) 七月初旬より十五日頃まで、祖先の墳墓に詣で香花を供ふこと。盂蘭盆の供養のためなり。圖 船頭の帷子着たり墓参　斗吟。

はかりざ【秤座】徳川時代に度量衡を作り、寄賣せしところ。京は夷川西洞院、大阪は高麗橋、江戸は日本橋箔屋町とす。

はぎ【萩】(秋) 潤木の名。山野に自生し又、多く庭園に植ゑ花を賞す。葉は楕圓形にして一極三葉を出し、秋初、唇形の小花穂をなして開く。色は淡紫紅白等の種類あり。〔異名〕胡枝花。天竺花。古枝草。鹿鳴草(シカナ)。野守草。庭見草。○糸萩。小萩。白萩。さざれ萩。木萩(ボハ)。もとあらの萩。萩の錦。萩の戸。萩の殿。萩原。圖 絲先やよべに見殘すけさの萩　樗耳。

はぎ【萩】長門阿武郡にある市街。毛利氏の舊藩地。

はぎがさね【萩重】(秋) カサネの色目の名、表紫、裏薄紫。

はぎぞめ【搔始】(春) 正月二日、江戸城にて老中の年長者、年男が命ぜられ、早朝出仕して、將軍御座の裏方に向ひて幕き初めをなすこと。若年寄之に從ふ。＝御搔始。又、一般には正月元日は搔除せざるを以て二日を搔始とす。圖 搔始や鶴者衆かゝる埃先　曰人。

はぎだいみょうじん【萩大名】能狂言の名。愚かなる大名、人の歌を物に擬へて覺え、萩見にゆきて歌を誦し、途に忘れて狼狽する筋。

はぎでら【萩寺】江戸本所柳島村、龍眼寺の稱、萩を以て有名なり。

はぎとり【萩鳥】(秋) 形、ホホジロに似てやゝ大なる鳥。頭は鼠色にて、背は紫を帶びし灰色に黑褐の斑點あり。翼黑く、尾は茶色なり。＝岩濱。岩雀。

はぎのあや【萩衣】(秋) カサネの色目の名。表スハウ、裏青。又は表薄紫、裏青等。

はぎのいた【萩戸】(秋) 萩殿に仝じ。圖 萩の戸やしばし蓬慮の翁丸　溟化。

はぎのいとの【萩殿】(秋) 古へ禁裏清涼殿の東西、小萩垣のありしところ。其戸を萩の戸ともいふ。圖 立寢て花もちらさじ萩の殿　鼠木。

はぎのにしき【萩錦】(秋) 萩の花の美しきを錦に比していふ。

はぎのぼう【萩坊】叡藏坊信海と云ふ。狂歌を善し、書に名あり。元祿頃の人。

はぎのはな【萩花】(秋) 萩。

はぎのめ【萩芽】(春) 草の芽を見よ。圖 萩の芽の萌る築地の崩れ哉　一形。

はぎのもち【萩餅】(秋) 牡丹餅に仝じ。

はぎはら【萩原】(秋) 萩の生ひたる原。圖 萩原や萩身にそひて分出る　闌更。

はぎもゆる【萩燒】(春) 草の芽を見よ。

はぎやうに【破鏡尼】和泉國岸和田の藩士の女。芭蕉の門人、菅沼曲翠の妻となる。夫自刃して後、落飾して破鏡尼と號し、泉州堺に隱れ、和歌及び筑紫箏を友とし世を終ふ。

はぎやき【萩燒】陶器の名。毛利家、高麗より陶工を招きて、長門國萩にて燒かしめしもの。

はぎわかば【萩若葉】(春) 二月頃、萩の芽生じ嫩葉を出したるもの。圖 燒寺も春來て萩の若葉哉　几董。

はく【鼻】よき絹布のこと。

ばく【獏】支那にて想像の獸。形熊に似て、頭は獅の如く鼻は象の如く、眼は犀の如く、尾は牛の如く、脚は虎の如く、毛は黑白の斑なり。之を畫けば邪氣を

祓ひ、又人の夢を喰ふといふ。我國にも獏の枕の俗あり。＝

（獏之圖）

はくいうし【白幽子】京都の北、白河の岩窟に隱れ、白隱禪師に養生の法を授けし異人。

はくい、しゅくせい【伯夷、叔齊】周武王の臣。伯夷は兄、叔齊は弟なり。武王が殷の紂王を伐つを諫めて用ゐられざりしかば、周の粟を食ふを愧ぢて共に首陽山に隱れ薇を採て食ひ餓死せしといふ。

はくえんしゅ【柏葉酒】(春) 椒酒(シャウ)を見よ。

はくが【薄荷】(秋) 原野又は園圃に生ずる草。春苗を出し藥方にして葉對生し、形圓く鋸齒あり。面は深綠にして裏は紫色なり。長ずれば綠に變ず、秋、高さ二三尺となり、碎小の紫白花を開く。其葉香氣多くして嘗むれば辛し、藥品に製す。 圖 巡錫に聞の嵐や薄荷畑　玉水。

はくが【博雅】朱雀院の時の人。博雅の三位といふ。蟬丸に琵琶の秘曲を學び、朱雀門に鬼神と唱和せしといふ。息、信義、信明、又琵琶をよくす。

はくがいこうたつ【伯牙斷琴】伯牙よく琴を鼓つ、其友、鍾子期よく其心を聞く。子期死して後、伯牙琴を破り世又、我琴を聞く人なしと嘆ぜし故事。列子に出づ。

はくかつむ【薄荷摘】(秋) はくが引く。

はくかのはな【薄荷花】(秋) 薄荷を見よ。

はくかひく【薄荷引】(秋) 秋の頃、薄荷を採りて其葉を藥品に製すること。

はくがん【白雁】(秋) 雁の一種。色白く形小なるもの。

はくがん【白眼】冷淡の心にてにらむこと。

はくぎう【伯牛】孔子の門人。雖病にて臥せしを孔子窓より其手を取り、此人にして此病ありと言て嘆せしといふ。

はくぎん【白銀】銀を三寸ほどの楕圓形に延べたるもの。徳川時代に賞與、贈答等に用ゐし貨。

はくきょい【白居易】白樂天を見よ。

はくく【白駒】月日のこと。莊子に白駒過隙とあるより出づ。

はくげき【篤逆】親しき交りをいふ。

はくさう【莽】雑草のこと。

はくざう【白藏】(秋) 秋の異名。

はくざうす【白藏主】和泉國、少林寺の塔中、耕雲庵に住せし僧。三足の狐を愛し、侍童の如く馴る。狂言釣狐は是によりて作爲したりといふ。室町時代のこと。

はくさん【白山】加賀能美郡にある高山。日本三山の一。＝しらやま。

はくしう【蓼秋】(雲) 五月の異名。又、むさあきを見よ。

はくしき【白式】能樂に用ゐる翁の面の稱。

はくしぶんじふ【白氏文集】唐の白樂天の詩文を集めたる書。平安朝時代には最も重んじ流行せしもの。

はくしん【白臣】官に仕へざる民をいふ。

はくじん【柏人】料理する人をいふ。

はくじん【白人】京祇園にて遊女の上なるものを云ふ。淵雷島の内にて、伯人と書て遊女の總名とせり。

はくしんぶう【蓼信風】(雲) 五月に吹く東北風をいふ。

はくしょ【薄暑】(雲) 初夏の頃の氣候をいふ。

はくしょ【曝書】(雲) 書を曝す。

はくすあらら 【白水郎】あま(漁人)をいふ。

はくせんしふ 【泊船集】元祿十一年、風國の編みたる芭蕉の句集。

はくたうふう 【舶來風】(夏)梅雨過ぎて後來る風をいふ。

はくたく 【白澤】白澤王をいふ。

はくたくわう 【白澤王】支那にて想像の動物。其形、象の如く、三目あり、惡夢を喰ふといふ。古へ禁中鬼の間の壁に其圖を描かれたりといふ。

はくだみ 【箔泥】金泥などにてぬりしもの。

はくちく 【墨竹】(春)さざちやう。

はくちやう 【白丁】白張の裝束のこと。轉じて公卿の僕、或は神事の人夫の稱。

はくちやうくわ 【白丁花】(夏)人家の籬などに植うる樹。高さ二三尺、枝莖動く折らるゝも忽活く、四月小白花を開き、其香丁子の如し。 圖 侍の家や四角に白丁花 一鈴。

はくとうおん 【白頭吟】卓文君(ソクブン)を見よ。

はくとうそう 【白頭翁】(夏)藥草、根の邊に茸狀のものあり、形白頭の老翁に似たり、四五月赤き花を開く。一に翁草ともいふ。【異名】根都古草。

はくのふだ 【獏札】(冬)獏の枕。

はくのまくら 【獏枕】(春)前分の夜、獏(其條參照)を畫きて枕に敷き眠れば惡夢を見ずと。＝獏の札。 圖 うつゝなき妹が笑や獏枕 青々。

はくばじ 【白馬寺】後漢の明帝が始めて長安門外に建立せる寺。支那に佛法傳來したる最初の梵刹。

はくばのせんぶ 【白馬節會】(春)あをうまのせちゑ。

はくばん 【拍板】びんささらのこと。

はくび 【白眉】卓越したることをいふ。支那三國時代、馬氏の五兄弟中、長兄馬良最も後秀にして其眉白かりしといふ故事より出づ。

はくひん 【白濱】舞樂の名。

はくぶん 【白文】注釋訓點なき漢文をいふ。

はくぶま 【白熊】支那に產する猪牛(牛に似たる獸)の尾をいふ。馬の尾よりも細く白くして、多く拂子などに作る。又赤く染めたるもあり。

はくぼたんはな 【鬼督郵花】(秋)幽谷に生ずる草、高さ尺餘、一根一莖にて、莖頭に八九葉輪生す。形枇杷の葉に似て小なり。秋穗を出して白花を開く。蒼朮の花に似て小く種類多し。

はくんせい 【破軍星】北斗七星中の第七の星。九星家にて凶星とす。

はくもんぢう 【蓼門冬】(夏)草の名、葉細長く一尺餘にて叢生し、夏の初、四五寸の莖を出して、淡紫又は白色の六瓣の花を開く、實は南天に似て、碧色なり。根塊を藥用とす。＝シロウガヒゲ。 圖 行わたる掃除や蔵にじようがひげ 清民。

はくや 【護節】周の幽王の時の刀工。眉間尺(ジヤク)の條參觀。＝莫邪。

はくやう 【白楊】(春)ハコヤナギ。

はくらう 【博勞】馬を賣買する人。＝馬喰。

はくらういなりまつり 【博勞稻荷祭】(秋)仁德祭を見よ。

はくらうぐち 【博勞口】人の影口するをいふ。

はくらく 【伯樂】馬の醫者を云ふ。又馬を相する人。

はくらくてん 【白樂天】唐の憲宗時代の有名なる詩人。名は居易、香山居士と號す。其詩文を集めし白氏文集は廣く我國に行はる。

はくらくてん 【白樂天】唐の白樂天、日本へ渡來せんとし、道に住吉明神の化身なる漁翁に逢ひ、歌道を論じ、引返すことを作りし謠曲。

はくらくてんやま 【白樂天山】(夏)祇園會の山の一、白樂天が鳥羽道林禪師と問答する樣を作る。

(白樂天山)

はくりけ 【百里奚】支那戰國時代、虞の大夫。無道の君を捨てゝ、市に乞食す。後、秦の丞相となる。

はくりやう 【伯夏】謠曲羽衣に出し三保の浦の漁夫の名。

はくれん 【白蓮】(夏)蓮の白花をいふ。

はくろ 【白露】(秋)二十四氣の一。

はくろさん 【羽黑山】出羽東田川郡にある山。月山の東に雙え、東北の名山にて、古へ天狗の棲と傳へらる。

はくろさんまつり 【羽黑山祭】(夏)六月十五日、出羽羽黑山、三所權現の祭禮。神輿、鉾幟等出で、境內一町計を廻り本社に入る。近鄕擧りて詣づ。 圖 五十間練るを羽黑の祭哉 桃隣。

はくわん 【白隱】我國臨濟宗中興の碩德。遠州松隱寺の住職にて惠鶴といふ。著書

はげいまろ 【葉鶏頭】(秋)鶏頭の一種、葉大にして、秋其葉の紅染するを賞す。＝雁來紅。かまつか。又、一種に秋黃葉を出すものあり。之を雁來黃(ライガン)といふ。 圖 鶏の居る足輕町や葉鶏頭 武然。

はこ 【屎】糞尿のこと。

はこ 【筬】小鳥を捕ふるため、小枝に講を付け、囮の傍に置くもの。

はご 【羽子】(春)ムクロジの玉に鳥の小羽五葉を並べ挿しゝもの。羽子板にて衝く、新年女兒の玩具。＝羽根。胡鬼の子。○羽子つく。羽子板。追羽子。 圖 羽子つくや用意なかしき立廻り 太祇。

はごいた 【羽子板】(春)羽子を衝く板、其製種々あり。多く長方形にて柄あり。 圖 羽子板やたゞにめでたき裏表 嵐雪。

はごいたうり 【羽子板賣】(冬)年の市に羽子板、羽子を賣るもの。 圖 羽子板の賣聲はやせ明鴉 方山。

はこざき 【箱崎】筑前船屋郡の海邊にある市街。八幡宮ありて有名なり。

はこざきたまとりまつり 【箱崎玉取祭】(春)正月三日、筑前國船屋郡箱崎八幡社の神事。徑二尺五寸の石の玉を洗ひて油を塗り、五町先の惠比須社に持出で、神官祝詞を奏し了れば、競人と呼べる壯年の者、悉く素裸にて此玉を取らんと奪ひ合ひつゝ、水宮に至る。之を玉セリといふ。

はこざきまつり 【箱崎祭】(秋)八月十五日、筑前國箱崎八幡宮(應神帝、神功皇后を祀る。古へ、三韓征伐の軍旅、筑紫に歸り、帝此地に降誕したまひ、御胞衣を箱に納めて地に埋めしより箱崎の名起るといふ。社は延喜廿一年の創建なり)の祭禮。 圖 箱崎は神の祭の始かな 西武。

はこだて 【箱館】北海道渡島龜田郡の市街。

はこだてやらちん 【箱提灯】圓き筒形の大なる提灯、上下に黑塗の蓋あるもの。古へは儀式に用ゐ、後、遊廓にて遊女の送迎に用ゐらる。

はこどり 【果鳥】(春)春の曉に啼く鳥の稱。一說に呼子鳥のことゝも。＝箱鳥。(かほ鳥をも見よ) 圖 はこ鳥や明放れゆく二子山 曾良。

はこね 【箱根】相模國足柄下郡の山中にある町。又、其附近の山の稱。溫泉を以て

著名なり。

はこねうつぎ【箱根空木】(夏) 空木の一種。相州箱根に多く產す。高さ丈許、葉に皺あり。夏初、蓋狀にして旱鯛の花を開く紅白相交る。＝海仙花。錦帶花。十姉妹。 圖 明暮て箱根空木の咲にけり　碧嶺。

はこのり【羽子樹】(雙) つくばれ。

はこばしら【箱階子】箱を重れたるやう作りし階子段。商家などに多く、引出又は戸棚などを取附く。

はこべ【繁蔞】(春) はこべら。

はこべら【繁蔞】(春) 正月七草の一。原野に布生する雜草にして、春夏最も多く茂り、莖方にして地に敷くこと蔓の如し。葉は楕圓にして尖り對生し、長さ寸餘。初春十瓣の小白花叢り開く。＝ハコベ。鵝腸草。 圖 草の香やはこべらむしる垣の隙　四方太。

はこやのやま【箕姑射山】仙郷の名。莊子に箕姑射山有神人の句あるより出づ。

はこやなぎ【箱柳】(春) 柳の一種。山野に生じ、樹大にして葉圓く大く、末尖り、春初、葉に先ちて蕾狀の花を開く。材を柳行李などに作る。＝白楊。

はころも【羽衣】三保の松原に、天人失ひたる羽衣を得て舞を奏することを作りし謠曲。

はこわう【箱王】曾我五郎の幼名。

はざくら【葉櫻】(夏) 花散りて若葉の出たる櫻。(古へは春とす) 圖 葉櫻や暮氣になりゆく奈良の京　蕪村。

はざし【羽指】(冬) 鯨船にありて其船の進退を指揮する人。 圖 二の銘や巳に羽指が亂れ髪。

はさむ【鋏髮】物の縺り、或は戰く形容語。

はさみ口【夾總】連俳の用語。連句の平句と平句の間に總句唯一つ挾むをいふ。忌むべき淀なり。

はさら【拔折羅】伊達なること。古語。又、亂れたること。

はし【土師】古へ墳輪を造りし人。＝ハニシ。

はし【櫨】(秋) 漆の木の一種。山中に多く生じ、葉はやゝ圓く、葉柄赤ばみ、春夏の交、小白花を開き秋實を結ぶ。其木心黃色なれば古へ染料とす。秋紅葉すること早く、櫨紅葉といふ。＝ハセ。 圖 新米を運ぶ徑や櫨紅葉　里星。

はし【馬氏】大公望(呂尙)の妻の名。

はしうら【橋占】橋の秋にて占する人。又、橋の邊に立ちて、そこを渡る人の言葉なきゝて、己の思ふ事にひきあて占ふこと。

はしがかり【橋掛】能樂の舞臺に續きて作りし廊。其前に三本の松を植う。

はじかみ【薑】(秋) シヤウガ。

はじき【彈】(秋) 田畑に造りて鳥をおどす具。添水、かゝしの類をいふ。＝水鳴子。

はしきやし【愛】愛らしく思ふよといふこと。古語。

はしすみ【橋涼】(夏) 橋の邊にて涼むこと。

はしたか【鷂】(冬) 鷹の一種。體鷹に似て小く、背黑く光ありて腹部灰赤なり。雌はよく鶯鴨を捕ふ。雄を兄鷂(ヨノ)とす。＝はいたか。箭鷹。

はしだてまつり【橋立祭】(夏) 六月廿五日、丹後國天橋立、橋立明神(豐受大神宮を祀る)の祭禮、一に文殊會ともいふ。是れ同所、切戸、天橋山智恩寺文殊堂も同日法會あるを混じていふなり。 圖 波分て出る橋立祭かな　仙鶴。

はしなのらう【橋女郎】京島原にて下等の遊女の稱。大夫、天神は茶屋へ出れども橋女郎は茶屋へ出づといふ。

はしづか【雪塚】大和國城上郡に在り。崇神

天皇の姑、百襲姫命、大物主命と契り、箸にて陰を突き死せしといふ傳說ある舊蹟。

はしづくり【端作】端書(ハシ)と同じ。又、連俳の用語。懷紙の始めに「俳諧之連歌」とかくことを云ふ。

はじまみ【牛蒡】蒡の牛ばなるもの。

はじまみ【牛蒡】源氏夕顏卷の事を作りし謠曲。

はしのおに【橋鬼】昔、江戸日本橋の秋に置きし擬香の男をいふ。常に鐵棒を携へ居し故にかく呼ばる。

はしのさん【巴字盞】(春) 曲水の宴の酒盃をいふ。巴字の水を見よ。

はしのみ【櫨實】(秋) ハゼを見よ。

はしのみづ【巴字水】(春) 曲水宴をいふ。曲水の流の形、巴字に似たるを以て名とす。○巴字の水　影人。

はしばしら【橋柱】橋の基礎となる柱。し巴字の水

はしばしら【橋柱】司馬相如が橋柱に詩を題せし故事。司馬相如の條參照。

はしばみ【榛】(秋) 榛の實をいふ。樹は高さ丈許、冬は葉無くして、節毎に寸餘の淺稜色なる蕾を下垂す、春に至り花開けば黃色なり。春の末花落ちて葉出づ。葉は圓くして五短尖あり、邊に鋸齒あり て嚴多し。秋に至り、圓くして尖りたる實を結ぶ。榛の實に似て仁白く、生食すれば栗の如し。 圖 はしばみを零して早し初瀨川　梅里。

はしひめ【橋姫】宇治橋の下にて其橋を守る女神。住吉の神遙ひ給ひしと傳へいふ。

はしひめがんな【橋姫女】旗鉾の幕りたる相ある能面の名。

はしひろかも【嘴廣鴨】(冬) 鴨の一種。嘴大なるもの。

はしぶと【嘴太】鴨の一種。牛若丸、五條の橋にて武藏坊辨慶と鬪ひ、終に主從となることを作りし謠曲。

はしべんけいやま【橋辨慶山】(夏) 祇園會の山の一、牛若、辨慶と五條の橋にて鬪ふさまを造る。

はじめてすずし【初涼】(秋) 新涼(シンリ)。 圖 たたむ音の初て涼し庵の蚊帳　文路。

はしもと【橋本】山城國綴喜郡男山の西麓にあり。河內國との堺にして、淀の舟客多くこに上陸せしを以て遊女屋など多かりしといふ。古へ山崎と此地との間の淀川に架せし長橋ありしを以て此名あり。又、岩本橋木の條を見よ。

はじもみぢ【櫨紅葉】(秋) ハゼを見よ。 圖 染詩ぬ心ばかりや櫨紅葉　龜六。

はじもみぢのまゆ【櫨紅葉衣】(秋) カサネの色目の名、表スハウ、裏黃、又は表黃、裏薄萌黃。

はしやうが【葉生姜】(秋) 新生姜の葉を云ふ。 圖 葉生姜に市の末枯見る日かな　楓子。

はじやうさん【馬上盞】送別のさき馬上にて盃を酌み交すこと。

はじやげんせい【破邪顯正】延寶七年、眞德門の中島隨龍が談林派の高政等の連句を論難攻擊したる書。

はしらかしぢる【走汁】少時、火にかけたる羹なりといふ。

はしらごよみ【柱曆】家の柱、壁などに張る、一枚刷の略曆。

はしらずし【柱鮨】(夏) ツト鮨を見よ。

はしらたいまつ【柱炬火】(春) 蠟燭(ガ)柱炬火。

はしらもち【柱餅】(冬) 長崎の柱餅。

はしり【走】素所などの水流しのこと。

はしりがき【走書】文字を續けて早くかくこと。

はしりそば【走蕎麥】(秋) 新蕎麥。

はしりちや【走茶】(夏) 新茶。 圖 走り茶や

はこのは

字治の一流を祈の間　流川。

はこびび【走火】火のはれること。

はこびの【走坊】農家の名。活歌に動作する家。

はこびの【走清】かや豆加美酒にある酒。

はこびや【走米】煙草業の曲輪にある米の名。又、京より近く遠ける新酒業の酒にある米の名。

はこ【箱】（名）ハコ。

はこ【箱】（名）箱形に似てる物、形状キリスに似て色白く、蕾は巻の花蕾に似た。肉中に刺多し。四五月多く流し、鮮。

はこの鮮の鮮。＝ハツ。

はこ【箱】（名）手の類、巻白く中に小孔あること、球を蓮球の如し、巻蕾巻里手より形、根は形巻に似、根くして食ふに堪えず。＝白手。

はこ【箱】（春）二月の頃、蓮の芽を水田、池などに植付ること。圖蓮植ふ

はこ【箱】【箱根】【箱根】（名）箱根の関。＝は入さし。

はこ【箱】【箱茶】（名）蓮の前茶を蓮の花に蓮注ぎ、之を防の蓮の茶に加へ冷したもの。圖朝

はこ【箱】【箱】（名）ハコ。

はこ【箱】【箱】（名）ハコ。

はこ【箱】【箱】（名）ハコ。

ばんだいじ

ばんだい

ばんなんぶ

ばんだいじ

ばんだいじ

ばんだいじ

八幡宮の逸に行はるゝ市。

はちまんぐ【八幡宮】(夏) 紙園會の山の一、宮殿に八幡宮を祀る。

はちまんぐ【八幡山】(夏) 紙園會の山の一、宮殿に八幡宮を祀る。

はちまんらく【破陣樂】舞樂の名。

はちもんじ【八文字】昔、遊女が道中の時、足の爪先を内に曲げ裾を廻はして歩行むないふ。

はちもんじや【八文字屋】京鉄屋町の書肆。主人を代々、八左衛門といひ、自笑と號す。役者評判記を其實物とせしが、元祿享保頃、浮世草紙を著し、八文字屋本と呼びて盛に行はる。

はちやかき【蜂屋柿】(秋) 美濃國各務郡蜂屋村より出る柿。澁柿にして實の形長し、ツルシ柿として名あり。

はちろこ【八郎湖】羽後國南秋田郡に在る湖。風景好し。

はちわうじ【八王子】素盞烏尊の五男三女を合せて神と祀ること。

はつ【鉢】(冬) マケロ。

はつあき【初秋】(秋) 立秋の頃をいふ。‖新秋。孟秋。早秋。秋の初。 ㊐ 風の灯秋初めての夜なりけり 松夢。

はつあきかぜ【初秋風】(秋) 秋の初風に同じ。

はつあきなひ【初商】(春) 正月二日又は三日四日に、各商人、商ひ初めをなし、初衛を出すこと。‖商始。賣初。初賣。商初め。 ㊐ たれが子ぞ商初に若菜賣 門慧。

はつあかり【初明】(春) はつあけ。

はつあけ【初明】(春) 元日の曙光をいふ。

㊐ 俗目のやゝ見ゆるほど初明り 波陽。

はつあした【初旦】(春) 元日の異名。

はつあはせ【初袷】(夏) 袷を着初むること。

㊐ 御家老の短き袖や初袷 之房。

はつあらし【初嵐】(秋) 七月末より八月ごろまで吹く風をいふ。 ㊐ 古池や蓼咲くに起る初嵐 保吉。

はついち【初市】(春) 正月二日、魚市、野菜市等の開始をなすこと。又、國々により て其日異なるもあり。 ㊐ 初市の籌に鯛の光りかな 素石。

はついなびかり【初稲妻】(春) 初いなびかり。

はついなづま【初稲妻】(春) 初かみなりを見よ。‖初稲妻。

はつう【初卯】(春) 初卯詣。

はつうぐひす【初鶯】(春) はつね。

はつうづら【初鶉】(秋) 鶉の初て啼くこと。

㊐ 初鶉時計の六つも打ぜけり 史邦。

はつうま【初午】(春) 二月初午日、京伏見の稲荷社の祭禮、京中の人、又は附近の農民多く參詣す、之を福詣といふ。社前に、穀粟の種子、大小の陶器(小なるをつぼ〳〵、大なるをでんぼふといふ)を賣る。○御籠の錢。虫の飴。」又此日、諸國の大小の稲荷社も概れ大祭を行ふ。‖午祭。○二の午。三の午。 ㊐ 初午や物種賣に日の當る 蕪村。

はつうまうら【初卯詣】(春) 正月初卯の日、諸人攝津、住吉社に詣で、神符を受くること、此符を卯の札といふ。又、正月初卯、二の卯、三の卯等に、東都亀井戸の妙義社に參詣し、串に挿みたる紙符を受けて、之を頭にかざして歸る。又同日、社内にて鶯玉を賣り、參詣の人多くを買ふ。‖妙義詣。○二の卯。 ㊐ 初卯參梅ぬす人もまじりけり 巣兆。○住の江の松に雪ふる初卯かな 吟月。

はつうまや【初馬】(春) 元日、驛路の往來

し始むること。 ㊐ 旅人や鞍に梅さす 初驛 小西。

はつうまわり【初卯參】(春) 初卯まうで。

はつうり【初賣】(春) 初商。

はつうり【初瓜】(夏) 早瓜。

はつえびす【初戎】(春) 正月九日、諸方の夷子神へ參ること。 ㊐ 初戎十萬堂を覗さけり 莊角。

はつか【僅】わづかに同じ。

はつかう【八講】はかう。

はつかうしん【初庚申】(春) 正月初庚申に帝釋天に詣づること。

はつかうふ【八講布】(夏) 越中加賀より產する麻布。古へ禁中にて法華八講會のとき、布施に用ゐしより名く。(晒布の條參照)

はつかまつり【廿日祭】(春) 正月廿日、初めて炙を据ゆること。

はつかぐさ【二十日草】(夏) 牡丹の異名。

はつかしのもり【疵突鼻】山城乙訓郡に在る地。

はつかしもつくわつ【廿日正月】(春) 正月廿日、京都の俗に、赤豆の團子を作り喰ひ、又、新年の料にしたる鯛の骨を、大豆、酒精等に和熱して喰ふ。故に團子正月、骨正月の稱あり。此日、支那にも天穿節、煎餅を繫ぐ等の俗あり。○ 鏡臺觀ふ。 ㊐ 乞食の骨正月や寒降る 菰堂。

はつかすみ【初霞】(春) 新春の霞をいふ。‖新霞。 ㊐ 明け行くや嵐も止みて初霞 須惠。

はつかたんぐ【廿日團子】(春) 廿日正月に製する赤豆團子。 ㊐ かちんもり祝ひ納めて團子かな 十于。

はつかづき【廿日月】(秋) ふけまちづき。

㊐ うさ人も待出でつらん廿日月。

はつかを【初鰹】(夏) 三月下旬より四月の頃、相州鎌倉にて始めて漁したる鰹を初松魚といひ、東都に大に賞翫す。(初鰹は晩くも四月上旬、早きは二三月の頃なれば春季とすべきものなれど、古來夏季として詠じ騷れしを以て、且く之に從ふ。初鰹の神供の條參照) ㊐ 白眼に貧乏人や初鰹 成美。

はつかをのじんく【初鰹神供】(春) 正月中旬より二月上旬の間に、相州鎌倉長谷の海にて初めて鰹一尾を漁す。此時の魚に限り、頭に大さ二寸餘の、紺色の烏帽子の形したるものを頂き居る故に、烏帽子魚、又は駈魚(カケノ)といふ、漁人之を穫るや直に船を戻し、鶴岡八幡に至り、社人に之を渡して神供とす。後濱に引返して、漁船數艘を出し、笛太鼓を囃して祭を行ひ、其鰹を漁したる漁夫の名を、江戸幕府へ注進するといふ。又、鰹漁の時に此魚の烏帽子のみ流れ來る事ありと。

はつかねずみ【鼠鼠】鼠の一種。形小さくして二寸餘。人家に近き土中に棲み、時々出でゝ食を盜みなどす。一種、白毛、又は斑なるを南京鼠といふ。

はつかのぼり【拔河戲】(春) 綱曳(ツナヒキ)。

はつかはづ【初蛙】(春) 初めて蛙の鳴くを聞くこと。 ㊐ かたぶきて田螺もきくや初蛙 巣兆。

はつかひ【初買】(春) 正月、初商の品を買ふこと。‖買初め。 ㊐ 初買に天津橋を渡りけり 青々。

はつかぜ【初雷】(春) 新年、始て雷を發くこと。

はつかみなり【初雷】(春) 二月、初て雷電あるをいふ。此時、地中に蟄伏する虫類の穴を出る頃なれば、虫出しの雷ともいふ。‖春雷。初神。初電。初なり。 ㊐ 初神や鯛うき上る沖の空 雲五。

はつかも【初鴨】(秋) 秋の鴨をいふ。多く食味につきて稱す。

はつかやま【羽束山】俗に香下山といふ。摂州六部郡三綸に在る山。

はつがらす【初烏】(春) 元日の曉に啼く烏。圖 加茂人とよき寢覺しぬ初鴉　水巴。

はつかり【初雁】(秋) 秋初て北地より雁の來ること。＝來る雁。渡る雁。天つ雁。初雁金。圖 初雁や声火に背く螢か顔　鳥酔。

はつかりがね【初雁金】(秋) 同前。

はつき【葉月】(秋) 八月の異名。

はつぎく【初菊】(秋) 九月の節句前の菊をいふ。圖 初菊や九日までの宵月夜　召波。

はつくさ【初草】(春) 若草。圖 初草や花の下草おそくとも　寧松。

はつくんし【八君子】支那宋朝の八人の學者。韓魏公、趙韓公、文潞公、司馬溫公、王荊公、歐陽公、蘇長公、黄山谷を併稱したる稱。

はつくれんが【八句連歌】能狂言の名。

はつくわいし【初懐紙】真享三年、蕉門の百韻を記しし書。

はつけ【八卦】易の乾兌離震巽坎艮坤の八卦を云ふ。轉じて易のこと。

はつけいこ【初稽古】(春) 稽古初め。

はつけん【法眷】佛法の眷族の意にて、僧の弟友をいふ。

はつけんや【八軒屋】紀州名草郡の驛。

はつこち【初東風】(春) 新春に吹く東風をいふ。圖 初東風の厠の灯動きけり　大江丸、

はつこほり【初氷】(冬) 其年、初めて凍氷あること。圖 手にしたむ髪の油や初氷　太祇。

はつこよみ【初暦】(春) 新年に暦を用ゐ初むること。＝暦開く。圖 遊ぶにはふさがりもなし初暦　乙由。

はつさうば【初相場】(春) 淀屋橋祝儀商ひを見よ。

はつさく【八朔】(秋) 八月一日、古へ農家にて、田實(ゆ)の節(轉訛して頼むの節とも)と稱し、其年始めて實りし稻を、折敷土器に入れ、禁裏又は己の主家などへ獻じたるより、轉じて各家に繪行器(エボ)、絲雀(スヂメ)(造雉、造松虫)を贈答する俗。又、德川幕府にては、節日の一とし、其祖家康が天正十八年の八朔に、初めて江戸に入城したる日なりとて、此日を關東入國の日と稱し、大小名及び直參の諸臣、白帷子を着て登城し、祝詞を將軍に奉る。○田の實の節。

はつさくらぶね【初桜船】(春) 新年、新聞雜誌の初刊をいふ。圖 初刷に出たりな古き傀儡師　紅葉。

はつすがたてんぐう【初水天宮】(春) 正月五日、水天宮の初縁日をいふ。江戸蠣殼町の水天宮、最も盛なり。

はつせ【初瀬】大和、城上郡にある山。長谷又は泊瀬に作る。山腹に長谷寺あり。＝はせ。

はつせ【初瀬】香の名。

はつせみ【初蟬】(夏) 其年、初めて蟬の聲を聞くこと。＝蟬の初聲。圖 初蟬や梅雨の晴れゆく朝嵐　孟遠。

はつせん【八専】暦の語。壬子より癸亥の間の十二日の内、丑、辰、午、戌の四日を除き、殘り八日をいふ稱。一年に六度ありて、此間は多く雨降るといひ、又嫁娶を忌む。

はつせん【八仙】雅樂の名。尖りたる嘴に鈴を下げたる面を着け、鶏冠を戴き、四人にて舞ふもの。

はつせぬ【初瀬女】初瀬山の神を云ふ。又、大和初瀬の里女を稱す。

はつそが【初曾我】(春) 初芝居を見よ。圖 初曾我や鼻頁の役者花道に　迂外。

はつそし【初祖師】(春) 一月三日、東都に尾花の潮。八朔白小袖。太夫饅頭。田の面行灯。圖 八朔や雛子寒し酒酌まん　樗冥。

はつさくのしろこそで【八朔白小袖】(秋) 八月一日の祝儀に、江戸吉原の遊女、白無垢の小袖を着ること。圖 八朔の猫まで白き揚屋哉　活東。

はつさくばい【八朔梅】(秋) 梅の一種。八重にして色深紅なり。八朔の頃より咲き、冬至の頃盛なり。江戸の植木屋に八朔梅と稱するは、八九月頃新芽を生じ、淺紅八重、中輪の花斑に咲き、初春再び花繁くなるものにて、秋の花は狂花なりと。＝秋の梅。圖 兮々さ八朔梅の匂ひ哉　雲鳳。

はつさくら【初櫻】(春) 咲きたるばかりの櫻。又、最も早く開花する櫻花。多くは一重なり。＝初花。圖 行きゆきて又山里や初櫻　柴根。

はつさけ【初蛙】(秋) 秋初めて漁獲して、市場に上る蛙をいふ。圖 初蛙や市に流るゝ淺野川　涼莵。

はつしう【八州】關東八箇國をいふ。即ち武藏、相模、安房、上總、下總、常陸、下野、上野。又、德川時代に關八州を巡廻する捕吏の稱。

はつしぐれ【初時雨】(冬) 冬初めて時雨あるをいふ。圖 濡れわたる鵜の背中や初時雨　許六。

はつしばゐ【初芝居】(春) 劇場の春狂言をいふ。江戸にては、往古正月二日を以て舞初としたれども、中比より十五日を初日とし、(現時は初日區々なり)吉例として三番叟を舞ひ、狂言は必ず曾我物語を出す。之を初曾我といふ。圖 金平も酔を吹れて初芝居　成美。

はつしほ【初潮】(秋) 八月十五日の滿潮をいふ。又支那の傳說に、吳王に殺されし伍子胥の死靈が、風波を起す爲め潮高しとて、旗旒を以て迎ふ。之を弄潮の戯といふ。圖 初汐や小舟の下のみなつくし　南巢。

はつしも【初霜】(冬) 其年、初めて降る霜。圖 初霜に何とおよるぞ船の中　其角。

はつしもつき【初霜月】(冬) 十月の異名。

はつしやう【八省】古へ中務、式部、兵部、治部、刑部、大藏、宮内の八省の稱。

はつしゅん【發春】(春) 一月の異名。

はつすずめ【初雀】(春) 元日の雀をいふ。圖 九族の囀り靈きし初雀　青々。

はつすずり【初硯】(春) 書初をいふ。圖 荻も筆に芽組むや初硯　乙由。

はつすり【初刷】(春) 新年、新聞雜誌の初刊をいふ。圖 初刷に出たりな古き傀儡師　紅葉。

はつすわてんぐう【初水天宮】(春) 正月五日、水天宮の初縁日をいふ。江戸蠣殼町の水天宮、最も盛なり。

はつせ【初瀬】大和、城上郡にある山。長谷又は泊瀬に作る。山腹に長谷寺あり。＝はせ。

はつせ【初瀬】香の名。

はつせみ【初蟬】(夏) 其年、初めて蟬の聲を聞くこと。＝蟬の初聲。圖 初蟬や梅雨の晴れゆく朝嵐　孟遠。

はつせん【八専】暦の語。壬子より癸亥の間の十二日の内、丑、辰、午、戌の四日を除き、殘り八日をいふ稱。一年に六度ありて、此間は多く雨降るといひ、又嫁娶を忌む。

はつせん【八仙】雅樂の名。尖りたる嘴に鈴を下げたる面を着け、鶏冠を戴き、四人にて舞ふもの。

はつせぬ【初瀬女】初瀬山の神を云ふ。又、大和初瀬の里女を稱す。

はつそが【初曾我】(春) 初芝居を見よ。圖 初曾我や鼻頁の役者花道に　迂外。

はつそし【初祖師】(春) 一月三日、東都に於て諸人、各所の祖師堂(日蓮宗の開祖日蓮の堂)に參詣すること。武州堀の内の法華寺、池上の本門寺、日本橋小傳馬上町の祖師堂等甚盛ふ。

はつそら【初空】(春) 元日の天をいふ。＝初御空。圖 初空や月にもよらず櫻にも　大魯。

はつそらづき【初空月】(春) 一月の異名。

はつた【蟹蛄】(秋) ハタハタ。

はつたい【麨】(夏) 夏、農家にて造る麥手。新麥を煎り焦して粉にしたるもの。＝麥コガシ。コガシ。麥の粉。又、凡て穀類を炒りたるもの。砂糖に交へ食ふ。圖 はつたいにあれむぜ給ふ使僧哉　一茶。

はつたい【八體】連俳の用語。連句の附句の方法の名。其人、其場、其時、天相、觀相、時分、時節、面影の八つをいふ。

はつだいし【初大師】(春) 正月二十一日、諸處の弘法大師の初會日をいふ。圖 初大師巾着錢の驚りかな　三角。

はつたか【法堂】寺院の說法場のこと。

はつたか【初鷹】(秋) 鳥屋出の鷹をいふ。之を用ゐて狩するを初鷹狩といふ。

はつたかがり【初鷹狩】(秋) 鳥屋出の鷹(初鷹)にて狩すること。一說に小鷹(蓋羽

はつだち

（ヌ）、兄鶲（リコ）、（ッミ等）にて小鳥を待（カリウト）。圖ある空手（ミ）の忍び歩行や初鳥待　西鶴。

はつだち【初芽】（秋）山中の樹下草中に生ずる芽。形狀蕗薹に先ちて生ずる故に名く。形狀芽より小く、紫褐くしる故に青蓋初（ハツ）。圖初芽を手に取ためて山＝て故　旨原。

はつぢ【初地】織物の名。八丈に似て地厚く、多くは藍染にて縞模の縞ある絹布。

はつぢぬの【絹布】絹布にて作りし股引を云ふ。

はつぢをたて【八筋立】船を八筋立てたる舟。

はつづき【初月】（秋）新月に今宵。圖初月やもしの香さむる曾のほこ　月を云ふ。

はつづき【初月夜】（秋）八月四五日移竹。圖山里や往きかふほどの初月夜　士朗。

はつつき【初霜】（秋）初めて露の置こと。圖初霜や猪の臥所の起あがり　去來。

はつつば【初蝶】（春）春初めて蝶の出るもの。圖初蝶や松の蜘の巣取すてて入

はつつば

（ツ）、見鶲（ッミ等）にて小鳥を待（カリウト）。圖ある空手（ミ）の忍び歩行や初鳥待　西鶴。

はつつば【初芽】（秋）山中の樹下草中に生ずる芽。形狀蕗薹に先ちて生ずる故に名く。形狀芽より小く、紫褐くしる故に青蓋初（ハツ）。圖初芽を手に取ためて山＝て故　旨原。

はつぢ【初地】織物の名。八丈に似て地厚く、多くは藍染にて縞模の縞ある絹布。

はつぢぬの【絹布】絹布にて作りし股引を云ふ。

はつぢをたて【八筋立】船を八筋立てたる舟。

はつづき【初月】（秋）新月に今宵。圖初月やもしの香さむる曾のほこ　月を云ふ。

はつづきよ【初月夜】（秋）八月四五日移竹。圖山里や往きかふほどの初月夜　士朗。

はつつゆ【初露】（秋）初めて露の置こと。圖初露や猪の臥所の起あがり　去來。

はつつば【初蝶】（春）春初めて蝶の出るもの。圖初蝶や松の蜘の巣取すてて入

はつつば

保吉。

はつてあら【初手水】（春）元朝、若水にて盥漱すること。圖初手水結ぶや指も凍れる　野坡。

はつてんじん【初天神】（春）正月廿五日、諸社に天天大い日初宮天慶の満の神神祭ふ。

（花神天旗神天）

は、天神祭、此日を梅花祭と稱し、境内に天神天神花等を賣る。又、二十四日を管天神と稱し、二十六日を煙り天神と稱す。圖嬢殿に初天神や世の中御。

はつとおり【初鳥待】（秋）初鷹待。

はつとし【初年】（春）新年。

はつとしのは【初年賀】（春）正月元日、江戸城へ諸大名、及、拜謁以上の士登城し、新年の賀儀をなすこと。圖諸殿の紋は明何々初登城　蛇足。○獄寺目より夜に入り初登城　柳枝。

はつなり

中南品なる樣ふ、美しく詠り蠟燭うだ、市中を樣りて賣先に客ちを云ふ。○初荷

はつなり【初荷】（春）正月の商初に馬、車に

すること言に、天下のオは一石あり、勝れた事はは其八寸を得たりとあるより、勝れた事オある人をいふ。

はつなりだし【初鳥屋出】（秋）そやでのたつ。

はつぬる【初寅】（春）正月初寅日、京都の貴賤、山城鞍馬寺の多門天に詣で福を祈る。此頃、鞍馬寺の護瓦、參詣の人に福壺（ツボ）福蝶（ツボ）を賣る。＝鞍馬（クラマ）詣。石（參詣下しを見よ）を賣る。圖初寅や院々はまだ雪ごもり　鞍馬詣。

はつねの【初鶯】（春）元日の曉に鳴く鶯をいふ。圖初鶯や冠正しうたひけむ　青嶋。

はつなぎ【初凪】（春）新春、風なくして河港の波平なるをいふ。

はつなぐさ【初名草】（春）椿の異名。

はつなすび【初茄子】（夏）初めて賣りたる茄子。圖鉢植や見るはかりなる初茄子　一茶。

はつなり【初雷】（春）はつらなり。

はつに【初荷】（春）正月の商初に馬、車に

はつぬる【初寅】（春）正月初寅日、京都の貴賤、山城鞍馬寺の多門天に詣で福を祈る。此頃、鞍馬寺の護瓦、參詣の人に福壺（ツボ）福蝶（ツボ）を賣る。＝鞍馬（クラマ）詣。圖初寅や院々はまだ雪ごもり　鞍馬詣。

はつねの【初鶯】（春）元日の曉に鳴く鶯をいふ。圖初鶯や冠正しうたひけむ　青嶋。

はつなぎ【初凪】（春）新春、風なくして河港の波平なるをいふ。

はつなぐさ【初名草】（春）椿の異名。

はつなすび【初茄子】（夏）初めて賣りたる茄子。圖鉢植や見るはかりなる初茄子　一茶。

はつなり【初雷】（春）はつらなり。

はつに【初荷】（春）正月の商初に馬、車に

はつぬる【初寅】（春）正月初寅日、京都の貴賤、山城鞍馬寺の多門天に詣で福を祈る。此頃、鞍馬寺の護瓦、參詣の人に福壺（ツボ）福蝶（ツボ）を賣る。＝鞍馬（クラマ）詣。圖初寅や院々はまだ雪ごもり　鞍馬詣。

はつねの【初鶯】（春）元日の曉に鳴く鶯をいふ。圖初鶯や冠正しうたひけむ　青嶋。

はつなぎ【初凪】（春）新春、風なくして河港の波平なるをいふ。

はつなぐさ【初名草】（春）椿の異名。

はつなすび【初茄子】（夏）初めて賣りたる茄子。圖鉢植や見るはかりなる初茄子　一茶。

はつなり【初雷】（春）はつらなり。

はつに【初荷】（春）正月の商初に馬、車に

はつにかま

荷。圖賣馬を曳りて立てたる初荷哉　子規。

はつにさく【初荷馬】（春）初荷の馬を曳く馬。

はつにび【初紅】（春）紅梅を見よ。圖初紅やゐれ色見ゆる蕾の丈　柏樹。

はつね【初音】（春）鶯の初音をいふ。＝初鶯。圖うぐひすの身を例しまに初音哉　其角。

はつね【初子】（春）初子の日をいふ。

はつねのそうきゃう【初音僧正】花林院永縁法師の、ことし。興福寺の別當にして、永縁僧正川百首の作者なり。天治二年寂す。曾て「聞くたびに今しけれは時鳥いつる初音の心地こそすれ」の歌を求にたるを以てかく呼ばる。

はつねだ【初子日】（春）略して初子といふ。子の日の遊の條を見よ。圖鶯鳴しよき宿ごろ人初子の日　去來。

はつのり【初海苔】（冬）十二月の頃、初めて採りし海苔をいふ。圖初海苔や淺草寺の鳴の音　雨中。

はつはつ【小雨】霧雨なること。

はつはな【初花】（春）初ること同じ。圖初花にうちふる雪の色香こそ　雪人。

はつはる【初春】（春）正月、初めて會談す

はつはつ

る。

はつはなづき【初花月】（春）二月の異名。

はつはる【初春】（春）立春の頃をいふ。又、春始の意にも用ゐる。＝早春。初春。圖初春や往交ふ人の花の雨　石合。

はつはるづき【初春月】（春）一月の異名。圖花雪や初春月の足袋合し　蝶生。

はつひ【初日】（春）初日の出をいふ。圖かしなめて松の葉蔭の初日哉　浙江。

はつび【法被】武家にて中間、小者などの着る木綿の服。多く紺地にして羽織の如く家の紋又は記號をつく。

はつひかげ【初日影】（春）初日の出に同じ。

はつひかげ【初日影】（春）初日の出に同じ。圖陽もなき五尺の庭や初日影　蝶夷。

はつひかげ【初日出】（春）正月元日の日出をいふ。諸人早曉より山上などの高所にて其昇るを待ち拜す。初日。＝初日影。圖日の光むりと今初日や蔵のかしらより　蕪村。

はつひかげ

る。

はつはなづき【初花月】（春）二月の異名。

はつはる【初春】（春）立春の頃をいふ。又、春始の意にも用ゐる。＝早春。初春。圖初春や往交ふ人の花の雨　石合。

はつはるづき【初春月】（春）一月の異名。圖花雪や初春月の足袋合し　蝶生。

はつひ【初日】（春）初日の出をいふ。圖かしなめて松の葉蔭の初日哉　浙江。

はつび【法被】武家にて中間、小者などの着る木綿の服。多く紺地にして羽織の如く家の紋又は記號をつく。

はつひかげ【初日影】（春）初日の出に同じ。

はつひかげ【初日影】（春）初日の出に同じ。圖陽もなき五尺の庭や初日影　蝶夷。

はつひかげ【初日出】（春）正月元日の日出をいふ。諸人早曉より山上などの高所にて其昇るを待ち拜す。初日。＝初日影。圖日の光むりと今初日や蔵のかしらより　蕪村。

はつひかげ

をいふ。

はつふじ【初富士】（春）江戸及駿河附近の諸國にて、元朝初めて富士山を望むこと。圖元日の見るものにせん富士の山　宗鑑。

はつふだう【初不動】（春）正月廿八日、各處の不動の祭日。初不動。圖東風うけて鷹の空のほつれや初不動　汪外。

はつふな【初鮒】（春）早春、初めて市場に賣る鮒。○鮒市。圖初鮒の鬼活にかく　る人鮒ちな　故堂。

はつふゆ【初冬】（冬）立冬の頃をいふ。又、十月の異。圖初冬や日和になりし貴賤は　蕪村。

はつふゆづき【初冬月】（冬）十月の異名。

はつぶり【初鮒】（冬）十一月頃の鮒をいふ。圖初鮒に漁り夢の丹波口　青笹。

はつぶり【初牛蒡】先の頃に附くる金眞。

はつぶり【初風呂】（春）湯殿初に同じ。圖初風呂の身に染む嬢の匂ひかな　竹香。

はつぶし【初節】（春）正月、初めて市場に

をいふ。

はつふじ【初富士】（春）江戸及駿河附近の諸國にて、元朝初めて富士山を望むこと。圖元日の見るものにせん富士の山　宗鑑。

はつふだう【初不動】（春）正月廿八日、各處の不動の祭日。初不動。圖東風うけて鷹の空のほつれや初不動　汪外。

はつふな【初鮒】（春）早春、初めて市場に賣る鮒。○鮒市。圖初鮒の鬼活にかく　る人鮒ちな　故堂。

はつふゆ【初冬】（冬）立冬の頃をいふ。又、十月の異。圖初冬や日和になりし貴賤は　蕪村。

はつふゆづき【初冬月】（冬）十月の異名。

はつぶり【初鮒】（冬）十一月頃の鮒をいふ。圖初鮒に漁り夢の丹波口　青笹。

はつぶり【初牛蒡】先の頃に附くる金眞。

はつぶり【初風呂】（春）湯殿初に同じ。圖初風呂の身に染む嬢の匂ひかな　竹香。

はつぶし【初節】（春）正月、初めて市場に

はつぶし

父、大道、鯛魚、鳥尾。

はつぶし【初節天】（春）正月初己日、各處の祭天の春日をいふ。＝初己日。

はつぶし

父、大道、鯛魚、鳥尾。

はつぶし【初節天】（春）正月初己日、各處の祭天の春日をいふ。＝初己日。

はつほたる【初螢】（夏）仲夏の頃、螢の出初むるをいふ。

はつほとゝぎす【初郭公】（夏）郭公の鳴音を始めて聞くこゝろ。

はつまくは【初桑】（夏）桑摘の初めて出たるもの。　圓初蚕飼たてにや割らん人種にやせん人　蝶青天。

はつみ【初己】（春）初巳。

はつみぐさ【初見草】（夏）卯の花の異名。

はつみぐさ【初見草】（冬）冬菊の異名。圓和歌浦や貞度小田の初見草　三千風。

はつみそら【初御空】（春）初空。

はつみつき【初見月】（春）一月の異名。

はつみどり【初緑】（春）若松をいふ。圓初緑雲木の中に置かなり　巴峰。

はつみぞれ【初深雪】（冬）初めて大雪降るをいふ。一説に夏に初雪のこゝとすべし。圓もの〻煙の分るもうにし初深雪　諸国頭。

はつむら【初雨】山城字治より出る製茶の銘。昔の字は廿一日の三字を合したるものにて、三月廿一日に摘かしもの〻なるべし。故に初むらゝいふ。

はつむらさき【初元紫】古く元服のとき、紫の組にて帽を結ぶこゝろ。轉じて元服のこゝろ。

はつもえぎ【初紅葉】（秋）諸木の紅葉しそむるこゝろ。　圓富山や老の中に初紅葉　可風。

はつもえぎのこゝろ【初紅葉炎】（秋）カサネの色目の名。表紅裏黄、表紅裏淡黄。

はつもの【初雛子】（春）雛子。

はつもゝか【初雛節】（春）正月八日、諸国の雛節知恵の初雛日をいふ。

はつゆき【初雪】（春）雪解初。圓故一故二〻して初雪の化粧成　鶴梧桐。

はつゆき【初雪】（冬）其年、初めて降る雪。圓初雪や故に潮雪の風より召波。

はつゆきまつり【初雪祭】（冬）初雪は稲ふる〻と分けに成に出ゆ。故に潮雪は稲ふる〻と解こ分ちて冬季こゝとす。圓初雪やまづ雪　医師ら祝えもむる　許六。

はつゆきのこゝろ【初雪炎】（冬）カサネの色目の名。表白裏、初ふる雪の白。

はつゆきのみやこゝろ【初雪見参】（冬）古く初雪の降る日、詩臣若中に参内して、其年の詩を賞する式。近年十一月より始まり終りは　圓初雪や見参をは　ゝる　沿のしこいふ。圓初雪や見参をは　ゝる　沿のはなし　蕉水。

はつゆし【初鰹】（春）鰹鰹ひもの。

はつゆめ【初夢】（春）節分の夜の夢をいふ。一説に、十二月晦日の夜より元日の晨まで、二日の晨まで、三日の晨まで、の夢をいふ。又、吉夢は正月二日の夢を見よ。圓酒ちまく初夢びたこゝろ　可風。

はつゆり【初百合】（春）ゆたゝりの花を見よ。

はつゆる【初雷】（春）初ゆかなり。

はつれん【初蓮】（春）蓮初。

はつれんぼう【初連歌】（春）新年、連歌の初会をいふ。圓水蓼の陰彩や年の初連歌　李塘。

はつわかな【初若菜】（春）若菜を見よ。

はつわかな【初若菜】（春）其年、初めて摘む若菜をいふ。圓春に出る清き千すり　晩圓。

はつわかめ【初若布】（春）其年、初めて刈りし若布をいふ。圓春に出る清き千すり　晩圓。

はつわらび【初蕨】（春）初わらびもゆ。

はつわらび【初蕨】（春）ゆゝわらび。

はつゐ【初猪】（冬）其年、初めて猪を捕ふる時、人家にて、猪の肉を賞する式。近年十一月より始まり終りは　圓初猪や見参をは　ゝる　沿のしこいふ。圓初猪や見参をは　ゝる　沿のはなし　蕉水。

はつゐのこゝろ【初猪炎】（冬）カサネの色目の名。表白、初ふる雪の白。

はつゐのみやこゝろ【初猪見参】（冬）古く初猪の降る日、詩臣若中に参内して、其年の詩を賞する式。近年十一月より始まり終りは　圓初猪や見参をは　ゝる　沿のしこいふ。圓初猪や見参をは　ゝる　沿のはなし　蕉水。

はつゐぶち【初猪】（春）猪初ゆかなり。

はつゐぶち【初猪】（春

はなはだき【花美】（夏）美の花。

はないれ【花入】（春）花を挿す器。正花なり。＝花活。

はなうば【花冠】（春）花を挿したる冠。正花なり。＝花笠帽。

はなうり【花賣】（春）櫻花を賣る人。正花なり。＝賣花翁。

はなたば【花束】花束、胡瓜などの落花後、直に摘み取りし實を云ふ。

はながきのしゆう【花垣庄】奈良縣の故事を見よ。

はなかご【花籠】（春）花を挿す籠。花筐ともいふ。正花なり。

はながさ【花笠】（春）花にて飾りし笠。又、花の形したるかぶり笠にて、元祿頃流行仮令は人人は誹　其角。

はなかぜ【鼻風邪】（冬）風邪にかゝりて、鼻汁の出るこゝ。

はなかた【俳諧】いもあこ。あはだ。

はなかた【花形】若年の俳優などの技倆ありて時めくものをいふ。

はなかたみ【花筐】（春）花籠を見よ。正花。

はながたみ【花筐】大鼓連の皇子に契りし女、紀季の花筐と王孝を抱きて狂女となり、都へ上りしに、皇子御位に即き王孝卿位に即き王ひ御遊の折から、逢見て再び召使はるゝこゝを作りし謡曲。

はなかつみ【花且見】（夏）古歌に詠じ植物にして、其說區々なれども、マコモ（菰）なりといふ說多し。俳諧に季とするは菰の花のこゝ。　圖　俳諧に季とするは菰の花のこゝ。　參　浪。

はなかつる【花蔓】（春）花を挿頭すこゝ。正花。

はなかつを【花鰹】よき鰹節を細く薄く前り、料理に用ゐるもの。

はながつを【花川戸】江戸淺草の隅田川に沿ひし町の名。

はなかど【花瓶】（春）花を挿す器。正花。＝花活。花入。

はなかば【花鞍】活花の席になりしもの。

はなぎ【鼻木】牛の鼻に通して、綱を附け曳くための木。

はなぐ【花供】（夏）かうやの花供。

はなくやう【花供回向】（夏）四月八日、世俗に草餅、草團子の類を製し、佛に供ふ。又、草餅といふこゝ。＝花草餅。

はなくさもち【花草餅】（夏）同前。

はなぐし【花櫛】造花などにてムネを飾りたる櫛。

はなぐもり【鼻曇】（夏）パナクモ。

はなぐもり【花曇】（春）櫻の枕詞。

はなぐもり【花曇】（春）花時の天候、曇り勝なるをいふ。　圖　花曇霞に近き夕ゆふ　蕪村。

はなぐもり【花曇】（春）花樹を繞りて垂上に移して挽くもの。又、花見車のこゝ。正花。

はなくわし【花菓子】（夏）おしだ。

はなげ【花子】一七日の産屋を行ふこゝ。其の日、太郎冠者に裏を着せて、忍び裏れの花子の詞を述ぶ。留守の間に盜は出でゝ、裏、産婦を喜び夫の歸るを待ち怒るといふ狂言。又、謡曲花女に出でゝ、裏酒町上の宿の女の名。

はなごころ【花心】（春）仇なる移り易き心をいふ。正花。

はなごろも【花衣】（夏）櫻、彩色を織りたる薄の類、夏季の衣物なり。

はなざかり【花盛】（春）一年中の花を盛りなるを記したる時の層。四季の花を月分にして記したるもの。初春各條に花の名所を記したるもの。初春用ゐる初ゐる故、初層こ同じく新年の季こゝ。

はなさかる【花咲爺】（春）こゝらがさ爺のこゝ。

はなさかる【花咲爺】（春）こゝらがさ爺のこゝ。又、花時に着る衣。正花。＝花見衣。　圖　武士の裏や夏の花衣　蕪村。

はなざかり【花盛】（春）滿開せる花をいふ。　圖　世に古き小雨も見たり花盛　士朝。

はなさら【花皿】（春）花を盛りて佛に捧ぐる器。正花。

はなさらえん【花盛園】（春）遊園地。

はなざらし【花晒】（春）三月十四日、宮中清涼殿に於て大鼓(つゞみ)、鉦(かね)の調を奏ゝこゝ。春花の飛散する頃は、雲調の人を恐すを以て之を嫌ふ時なり、こゝ云ふ。　圖　鉦の調えやみの調や花しづめ　青々。

はなさんが【ハナシガ】【花冠】連俳の用語。連句に何々はなしこゝ留るは、千句の時、第三に於てすべしこゝの法をいふ。

はなさを【花竿】米を袋に包み木の枝に多く附け、幣の如くして前に挿げ、豊穣を祈ゝこゝ。

はなさんしき【花百清】（夏）百清の花をいふ。

はなじゆんさい【花蓴菜】（夏）ノヤヤ。

はなぞめ【鼻白】心後れして赤がるこゝ。

はなそや【花寺】（夏）ちもの花。

はなそよぎ【花毛】（秋）尾花に全に。　圖　花毛故ゐれながらに日は入る　大江丸。

はなそよぎ【花毛衣】（秋）尾花の衣こゝ。カヤネの色目の名、表白、裏清。パナガ色。

はなそよぎ【花蓑坊】（春）蓑坊の花。

はなそよぎ【花相撲】江戸本所回向院の春場所及夏場所以外に、他に興行する相撲。何時に係らず行ふを以て季とせず。

はなそりこう【花剃刀】蓑又は蓑草なこゝの花を茨に挿りたるもの。

はなぞの【花園】（春）花樹を植えし園。正花。

はなぞのいんきよ【花園院御忌】（冬）十二月十一日、京都花園、妙心寺及紫野大徳寺にて花園帝の御忌を修するこゝ。

はなぞのさい【花園祭】（秋）灯籠祭。

はなぞのまつり【花園祭】鎌倉に於たる清春き色の表。

はなだ【縹】淡き空色をいふ。

はなだおび【縹帯】淡黄色の帯をいふ。中の結ゆる時の心に用ゐる。

はなだかまつり【鼻高祭】（夏）こゝうふゝしぶつし公やう。

はなだはだ【花膚】（夏）櫻の花。

はなだはだの【花膚】（夏）カヤネの色目の名、表紫、裏青。

はなだおび【花足袋】（冬）赤、紫等の色裏し足袋をいふ。　圖　失ひし花足袋出でゝ幻花春の中　洋流。

はなちがめ【放龜】（秋）放生會を見よ。　圖　姉しこゝや放生川に魚離る　蕪言。

はなちかま【花釜】（春）釜の花。正花。

はなちり【放鳥】（秋）放生會を見よ。　圖　夕されば手水に遊ぶや放ち鳥。

はなちるさと【花丁子】（春）丁子草の花。

はなちるさと【花散里】源氏物語中の人物。藤原故太政の妹。姉の者にありて源氏に通ず。性眞故にして源氏に愛こゝる。

はなつば【花椿】（春）花椿を素ふ人。正花。

はなづち【花槌】（春）香華をのせ佛前にかゝ机。又、經文、佛具をのせ佛前にかゝ几。

はなづつ【花筒】（春）花を挿す器。正花。

はなづつき【花筒月】（春）三月の異名。

はなつま【花妻】ひろゝ百花を親みていふ語。正花にあらず。

はなつみ【花摘】元祿三年、其角が父の遺著に編かし集の名。

はなつみ【花摘】（夏）四月八日、北嶺山東

願受開帳の時、同山末寺の花精社（修験宗大本師の母、妙智誕人を祀る。大師の母、生前幸て大師に遇はんとて叡山に登り、此處まで王り、大師に會し下山なす。故に後世婦女は此處より上に參拜願酒の供を安置し、女人多く參詣する由。

はなのうう【花燈籠】（秋）造り花などにて美しく飾りたる盆燈籠。

はなのとり【花鳥】（春）花に宿る鳥。又單に花と鳥とをいふ。正花。圖花鳥になれて戸口なき庵哉　牛化。

はなのとりまい【鼻取角力】能狂言の名。

はなのなし【花菱】（春）菱の花。

はなのなし【鼻梨】（夏）こうふくじふつしやうの。

はなのなでしこのもん【花撫子紋】（夏）カナヘの色目の名、表紫、裏紅。

はなのなぬか【花七日】（春）堰の咲きて散るまでの間の短きをいふ。圖花七日食はずとても節酒の會　蕪村。

はなのなぬし【花盛人】（春）花の枝を折り盛む人。又、王生王言（ワウシヤウワウゲン）の婦の一。圖山の月花盛人をてらし給ふ　一茶。

はなのなみ【花波】（春）花の枝を折り盛む人。又、王生王言（ワウシヤウワウゲン）の婦の一。圖山の月花盛人をてらし給ふ　一茶。

はなのなみだ【花涙】（春）花の露。

はなのなみだ【花涙雨】（春）花時に降る雨。圖庵の雨花相似ざるさの降ふにはは　召波。

はなのなみじ【花主】（春）櫻樹あるる家の主をいふ。正花。圖貴るこゝ、覺えぬ花の主ゆな　乙鶴。

はなのの【花能】江戸時代に婦女にも觀覽を許せし能樂。

はなのぬん【花笑】（春）花時愛を張りて花を賞するこゝ。正花。

はなのねぶり【花粉】（秋）菊の異名。花の兄（梅）に對して云ふ。

はなのか【花香】（春）櫻に限りていふ。正花。圖花の香や嵯峨の灯ゆるさき　蕪村。

はなのかほ【花顔】（春）花の美を佳人の美に比し、又美女の顏色を花に比ふこゝ。正花。

‖はなのかほ　花の姿、花の肌、花の樣も全じ。正花。

はなのくもる【花曇】（春）櫻樹に曇りて花時に陰りて曇ふ。正花。圖花の雲や嵯峨の灯ゆるさき　蕪村。

はなのかほ【花顔】（春）花の美を佳人の美に比し、又美女の顏色を花に比ふこゝ。正花。

‖はなのかほ　花の姿、花の肌、花の樣も全じ。正花。

はなのくもる【花曇】（春）櫻樹に曇りて花時に陰りて曇ふ。正花。圖花の雲や嵯峨の灯ゆるさき　蕪村。

はなのくもる【花曇】（春）櫻樹に曇りて花時に陰りて曇ふ。正花

はなびぐす【花火草】立圃が編みし俳諧の季寄書。

はなびぶね【花火舟】(秋) 花火する舟。或は花火を觀る舟。圖 花火舟遊人去て秋の水　召波。

はなびら【葩】(春) 特に櫻花の葩をいふ。正花。

はなひる【嚏】くさめすること。

はなふくろ【鼻袋】古へ貴人の厠へゆくときに、兩耳に紐にてかけ、鼻を蔽ふ具。

はなぶくろ【花袋】匂ひ袋をいふ。

はなぶす【蕚】(春) 特に櫻花の蕚をいふ。正花。‖花房。

はなふまいつぴら【英一蝶】一蝶を見よ。

はなふぶき【花吹雪】(春) 落花の飛散して、吹雪の如きを形容したる語。圖 小走りの紅提灯や花ふぶき　四方太。

はなぶつぼ【花眞壺】花の繪ある壺。

はなぶり【花鞦】(秋) 飛鳥井の鞦。

はなみ【花見】(春) 櫻花を觀賞すること。圖 さそはるる人にかくれて花見哉　秦夫。

はなみぐるま【花見車】(春) 花見の人の乘り行く車。正花。

はなみぐるま【花見車】元祿十五年、織士が編にて、當時の俳人を、遊女の見立に倣ひ評判を書きし書。

はなみごしや【花見小袖】(春) 花見の人の美衣。又、小袖を木の間に懸けて、幕の代りとするを花見幕といふ。正花。

はなみごろも【花見衣】(春) 花衣。

はなみざけ【花見酒】(春) 花を見つつ宴すること。

はなみじらみ【花見虱】(春) 花見の季節に、暖氣龍すを以て虱が衣服の表面へ這出ること。圖 藥園に花見虱をふるひけり　青々。

はなみだら【花御堂】(夏) 佛生會に寺院にて飾る小堂。屋を諸種の花にて葺き、中に裸佛の佛像を置く。

(うだみなは)

圖 いろ〳〵の花の雫や花御堂　蓼林。

はなみず【花水】(秋) 落し水を見よ。

はなみず【花水】墓前に手向る水をいふ。

はなみつき【花見月】(春) 三月の異名。

はなみどり【花見鳥】(春) 鶯の異名。

はなみぶね【花見船】(春) 水邊の花を見るため乘る船。

はなみまく【花見幕】(春) 花の幕。花見小袖なども見よ。圖 土佐が畫の顔に扇や花見幕　曉臺。

はなむこ【花聟】(春) 新聟のこと。正花にして戀なり。

はなむしろ【花宴】(春) 花下にて宴などする席。又、落花の布きたる上へ座すること。正花。

はなむすび【花結ひ】(春) 草木の花の名を探題の知くして歌を讀むこと。又は男女の名に假して緣結の知くする女兒の戯。正花。

はなむらさき【花紫】(秋) ムラサキ草の秋花咲くものなりと(ムラサキの條參照)。

はなめぐり【花巡り】(春) 花を見めぐりて旅すること。圖 吉野山また散るかたに花巡り　去來。

はなもみぢ【花紅葉】(秋) 紅葉を形容していふ語。又、花と紅葉と合せいふ。後者は雜なり。圖 目にあて、足羽おろしや花紅葉　大町。

はなもり【花守】(春) 花樹を守る人。正花。圖 花守となりて棒つく花主哉　闌更。

はなやぐまのまぬ【花山吹衣】(春) 山吹のきぬ。

はなよめ【花婚】(春) 柚の花。

はなよめ【花嫁】(春) 新婦のこと。正花にして戀なり。

はなれをし【離れ尾鳥】(冬) 雌雄相離れたるをいふ。

はなわらふ【花笑】(春) 櫻花の開くを擬人して形容したる語。正花。

はなをかやら【華岡寺】崇靈山と號す。播州赤穗にあり。淺野家の墓提所にして義士の遺物多し。

はなをけ【花桶】(春) 花を挿す桶。正花。

はなをたづぬ【尋花】(春) 櫻狩。

はなをむり【花踊】(春) ヤスラヒバナ。

はなをふらす【花降】(春) 佛經に虛空に花を雨らすとあるより出づ。正花。

はなをまつ【花待】(春) 櫻花の開くを待つこと。(櫻に限りていふ) 圖 蒐翁も花待つ宿の仲間哉　由之。

はなをり【花折】能狂言の名。

はなををしむ【花惜】(春) 花の散るを惜むこと。

はにふがは【馬入川】相州高座、大住兩郡の堺にある河。相模川とも云ふ。

はにふのこや【埴生小屋】賤しき人のすみか。

はにわ【埴輪】古墳などの中より出る土製の人形、瓶子の類。

はぬけかも【羽抜鴨】(雜) 羽抜鳥になりし鴨をいふ。

はぬけどり【羽抜鳥】(夏) 四五月頃、鳥類の羽毛脫落して新毛生ず。その羽の脫したるばかりの鳥を羽抜鳥といふ。‖鳥毛を革む。○羽抜鴨。圖 あら磯や日にこがれ鳴く羽抜鳥　文路。

はね【羽根】(春) ハゴを見よ。

はねだいもく【撥題目】(春) 題目を見よ。

はねつく【羽根突】(春) 左義長のこと。

はねび【撥火】(春) 曲水の宴。

はのじのみつ【巳字水】(春) 曲水の宴。

はばき【脛巾】脚絆の類。古語。

はばき【鎺】刀の鍔の裏表に當てたる金具。

はばき【箒木】(夏) 高さ四五尺の草。春苗を生じ、枝葉繁く葉は細長くして互生し、深綠にして毛あり。夏、葉間に小白花を開く。秋伐りて莖枝を干し。箒に作る。‖苕草。地膚。箒草(ハウキ)。

(ききはは)

圖 箒木のものめきて立つ淺茅哉　道彦。

はばき【箒木】信濃國園原にある名所。遠くより見渡せば森の茂りし如く、近つけば更に何物も見えずといふ。古來和歌に詠ぜられて有名なり。

はばきぐさ【箒草】(夏) はははきぎ。

はばきぼし【箒星】ほうきぼし。

はばくそ【黑子】ほくろ。

はばくり【貝母】(春) かたくりの花。

はばくさ【母子草】(春) 原野に多き草。秋苗を生じ、葉薄く長く白毛あり。春七八寸に長じ、梢に小黃花を開く。正月七種に若葉を採りて御形(ゴギヤウ)といひ、三月、草餅に搗く。‖鼠麴草。佛耳草。米麴。圖 曉に毛むく立けり母子草　吾舍。

はばこもち【母子餅】(春) 草の餅。

はぼ【柿】(秋) 香木。高さ二三丈に及ぶものあり、葉は柏に似て細く尖りあり、秋紅葉し冬落つ。今、カシハともいふ。圖 めた〳〵と日暮がち也柿原　成美。

はばそのもり【柿森】山城乙訓郡にある地。紅葉の名所。

はばそのみもり【柿屋籠】(春) 正月初申日より戌日の夜まで、山城木津川の邊、柿の森附近の人家にて、三日間の食物を

落く、（神武帝に討れし長髓彦の裔なりのこと
い見（神武帝に討れし長髓彦の裔なりのこと
氏のふ）の遊行して樂りを爲すを遊べ。
の日の夜より翌日に至り、春日明神
の夜風空に響く　毛天。
の夜風空に響く　毛天。
はぎ　【杼機】母の枕詞。
はぎのみち　【杼紅葉】（秋）杼を見よ。
水鶏江や上は杼紅葉　岡更。
はぎとり　【朝々鳥】鶺鴒（ゆこ古名を去る條を
見よ）
はぎとし　【冠年】紀こ、ろ。
はぎうら　【灰占】火鉢の灰に文字など書て
問り占ふこと。
はぎかつき　【灰搔】炭火のたちて白き灰の表
ふこと。
はぎ　【萩風】風種の切種の蟬、山形をなす
こと、ろの樣。＝時風。
はぎ　【萩走杵】蛇の一種。多く
し、頭は鍬の柱の形し、毒あり。
はぎ　【萩刀】彫物師の用るる小刀。＝
刷刀。
はぎうんどう　【注三亭】四洗の高蹈
りて國に入り、孫王子を殺さ惟しかた後、
を釣りて蹈上に入り、孫王子を殺さ惟しかた後、
人上に算し、今を算して注三亭
を殺す者は死、人を傷け、盜
す。

なすを者は罰に處し、其盜は悉く奉の民之
前法を盜み人をいひしかば、奉の民之
ゆを見て面倒なる法律ないふ。
はぎあり　【羽前酒】雉子の羽前の肉を鹽に
し、だゝきて酒に炙くしたもの。
はぎのまち　【放埒】行狀あしきをいふ。
はぎのり　【蔵部】神官行狀あしきを人をいふ。
はぎのり　【蔵王】は山に全に。
はぎのり　【蔵女】巫女を云ふ。
はぎ　【萩】はうむこと、こと。
はく　【蛾】（夏）蛾の羽化せしもの。
三分ノ一に集りて開翅六足あり。夏昼出て
ノ物に集りて煩し。○蛾（ガ）小蛾。
金蛾。蛾。瓜蛾。　國蛾を打つ者や
蛾こゝのふ。　大蛾。
はくまり　【蛾切】素盞男命の腰に給ひしと
いふ大刀の名。
はくまりとり　【蛾取草】（夏）小町草。　國版
近し蛾取草もなきあたり　蛾妖。
はくまりとり　【蛾取蜘蛛】（夏）蜘蛛の一種。
さ三四分にして白灰色。又は黑褐な大
なるもあり。雌なるに樣か、蛾類の小虫
の目の光り　＝蛾虫。　國夕暮や蛾取蜘蛛
の目の光り　王江。
はくんこう　【馬糞茸】（夏）原野に生ずる茸。

に春宿根より生じ高さ二三尺、莖は三天
狀馬糞之。　國馬糞茸加用虫の歌ひけり。
はぐさ　【蛤】（春）貝の名。形楕の貝に似
て、殼厚く堅く、表面に種々の文樣あ
り。肉を煮又は燒き面て食ふ。　國蛤の
同じふたつとなりけり　常川。
はぐさのにこ　【蛤面】（春）汐干狩の
中を語が、蛤の走所を探りて、之を取る
こと。＝シルは蛤面ふる事なり。
はぐさ　【蛤差】（秋）せられい。
はぐさ　【蛤】（冬）ブリ。
はぐさ　【漁手鳥】（冬）漁達に飛ぶ千鳥。
國冴ゆ漁手鳥　月の漁手鳥　精貫。
はぐさ　【漁樵】（春）樵の一種。漁達に
生じ、蛤小にして漁は山茶花に似、花に
なし。
はぐさ　【漁名湖】漁名の湖こと。
通國數知郡にあり。麓水の切、湖水と相
て、其切れたる所を今切と呼ぶ。
はぐさ　【漁製】（夏）漁製の用。
はぐさ　【漁流】（夏）漁製の流れ。
はぐさ　【漁師】（夏）漁の師。中は
五出の漁赤花を開き、後赤き實
し、漁達に創多く、漁バヲに似たり。初
夏、漁達に白花漁り開き、漁秋實を結ぶ。＝
刈漁花蔭。　國流木鎖の花はいつ咲く夏
白鎖。
はぐさ　【漁夫】（春）正月、古く兒童の
射にのみる迎知盤を、

（弓まは）

て弓竹的れくの者を
ふ。大和、土佐がこの國々に行はる。後
る。　國俗樂弓や男子四方の志　鈴鹿。
はぐさ　【俗樂弓】（冬）盛の春に
樂弓を問ふもの。○はぐや實。

はぐさ　【漁夫綿花】（秋）漁達に生ず
る綿ふ、形漁手の如し。花は春綿よ
ふ以て春形の油を製す。＝故蟹。　國
故蟹や羽後に遊人で漁あり　蛤堂。
はぐさのこと　【漁名橋】漁江國數知郡漁名湖
の一橋に架せし橋の名。中古は漁名湖
に會りしを以て有名なりしが、其後時
遊に會りし橋に樣も架て名のみ存す。
はぐさ　【漁圓】（秋）九月頃吹く風の名。
はぐさ　【漁砂風】（春）漁達に生じ、又圓
に圓にも樣こ。砂風の一種。莖は中ノ開
赤く、夏の初莖頭に種を出し、小花を付け
て色なし。春、開なこに漁へて食ふ。
はぐさ　【漁芝】（秋）はまゆふの花。
はぐさ　【漁蕎】（秋）漁に生ふる蕎なら
んこと。
はぐさ　【漁蛇】漁達の蛇をいふ。
はぐさ　【漁蛭】漁達の蛭こと。
はぐさ　【漁蜻蛉】（春）蜻蛉の一種。
國蜻の翅羽ふくらめし蜻蛉かな
見月。
はぐさ　【蜻蛉矢】（春）はまゆふ實。
はぐさ　【蜻蛉】國を蜻蛉にせしも詞。
はぐさ　【漁夫綿花】（秋）漁達に生ず
る綿ふ。形漁手の如し。花は春綿よ
ふ以て春形の油を製す。＝故蟹。　國
故蟹や羽後に遊人で漁あり　蛤堂。
はぐさのこと　【漁名橋】漁江國數知郡漁名湖
の一橋に架せし橋の名。中古は漁名湖
に會りしを以て有名なりしが、其後時
遊に會りし橋に樣も架て名のみ存す。
はぐさ　【漁圓】（秋）九月頃吹く風の名。
はぐさ　【漁砂風】（春）漁達に生じ、又圓
に圓にも樣こ。砂風の一種。莖は中ノ開
赤く、夏の初莖頭に種を出し、小花を付け
て色なし。春、開なこに漁へて食ふ。
はぐさ　【漁芝】（秋）はまゆふの花。
はぐさ　【漁蕎】（秋）漁に生ふる蕎なら
んこと。
はぐさ　【漁蛇】漁達の蛇をいふ。
はぐさ　【漁蛭】漁達の蛭こと。
はぐさ　【漁蜻蛉】（春）蜻蛉の一種。
國蜻の翅羽ふくらめし蜻蛉かな
見月。
はぐさ　【蜻蛉矢】（春）はまゆふ實。
はぐさ　【蜻蛉】國を蜻蛉にせしも詞。
はぐさ　【漁夫綿花】（秋）漁達に生ず

の。

はんかせん【半歌仙】連句の一躰。歌仙の初折十八句のみを以て一卷とするもの。

はんかせ【番鍛冶】古へ諸國より京都へ勤番したる鍛冶。後鳥羽院の時より始まる。

はんかつは【半合羽】丈の短き合羽。享保頃流行せしもの。

はんきう【半弓】揚弓の類。其長さ大弓の半なるもの。

はんきかう【萬鬼行】(雲)支那の古俗に、三伏の日は鬼出るとて、終日門戸を閉ぢ、或は湯餅を作りて辟鬼するといふ。

はんきり【半桶】淺き桶をいふ。

はんくわい【樊噲】漢高祖の臣。勇武比なし。鴻門の會に沛公を救ひし故事有名なり。

はんくわいさう【樊噲草】(雲)草の名。高さ一二尺、葉は七切の叉あり、夏の頃、莖端に小白花を開く、やゝ菊花に似たり。

(樊噲草)

はんくわん【判官】はうぐわん。

はんけい【盤珪】播州龍野の人。幼にして京に遊び、密敦を松山寺に從ひて禪を修め、永琢後、備前の朴翁に從ひて禪を修め、永琢といふ。時に明僧超元、長崎に來り天下の禪僧之に集る。然れども超元の問に答ふるもの無し、盤珪よく答ふ。後、播州網乾の龍門寺に居り、又、江戸に來りて本所に天祥寺を開く。元祿六年寂す、禪師說を賜はる。

はんげさう【半夏草】(雲)藥草。春、舊根より數莖を生じ、莖頭に三葉を着く、形ヤモダカの葉に似たり。五六月頃別に莖を出して筒狀の花を開く。天南星の花に似て、瓣の外面は綠色、內面は紫黑色なる帶ぶ。葉は直立して鼠の尾の如し。根を藥用とす。

はんげしやう【半夏生】(雲)夏至より十一日に當る日。(新暦七月二日頃にして、半夏草の若根の生ずる時なれば名くといふ)。農家此日を以て田植の限とす。‖守田。國竹の子に笠きせやらん半夏生　蕉太。

はんどんかう【反魂香】漢の武帝、李夫人の死後、其姿を見んとて香を燒きしに烟の中に其姿顯はれしといふ故事。轉じて死者の面影を烟の中に見するといふ想像の香の名。

はんどやき【萬古燒】伊勢國朝明郡小向村より出す陶器。多く手づくれにて澁くして堅く、茶碗、急須などに作り、專に萬古の二字を刻む。

はんない【晩歲】(冬)年の暮。

はんないらく【萬歲樂】雅樂の曲名。

はんなし【答剌】はすさし。

はんしう【晩秋】(秋)九月の異名。又暮秋ともいふ。

はんしまてう【盤涉調】樂曲の律名。

はんじや【判者】句合の判をする人。

はんじやう【番匠】大工のこと。

はんしやうぐん【萬將軍】弘安四年、蒙古襲來のとき、元軍のうち生還せし三人の一。

はんじやうまつり【繁昌祭】(秋)ハンヂョ祭に仝じ。

はんしゆん【晩春】(暮)三月の異名。暮の春。

はんしり【半尻】古へ童の服。狩衣の裾短きものに似たり。

はんすらく【萬春樂】(雲)謠歌(カウ)に謠ふ說詞。

はんせつ【反切】漢字の二字を約節して一音となす法。

はんせつこゑなし【反舌無聲】(雲)二十四氣の一、反舌は蝦蟇なりといふ。

はんせふじよ【班婕妤】班女(ハンヨ)を見よ。

はんせん【番船】(秋)番綿。

はんせんのたはむれ【半仙戲】(暮)ふらこ。

はんそう【伴僧】葬式に行列する供僧。

はんた【反】あんだに同じ。

はんた【番太】ばんたらう。

はんたいさん【磐梯山】岩代耶摩郡にある噴火山。

はんたいふぎし【半太夫節】江戸半太夫の始めたる俗曲。眞享元祿頃多く流行し、芝居などに用ゐらる。

はんたう【牛道】潘籍役の俳優をいふ。

はんたらう【番太郎】昔、市中に辻木戸を立て自身番を設けし時、其番所に置きし留守居の稱。多く田舍人にて、間に草鞋など賣りし故、後には荒物商人を番太郎と呼ぶに至る。

はんたわん【半田椀】阿波美馬郡半田村より出づる塗椀。

はんたよ【斑女】漢成帝の愛姬。名を婕妤と云ふ。詩を能くす。寵衰へて後、扇に閨怨の詩を書て奉りしといふ。又、この事を骨子として吉田の少將の契りし花子といふ女、形見の扇を身に離さで狂ひ出で終にめぐり合ふことを作りし謠曲。

はんだよまつり【藥利女祭】(秋)九月廿日、京都高辻北、室町西の藥利才女社(辨才天を祀るといふ。針才女とも書き、轉訛してハンヂョ、又、誤りて繫昌社といふ)の例祭。國町役に夜出るはんじよ祭哉　普求。

はんたう【晩冬】(冬)十二月の異名。

はんたらう【坂東太郎】下總利根川の別稱。

はんだ【番島】雁の田畑にて養るとき、他の雁四方を警戒するものなりといふ。‖雁奴。

はんなり【埴破】舞樂の名。四人にて玉を弄ふ狀をなし舞ふ。

はんなりと【暖】はつきりと。あきらかに。

はんにやはらう【般若經】佛教の經文。法相、華嚴、三論等の宗とするもの。

はんにやはらもんじゆゑ【般若寺文殊會】(暮)三月廿五日、大和國奈良般若寺にて修する會式。

はんのき【榛】ほしばみの條參照。

はんのたらう【番太郎】藝人などの多人數の頭立ちし者。

はんば【番場】近江坂田郡の驛。

はんび【半臂】衣冠束帶の時袍の下に着るもの。兩袖なき短き衣。

はんぶね【番船】(秋)番綿。

はんぬら【斑猫】(雲)形てんとう虫に似て翅の上に綠色の線あり、多く葛、豆の葉に集り、惡臭を帶び大毒あり。其眩を紡細して毒藥を製す。‖斑蝥。國斑猫の一つ離れぬ茶店哉　青々。

(斑猫)

はんぬんびでん【半面美人】其角が用ゐたる俳諧の點式の印。

はんもつく(雲)つりどこ。

はんや【蘿摩】(雲)かがいも。

はんりやう【晩涼】(雲)夕涼み。

はんれい【范蠡】越王勾踐の臣。勾踐と共に會稽山に難り、智略を廻らして終に吳を亡ぼす。後、王の愛姬西施を伴ひ五湖に泛び、鄉に歸て陶朱公と呼び、富

を爲すといふ。

はんわた【番綿】(秋) 古へ、京阪地方の綿商より、秋の新綿を江戸に運送する船を一番船、二番船、三番船と稱し、其運速を爭ひ、以て損益を定む。此船を番船といふ。‖早綿。○追綿。 **圖** 十二演番船出るはやし哉　月鬼。

はんをまくら【盤枕】古俗に、戀しき人を夢に見んと思ふ時、雙六盤を枕にし、衣を返して妙童菩薩を念ずること。

はも【鱧】畿内の海に產する魚。鰻に似て大く、長さ三四尺、灰色にて腹白く嘴長く尖り、齒多く肉中に骨多し。蒲鉾に造れば上品なり。‖ハム。海鰻。(水體の條參照)

はもも【葉餅】木の葉に餅を包みしもの。

はもり【羽盛】鳥の肉を燒き、其羽、頭、足などを飛べる時の如く皿に盛り添へしもの。

はもりのかみ【葉守神】樹木を守る神といふ。連俳にて神祇にあらず雜とす。

はや【甲矢】一手に二本持ちたる矢のうち、第一に射る矢をいふ。

はや【鯊】(春) 柳ハエ。

はやうた【早歌】(冬) 神樂歌の小前張の曲の名。

はやうも【早竹】馬、罵などにて急使を出すこと。

はやうり【早瓜】(夏) さうり。

はやうるし【早漆】能狂言の名。

はやく【舊】昔といふに同じ。遠かの意に非す。

はやさきのうめ【早咲梅】(冬) 年の暮より咲出る梅。‖早梅。

はやざきのつばき【早咲椿】(冬) 冬のころより咲出る椿。 **圖** 樫の木の中に早咲椿　かな　百紙。

はやしのかね【林鐘】(夏) 六月の異名。

はやずし【早鮨】(夏) 一夜鮨の類のなるゝこと早きものをいふ。 **圖** 早鮨に王思ほ飯をあふさけり　召波。

はやと【隼人】はいと。

はやなぎ【葉柳】(夏) 葉の繁りたる柳。‖夏柳。 **圖** 葉柳の寺町過る雨夜哉　白雄。

はやなり【逸勢】橘氏、嵯峨帝の時、能書を以て聞え本朝三筆の一人と稱せらる。入唐して橘秀才の堅譽を博す。

はやひと【隼人】はいと。

はやひとぐさ【旋花】(夏) ヒルガホの異名。

はやぶさ【隼】(冬) 鷹の一種、鷹よりも小く、背蒼黑に腹部灰白にして赤みあり、腹背に斑文あり。足短くして能く鵰、雁、鷺等を捕る。峰を擧さし雄を鵰とす。

はやぶさ【端山】山の麓に近き所を云ふ。

はやわた【早綿】(秋) 番綿(ワキ)の最も早く着きたるもの。

はやを【早緒】舟の櫓に付る繩。

はやを【駿馬】はいま。

はら【原】東海道駿河の宿驛。

ばら【薔薇】(夏) 茨(ライチ)の花を見よ。

はらあて【腹當】(夏) 白布などにて胸腹部を被ふやう作りしもの。夏、小兒に多く着す。‖腹掛。 **圖** 腹掛は母の歎の廢衣哉　湖十。

はらうじん【波浪神】航海の時、波を除くる神なりといふ。船首などに彫る。

はらかけ【腹掛】(夏) 腹あて。

はらかのうを【腹赤魚】

(腹赤魚)

(春) 腹赤魚に筑紫より奉る魚の名。鱈に似てやゝ異りといふ。‖鱈。

はらかのうを【腹赤魚】(春) 元日の節會に、腹赤魚を筑紫より奉り、宮内省大膳司之を奏し、腹赤の喰樣(クヒタ)として御膳に供へ奉る式。‖腹赤の贄。 **圖** 筑紫ぶり腹赤の奏ときくからに　青々。

はらかのにへ【腹赤贄】(春) 腹赤の奏。

はらたてず【腹不立】能狂言の名。

はらひぐさ【祓草】(夏) 形代をいふ。麻の葉流すを見よ。

はらへつき【祓月】(春) 三月の異名。

はらだら【腹斑】(秋) 雁の一種。目の緣黃にて、腹部に斑文あるもの。

はらみく【孕句】詩歌俳句などを讃め考案し置きたるもの。又、連俳にて、讃め考へ置きたる句の、未だ附句として出すべき機なくして出さざるもの。猿蓑集に出し、芭蕉の「浮世の果は皆小町なり」の如きは孕句の例として傳へらる。

はらみじか【孕鹿】(春) 鹿は秋季交尾して夏產見す。故に春を産期とす。 **圖** 戸に倚て人に親しや孕鹿　寸砂。

はらみすずめ【孕雀】(春) 二三月の頃、雀多く孕みて產卵するをいふ。 **圖** ちうたげに巢籠る孕雀かな　菊男。

はらみつ【波羅密】佛教に、生死を此岸とし、涅槃を彼岸とし、此岸より彼岸に至らしむるをいふ。

はらん【葉蘭】(夏) 庭際などに植ゑ、又活花として賞する草。葉は常綠にして長二三尺、巾三四寸、一根一葉にして叢生す。初夏、七瓣の薄紫の花を開く。

ばらもん【婆羅門】天竺の四姓の最上級に位する族。又、其宗門の名。

はらわた【腸】魚の卵の胞に包まれしもの。碎け散ること。

はらわた【腸】(秋) 鮭の腸をいふ。數百粒一胞を成し紅黃にして赤點あり。鹽漬等にして食ふ。‖筋子。 **圖** はららごを千々に碎くや后の月　其角。

はりかた【張型】鎧甲にて男の陰具を作り、女子の色情を洩すに用ゐる具。‖をはせがた。

はりくやう【針供養】(春) 江戸の俗、二月八日の事納に婦女等、縫針の折たるを集め、其日絲針の柴を伐ること。

はりせんぼう【針千本】(冬) ハリセンボン。

はりせんぼん【針千本】(冬) 河豚の類、北國の海に產し、長さ四五寸、形鼠に似て球の如く、背黑く腹白くして、全身白き刺あり、十一月八日の頃、越前の浦に多く寄るといふ。‖魚虎。ハリフグ。 **圖** 鉤にかゝる針千本の怒かな　塵山。

はりた【墾田】新に開墾せし田地。

はりたけ【針茸】(秋) 菌の名。鼠茸に似て長さ二寸ほど、菱無く灰白色にして毛刺あり。平地に叢生す。 **圖** 針茸や山の猟ゐふ苔衣　四崖。

はりたて【張鉾】能狂言の名。

はりたてかみなり【針立雷】能狂言の名。

はりぢの【張殿】宮中などにて裝束を張置くところ。

はりのみ【榛實】(秋) 榛(ハシバミ)の實をいふ。樹は山中に生じ、高さ一二丈、葉は楢に似て柔く、花は栗の杉の如く褐色なり。秋實を結ぶ。杉の實に似たり。‖赤楊。榿。

はりふぐ【針籠】(冬) 針千本。

ばりん【馬鬣】(夏) 庭園などに植うる草、春の末、宿根より叢生し、一二尺にてアヤメの如く、質固くれぢれたり。初夏に薄紫色の六瓣の花を開き、後莢を結び實を生ず。麻の實に似て稜あり。根細長く黃色なり。(一說に春季とす)。‖ネザアヤメ。バラン。馬棟。 **圖** 夜べ

はるのあさぼらけ　春の明方。

はるのあめ【春雨】（春）春の雨。

はるのゆき【春雪】（春）春さめに。

はるのりて【春去り来】（春）同上。

はるまちて【春去り来】（春）春しあれば。

はるまつる【春待つ】（春）春の春に同じ。　國春待つ人は春の如き家なるべし。

はるまつる【春待つ】（春）つ春の春に待つ。

はるみち【春道】（春）春の道。

はるみち【春路】（春）春の道。

はるみち【春路】（春）春の道。

はるみち【春路

はるのはへ【春蠅】(春) 春の頃より出る蠅。

はるのひ【春日】(春) 春の日光の和暖なるをいふ。＝はるび。春日影。 國 殷すでし田雲に春の日影かな 闕更。

はるのひ【春日】(春) 春日の氣候温和にして長きこと。 國 機上の扇かゞやく春日哉。

はるのひ【春日】 俳諧七部集の一。貞享二年の作。

はるのひがさ【春日傘】(春) 春の日に用ゐる日傘。 國 春日傘竹か隔てゝ通りけり 宵々。

はるのほだし【春紆】(春) 霞の異名。

はるのみぞれ【春霙】(春) 春降る霙をいふ。 國 人戀し春の霙の桐火桶 奇淵。

はるのみづ【春水】(春) 春季、氷雪解け春雨降りなぞして水の多きをいふ。 國 蛇を追ふ鱒のおもひや春の水 蕪村。

はるのみなと【春湊】(春) 暮の春をいふ。湊は河川の海に入る界なれば、春盡きて夏に入らんとするに比す。一說に春の集り盡きたるを湊に船の集るにたとふと。

はるのみや【春宮】(春) 東宮ともいふ。皇太子のこと。古へ遠俳には春季とす。

はるのやま【春山】(春) 山笑ふを見よ。 國 春の山後ろにありて田に映る 以足。

はるのやみ【春闇】(春) 春の夜の闇をいふ。 國 はや二日昔の雨か春の闇 來山。

はるのゆき【春雪】(春) あわゆき。

はるのゆふ【春夕】(春) ＝春ゆふべ。春の暮。 國 春の夕たえなんとする香なつぐ 蕪村。

はるのよ【春夜】(春) ＝夜半の春。 國 春の夜の音となりけり桶の鯖 奇淵。

はるのよは【春夜半】(春) 春の夜。 國 春の夜半清女の局たゝきけり 几董。

はるのよひ【春宵】(春) ＝宵の春。 國 肘白さ僧のかりれや宵の春 蕪村。

はるのらい【春雷】(春) 初雷。＝春雷。

はるのわかれ【春別】(春) 暮の春。 國 むら肝な定めん春の別かな 保吉。

はるばしよ【春場所】(春) 一月場所。

はるひかげ【春日影】(春) 春の日。

はるふかし【春深】(春) 春の闌けたること。

はるべ【春邊】(春) 春の頃、春さきなどいふ意。 國 鳥さしも二人連立つはるべ哉 成美。

はるまちづき【春正】 山本氏、明歷頃の有名の蒔繪師にて、兼て木下長嘯門の歌人なり。古今類句を著す。

はるまちつき【春待月】(冬) 十二月の異名。

はるまち【春待】(冬) 年の暮、春の近づくを待つ意。＝正月待つ。○春近し。春隣る。春急ぐ。 國 灯火の花に春待庵かな 鬼貫。

はるめく【春】(春) 春らしきこと。＝春の色。

はるゆふべ【春夕】(春) 春の夕。

はるをおくる【春送】(春) 暮の春。 國 鳶に乘つて春を送るに白雲や 其角。

はるをしみつき【春惜月】(春) 三月の異名。

はるをしむ【春惜】(春) 春の終るを惜むこと。 國 春惜む人や落花を行戻り 召波。

はれん【馬槌】 板木を撞くに用ゐる器。竹皮にて作り、古は馬鬣の根にて作る。

はんえん【馬援】 後漢の臣。正直にして屢外夷を討ち、世に伏波將軍と稱せらる。

はんえん【馬遠】 宋の光寧の時の畫家、四大家の一人。

はんやま【帆山】 草木の生ぶし山。

ひ

ひ【氷】(冬) こほり。

ひ【梭】 機織の具。竪糸を卷きたる管を入れ、横糸の間をくゞらせて布の端へ通はすもの。

ひ【鐵】 とび。

ひあうぎう【未央宮】 漢の高祖の七年、蕭何に命じて作らしめし宮殿の名。

ひあうやなぎ【未央柳】(夏) 高さ二三尺の灌木、葉柳に似て、梅雨の頃、黃花を開く、形桃花の如くにて莖長し。＝金糸桃。美容柳。 國 柔長し未央柳のちりのこり 桃紙。

ひあふぎ【檜扇】 檜の薄き板にて編みし扇、古へ公卿、殿上人、官女等の持ちしもの。

ひあふぎ【檜扇】(夏) 古名からすあふぎ、草の名、其葉相並びて檜扇を開きたる如きを以て名く。夏の末、葉の中心に一莖を抽て、梢に六瓣の黃赤色に紫斑ある花を開く。＝烏扇。射干。 國 射干は隱るゝ雉子のかざしかな 希因。

ひいな【雛】(春) ひな。

ひいれ【火入】 煙草盆などの火を盛る器。

ひうがあふひ【日向葵】(夏) カラ葵。

ひうちばこ【火打箱】 火打石、火打金を入るゝ小箱。

ひうちぶくろ【燧袋】 火打金と火打石とを入れたる袋。腰などに提げて携ふ。

ひうん【飛雲】 山伏が天狗を所り伏す筋の謠曲。

ひうを【氷魚】(冬) ヒヲを見よ。 國 乾鮭の切身に隣る氷魚かな 露石。

ひえ【稗】(秋) 穀類。水陸何れの田にも蒔く、穗は粟の如く、實は黍の如くにして、秋收穫す。＝穆。 國 引捨し稗穗に出る徑哉 丁水。

ひえいさん【比叡山】 山城近江に跨る山。延曆寺といふ天台の大刹あり。＝日枝。天台山。都の富士。

ひえいさんらいはいかう【比叡山禮拜講】(春) 禮拜講。

ひえだのあれ【稗田阿礼】 天武帝の時の人。天細女命の後裔にして、性强記、よく古老の口碑を暗じ、和銅四年七十五歲の時、太安麿に口述し古事記を編せり。

ひえどり【鵯】(秋) ヒヨドリの古名。

ひえのりんじさつり【日吉臨時祭】(冬) 十一月中申日、朝廷より比叡山の日吉明神に祭使を立てらる式。順德帝の建曆三年、延曆寺の衆徒亂を起し官兵に誅せられしより、神慮を宥めんと臨時祭を行ひ始むと。

ひえまき【稗蒔】(夏) 江戸にて、五六月の頃、炮烙ほどの土鉢に稗を蒔きて、小さき苗の出たるに、案山子の形、土製の鷺などを置きたるものを作り弄ぶ。之を荷ひて市中を賣り歩くものを稗蒔賣といふ。 國 稗蒔に八ッ橋かけし目高かな 文牛。

ひえまく【稗蒔】(夏) 稗を蒔くこと。五六月の頃、時を定めて蒔く。 國 人の子か末の男か田稗まく 靜雨。

ひえまつり【日枝祭】(夏) 山王祭。

ひえん【飛簷】 殿堂の軒先四隅曲りて、鳥の翅の形をなしたるをいふ。

ひえん【飛燕】 趙飛燕を見よ。

ひえをはたも【比叡二十】 伊勢物語に、富士の山は比叡山を二十ばかり重ねあげたらむ程して、形は鹽尻の如しとあるより富士山を二十山といふ。

ひかう【披講】 歌或は俳諧の會席に詠草を讀上げること。

ひがき【檜垣】 薄き檜板にて網代に編みし垣。

ひかき【檜垣】 後撰集に出でし檜垣の嫗が歌に由りて其事蹟を作りし謠曲。

ひかきのたゆな【檜垣嫗】 中古、筑前太宰府にありし遊女。老いて後、筑紫白川に住

か、「うは王の我蔭葉も白河の水はぐむ後撰集に入れり。」と詠ず。其歌は後撰集に入れり。

ひかげかづら【日陰蔓】（冬）日陰の蔓。

ひかげかづら【日陰蔓】（冬）日陰の蔓。ノリてて生ずる苔。夏深山の巨木などに、木の如し。＝ひかげ。女蘿。

ひかげぐさ【日陰草】（夏）賀茂祭。

ひかげのいと【日陰糸】（冬）日陰の蔓。

ひかげのかづら【日陰蔓】（冬）新嘗祭、大嘗、豊明節会等の伴奏に、白青の糸縒に、女蘿（ヒカゲ）に雙し作りたるもの。心葉（ココロバ）と共に冠に垂くること。（古は其の女蘿を用ゐる）＝ひかげの糸。圖かげら　椎けの舟。

ひかさ【日傘】（夏）夏、日光を避くるに用ゐる傘。紙にて作りしもの、雨傘の用の如く、油を布かず、多く婦人を出す。又、布にて作りしものあり。＝ヒガサ。笠。圖　蓋なり。てて入れ板を下ろす日傘等。

ひかしをもん【東左衛門】大阪、島の内にて田舎人を呼ぶ異語。

ひがしをみえ【東近江】近江國愛知郡以東の地を指して云ふ語。

ひがしさんじゅうさんげんどう【東三條御堂】（冬）古く十一月、京都東三條にありし藤原氏の邸の、角堂御堂外一社に、宮中より御堂を奉ること。

ひがしやま【東山】京都の東南、如意嶽に連なる一帯の山の稱。

ひがしやまどの【東山殿】足利四代將軍義政の一ニ。京東山に慈照寺を興し、寺号を以て名あり。

ひがしやまやすがわ【東山安井祭】（秋）八月廿六日、京都東山真葛住院（浴博礎寺）に、崇德帝の御忌を修する一ニ。崇德院、始め東山安井に殿舎を作り、后妃を給へ給ふ、其後二年、讒侵にて崩じ給へり。後之を寺となすこと。＝崇德帝御忌。圖　ツバメも來て鳴く安井祭り　巨立。

ひかた【干潟】沙の干たる港。

ひかた【筑川】出雲國の大川。仁多郡鳥上滝より出で宍道湖に入る。

ひかたまつり【氷川祭】（夏）六月十五日、江戸赤坂氷川神社（素盞嗚尊大己貴命外數柱を配る）の祭禮。

ひかりぎ【火炬】赤炬なること。

ひかんべ【火舎】（夏）住吉の御社。

ひがんえ【彼岸会】（春）二月十三日、四月の彼岸、氷上神社の祭禮。一説に、國吉郡節原、氷上神社の祭禮。年毎に此を、是頃ること、いひ傳ふ。今は祭禮えたり。

ひがんあ【彼岸入】四月に入ること。

ひがんあ【彼岸入】（春）彼岸に入ること。國　漁家として江村の港七分ばかり　蕪村。

ひかん【比干】殷の紂王の庶父。紂王の無道を諫め三日に亡て去らざりし、紂王大に怒り、「聖人の心に七竅あり」と、剖て其心を見しこと。

ひかん【彼岸】佛說に生死を此岸とし、涅槃を彼岸とし、煩惱を中流とし、法華經を舟に喩へ彼岸とす、不生不滅を云ふなり。轉じて春秋の彼岸に法會をなすこと。

ひがん【彼岸】（春）春分、秋分の日を中日とし、其前後を三日、合て七日間を云ふ。（なほ前條參照）（氷は後の彼岸と云ふ）○中正。彼岸會。茶の子。彼岸に草餅。彼岸牡丹餅。彼岸團子。又、彼岸茶を行ふ。圖　病葉節も黒ん貫ふ彼岸かな　蕪村。

ひがんぞうり【彼岸草履】（春）彼岸團子を見よ。

ひがんぞうり【彼岸草履】（春）彼岸の頃開く一重櫻をいふ。淡紅にして花小なり。圖　朝の雛彼岸櫻のちらりにけり　調雅。

ひがんだんご【彼岸團子】（春）彼岸に草餅、團子、牡丹餅などを家毎に作り、佛に供へ、又は贈答すること。

ひがんだのう【彼岸大師】（春）彼岸の入の日をいふ。此日雨ふれば、其年の稻の實りよしこと。農家、又、此日の晴雨にて彼岸中の天候を卜す。

ひがんばな【彼岸花】（秋）マンジュサゲ。

ひがんぼたもち【彼岸牡丹餅】（春）彼岸團子を見よ。

ひがんまえ【彼岸會】（春）彼岸の日、各、佛事を修し、七寶に供養し、諸寺に詣づること。此日を家、茶の子、牡丹餅に等を製して供へ、又知音に贈答す。圖　乞食の法師した彼岸哉　吾仲。

ひがの【日金】（夏）四十雀に似て小く頭脊尾灰赤色、頬の邊黑白相雜り、翅黑共赤黑、秋來鳴り、春去る。圖　日雀なく東近江や山畑の千可。

ひがのかき【日金】（夏）ひがの。

ひかるぎみ【光君】光源氏にあたる。

ひかるけんじ【光源氏】源氏物語中の人物。源氏の君といふ。＝光君。

ひき【蟇】（夏）ひきがへる。

ひきいた【引板】（秋）ひた。

ひきいた【引板】（夏）乾板。

ひきうま【引馬】儀式などの飾りに引き出す馬のこと。

ひきぶね【引船】ひきぶねのこと。

ひきがえる【蟇】（夏）ヒキ。蛙の一種、形大きく、性鈍にして行くこと遲く、渋又は床下などに棲み、夜出でて、蚊又は諸虫を食ふ。＝蟾蜍。○灯蛾。圖　灯せばあちらこちら向きけり蟇　松瓶子。

ひきがも【引鴨】（春）鴨の頃、春分の頃より北地に返るをいふ。（引鶴（ヒキヅル）を見よ）圖　引かれて家鴨になる小田の鴨　遠麦。

ひきさい【引菜】膳部に並べ置くみにて味はひ副食物。龍入の魚鳥などを用ゐる。＝引物。

ひきしめがみ【引裂紙】紙を細く引き裂きしもの。

ひきずりもち【引摺餅】（冬）實餅の南人、白、粳を搗き荷ひ、依頼された家に到り、餅をつくこと。

ひきぞめ【弾初】（春）正月、琴、琵琶、三絃、胡琴の類の弾き初めをなすこと。圖　弾初や三軒の酒屋の夫婦數　蕪村。

ひきた【引板】（秋）ひた。

ひきちゃ【行茶】（春）手加清經（ヒキツケド）を見よ。

ひきづる【引鶴】（春）鶴の歸、春分の頃より北地に向ひ返るをいふ。（引は引去）圖　引鶴の聲はるかなる朝日かな　闌更。

ひきでもの【引出物】祝宴、饗應などのときの贈物。

ひきにえづる【引殺鶴】（春）引鶴（ヒキヅル）の尚殺りて三月頃まであるをいふ。圖　引殺る鶴や所作なき磯歩行　黄雪。

ひきはだ【蒔肌】鎗鞘の如き鞘ある事。道の中差などの刀の鞘を覆ふに用ゐるもの。＝鞘。

ひきふね【引舟】京、浪華の遊廓にて丈夫に附添ふ女。

ひきぼし【曳干】海藻を干したるもの。

ひきめ【匹殿】祝ひ物などに用ゐる昆布の切方。昆布を兩端より卷きて、卷布の小口の二つ並びしやうに切ること。

ひきやど【引屋宅】刺りたる屋、又は清き屋の上に藁にて葺くこと。

ひまめ【毒目】鏃矢をいふ。其條參照。

ひまやし【引板】（春）鳥おどしをいひ。

ひまやしぶね【飛脚船】飛脚の便に用ゐる船。時日を定めて出帆するものの。

ひまり【抓朔】（秋）たうきりの。

ひまわけのこま【風分駒】（秋）風駒。

ひまわけのこまゐ【引分毛】（秋）駒毛(ニマ)。

ひみ【比丘】僧侶を呼たる尊称をいふ。

ひみ【春】魚を入れて煮こる竹籠。

ひみだ【比丘貫】能狂言の名。

ひみどり【引鳥】（春）鳥歸るに全じ。

ひみに【比丘尼】僧侶を呼たる女尊。

ひみにやつ【比丘尼雪駄】尻の反りゥくりて圓のゥくるゥやゥ作りたる雪駄。

ひみにをね【比丘尼舟】動化の尊尼、山伏などを乘せる船。＝動化船。

ひみなかま【引山】古く京にて醫師會の時、出日を住例として年貢を持來る他國人に、振舞酒を出す例あり。約こに醫家人牛に乘て始も山鉾の巡るを以て、ソ山鉾が出て始も巡見よりて、其だ混雜すれども、後に酒の巡見の引の山ゴ云て多忙る醫師ゴす。

ひみのとり【火時鳥】熱帯地方に產する鳩の一種の名。

ひみのの【引馬野】遠州三方原の古稱。

ひみのの【美濃】美濃國の古名。國人になるべき人の、未だ其列に出たる時に、殿中の雜役たらすもの。

ひみのも【蜩】（秋）蟬の一種。大きさ五六分、林に淡褐、淺黑相交りて綺麗あり。羽に多く黑き斑に、雲紋ある高し。其聲に「ヒグラシ夕ヒグラシ」と呼ぶ。＝其聲。〔異名〕うつり　鳴蟬。　國蟬や明るき方へ鳴蟬。

ひみのしまを【日御里】武藏北豐島郡に在り。谷中の北にして櫻花に名あり。

ひみをま【日市】（夏）ヒマワリ。

ひみをもやをほし【日御道通】事貫切迫して眼りに急ぐを言ふ。

ひめ【姫】（春）所屬官の意にて、正たらざる官位に非ざる義。古く、官の下に置せられるゾ淡司の稱。

ひめ【姫蕨】（春）蕨の異名。

ひめきり【姫切】藤丸と共に源氏系代の寶刀の名。左切丸ともいふ。平家物語劇の卷に出づ。

ひめすぐる【姫袋】（冬）長髮の人を刺記を入れて耳より吊り置く袋。

ひめ【姫】細く裂きたる竹。籠を編むに用ゐるもの。

ひめ【樣】枝より更に出たる枝。

ひめ【姫山】豐前筑前の國境に出たる山。

ひめいさんけんぐつ【姫山權現祭】（春）二月十五日、豐前國姫山權現社（前條參照）の祭禮、近國より參詣多し。

ひめこの【姫大根】（春）蕾の美の異稱。九州の方言。

ひめは【姫椿】近江國大上郡に在る町。井伊氏の初城下。

ひめまつ【曾根松生】（春）役りたる樹の樣より生ずる芽。＝ヤカバエ。譬（古く雜のじく非季ゴ云ひ役ゴ）。又、木の芽なゴ云ひ役ゴ。

ひめ【姫】（秋）秋牛の和名。

ひめ【姫】（春）春牛の異名。

ひめ【姫】（夏）夏の異、日光の强ゴ。　國日盛や蔭になる蔭の尻の雲。

ひめ【樣】（秋）樹の名、樣の類、枝葉共に動生し、葉は稍に似て大なる花。夏蕾をなして小花を開く、切葉の花に似て淡黃に紫點あり。後、實を結ぶ。其實ゴ尺餘、サ、ゾに似た花水サ、ゾゴ云ふ。○淡樣。　國淡の家に秋高くやゴ樣　蘇州。

ひめのはな【樣花】（夏）樣を見よ。

ひめのはなたに【樣菜畝】（秋）古く支那の俗に、立秋の日、婦女兒童、樣を剪りて之を祭す。ゴ云。　國畝いて菜を我も秋知る樣かな　立圃。

ひめもみぢ【樣紅葉】（秋）秋、樣の葉の紅葉するを言ふ。

ひめやこ【姫櫻】（春）櫻の一種、花蕚共に淡紅にして開けば淡紅なるもの。　國足もなき夜を綿櫻の盛哉　蕉門。

ひめ【姫】酒を盛りて注ぐ器。銚子に同じ。

ひめ【籾】（冬）神樂歌の採物の曲名。

ひめ【姫】元祿三年、大坂の參頭の書によりて編ゥし、蕉翁の連句集。七部集の一。

ひめこばな【姫花】（夏）ふゥゾの花。

ひめ【姫笠】三尺四方ほゴの淺笠の稱。

ひめ【姫拍子】鼓を打ちて拍子をゴ云ふこと。

ひめ【姫丸】源頼光の所持せし名刀。後に土蜘蛛を切りて蜘蛛切ゴ名くゴ云ふ。

ひめ【水面】あらに。ゥ。

ひめ【姫御前】物を常ひ愛る女。又、町家の下女をいふ稱。

ひめ【人居】伊勢一志郡の市街。藤堂氏の西洋清地。

ひも【蔓】（夏）ひしのはな。

ひも【蔓】兩鼓の腹に長柄をつけしもの。剣又の類。

ひも【非時】僧家にて、午後の食事をいふ。

ひも【彦手】殷封王の庶兄。賢にして數々、封王を諫めしゴ云ふ。

ひも【彦手】支那春秋時代、衛の襄公の寵臣。母にて母の病を聞き、君命に奉じて出づ。衛國法の法に君命に奉ずるものは刖罪に所せらるゾを、彦手知て之を賞賛ゴし、母の爲に其刖罪を忘れたるは孝なりゴ賞す。又、一日、君ゴ果園に遊び桃を喰ひしが、其味美なるを以て君に捧しむ。襄公其愛其ゴ情を感じ桃の半を以て君に捧げし後、君命に奉ずゴ此二事を以て不敬を責られしゴ云ふ。

ひも【彦丸】源頼光の所持せし名刀。後に土蜘蛛を切りて蜘蛛切ゴ名くゴ云ふ。

ひも【風尾藻】（春）古名ヒメキモ。海中の石上に生ずる二三寸の褐藻ゴ海藻。採りて食用ゴす。煮れば黏くなりて味淡し。＝辛藻ゴ。　國舟橋の夜に入るゾひにきゥな。

ひも【鴻】（秋）大雁（ガリ）ゴ云ふ。雁の大なるもの。羽毛も雁ゴ異り、翅、淡黑褐にして、翅黑く腹白し。頭に垂り好ゥで菱の實を食ふ。＝菱鴈。　國洲の列を別ゴ幻時雁かな　米翁。

ひも【蔓】（秋）蔓菁（蕪の小なるもの）の異稱。俳諧にては又、蔓菁の略稱。　國菜の蔓に飽つや蔓菁　大江丸。

ひもいもし【蔓菁】（秋）小蕪に同じ。

ひもいもり【蔓菁】（秋）小蕪の二三寸なるを採りて、一升に鹽三合の割合にて和し、若子、生薑、蓼等を交へ、石を以て壓に押漬したるもの。＝ひもいも。　國酒飲の生ゥゾやひもいも漬　夏風。

ひもうまつり【蔓火祭】（夏）（冬）六月晦日、十二月晦日の兩度、宮中にて迦具土神（カグツチ）を祭り、防火の祈をなすゴ云ゴ。＝はしりのまつり。

ひもかはのべ【姫川吉兵衛】俳諧（ハイカイ）を見よ。

ひもこ【風尾藻】（春）古名ヒメキモ。海中の石上に生ずる二三寸の褐藻ゴ海藻。採れば黏くなりて味淡し。＝辛藻ゴ。　國舟橋の夜に入るゾひにきゥな。

ひもこ【鴻】（秋）大雁（ガリ）ゴ云ふ。雁の大なるもの。羽毛も雁ゴ異り、翅、淡黑褐にして、翅黑く腹白し。頭に垂り好ゥで菱の實を食ふ。＝菱鴈。　國洲の列を別ゴ幻時雁かな　米翁。

ひもこ【蔓】（秋）蔓菁（蕪の小なるもの）の異稱。俳諧にては又、蔓菁の略稱。　國菜の蔓に飽つや蔓菁　大江丸。

ひもこいもし【蔓菁】（秋）小蕪に同じ。

ひもこいもり【蔓菁】（秋）小蕪の二三寸なるを採りて、一升に鹽三合の割合にて和し、若子、生薑、蓼等を交へ、石を以て壓に押漬したるもの。＝ひもいも。　國酒飲の生ゥゾやひもいも漬　夏風。

ひもうまつり【蔓火祭】（夏）（冬）六月晦日、十二月晦日の兩度、宮中にて迦具土神（カグツチ）を祭り、防火の祈をなすゴ云ゴ。＝はしりのまつり。

ひしも【菱採】（秋）八月、菱の實を採り蒸して菱こ（ヒシ）にしてもぐ。之を菱採（ヒシ）こいふ。國 近江琵琶湖の池や菱を採る　南部。

ひしのはな【菱花】（夏）水草、根は水底にあり、葉は水面に叢生す。葉は菱の形平たく、中央の切れ目の羽に似たり、葉は菱の形平たく、中央の切れ目の羽に似たり、葉は菱の形にて柄の股たき、秋實を結ぶ、形圓角又は三四角、堅く刺り、熟すれば黑色となる。花は白くして菱の花　可明。

ひしのはなぎぼうし【菱語鷺】（春）左春眞の式の絲りに其火にて鮒を焼くこと。

ひしば（秋）スマフ。

ひしば【菱炭】菱の實殼を焼きて作りし炭。香爐などに用ゐるもの。

ひしぼうす【菱漬】（夏）鮒に大豆を交ぜ、日鹽を加へ米で貯へ置くを謂こいふ。夏日、多くこれを作り、瓜蔬を漬けナメモノこす。

ひじんぎう【美人草】（夏）ひなげし。

ひじんぎう【美人草】（夏）曝地に產する草。形芭蕉に似て小く、夏、朱色の花を開く。其莖淡く紫にして左右に互生す、葉を前に下て女の髮を洗ふに用ゐる。＝ひめ

ひたき【鶲】（秋）大さ雀の如き小鳥。黑くして白き斑点あり、背翅は灰赤にして多く黑斑あり、雌雄共に黃斑なり。初冬多く來り、秋末に消滅なり。古は秋の渡來り鳴ゐる。＝鶲。大美鳥。國 鶲なく島や屋のすみし跡　蕉々。

ひたきや【火燒屋】茶士などの家にて、炭を守る小屋。

ひたたれ【直垂】古制の服の名。短衣にて袖なく、胸紐、袴腰あり、裾に括り紐を付く。古、庶人の服なりしが後世は禮服こす。

ひたちたいのじんじ【常陸帶神事】（春）古、常陸國鹿島神宮にて行はれし神事。正月十四日、參詣の男女の名を布帶に記し、神前にて巫覡之を結び、其結びやうに依りて婚姻を定むること。國 かくすまいつゝ結に出て常陸帶　芳草。

ひたつゆ【直附】連俳の用語。連句作法を見よ。

ひたのたくみ【朱漆匠】古、例年、朱漆國より朝廷に召す木匠をいふ。轉じてすべて木匠をいふ。

て、其家の時動する音にて鳥獸を怖すもの。＝ひさらい。ひきだ。國 曉を引く茶屋に一しるの茶もがな　秋色。

ひたう【緋雀】（春）ひもと。

ひたき【鶲】（冬）大さ雀の如き小鳥。黑くして白き斑点あり、背翅は灰赤にして多く黑斑あり、雌雄共に黃斑なり。初冬多く來り、秋末に消滅なり。古は秋の渡來り鳴ゐる。＝鶲。大美鳥。國 鶲なく島や屋のすみし跡　蕉々。

ひたき【火燒屋】茶士などの家にて、炭を守る小屋。

ひたたれ【直垂】古制の服の名。短衣にて袖なく、胸紐、袴腰あり、裾に括り紐を付く。古、庶人の服なりしが後世は禮服こす。

ひたちたいのじんじ【常陸帶神事】（春）古、常陸國鹿島神宮にて行はれし神事。正月十四日、參詣の男女の名を布帶に記し、神前にて巫覡之を結び、其結びやうに依りて婚姻を定むること。國 かくすまいつゝ結に出て常陸帶　芳草。

ひたつゆ【直附】連俳の用語。連句作法を見よ。

ひたのたくみ【朱漆匠】古、例年、朱漆國より朝廷に召す木匠をいふ。轉じてすべて木匠をいふ。

ひたひたり【額白】馬の額に白き斑ある もの。

ひたぶる【混沌】ひたすらにの意。＝頓。

ひたぶるゐ【直家居】ひたすら家にのみ籠り居ること。

ひたる【干鱈】（春）鱈の腸を除き、或は之を割り開きて乾したるもの。其狀棒のごとし。知くなれば棒鱈こいふ。國 初小屋や春の山邊に干鱈燒く　木鬼。

ひたりうほ【左鞆】弓道の條なるをいふ。

ひたりじんごろう【左左玉郎】幼名は力蔵公。京に住し、彫刻及木匠を善とす。左手を多く用ゐるを以て世に左左玉郎こ呼ばる。絵山城、紫樂等其他神社佛閣の欄間、木鹿等を刻み、古今の名手こ稱せらる。寛永十一年歿す。

ひたりまき【右巻房】饅頭をいふ。

ひたりまえ【貴賓房】漢の汝南の人。嘗て市上に藥を賣る老翁、壺公に從ひ、山中に苦行すること十餘年、仙道を得て籠り、醫藥を行ひ、又、縮地の方をなし、鬼神いふもの に命じて九月九日、高きに登り、絳囊に茱萸を盛りて臂に掛けしめ、以て災厄を免れしむといふ。なほ壺公(ココ)、宮きに登る、菊の酒等の故事語。

ひちりき【篳篥】樂器。古に似て別に蘆舌(ヒ)を挿し縱にして吹くもの。

ひちりた【筋緒】（冬）綿を割して炭れしもの。

ひつじ【羊】（夏）すゐれん。

ひつじぐさ【未草】（夏）山王祭。

ひつぢ【筆墨】事人。字は筆墨。少より放逸にして常に酒を愛し、嘗て數百斛の船に載し、四時時の中味を船頭に置き、右手に酒杯を持ち左手に蟹螯を持ち、酒船中に沿浮せば、便ち一生を了ずるに足れりこ。

ひつぢかぶと【引立烏帽子】もみ烏帽子の頭。背の下に差り兜を脱ぎしこき、引立つるやう作りしもの。

ひつち【樋】（秋）稻を刈りたる後、再び自生するを稻をいふ。多く實らず。＝ひつち。國 樋田や蒔せて蒔結の花ひこつ　千規。稻田や蒔せて蒔結の花ひこつ　千

ひつちた【樋田】（秋）樋の生ずる田。國 ひつち田に樋の花見るあしたがな　城青。

ひつちは【樋】（秋）ひつち。

ひつなすす【水頭菌】鹿茸の頭の肉を細こしたもの。

ひつみ【引み】一方高く一方低くなりたる。

ひつた【筆】中古、筆手の結業の名。＝角業。かつら。

ひやんじ【藤田寺】京都にて乞食、物乞の業をいふ。

ひやんぞん【藤田院】古、宮にて病者、貧乏なる者ふたり設けしところ。轉じて乞食などの生ずるところ。

ひや【冷】（夏）夏季所少く、水酒をノこと。＝冷酒。冷年。　園冷こし伏水の小麦もちひけり　業村。

ひやひ【冷年】（夏）今前。

ひやびと【人鳥】能狂言の名。

ひやふすず【一重】（春）少しの間を云ふ。

ひやどり【人鳥】民ことしふに今こ。＝青雀。

ひやどりどり【人鳥鳥】（春）鶯の異名。

ひやどりに【人の国】他国ことしふに今こ。

ひやどりどり【一言主】葛城の神に同じ。

ひやどりのあま【一姑】貴族の一ツ。

ひやどりぼ【一葉】（夏）山中陰地に生ずる草。根は長く蔓延して處々に一葉を生ず。花はさゝやか淡緑にして穂をなして生ず。夏、新葉を生ず。根を採り細切にして

ひの【樋】（秋）（はつつぼひ）

ひの【樋】園の一つ。古語。

ひのあ【人日】（春）に人こつ。園日ニ知らで三味線弾く夏座敷　松宇。

ひのあ【一葉】（秋）桐一葉。

ひのあぶ【一葉草】（春）蓮の異名。

ひのあ【人柱】古く、橋島宮は洪水なこに度々あり。しこれ、龍神を鎮むる爲こして生けける人を箱に入れ、鎖をしてこれを沈めしこと。

ひのあ【一葉紙】（秋）桐一葉。

ひのあ【一葉舟】（秋）桐一葉の水に浮べるを舟に比していふ。

ひのあ【陽日】一日ノ間をおこと。

ひのく【草茎】（夏）ひこくもの。

の葉カラ蕨ヲ附ケトッパヲ附ケテ春頃ノ、葉今ニシテ春頃ノ、青ニ全足の紋ヲ附ケ

ひなまつり

雛を飾り物に餐せたる雛と共に就座なごく雛し、こと。

ひなもり【鄙言】古へ和歌に方言を交へよみたる風。

ひなまつり【雛祭】（春）三月三日、女子ある家に於て、雛人形、小さき調度類なごを飾り、酒肴を供ふ。雛遊ぶ。雛＝雛人形。雛遊ぶ。○雛の節句なごも云ふ。雛＝雛見草。雛遊ぶ。雛壇。雛の宴。雛の節句。花雛。雛の宴　一茶。

ひなみ【雛見世】（春）二月下旬より三月雛上旬まで、雛賣る店を所に出ること。＝雛の市。　雛見世の灯を引くこころや春の雨　素行。

ひなもり【鄙言】（名）ひなもりに、つら。

ひなやあがり【火屋上】は【火屋見世】に出でたる火屋。能登屋の製なる人たちに火屋を賣取れこいひしこと。

ひなり【日南】支那人の言説に南方の海にある国の新火の中に產す鳥といふ。

ひなりぶね【雛】雛状を類する船を、其雛たる折りつくしたるもの。

ひなりの【水蛭】（春）ひのかめし。

ひなもの【水蛭物】（夏）夏季、空中の動詞に水を用ゐること。＝水水沼す。（俳季には六月をす）

ひなまつり

ひなあり【雛】雛のくき茎にて、鋼代なごに編み作れる笠。

ひながせ【雛瀬川】大和高市郡にある河。

ひなもり【鄙言】能狂言の名。

ひなまつり【日新記】（名）日新記は藤原氏。三位樣中納言に至藤帝の寵を蒙り、後たる世、藤原俊基等と共に政權を奪り、て、其頃に流され、其地にて殺さる。

ひのだま【水雷】（春）元日の宮中の儀式の内、主水司より、水室の水の厚さを計りて奏す。水厚さ年は豊年なり厚きこと、薄き時は水の所厚さ年は凶年なり、薄きこと、言ふる。　國　水の樣閉し豊作の兆、つし　芭蕉。

ひのもとのとり【日本者】（春）山崎日の使。

ひのもとのつかひ【日本使】（夏）山崎日の使。（冬）春日日の使。

ひのもり【日盛】（夏）山崎日の使。

ひのもりの【日盛】月日の盛を見よ。

ひのはじめ【日始】（春）元日の異名。三始を見よ。　國　振舞の大和に異し日の始　曉雪。

ひのはたらき【日新業】（春）農稼。

ひのはたらきのき【日新業樹】（春）農稼。

ひのはる【日春】（春）盛日の盛語。　國　日の春をさすがに鶯の歩み進　其角。

ひのもとの【日新祭】（秋）九月五日、山城國所、法華寺の鎮守）の祭禮。

ひのみや【日宮】（名）宮殿の外は　御所をいふ。

ひのみん【日新民】　國ろ漢語の例。元盛江國より日新國く出し、こいふ。

ひのもん【日國】山城字治郡の者、山科新清にを在ろ匠國。

ひば【檜】（秋）ひわ。

ひば【檜】（秋）大根の葉なごを干したるもの。味噌汁なごにも用ゐ、又は漬に入れて醤漬なごをする用こと。

ひば【檜肥】（夏）果物、苦を丈夫、葉厚く、を長大にして冬を經て枯れず、冬枯に際しを長なしして、主幹の小白花を開く、蕾記に、て人目を奪ひて、實は中夏の頃に黄に成熟す。大目を奪ひて、實は中夏の頃に黄に成熟す。一枝に數多、彩正圓に近く、葉大なり。實を乾す。　國　檜肥粉少くして竹葉の手伸び圓新を手　雄田。

ひば【檜】（夏）檜肥漬　夏季の頃、を主りて、を所にして、後、熟を迫ふ。○檜肥粉。

ひばり

ひばり【雲雀】（春）ひばり、こと。○雲雀。　國　琴爪も老に付ら　雄　雲雀。

ひばり【雲雀】（名）雲雀の鳴なごを手したるもの。味噌汁なごにも用ゐ、又は漬に入れて醤漬なごをする用こと。

ひば【檜肥】（夏）果物、苦を丈夫、葉厚く、を長大にして冬を經て枯れず、冬枯に際しを長なしして、主幹の小白花を開く、蕾記に、て人目を奪ひて、實は中夏の頃に黄に成熟す。大目を奪ひて、實は中夏の頃に黄に成熟す。一枝に數多、彩正圓に近く、葉大なり。實を乾す。　國　檜肥粉少くして竹葉の手伸び圓新を手　雄田。

ひば【檜肥】（夏）檜肥漬　夏季の頃、を主りて、を所にして、後、熟を迫ふ。○檜肥粉。

ひばり

ひばり【雲雀】（春）ひばり、こと。○雲雀。　國　琴爪も老に付ら　雄　雲雀。

ひばり

ひばり【雲雀】（名）雲雀の鳴なごを手したるもの。味噌汁なごにも用ゐ、又は漬に入れて醤漬なごをする用こと。

ひば【檜】（冬）蕎麦にて手足の皮裂け傷む、こと。○檜膏。　國　琴爪も老に付ら　雄　雲雀。

ひば【檜】　清若蕎麦をいふ。

ひば　近江國蕎麦する麦。長さ六七寸にして、近江國蕎麦する麦。

ひばり【檜膏】（冬）檜を治する藥。＝不龜手。

ひび【檜膏】ひゝ。

ひび【檜】（春）ひな。

ひびきぶし【響節】（春）ひなまつり。

ひびき【響】（春）蜜蜂の頃、蜂の子を捕すること、を鳴こと。　國　ひゝ　啼て蜂の　仙下。

ひびきぶし【響節】（春）ひなまつり。

ひびきぶし【響節】（春）雛祭。

ひびきぶし【響節】（春）回上。

ひびき【響】（冬）柊の花を見よ。

ひびきのまつり【柊賣】（冬）節分に門に挿す柊を賣り歩くもの。

ひびきまつり【柊祭】（冬）節分に蜂花（ヒイラギ）こと、で、柊の小枝に鰯の頭、又は蜂（ヒイラギ）を門に挿して疫鬼を追ふ俗。○鰯頭祭。鰯頭祭。柊賣。　國　一面々々に柊祭せ其角。

ひびき【檜原】ひの木の林をいふ。

ひびき【響】（春）雀に似て少し大く、頭足、尾、尾共に長し。原野の地上に巣くひ、春日空高く舞ひ上りて啼く。＝鶯。天鶯。告天子。〔異名〕ひゝひな鳥。○鶯鳴。鶯。鶯。鶯

りの向潮　巳山。

ひかげのはな【水花】（冬）椿は山中に五人家にも植ゑる。葉厚く光澤あり、冬花を開く。葉のかげに隠れて咲く。花は白の大なる弁あり、雄しべ多く、雌しべ一本あり。葉は互生し、小白に咲き花を開く。冬

ひやかす

ひやかす

ひやかす

ひやしざけ【冷酒】【夏】夏時、酒類を冷して用ゐること。圖 冷酒やはしりの下の石だゝみ　其角。

ひやしじる【冷汁】(夏) 夏時、汁の類を煮て、器のまゝ水に冷したるもの。＝煮さまし。圖 煮冷や疑覺たのしむはしり元　來山。○冷汁にうつるや春戸の竹林　蓼林。

ひやしすゐくわ【冷西瓜】(夏) 夏日、西瓜を水に冷して食ふこと。

ひやしとうふ【冷豆腐】(夏) 豆腐を正角に切り、水に冷して食ふ夏日の料理。＝冷ヤッコ。

ひやしもの【冷物】(夏) 夏時、食物を水に冷して喰ふをいふ。○冷汁。冷蓼。冷素麺。冷酒。冷瓜。冷西瓜。冷豆腐。

ひやみづうり【冷水賣】(夏) 水賣。

ひやひや【冷蓼】(夏) 切蓼。圖 酒の邀冷蓼の九天より落るならん　其角。

ひややか【冷】(秋) 初秋の氣候の冷かなること。＝つめたし。圖 ひや〳〵と壁なふまへて蓋寐かな　桃青。

ひややつこ【冷奴】(夏) 冷とうふ。圖 冷奴死を出入しあさの酒　虚子。

ひゆ【莧】(夏) 草の名。高さ四五尺に至る。葉は鶏頭に似て圓くして末尖り、六月、穗なして細小なる黄白花を開く、若葉は採りて食用とす。圖 莧尾ゆる園の島の四隅かな　支伯。

(ゆひ)

ひよう【蓂】多く雷鳴の後に降るもの。蓂の結晶して一層大なるもの。

ひよういん【馮異】字は公孫。後漢光武帝の臣。光武に從ひて軍旅に赴き、屢々功あり。然れども、諸將並び座して功を論ずる時は、常に樹下に退いて守はす。人呼んで大樹將軍といふ。後、陽夏侯に封じ、征西大將軍に拜せらる。

ひよういん【馮緩】名は照儒。前漢元帝の妃。元帝曾て獸鬪を見る。熊逸して圓を出で殿に上らんとす。左右皆驚き走る。照儒身を以て之に當り、帝事なきを得たりといふ。

ひようたつり【冷瓜祭】(秋) ヒヤ瓜祭。

ひよくのとり【比翼鳥】【夏】夏時、遊席にて禁間の藩圓の上へ散く二ツ折の鏡ないふ。

ひよくもん【比翼紋】相思ふ男女が、互の紋所を組合せて用ゐるもの。

ひよこまつり【鶴】(秋) ツケミに似たる小鳥。

ひよこまつり【日吉祭】(夏) 山王祭。

ひよどり【鶏】(秋) 尾若灰色にて長く、頭上の毛亂れて起ち、眼の邊赤く、殼灰色なり。翼は黑くして利く、脚細し、常に群飛して啼き、好むで草木の實を喰ふ。古名ヒエドリ。＝蓼鶏。白頭鳥。圖 鶏のこぼし去にゐる實の赤き　葉村。

ひよどりごえ【鶏越】攝津八部郡鵯越の北面にある間道。元暦元年、源平の合戰に、源義經が平家を一の谷に襲ひし古跡として名あり。

ひよどりじやうろう【鶏上戸】(秋) 原野の草木に纏ふ蔓草。卷宿根より生じ、莖に毛ありて朝顔の如し、葉菊に似て、夏小叉を出して小白花を開き、秋、實を結ぶ。南天に似て大く赤熟す、鶏好みて其實を食ふ故に名く。＝白英。鬼目。ホソシ。圖 待ちうけたやうな鶏上戸　俳一茶。

ひよどりばな【鶏花】(秋) 藤袴の一種。葉は桃に似て細長く、鋸齒深し。花は白と

淡紫とあり。

ひよひよぐり【雛栗】(秋) 小栗(ゲリ)の一種、實圓くして尖なきもの。

ひよんのき【瓢樹】(秋) 常綠木、高さ一丈餘、葉は姫椿に似、三四月頃、小白花を開き紅き實を結ぶ。圓くして豆の如く中子細小にて黑色なり。夏其葉に細虫寄生し桃實の如き巢を造る、秋に至り其虫の出たる殼に穴ありて空虚となる。小兒弄に之を鳴らし、又は小瓢の如き器とす。＝イスノキ。龍笛。蚊母樹。圖 ひよんの木に蟬百匹の殘暑かな　虚子。

(きのんよひ)

ひよんのみ【瓢實】(秋) ひよんの樹の實に非ず。同樹の寄生虫の殼を、世俗誤りて實とするなり。圖 ひよんの實や人もすさめぬ木の形　一有。

ひよんもん【觀門】赤兒の腦蓋骨の未だ固らぬ時、前頂の中央の動く部分。

ひら【比良】近江國琵琶湖の西、比叡山の北に聳ゆる山。比良の暮雪として八景の一とす。

ひらあゆ【平秋】連俳の用語。戀にあらぬ秋の句をいふ。平秋の句に戀の秋の句は挾まざる掟なり。

ひらいづみ【平泉】今の陸中磐井郡一の關の北にある地。高館、中尊寺等の古跡有名なり。

ひらうげ【檳榔毛】古の牛車の一種。檳榔の葉を染して白くせるものを張りて飾れるもの。太上天皇、親王、大臣などの乘るもの。

ひらかた【牧方】河内茨田郡の北、淀川の東岸に在り。淀の舟路にて煮賣船の多く集るところ。

ひらが【柊】(冬) ヒヒラギを見よ。

ひらがしらばち【開午房】(春) 午旁を生のまゝ算木の如く切りたるもの。新年の料の物に用ゐる。＝叩き午旁。算木午旁。

ひらまめ【開豆】(春) 大豆を水煮にした物に用ゐる。圖 れもころに叩午房や老の爲　東亭。

ひらく【平句】連俳の用語。一卷の連句の中、發句、脇、第三、月、花の句などの以外の句をいふ。

ひらくにち【開日】暦の語。運の開く日なりといふ。

ひらたけ【平茸】(秋) 山林濕地に生ずる茸。色淡黑く、松茸に似て莖の形薄く平たし、食用とすれどまゝ毒あり。圖 市に出る平茸實は法師哉　几董。

ひらたぶね【平田船】底の薄く平たくして長き形の小舟。＝艜。

ひらど【平戸】肥前國松浦郡の海邊の地。松浦氏の舊城下。

ひらど【平戸】金銀の線にて編し具。南蠻より肥前國平戸へ舶來するもの。

ひらどつつじ【平戸躑躅】(春) ツ、ジの一種。早春の白花を開く、樹甚大にして一二丈に及ぶ。肥前平戸地方より出づ。＝琉球ツ、ジ。

ひらなべ【平鍋】淺くひして平なる鍋。

ひらのもりやしき【平野長者式】(夏) 攝津國住吉郡平野庄は、古へ坂上田村麿の領地にて、其子廣野郷の臣世々住し、平野侍といふ。五月廿三日、此家門の七番頭集り、國所長實寺にて、長者式として大饗を開くこと。

ひらのはかり【比良八講】(春) 二月廿四日、

ひのこまつり　ひのさかまつり　ひのさかまつり

比賀比賀の所謂（祭禮）田植祭（春）の祭禮。此日、河内國河内郡牧岡神社に於て行ふ。十四日夜より、神社前に大麥を積み、小豆粥を煮て之を神供として、其麥の上に強置きたる竹竿を以て麥を搗き、其麥の殻は元の所に撒き、之を以て麥の豊凶を占ふ。二に占田（ウラ）祭とも云ふ。國河内國を挙げて、其年の五穀の豫兆を占ふ。

ひのさかまつり【牧岡祭】（春）新暦二月一日、河内國河内郡宮町大社牧岡神社（祭神天兒屋根命外三座）の例祭。夕暮より、「拜殿より山に入り水を探り来りて、拜殿より叩き鳴らす。俗に水を探り来りて、拜殿より叩き鳴らす。俗に水を探り来りて、拜殿より叩き鳴らす。俗に

【風谷文藻】玉巻本前六の歌、芭蕉門の人々の俳文を集めし書。

【風雅】古聞なる新の四言にて作りし雅彩の詩。空海の新の四言なるに倣うものも。

【風鳥】尾長鳥の一種なり。形、三光鳥に似て尾は老の雄雀、羽毛は緑褐、相は文鳥の足に似たり、全体に羽毛を蔵し、雄雌に合し雌を若たる知し。羽毛を蔵に羽中にうとして行く。生活の食は芋、飛ぶこは風に乗に乗に

【風鳥亭】（秋）芋の名。秋葉頃に白花を開く。蕾淡の蕾長く、花薄たる雅せる知く、其形風鳥の飛ぶ姿に似たるを以て名あり。＝白花菜。

【風谷】紀州熊野の熊野の南に接する谷川なる谷川の谷。

【風呂屋】「風呂屋」遠く離れて関係なこと。

【風羅坊】芭蕉の号。芭蕉の句を唱れて春夢の唱歌に作り、芭蕉の別號、風羅坊ことふとり名く。

【風羅】（春）茅山の麓春の間に多く生ずる草。葉はヨモギに似て、葉に三三寸、夏六月を出して小白花を開く、茎あり、根は茎なく、根りて蓋に己れ頭なる様のはし　仙翁。

【風谷】（夏）鯉の形に似て大さ二三寸の海魚。其舌に短刺なる鋭く、釣り、其舌に刺さる食す。＝鯉。初鰹鳥。

【風雲】風谷の間りつ、雲雷こりけり　初鰹。

【風雲亭】（夏）ムラサキウチワの異名。

【風雲亭】（夏）ムラサキウチワの異名。

【風】魚の腹中にある氣嚢。魚の浮沈する嚢囊。

【風鳥】「不鳥」ふはとる、こと。併語にて鳳々、不鳥飛行と相連れて、ふ。

【風祭】（秋）九月の異名。

【風流】弓の柄を巻きし麻を赤く塗り、他を黒く塗りしもの。

【風柱】【風柱】柱数箱の風の柱にて、大臣柱と新し地詰の造すう柱にあるもの。

【風吹川】【風吹川】甲州千太郎より出づる川。其は富士川なるべし。

【風之】【風雅】式部卿重尚代、貴の宣王の時、風を雅なりしこと名づく。雅とて雅楽の、こと。又、帝の新らしき、こと。

【風谷】【風谷】茅の海の屋でかたの巧者あり、夏六月を出して小白花を開く、茎あり、根は茎なく、根りて蓋に己れ頭なる様のはし　仙翁。

【風鳥】（夏）鯉の形に似て大さ二三寸の海魚。其舌に短刺なる鋭く、釣り、其舌に刺さる食す。＝鯉。初鰹鳥。

【風雲】風谷の間りつ、雲雷こりけり　初鰹。

【風雲亭】（夏）ムラサキウチワの異名。

【風】魚の腹中にある氣嚢。魚の浮沈する嚢囊。

【風鳥】「不鳥」ふはとる、こと。併語にて鳳々、不鳥飛行と相連れて、ふ。

【風祭】（秋）九月の異名。

【風流】弓の柄を巻きし麻を赤く塗り、他を黒く塗りしもの。

【風柱】【風柱】柱数箱の風の柱にて、大臣柱と新し地詰の造すう柱にあるもの。

【風吹川】【風吹川】甲州千太郎より出づる川。其は富士川なるべし。

【風之】【風雅】式部卿重尚代、貴の宣王の時、風を雅なりしこと名づく。雅とて雅楽の、こと。又、帝の新らしき、こと。

【風谷】【風谷】茅の海の屋でかたの巧者あり、夏六月を出して小白花を開く、茎あり、根は茎なく、根りて蓋に己れ頭なる様のはし　仙翁。

【風鳥】（夏）鯉の形に似て大さ二三寸の海魚。其舌に短刺なる鋭く、釣り、其舌に刺さる食す。＝鯉。初鰹鳥。

【風雲】風谷の間りつ、雲雷こりけり　初鰹。

【風雲亭】（夏）ムラサキウチワの異名。

【風】魚の腹中にある氣嚢。魚の浮沈する嚢囊。

【風鳥】「不鳥」ふはとる、こと。併語にて鳳々、不鳥飛行と相連れて、ふ。

【風祭】（秋）九月の異名。

【風流】弓の柄を巻きし麻を赤く塗り、他を黒く塗りしもの。

【風柱】【風柱】柱数箱の風の柱にて、大臣柱と新し地詰の造すう柱にあるもの。

【風吹川】【風吹川】甲州千太郎より出づる川。其は富士川なるべし。

【風之】【風雅】式部卿重尚代、貴の宣王の時、風を雅なりしこと名づく。雅とて雅楽の、こと。又、帝の新らしき、こと。

【風】魚。大さ二三寸、氏白色にて、能く鳴を重し人を驚ふこと。其肉美味なり。

【風雅】俳文の巻を調べて雅事あること。

【風雅亭】【風雅亭】雅亭の別名。源士、雅亭なるこの雅亭なる。

【風】【風】紀州熊野なるこの雅亭なる。

【風の】【不可有雅】仙境をいふ。

【風谷】【風谷】そこいふこと。

【風谷】【風谷】山城記事節伏見見城南の南方、風谷の反物語をいふ。

【風谷亭】【風谷亭】（夏）古く山城深草の里より産しなる蓮。近江国に産し、て寺を蓮はそこなるもの。　国　焼芋屋が焼てる深草蓮なる　蕉翁

【風谷文藻】【風谷文藻】（春）二月十八日、元政上人（日蓮宗の僧、日蓮こいふ。）が深草に住す、中に深草元政こいふ。中に住くて主事、雅藻記に元政歌詩を事す、寛文八年寂。其墓は山に深草、雲光寺にあり、竹三竿を植えて墓印とす。）の墓。　国　こひより竹を用て竹を用て元政墓　青々。

【風谷文藻】【風谷文藻】せこいふこと。

【風見亭】（夏）牡丹の異名。

【風雅】【風雅】清きかこり。

【風雅亭】【風雅亭】（秋）蓮の異名。

【風雅会】【風雅会】俳諧の連歌。

【風雅】【風雅】（春）初春の吹初、正月、笛、尺八、琴の吹初をなすこと。＝雅吹。　国　吹初や人の影すう琴の音　来之。

【風雅】【風雅】（夏）端午に飾る五色の吹流をいふ。端の節句飾。

【風の】【風姿】（春）蓮の異名。

【風の】【風雅】（春）蓮の雅名をいふ。

【風の花】【風雅】（春）蓮の雅名を見よ。＝蓮の　シ　ト　ム。　国　蓮の花の匂や蓮の雪　清口。

【風】【風】（冬）港産の魚、形やノ新鮮に似て、長も鱗もなく、背は青黒く、腹は白く、て光沢なし。味はあり、て尾細く、鱗は白く、て光沢なし。物に触れられて怒りて膨脹すること球の如し。春夏の頃は美味なれ、ば食を諸西瓜乳。○鱗汁。鱗鍋。鱗酒。○鱗は鱗食ふ程なり、に、け　蕪村。

【風】【風】（冬）鱗を貫るもの。　国　鱗貫の交合ふて行く命かな　永吟。

【風】【風】（春）初宮詣の日、嵯峨嵐の山氏、風神水こいふ木にて鶴を作り、風で鶴を振ること、こいふ風にて風振こいひて貫るもの。

【風】【風】茶の湯の座でかたの巧者を見よ。

【風】【風】（春）牡丹の異名。

【風】【風】牡丹の異名。

【風】【風】（春）牡丹の異名。

【風】【風】（春）牡丹の異名。

【風】【風】（春）

ふくぎや【福茶】(春) 大服。

ふくぎやうちん【龍提灯】河豚の皮を剝ぎ提灯に作りしもの。

ふくつけし【食】むさぼる心ないふ。

ふくと【河豚】(冬) ふぐ。

ふくとじる【河豚汁】(冬) ふぐじる。 ㊟ 鎮汁の君よ我等よ千朝伯牙　葉村。

ふくなべ【福鍋】(春) 福沸(カワクワ)に用ゐる鍋ないふ。

ふくなべ【河豚鍋】(冬) 河豚汁の鍋。

ふくにち【復日】暦の語。旅立に吉なりといふ日。

ふくのゆ【福湯】(春) 東叡山大黒の湯。

ふくはうち【福内】(冬) 豆撒。

ふくはしらうん【伏波將軍】馬援(ンエ)。

ふくはら【福原】今の兵庫鮮一帯の地。平相國清盛の別業を營み、後、治承四年都を遷したるところ。

ふくびき【福引】(春) 糸の一端に景物を結び、他の端を集め持ちて引かしめ當りたるを取らしむ。又、圖に地口、謎の文句など記して景物を分け與ふるものあり。多く新年に行ふ。寶引の一風なり。 ㊟ 福引や初音の君に竹箒　紫曉。

ふくべ【河豚】(冬) ふぐの異稱。

ふくべ【瓠】(秋) 瓢の實をいふ。

ふくべのはな【瓠花】(夏) 夕顔の一種。花莖夕顔と異ならず。實は圓くして扁く、實を干して瓢とし、肉を剝きて干瓢(カンピ)(ヤウ)とす。＝瓠。 ㊟ 待もせぬうちや瓢の花も咲く　乙二。

ふくべぐん【瓢實】(秋) 瓢の花を見よ。＝へうたん。○青瓢。種瓢。種瓢。 ㊟ 盗人のあたまうちたるふくべ哉　青奇。

ふくまめ【福豆】(冬) 豆まき。

ふくまり【福釜】(春) 初午に、山城伏見稲荷に詣づるをいふ。 ㊟ 年寄の何を願ひや福釜　菊酔。

ふくむかひ【福蜈蚣】(春) 初寅の日、筑馬の土民、生きたる蜈蚣を釜詣人に賣る。蜈蚣は多門天の使令なれば、福德を授くるものなりとて、御福蜈蚣といふ。筑馬山中へ蟲を養はざるは、蟲の蜈蚣を食ふを防ぐためなりといふ。

ふくめたい【含鯛】干鯛を炙りて拵りたる食品。

ふくゆ【福湯】(春) 東叡山大黒湯。

ふくよし【福吉】痛病のこと。古語。

ふくらすぬ【膨釜】雀の子をいふ。其親よりも太り居るものなれば名くと。

ふくらに【膨煮】鮑の肉をうま煮にしたる料理。

ふくろ【除蓋】いんなう。

ふくろいたし【除蓋落】(冬) ヤクオトシ。

ふくりん【復輪】物の緣を畫すること。又、器具の緣を金銀にて飾れるもの。

ふくりやう【茯苓】(秋) 黒松の根株の邊に自生する塊根。形拳の如く、皮は黒くして皺あり。肉白きものと赤きものとあり。澱粉質に富む。秋採りて藥用とす。 ㊟ 茯苓は伏しかくれ松露は露れぬ　葉村。

ふくろあらひ【袋洗】(秋) 攝津國伊丹の酒家にて、新酒を作りたる後、其濾袋を搾名川の邊にて洗ふ。近傍の賤者、其洗ひ汁を乞ひて飲む。之を袋洗の酒といふ。

ふくろぐも【袋蜘】(夏) 蜘の一種。頭大く色赤黒くして、脚に爪あり。袋の如き巣を地上、又は樹根の間に作り多數の子を生育す。＝土蜘。穴蜘。 ㊟ 夕暮にわかれ出にけり袋蜘　其杉。

ふくろぞうし【袋草子】藤原清輔が和歌に關することを書集めし隨筆。

ふくろつの【袋角】(夏) 鹿の袋角。

ふくろふ【梟】(冬) ミゝヅクに似て大なる鳥。羽毛黄黒にして毛角無く、其性又

水兎に似て、小鳥を捕り食ふ。＝鵂。 ㊟ 梟や雪止み月も入りし後　蝶夢。

ふくろふのあつもの【梟羹】(夏) けりのあつものを見よ。 ㊟ 梟のあつもの笑ふ鶴かな　勝雪。

ふくろまち【袋町】袋の如く行き止りなる町ないふ。

ふくろやまぶし【袋山伏】能狂言の名。

ふくわうじまつり【福王寺祭】(秋) 鳴瀧祭(ナルタキマツリ)。(福王寺祭とも書く)

ふくわかし【福沸】(春) 元日、若水を汲みて煮ることの祝語。又、神の供物とする餅を煮ることなりと。之に用ゐる鍋を福鍋といふ。 ㊟ 長閑なる釜の音なり福湯　白雨。

ふくわたし【福渡】筑馬多聞天より下人に授かりし福を、主人が威光にて奪ふ筋の能狂言。

ふくわら【福藁】(春) 新年、庭上に清き藁を敷くこと。不淨を除く爲なりと云ひ、又賀客を迎ふる爲なりとも傳ふ。 ㊟ 福わらや十ばかりなる供奴　一茶。

ふくわらとく【福藁敷】(春) 同前。

ふけい【普化忌】(夏) 六月十三日。普化僧又は尺八を吹くもの、普化禪師(唐の人、普化宗の祖なり。其弟子張釜に至り、我國の法燈國師が入宋して、虚鐸の曲を受け來り、歸朝の後、鈴鐸に代ふる尺八を吹き、讀經に合す。それより篤僧は起りしといふ)の忌を修すること。

ふけしゆう【普化宗】禪宗の一派。普化忌參照。

ふけぜんじ【普化禪師】普化忌を見よ。

ふけそう【普化僧】普化宗の僧。深編笠を被り、袈裟衣を着け、尺八を吹きて四方を遊行するもの。我國にて文明中、山城に住せし、風化道者明庵を始とす。なほフケキの條參照。＝コムソウ。ボロ。ボロンジ。

ふけまちつき【更待月】(秋) 八月廿日の月ないふ。更くるまで待つ義。又、亥の刻に出づる故に亥中月(ゐナカツキ)ともいふ。＝廿日月。深待月。 ㊟ 酒屋には もう經てや居ん亥中月　引牛。

ふけんぎう【普賢象】普賢菩薩の載れる象。又、普賢象櫻の略。

ふけんぎうさくら【普賢象櫻】(春) 略して普賢象。櫻の一種。花莖長く垂れ色赤く、鮮の間に卷葉雜りて出づ。花(鼻)より蕊(歯)出づとて、普賢象菩薩に乘れる白象に寄せて名くと。 ㊟ 鼻に似て盛り長かれ普賢像。

ふけんぼさつ【普賢菩薩】德利仁慈なる菩薩。常に女鉢にして白象へ乘れる狀を圖せらる。

ふこたろし【春下】(春) 初寅詣の日(或は第二の寅日)山城國筑馬の山民、同所の名產燧石を賣るに、谷を隔てたる崖上に小屋を設け、繩にて春を下し、客之に錢を入るれば即引上げて其錢の多少に應じ、燧石を入れ再び春を下す。 ㊟ 松風に錢こぼしけり春下し　月居。

ふこく【布穀】(夏) かんこどり。

ふさ【夫差】支那春秋時代、吳國の王なり。薪に臥して屈辱を忍ぶこと數年、終に越國を破る。後、西施を納れて遊樂に耽り、終に越王勾踐の爲に亡さる。

ふさ【扶座】けつかふさ。

ふさうはたるをたる【房草化蕚】(夏) 七十二候の一、六月の中の第一候。此頃房草化して蕚となると。 ㊟ 枯草の又崩え出る蕚哉　卜宅。

ふさん【巫山】支那四川省巫山縣にある山。古へ楚の襄王、夢に此山の神女と遇ひし故事あるを以て名あり。

ふさんのゆめ【巫山夢】楚の襄王の故事(前條參照)より轉じて男女密會すること。

ふし【附子】烏頭(トリカブト)の根に生する塊根。劇毒あり。藥用とす。

ふしいも【富士市】(夏) 六月一日、東都駒込、淺草象潟町等の富士淺間社に諸で、彫藝細工の蛇、五色綱、氷餅等を求め歸るをいふ。 圖 駒込や小兒の足で不二の山　旨原。

(富士市の彫藝蛇)

ふしだうし【富士蓋】富士山より吹下す風。又、編笠の一種。富士山の形に似たるもの。

ふしがき【柴垣】柴にて結びし垣根をいふ。

ふじかは【富士川】甲斐國より出し笛吹、釜無、芦の三川合して、駿河國を流るゝ急流。

ふしまろ【不識庵】上杉謙信の號。

ふじびり【富士垢離】(夏) 五月下旬、富士登山の道者、山麓の行場にて七日間、浴水潔齋を行ひ、身躰を清淨にして登山すること。 圖 富士こりや山は日ごろの薄煙　牛阿。

ふしば【伏柴】(夏) 眞菰のこと。「又常の柴なし云ふ。

ふしばのかが【伏柴加賀】待賢門院の侍女。「兼てより思ひしことよ伏柴のこゝばかりなる歎きせんとは」と云ふ歌により名を得たり。

ふじせんがやう【富士禪定】(夏) 富士詣。

ふしぞめ【柴染】釣棹の煮汁にて染めたる黄色の衣。

ふじだいこ【富士太鼓】樂人、富士の妻、夫が淺間の爲に討たれしを知らず尋ね行き其形見の裝束を見て、狂氣することを作りし謡曲。

ふじだうしゃ【富士道者】(夏) 富士詣をする人。一に行人ともいふ。

ふしづけ【柴漬】(冬) 冬季、柴を束ねて水中に漬け置き、魚の寒氣に堪えずして其下に潜み集る時、網を張りて捕ふこと。＝粟。 圖 ふしつけし川や家より見し蟲　乙二。

ふじのうをとこ【富士農男】(夏) 四五月頃、富士山の麓、消殘りて田子の浦の方より望めば、寶永山の方に人の形の如く見ゆ、之を農男(野男)といふ。又、甲斐の方より望みて、烏の形に殘雪の見ゆるを甲斐の野烏といひ、農家之を見て其年の豊凶を卜すといふ。

ふじのはつゆき【富士初雪】(夏) 六月十五日の頃、富士山に降る雪をいふ。俗へいふ、富士の雪は六月十五日に消えて其夜直に降るといふ。 圖 其夜降る風の聲や富士の雪　旨原。

ふじのゆきげ【富士雪消】(夏) 六月十五日、今日のみ富士山の雪消ゆるといふ。前條參照。 圖 雪解富士廚居の窓を開きけり　死洒。

ふじびたい【富士額】女の額髪の生え際の形、富士に似たるをいふ。

ふじまうで【富士詣】(夏) 六月一日より廿一日迄、(現時は新暦七月中旬より八月末まで)諸國の人、富士山に登山し、絶頂の富士權現社(淺間大神、木花開耶姫命を祀る)に參拜すること。登攀の道四あり。表口(西口、又は大宮口ともいふ。駿州大宮よりするもの)北口(吉田口ともいふ。甲州吉田よりするもの)東口(御殿場口ともいふ。駿州御殿場よりするもの。又、舊東口は駿州須走村よりするものにて、須走口ともいふ。)南口(小泉村佐野より須山を經るもの)等にして、各道、距離大抵相同じく、山巓までを十合に分ちて、一合又は半合毎に石室の坊舍を置く、之を篠小屋といひ、休憩宿泊に備ふ。登山の行者は行人又は富士道者といひ、白衣に菅笠、金剛杖を携へ、各隊皆、先達あり。皆富士講と稱する講社にして登山を全ふせしものを山上(ヤマウヘ)又は禪定(ゼンヂヤウ)といふ。現時は何人も登攀すること容易なり。○富士垢離。 圖 水無月の風ふくや六合目　活潭。

ふしまろつき【臥待月】(秋) 八月十九日の月。臥して待つの義。＝寝待月。 圖 寝過して臥待の月の蟲哉　大巻。

ふじまつ【富士松】能狂言の名。

ふじまつぶし【富士松節】俗曲の名。享保頃、富士松加賀掾の始めしもの。新内節は之より出でゝ一流を爲したるものなり。

ふしみ【伏見】山城國紀伊郡にある町。稲荷社を以て名あり。＝伏水。

ふしみいなり【伏見稲荷】山城國紀伊郡伏見街道の東に鎮座す。倉稲魂命、素盞男命、大市比賣命を祀る。稲荷山は土地廣潤にて攝社末社多し。其山上の諸社に賽するを御山廻りと稱して參詣の人踵に絶えずと云ふ。

ふじみじふさんしう【富士見十三州】富士山を望む十三箇國をいふ。

ふじみなみ【不二南】西南の風を云ふ。

ふじみにんぎやう【伏見人形】山城伏見より作り出す土人形。小兒の玩具にて不細工なれど雅致あり。

ふしみのたゆな【伏見翁】古への異人の名。大和菅原の岡に臥すること三年、時々東方を見るのみ、一日、起て舞ひ歌ひて後時なる哉といつて去る、其跡を伏見岡といふ。

ふしみのをか【伏見岡】大和添下郡菅原村に在り。かの伏見翁の臥しゝ古跡なりといふ。

ふしみぶね【伏見船】山城伏見より淀川を下り大阪に至る通船。

ふしんがみ【不審紙】書物の不審なるところに貼る紅唐紙をいふ。

ふしもの【賦物】連俳の式の名。連句の中に名所、物語の名、調度の名、景物の名などを緣語にて讀込むこと。例へば「四宮河原」といふ名所を賦して「契りしのみやかはらざるらむ(爲氏)」とする類なり。これ和歌の「物名」等より轉化せしものにて、要するに言語上の遊戯に過ぎず。其法も初は連句の總てに緣語なからまぜ行く式なりしが、次第に廢れて終に發句のみに詠むやうになり、俳諧にては連句に之を詠むことなし。賦物には上賦、下賦の別あり。上賦は專に「賦山何」とし、下賦は「賦何山」として賦物を定め、何といふ字に代るべき字、即ち山の字と連續して一の意をなすべき字を句中に讀み込むなり。例へば「賦何衣」とあるに「年毎に見れども花は櫻かな」として花衣といふ意を取たるなり。又、一字露顯とは日(ヒ)を火に取り、音(オト)を寝(ネ)に取り二字反音とは夏(ナツ)を綱(ナワ)と案じ、三字中略とは菖蒲(アヤメ)を雨(アメ)に取なして作ることあり。其他三字上略、三字下略、四字上下略などあり。後には一字重轉(詩をシジとし、矢をヤとする類)二字除篇(鰐を雪、松を公とする類)除冠(灰を火とする類)加冠(舞を蕣とする類)の知きもの現れたり。

ふしゃ【鳧車】(夏) 競渡(ドイ)。

ぶしやうびき【無性獨樂】獨樂の一種、心棒なく胴長くして底尖り、紐にて胴を打ちつゝ廻すもの。

ふじやまびらき【富士山開】(夏) 富士山に登山を許し初むる日。富士詣參照。 圖

山開き十三州の日和かな　碧梧桐。

ぶしゅかん【佛手柑】(秋) 暖地に産する果樹。葉は木犀に似て鋸歯なく、木に刺あり、秋實を結ぶ、熟すれば黄にして香氣あり、本は圓く柚子の如く半より末は裂けて人の手の如し。其肉は白くして核無し。＝拘橼。○佛香碧。圖 佛手柑や亭主の禪の顔に出る　雅因。

(佛手柑)　花

ぶしょう【附子】能狂言の名。

ぶすぶる　恨を云はで戀人を苦しましむること。

ぶすべがき【爐柿】(秋) 甘干(ボウシ)。

ぶすま【衾】(冬) 冬多く用ゐる故季とす。寢ねるとき身上に被ふ布團の類。○紙衾。圖 かしらへやかけん祇へや古衾　蕪村。

ぶすま【鈍船】小麥粉を製したる後の屑をいふ。

ぶすまゆき【衾雪】(冬) 雪の物に被ひ降りたるを衾に寄せていふ語。圖 山姫の寢道具ならしふすま雪。

ぶせ【布施】佛教に淨財を施興すること。

ぶせ【布施】下總東葛飾和田沼の近傍の地。辨天の社ありて參詣多し。

ぶせあみがさ【伏編笠】編笠を前さがりに被ること。＝伏笠。

ぶせいほ【伏庵】小くして汚き庵。

ぶせがさ【伏笠】ふせあみがさ。

ぶせがね【伏鉦】座上に置き稱名などの時叩く鉦。

ぶせこ【伏籠】香の薫を衣に移す爲め、火取の上へ覆ひ衣を其上に掛おくに用ゐる籠。＝薫籠。

ぶせこもり【布施籠】下總國東葛飾布施辨財天へ參籠すること。

ぶせない【布施無】能狂言の名。

ぶせりょう【浮綿綾】織文の名。浮織に織りし綾にて、貴人の裝束などに用ゐるもの。

ぶせや【伏屋】賤の家をいふ。

ぶせや【布施屋】古へ官にて驛路に設て無料にて旅人を泊せしむるところ。

ぶたんき【蕪村忌】(冬) 十二月廿五日、與謝蕪村(天明三年歿。京都一乘寺村の金福寺に墓あり)の忌。＝春星忌。圖 風呂吹や蕪村百十八回忌　子規。

ぶだいし【傅大士】名は翕字は玄風、善慧大士と號す、烏傷雙林寺に住す、梁朝の大通元年に寂す。世に一切經を守護せし人。後世寺院の輪藏の前には必ず其木像の傍に、普建、普成の二童子侍せるものを置く。＝笑ひ佛。

ぶたいはじめ【舞臺初】(春) 能初。

ぶだう【葡萄】(秋) 古名紫葛(エビカヅラ)、蔓生の樹にして棚を作り延ばしむ。葉大く五尖にして皺粗く、鬚あり。春、黄白の小花穗をなして開き、秋小圓實、簇り房をなして垂る。暗紫色にして味甘美なり。生又は乾して食ひ酒にも釀す。○葡萄酒。圖 葡萄召す水銀盤をうたれけり　召波。

ぶだうがき【葡萄柿】(夏) さるがき。

ぶだうざけ【葡萄酒】(秋) 葡萄の實の液より釀したる酒。圖 衰弱の杜甫が机や葡萄酒　青々。

ぶだうしゅ【葡萄酒】(秋) ぶだうざけ。

ぶだうのはな【葡萄花】(春) 葡萄を見よ。

ぶたかみやま【二上山】大和國にある山。葛城山の峯續きなり。

ふたきぐさ【二季草】(春) 藤の異名。

ふたきどり【二季鳥】(秋) 雁の異名。

ふたきやの【二朝】隔つにかくる枕詞。

ふたたびまうす【再度詣】(春) 三月廿一日、攝津國神月、再度山大龍寺の弘法大師へ參詣すること。

ふたつぼし【二星】(秋) じせい。

ふたつもじ、うしのつのもじ【二文字、牛角文字】態字の隠語。二つ文字はこと云ふ字。牛の角文字はいと云ふ字。合せてこいの意とする。

ふたの【二布】女の下帶をいふ。

ふたばぐさ【二葉草】(夏) 賀茂葵。

ふたばぐさ【二葉葵】(夏) 賀茂葵。

ぶだい【浮鯛】(春) 二月頃、安藝、周防等の邊海に產する鯛の名。古へ神功皇后遠征の時、酒を海に洒ぎ給ひしを以て、鯛醉ひて浮べると傳へ、今も海を蔽ひて浮ぶといふ。

ふたみのうら【二見浦】伊勢度會郡伊勢海、蓋見浦をいふ。後ろに音無山を負ひ絶景の地なり。

ふたみのしほひ【二見汐干】(冬) 十一月十五日の夜子の刻、伊勢國大湊、二見の浦の沖、潮干して駛しく陸となる。之を七汐日ともいふ。

ふたんぼうら【不斷經】(秋) 高野(カウ)不斷經。

ふたんざくら【不斷櫻】(春) 櫻の一種。高さ尺に過ぎず。單瓣小花にて、五六月若芽を出し、四季に花あり。正月十六日に開花するを以て、一に十六日櫻とも いふ。＝節會櫻。若木櫻。圖 翁や咲不斷櫻の返り咲　常仙。

ふたんな【不斷菜】(春) たうぢさ。

ふたもじ【二文字】(春) にらの異名。

ふたよのつき【二夜月】(秋) 後の月。

ふたらく【補陀落】梵語。海島の義にて、觀世音菩薩の出現せし地。

ふたらやま【二荒山】下野、日光山のこと。

ふたりかぶろ【二人禿】寶永年中、新町、近江屋鄙路といふ遊女が仲の町へ出るに、二人の禿を連れしより起る。遊女の品位の稱。

ふたりしづか【二人靜】(夏) 多く陰地に生ずる草。春、宿根より叢生す。莖尺餘、葉はアザサ井に似て、夏四葉の上に二條の細莖を生じ、圓小の白花穗り生ず、其色次第に綠に變じ、後に實を結び下垂して、二穗となる。＝及己。ツキネグサ。

ふたりしづか【二人靜】吉野柴摘川の神事に、靜の亡魂と、亡魂の乘移りし柴摘女と、昔を語る筋の謠曲。

(ふたりしづか)

ふたをまゐ【札納】(冬) 世俗、年末に其年中受けたる諸社寺の札を、一社寺に納むること。圖 方除の三年も立ちて札納　效枝。

ふち【藤】(春) 蔓生の樹。葉は萩に似て大なり。花は四瓣の唇形にして春夏の交な花季とす。其花紫なるは花穗長きもの多く、白なるは穗短し、花落ちて後實を結ぶ。之を藤豆といふ。(異名)松見草。二季草。」○白藤。藤溪。藤蔓。藤が枝。藤棚。圖 藤棚や酒賣る家のとはれ顔　几董。

ふち【藤】越中多胡の浦は古歌に名高き藤

の名所なることなど、藤花の綺現ほれて旅愁に物語ることなど作りし謠曲。

ふぢがえ【藤枝】(春)藤といふに仝じ。

ふぢがさ【藤笠】藤蔓を晒して編みし笠。武士、醫者、御坊主など多く冠るもの。

ふぢがさね【藤重】(春)カサネの色目の名。表薄紫、裏青、又は表紫、裏薄紫。

ふぢかつら【藤蔓】(春)藤の蔓をいふ。轉じて藤の異稱とす。

ふぢくらのさうり【藤倉草履】蘭草履(ヰザ)。

ふぢころも【藤衣】葛の布にて製りし衣をいふ。賤者の衣とす。又、堂上の裏服をいふ。

ふぢさはぎく【藤澤菊】(春)水邊に生ずる草。葉は苣に似て厚く深綠にして長さ白毛あり。春の末、莖高さ二三尺に至り、莖頭に黃瓣黃心の花を開く、錢大にしてチケルマの花に似たり。後白き絮となりて飛ぶ。‖狗舌草。

ふぢさはやま【藤澤寺】相州藤澤遊行寺のこと。

ふぢしろやま【藤白山】紀州名草郡にある山。

ふぢだな【藤棚】(春)藤の木を這はせたる棚。圖水彩や鬼わたる藤の棚　其角。

ふぢつぼ【藤壺】紫宸の殿舍の名。‖飛香舍。

ふぢつぼのにようご【藤壺女御】源氏物語中の人物。桐壺帝の女御にして後、源氏に通ず。帝の崩後尼となつて藤壺女院といふ。

ふぢづき【藤月】佐々木盛綱、備前の兒島に平家を攻めし時、藤戸の渡に漁父を斫りしな、其母、恨を陳ぶることを作りし謠曲。

ふぢな【藤菜】(春)たんぽぽの異名。

ふぢなでしこ【藤撫子】(夏)撫子の一種。花紫色なるもの。

ふぢなみ【藤浪】(春)藤の花房の蹴さて浪の如きをいふ。

ふぢのとりゐ【藤鳥居】古、春日神社にありし華表。

ふぢのはな【藤花】(春)藤に仝じ。圖筏くむ夕暮ふぢの落花哉　白雄。

ふぢのはな【藤花】(秋)八朔の繪行器(エボ)に盛りて贈る菓子の類。(エボカイの條參照)

ふぢのみ【藤實】(秋)藤豆ともいふ。莢はナタ豆に似て、子は碁石の如し。子の色、紫白の二種あり。圖藤の實に小寒き雨を見る日哉　曉臺。

ふぢのめ【藤芽】(春)初春の頃、藤の芽の萠出るを云ふ。圖鳩の來て藤の芽翻す日數哉　樗堂。

ふぢのもりまつり【藤森祭】(夏)五月五日、山城紀伊郡深草、藤森社(倉人親王、早良親王(ナガラノシンワウ)、伊豫親王(イヨノシンワウ)など祀る)の祭禮。社家、氏人等、各甲冑を着し、神輿に從ひ、後社前の馬場にて競馬を行ふ。圖裸身に具足ならしつ藤の森淡々。

(藤森祭競馬)

ふぢばかま【藤袴】(秋)草の名。春宿根より苗を叢生し、莖圓く葉は女郎花に似て香氣あり。夏秋の候、莖高さ五六尺に至り、枝の梢に淡紫色の細小花、傘の如く簇り開く。古へ蘭の未だ渡來せざる頃、蘭と稱す。‖アラライ。圖ぬれて干す蘭の野中や藤袴　桃里。

ふぢばかまのきぬ【藤袴衣】(秋)カサネの色目の名、表裏共に紫。

ふぢばし【藤橋】山中の溪谷などに架する橋。藤づるにて繩絡せしもの。

ふぢぼたん【藤牡丹】(春)ケマン草。

ふぢまめ【藤豆】(秋)蔓草。春種を下し、蔓甚だ長く、葉は葛に似て小く毛無し、花藤に似て大く紫白あり。秋莢を結ぶ。其核扁平にして、莢ともに食用とす。‖鵲豆。「又、藤の實をいふ。圖藤豆や田溝を隔てもぎりけり　松芽。

ふぢむすめ【藤娘】大津繪の中に、爪折笠を被り、振袖着たる女の、藤の枝の長きを携へしをいふ。

ふぢもんじ【浮沉雲】元祿頃、江戸三田にすみし畸人。嘗て鎧の管笠、水曾の檜笠を得て之を着んと樂みしに、折ふし雨降らざりければ、ある密院に赴き、金五兩を出して雨乞を依み、四五日にして雨降りしかば笠を着て笈を負ひ、諸國を巡歷したりといふ。

ふぢやれうり【普茶料理】支那風の精進料理をいふ。

ふついん【佛印】梵字の印をいふ。又、蘇東坡が禪學の師とせし僧の名。

ふつか【二日】(春)正月二日をいふ。圖元日はうれし二日は面白し　丈左。

ふつかうへき【佛香碧】(秋)ブシュカンにて作りし果酒。

ふつかあ【二日酓】(春)正月元日より三日間、大阪新町の妓樓にて傾城、衣裝を飾り道中をなすこと。元日は亡八(ワブ)の仕着せ、二日三日は客の出すものといふ。○三日酓。圖二日酓や國に寵ある命也　青々。

ふつかぎり【二日灸】(春)二月二日、灸點すれば息災なりと傳へ、男女各之を行ふ。‖二日やいと。圖二日灸花見る命大事也　召波。

ふつかぐさ【二日草】(春)櫻の異名。

ふつかづき【二日月】(秋)八月二日の月をいふ。圖八朔やさてあすよりは二日月　蕪村。

ふつかふきう【佛甲草】(秋)岩レンゲ。

ふつかやいき【二日灸】(春)ふつかぎう。

ふづき【文月】(秋)七月の異名。

ふつきまち【富貴草】(夏)牡丹の異名。

ふつし【伏羲氏】支那太古の帝王。蛇身人首にして聖德あり、書契及び八卦を作り民に佃漁を敎へしといふ。

ふづくり【恚】怒を含むこと。

ふつくわうじのもちがき【佛光寺餅撒】(春)二月一日、伊賀國山田郡千戶村、佛光寺にて、餅を諸人へ撒施す、數千の餅中に、錢を裹みしもの三個ありて、之を得るものは福を獲といふ。

ふつこつぐら【佛骨表】唐の憲宗帝、法門寺の佛骨を迎へ、宮中に入れんとせしとき韓退之の上書して之を諫めし文。

ふつさうげ【佛桑花】(夏)暖地に生ずる樹。葉は桑に似て、夏の末五瓣の花を開き、紅粉をつけたる長き紅蕊を中心より出す、朝に開きて夕に萎む。暖國にては仲春より仲冬に至るまで開くといふ。又、千瓣なるあり、黃色なるありて、後實を結ぶ。‖扶桑花。

ふつしやうゑ【佛生會】(夏)四月八日、佛陀誕生の日なりとて、各寺院にて花御堂と稱し、諸種の花にて葺きたる小堂を飾り、盤上に裸躰の佛像を安置し、甘草の香水を灌ぎて產湯に擬す。‖灌佛。浴佛。佛產湯。誕生會。龍華會。○甘水。五香水。甘茶。花御堂。圖大佛のこれがならろゝ八日哉　蕪村。

ふつしゆかん【佛手柑】(秋)ぶしゅかん。

ふつせせき【佛足石】大和國藥師寺に在り。釋迦の足跡を刻みし石にして、百濟より贈りしものといふ。其後方に佛足石を詠ぜる歌二十一首を記せる碑あり。

ふつそい【物祖徠】荻生徂徠をいふ。

ふつのみたまつり【師靈祭】(秋)七月七日、常陸鹿島神宮にて、寶藏より所藏の寶劍を取出し、神官之を抜きて拜式あり、參詣の群集各、刀を抜かざして神前に至ると。(ふつのみたまは石上神社の寶劍の名なり、鹿島に此名をいふは、其因由詳ならず)。

ふつぼん【佛法僧】ぶつぼふそう。

ふつぼふそう【佛法僧】深山に棲む鳥。鳩に似て小く、頭部淡黑、翅背綠にして、腹背は碧綠交り、喉碧色、翼尾の端黑く、嘴と足と赤し。鳴く聲ブッポウと聞ゆ。一に慈悲心鳥と云ふ。＝三寶鳥。

ふつみやう【佛名】(冬)ぶつみやう。

ふつもやう【物茂卿】荻生徂徠。

ふでい【武帝】梁の高祖。姓は蕭名は衍、字は叔達、深く佛法を信じたりしが、達磨と問答して其意を得ざりしといふ。

ふでかき【筆柿】(秋)柿の一種。キザハシの類にて、實の形小にして長く、筆頭に似たれば名く。青き時より渋なく食ふべし。

ふでかへし【筆返】逢棚又は短き袋棚及び俳諧の文臺などの端に附したる綠木。

ふでぎは【筆際】連俳の用語。連句にて執筆のすべき前の句を作るを云ふ。老人又は最も功達の人のなすべきもの。

ふでく【筆句】連俳の用語。連句の第八句目執筆のする所をいふ。

ふですてまつ【筆捨松】樹狀美なる松を古の畫人の描かんとして畫きえず、感嘆して筆を投捨てしといふもの。武州金澤能見堂の筆捨松は就中有名なり。

ふですてやま【筆捨山】伊勢鈴鹿郡岩根山をいふ。狩野元信筆を投つて其景を稱せしと云ひ傳ふ。

ふでつか【筆塚】瘦筆を埋めて築きし塚。筆の功を記するためなり。

ふでつむし【筆津虫】(秋)こほろぎの異名。

ふでつら【腰面】怒を含む面色をいふ。

ふでつはじめ【筆初】(春)書初(カキゾメ)。

ふでは【浮屠】佛陀をいふ。僧、又は塔のこと。

ふでな【納】(雲)山野水邊に多き小虫。蚊に似て小く、稍圓くして色黑く光る。夜は伏し晝出て人を刺す。膚痛蚊より甚し。＝蠓子。圖苦さに休めば納のたかりけり　蘭更。

ふでうき【風土記】和銅六年、諸國に勅して、其國の山川、風俗、產物、傳說等を記して獻らしめし書。今存せるは數箇國に過ぎず。フドウキといふ讀辯なり。

ふでうまつり【武德祭】(夏)新暦五月初旬、京都岡崎平安神宮の西なる武德殿(古へ禁裏にありしものを換したるもの)に於て祭典を行ひ、諸藝の武術者相會し、劍法、槍術、弓術、馬術等の試合をなす式。圖流鏑馬の風薰りけり　綾蘭笠四明。

ふでころがみ【懷紙】はながみ。

ふでばし【太箸】(春)柳の箸の太きもの。雜煮を食ふに用ゐる。古へ足利義勝、元朝、箸折れて其年死す、弟義政の代より太き箸を用ゐしといふより始ると。＝筷箸(カシ)。雜煮箸。柳箸。圖太箸や後に控へし檜山　曉齋。

ふでぢに【太占】神代に行はれし占事。

ふでん【布團】(冬)俳諧にて早に布團といへば、夜具布團のことなり。座席に敷く布團も古來冬季とす。＝蒲團。○座布團。敷布團。火燵布團。圖人情く一日被る布團かな　素鄕。

ふでんにし【布團太說】(秋)仁德祭の時、

ふなあ

樽の屋根に布團を積み下にて敷人太鼓を打つ輿を出すもの。

(布團太鼓)

ふなあ【太鼓】(夏)蘭の一種。水澤中に叢生し、長さ丈餘に至る。葉圓くして巾五分餘、深綠色にして心無し。夏の後、葉の梢の下に褐色の數花を着く。秋葉を刈りて蓆に作る。＝莞。オホヰ。

ふな【山毛欅】落葉の喬木。深山に生じ、葉は樫の葉に似て圓く小く、春、淡綠にして鐘形の花を開く。其實は蕎麥に類し、炒りて食ふべく、其材は工業用となる。＝極。

ふなあそび【船遊】(夏)夏時、江戸隅田川、大阪淀川等にて樓船に妓女酒食を携へ、日午より晩の頃まで遊興すること。又、單に小船などに凉を納るゝため遊ぶものをもいふ。圖船遊暮山を遠く眺めけり　朱明。

ふないち【鮒市】(春)初鮒を賣る市。圖しばし見ん柳が下の小鮒市　几董。

ふなおろし【船卸】新造の船を進水すること。

ふなかたのひ【船形火】(秋)施火(ヒ)の一種。七月十六日、京都の北、船岡山に薪にて船形の火を點ず、大文字の如し。＝舟の火。圖舟の火のたゞよふ影や夕嵐　太々。

ふなかみやま【船上山】伯耆國八橋郡の西南にあり。正慶二年、名和長年が義兵を擧げしところ。

ふなくらべ【船競】(夏)競渡(トイ)。

ふなくわんげん【船管絃】(夏)イックシマ祭。

ふなぐくわう【船御光】佛像の後方に付くる舟形のもの。光明に象りしもの

ふなずし【鮒鮨】(夏)鮒を裂きて飯を加へ製りたる鮨。雀鮨ともいふ。近江湖邊、山城宇治等の名產なり。圖鮒鮨や產狀の城に雲かゝる　蕪村。

ふなすまん【舟凉】(夏)舟にて凉を納るゝこと。＝凉み舟。圖凉み寢や秋を夢みるかゝり舟　蒼林。

ふなたまつり【船靈祭】(春)新年、舟乘初と稱し船靈を祭ること。船靈の神は播津住吉社の傍に祀れる美奴寶(ミヌ)の神なりといひ、船中又は船主の家に常に之を祭る。正月は船中、松、竹、注連の飾なし、餅、神酒等を供へて年中の海上安全を祈る。圖乘初や一粒選りの舟子共　碧童。○船玉の神酒いたゞくや小正月　西嶺。

ふなたんじり【船車樂】(夏)天滿祭のとき、船上に人形、旗等を飾りたる車樂を載せ河流を渡御するもの。

ふなちうろう【舟燈籠】(秋)盆燈籠の一種、船形に作りしもの。

ふななます【鮒膾】(春)近江地方にて、春季、鮒の大なるもの多く漁せらるゝを以て之を膾とし喰ふもの。圖鮒膾吸凉しき恩あり　四方太。

ふなのりぞめ【船乘始】(春)ふなたま祭を見よ。圖乘初や東風を追手の快さ　齡分。

ふなばし【船橋】船を横に數多並べて、其上へ板を架し橋としたるもの。又、佐野の舟橋のことを万葉の古歌によりて作りし謠曲。

ふなばる【白薇】(夏) 山野の陽地に生ずる草。莖圓く高さ二三尺、葉は柿の葉に似て小く、圓くして對生し、莖葉共に白毛あり。四五月頃、五瓣にして紫黑色の花、穗をなして開き、後莢を結ぶ。長さ二寸餘、内に子と白絮とあり。＝威靈仙。鐵砲草。

ふなべんけい【舟辨慶】大物浦にて義經、靜と相別れ、舟出せしに、知盛の幽靈現はれ辨慶の爲に祈り伏さるる事を作りし謠曲。

ふなほこ【船鉾】(夏) ふねほこ。

ふなまんどころ【船饅頭】舟中に鱶を鬻ぐ下等なる賣女。

ふなわたし【船渡】渡船ないふ。

ふなをか【舟岡】山城愛宕郡紫野の南にある丘陵。

ふねのひ【舟火】(秋) 船形の火。

ふねよな

ふねほこ【船鉾】(夏) 祇園會の鉾の一、屋臺を船の形とし、神功皇后、鹿島の神等の像を安置す。圖 船鉾に召して七日の御旅かな 安靜。

ふのり【布海苔】磯の石上に叢生する海草。紫黑色にして長さ二三寸、枝ありて鹿角の如し。採て食用とし、又糊にも製す。次條參照。＝鹿角菜。海蘿。

ふのりほす【布海苔干】(夏) 夏日、布海苔を採り、沙上にて屢々、水を注ぎて晒し、黄白色に變ぜしめ、海く乾海苔の如く漉きて貯ふこと。之を水に煮て、洗濯の糊とし、又婦女の髮を洗ふに用ゐる。圖 海蘿干す中に動けり小具かな

ふはのせき【不破關】古へ三關の一、天武帝の時、美濃國不破郡松尾村に設けし關。

ふはんさく【不破萬作】豊臣秀次の愿從。讃岐の武士某が心に感じ、陰に情を敍す。秀次高野山に切腹せんとするとき此事を自白して生害す。時に十八歳。

ぶぎ【武舞】舞樂の名、劍を帶び、鉾を採つて舞ふもの。

ふきん【霧】(夏) ふき。

ふぶき【吹雪】(冬) 風交りて吹く雪。＝嵐。○吹雪倒れ。 乙州。 圖 海山の鳥啼き立てる吹雪かな

ふきたおれ【雪吹倒】(冬) 北國の山道などにて、吹雪のため行人の害せらるること。

ふくりり【鵂鶹】(夏) つつどり。

ふくん【不犯】僧の、女色を犯さぬこと。

ふみたがし【踏落】詩の作法にて、起句に飄なふまぬこと。

ふみかきよ【女相撲】能狂言の名。

ふみつき【文月】(秋) 七月の異名。圖 文月や六日もたゞの夜には似ず 芭蕉。

ふみひらまつき【文拉月】(秋) 七月の異名。

ふみ【踏輪】(春) 輪踏に用ゐる、耶蘇の像を刻したる板。(輪踏の挿圖參照)

ぶんくん【文君】卓文君(タクブン)。

ぶんこうめ【豊後梅】(春) 梅の一種。樹長大にして、花も大く、重瓣淡紅なり。實は圓くして甘酸香美なり。＝鶯梅。

ぶんごばし【豊後橋】山城伏見指月院の飾に在り一に月見橋といふ淀河に架す梅溪の名所。

ぶんさい【分歳】(冬) 古へ支那にて、除夜、其祖先を祭り、一家相集りて宴し、金銀を奴婢等に與ふ俗。

ぶんしち【文七】元結に造る紙の名。又、文七元結のこと。轉じて元結の製造人。

ぶんしちもとゆひ【文七元結】髮を結ぶ細き元結の名。黑白二種あり。

ぶんしぼく【蚊子木】(夏) 五雜俎に出し奇木。葉、冬青(ヤマ)の如く、實枇杷の如し、熟すれば蚊出づといふ。又、蚊母草といふあり。(其條參照)

ぶんたい【文臺】短冊を載する臺。机の低き形にして、歌會、俳席などに用ゐるもの。又、俳諧にて、俳席のとき文臺の前に座する人。

ふんだんをいる【射紛團】(夏) 唐の代にありし俗。端午、宮中にて團子を作り、之を金盤に入れ、小角弓にて射、當てたる者取りて食ふ戯。圖 紛團に投壺の遺恨はたしけり 其角。

ぶんちうし【文中子】隋人、王通の學說を其子、福郊等の編したるもの。儒教を宗としたる哲學書。

ぶんちやうあい【文徵明】明の長州の人、嘉靖の初め、翰林院侍詔となり後、致仕して專ら詩文書畫に遊ぶ。其書畫は我國にても大に珍重せらる。

ぶんてう【文鳥】人家に飼ふ小鳥。形ウツ鳥に似て、躰は灰色、頂と喉黑く、頰白く、腹脊紅を帶び、嘴と脚紅くして美なり。

ぶんてんしろう【文天祥】字は宋瑞、文山と號す。宋の吉州廬陵の人、宋の末年に方り、元兵頻りに諸州を侵すを防ぎしが後、元に俘はれ、燕京に殺さる。其作、正氣歌は世に名高し。

ぶんまうひく【緑豆引】(秋) 緑豆(文豆)は小豆の類。ヤヘナリともいふ。莖高さ尺餘、秋小花を開き、莢を結ぶ、小豆の如くにして豆の色緑なり。秋、引きて豆を餅、飯等に交へ食し、又牛馬の食とす。

ぶんぼまう【蚊母草】(夏) 五雜俎に出し奇草。葉の中に血蟲あり化して蚊となるといふ。なほ蚊子木なども見よ。

ぶんぼてう【蚊母鳥】(夏) ツヽドリ。又、カスヒドリ。

ぶんや【文彌】房中にて泣く女郎の綽名。

ぶんやぶし【文彌節】小唄の一種。元祿中、岡本文彌と云る盲人の唄ひ初めし俗曲。

ぶんりうの【分龍雨】(夏) 分龍の節を見よ。

ぶんりうのせつ【分龍節】(夏) 支那の故事に、五月廿九日をいふ。此日雨あるを分龍雨といひ、多く大水となるといふ。

ぶんろくのしき【文六獨樂】文錢六つ七つを竹の軸に貫きて獨樂の如く廻すもの。＝錢獨樂。

ふもんぼん【普門品】法華經第二十五の品。觀音の功力を說きしもの。

ふい【冬】(冬) (異名)玄英。顓頊(センギヨク)。玄冥。壓鍾。析木(クキボ)。上天。羽音。律檀。清冬。三冬。九冬。

ふゆあんぢ【冬安居】(冬) 佛家にて冬季、一室に籠り勤行精進すること。十月十五日に始り、正月十五日を自恣の時とす。夏の安居と全じ趣旨なり。素と天竺には冬安居なし、佛法支那に入りてより殿寒の地にて行ひしより始る。我國にては多く禪家にて行ふ。＝冬偈。雪安居。

ふゆうぐひす【冬鶯】(冬) 冬季より鳴出る鶯。圖 冬鶯昔王維が垣根哉 蕪村。

ふゆがすみ【冬霞】(冬) 圖 平かな鳥羽の水田や冬霞 水皮。

ふゆかは【冬川】(冬) 冬の河川の水枯れて岩石など露れしをいふ。圖 冬川や風に吹かるゝ水車 玉明。

ふゆがまへ【冬構】(冬) 冬季に向ひて、家屋庭園などに防寒の用意をなし、雪除、霜除等を設くること。圖 古寺の簀子も青し冬構 凡兆。

ふゆがれ【冬枯】(冬) 冬の草木の枯るゝをいふ。又、冬の景色の寂しきをいふ。＝草枯。霜枯。圖 冬枯や芥しづまる川の底 移竹。

ふゆき【冬木】(冬) 冬木立。

ふゆぎ【冬着】(冬) 冬の衣服。綿入。

ふゆぎく【冬菊】(冬) 菊の一種。冬、單瓣の黄花を開き、葉紅葉す。＝寒菊。(異名) 雪見草。圖 寒菊やねるき日医の

壁うつり　俳諧。

ふゆのあさ【冬浅】（季）冬の始。

ふゆのあしの【冬木原】（季）冬枯したる原をいふ。國枝折れ花にほふ冬木の梅がな　烏帽。

ふゆのあめ【冬雨】（季）冬まで降れる雨。國乾雄の目に入れ暮のさりすがしいふ。國冬の雨　芋。

ふゆのあり【冬蟻】（季）冬まで残れる蟻。國大山詣や岩さへ白き冬の蟻　岩鼻。

ふゆのあれ【冬荒れ】（季）冬の荒れ。國何なりこ海風がけ人冬荒れ　召波。

ふゆのい【冬井】（季）冬枯りて黄物の冬ゐこ。＝冬ヰル。冬ヰル。

ふゆのいえ【冬家】（季）冬の家。＝冬ヰル。冬ヰル。

ふゆのいな【冬稲】（季）冬まで残れる稲　鳥のあさる蕪田　蕪村。

ふゆのた【冬田】（季）冬まで刈の残れる田。又、冬の田の荒れたるこ。國冬田刈るる夕暮人の一人徒　曉雲。

ふゆのたち【冬立】（季）りつこう。國あらたのし冬立つ宿の釜の音　鬼貫。

ふゆのあめ【冬近】（秋）冬待つ。國冬近し寺雨の雲もこゝよりモ　蕪村。

ふゆのあま【冬椿】（季）冬咲の椿をいふ。〇茶椿。國赤き實こ見てよる鳥や冬椿　大顛。

ふゆのあさ【冬待】（秋）冬待つ。

ふゆのあし【冬葦】（季）冬の采葦をいふ。國鳥羽田には春雨ふるらし水采船　大魯。

ふゆのあ【冬蚊】（季）冬の蚊の死れたるをいふ。＝枯蚊。冬の蚊。國手を出さず物所び行く冬蚊哉　来山。

ふゆのあま【冬雨】（季）國面白し雪にやなら人冬の雨　蕪村。

ふゆのあら【冬嵐】（季）國船かうも調流しけりの冬の海　蕉六。

ふゆのあり【冬蟻】（季）十二月、蟻は冬至の頃より開く蟻。早蟻、遅蟻ともこふ。國冬蟻の一つ二つや鳥の雲　土芳。

ふゆのかぜ【冬風】（季）北風なこの寒き風をいふ。〇カヲ風。寒風。北風。國冬水を渡けばいつも吹く也冬の風　蕉雨。

ふゆのかは【冬川】（季）冬川。國風がけや遠にして行く冬の川　蕉翁。

ふゆのあり【冬蠅】（季）冬まで残りる蠅をいふ。國空に見し蠅も影なくなりしを冬　蕉雨。

ふゆのあるき【冬歩き】（季）冬、歩を行つこ。國國打ち止むに回の冬の歩き　来山。

ふゆのあり【冬蟻蟻】（季）ふゆさりさりす。

ふゆのいす【冬草】（季）冬草。枯草。國冬草の朝夕くもがりけり　李雪。

ふゆのいな【冬宿】（季）冬宿。冬宿。國冬宿の池にうつり動かる風雨。

ふゆのこか【冬蛙】（季）國蛙鳴り冬山こゆる底の立つ　春蛙。

ふゆのそら【冬空】（季）國空を守る底はいつにも冬の空　中興。

ふゆのつき【冬の月】（季）冬の月光をいふ。＝冬月。

冬月。國門前の大鼓打つ也冬の月　百明。

ふゆのてん【冬蝶】（季）冬の蝶の寒に衰へたるをいふ。＝凍蝶。國蝶凍てゝ打るゝ雪の音哉　保吉。

ふゆのはち【冬蜂】（季）冬まで残りる蜂。國今は世を頼むけしきや冬の蜂。

ふゆのはく【冬蛾】（季）冬まで残りる蛾。〇凍蛾。國日影もる壁に動くや冬の蛾　蕪村。

ふゆのの【冬原】（季）冬の野。國此家も南むきけり冬の原　桂丸。

ふゆのひ【冬日】（季）冬の日短きをいふ。＝短日。

ふゆのひ【冬日】（季）冬の日光をいふ。國冬の日の人に影あり暮の山　其角。

ふゆのひ【冬日】一に尾張五歌仙といふ。享元年、芭蕉及其門下の連俳を集めしもの。七部集の一。

ふゆのみ【冬水】（季）冬の水の枯れたるゝこ。又、寒烈なるゝこ。

ふゆのやま【冬山】（季）〇山眠る。國松籟に夕日がゝるや冬の山　涼湖。

ふゆのよ【冬夜】（季）〇夜半の冬。冬夜。國何こなく冬夜既をこはれ鬼　其角。

ふゆのり【冬籠】（季）冬季、防寒のため家に閉ぢこもる。國門前の大鼓打つ也冬の月　百明。

ふゆのれん【冬蓮】（季）冬の蓮の寒に衰へたるをいふ。＝凍蓮。國蓮凍てゝ打るゝ雪の音哉　保吉。

ふゆのはち【冬蜂】（季）冬まで残りる蜂。國今は世を頼むけしきや冬の蜂。

ふゆのはく【冬蛾】（季）冬まで残りる蛾。〇凍蛾。國日影もる壁に動くや冬の蛾　蕪村。

ふゆのの【冬原】（季）冬の野。國此家も南むきけり冬の原　桂丸。

ふゆのひ【冬日】（季）冬の日短きをいふ。＝短日。

ふゆのひ【冬日】（季）冬の日光をいふ。國冬の日の人に影あり暮の山　其角

して三四尺、乃至五六尺に及ぶを謂ふ。小より大に至り、次第に名を改むるに従ひ、世俗之を出世身丈の意とし、盛事又は祝儀の前後などに用ゐる。國大食の者が酒や肴の前　大話。

ちりうり【振賣】品物を荷ひて繁昌く呼びつゝ賣り歩くこと。

ちりきりみる【振向見】仰ぎ見ること。

ちりこむ【降込】雨などの降て降りつゝ入ること。

ちりこめる【降籠】雨などたえず降りて籠ること。

ちりつゝみ【振鼓】小兒の弄ぶ鼓。柄ありて結び、振りて鳴らすものを仮に作りて鳴らすものを鼓。＝鼓。

ちりはくて　わざ〳〵、こゝさらにの意あり。

（りぶり）

ちりぶり【振振】（春）正月男兒の弄ぶ具。木に彩にて兒の角の形を造りたる六つの角に種々の彩色して紐を附す。初め眼鏡紐（ぶり）といひて、土を出世（ぶり）といふ。

ちりぬる【塵塗】塵芥の堆積せる所。

ちりのこる【塵残】雨などの降残りて塵芥の残れること。

ちりばめる【散嵌】宝石などを所々に散布して嵌めること。

ちりはら【塵掃】塵芥を掃除すること。

ちりはらひ【塵掃】（秋）九月、茶家に於て塵芥を掃除する時行ふ茶事。（前を見よ。）　圖秋活けこめて出でし風爐の名殘惜しむ　吳山。

ちりぶり【塵呂炊】（冬）大根又は蕪の皮を剥ぎ、細切にしたるを、蒸し煮はゆでて、胡麻味噌をつけ喰ふ。冬季の食品。　圖風呂炊の一切つゝもこの一句哉　嶋雪。

ちる【散】なすことなくして、日を送るこゝ。

ちるあり【塵芥】塵埃。

ちるをとる【古】見治てられたる屯を いふ。

ちるを【古業】（春）鳥屋の業の去年より存すること。　圖出殿の古業たづれつ鳥引つ　召波。

ちるだおり【古田織部】名は重然。印賀之流の開祖なる。茶道を千宗易に學び、後に織部流の開祖となる。茶室に仕く、後、茶道に通じたる事想れて利休にもちる。

ちるつま【古妻】老いたる妻。昔の妻。

ちるとし【過年】（春）去年。新年に對する語。

ちるとのつこうだいこ【布留社炊】（秋）七月七日、大和國山邊郡石上布留社にて、大和中の個社集り、講會を催し、貢蕎麦の交三國を賦ひて行法する こゝ。

ちるびな【古雛】（春）古き雛人形。　圖古雛や昔の人の神几帳　蕪村。

ちるまつり【布留祭】（秋）九月十五日、大和國山邊郡石上布留社（茶家宗易の祖を新りし布部創を配る）の祭禮。

ちるみづ【振水】（夏）夏日、市中の軒ながに紙水を注ぎ、杓及び茶碗を置き、自由に紙水もしの。＝施行水。　圖町筆く振賣水の坐敷　召波。

ちるをとる【風呂】浴場の湯殿をいふ。

ちるをのみ【風雲茶】（夏）茶事をなすもの、四月より九月まで雲を茶まで風爐を用ゐ、紙炉屋の炉等を爐に、（朝茶湯をも見よ）俳諧にては寄り夏季とし茶湯で茶す。　圖風雲手前涼しき茶室こゝ　百川。

ちるをなこ【風雲名殘】（秋）九月、茶家に於て風雲を掃むる時行ふ茶事。（前を見よ。）　圖秋活けこめて出でし風爐の名殘惜しむ　吳山。

ちるをふ【風呂炊】（冬）大根又は蕪の皮を剥ぎ、細切にしたるを、蒸し煮はゆでて、胡麻味噌をつけ喰ふ。冬季の食品。　圖風呂炊の一切つゝもこの一句哉　嶋雪。

く

く【鍋】鍋の前方をいふ。

く【釜】土を焼きて造りし器。＝瓶。

く【壺】ほとゝり。

く【上】うへ。

く【鉸】鑢をくるこゝき糸をかくる具。

くは【桑】クワ。にきて。かてゝら。

くにやす【平安】京都の別稱。＝平安城。

くにやすじだいまつり【平安神宮時代祭】（春）十月中二日（新暦）。京都岡崎の西、宮殿社平安神宮（桓武帝を祀る。安澤第千百年の記念に、明治中八年造營す。其社殿はすべて古の八省院、大極殿に擬して作る）にて行ふ祭式。明治初年より別りて維川、天正、慶長、藤原、醍醐等、各時代の文武官に装ひたる祭行列を整へ、市中を練行す。之を時代祭といふ。　圖祭こゝ雲に青葉白虎湧　四明。

くにやすじやう【平安城】平安。

くにやうう【兩吉】魯の人。字は少卿。宣帝の時、等相こなる後、婚姻家に封ぜらる。昔、吉と龔勝は同じく王莽に仕へ、王莽の死に臨み、吉は龔勝に語ふ、「今、王莽の人に自由に殺されんとす。

ごりスキスキ句(初表八句、初裏、二の表、三の表裏、名残表各十二句)にて一巻をなすもの。一に米寄せ(モヨリヤマ)ともいふ。

くがつこそで【霜月】(冬) 四月の異名。

くがにこそで【平太】雅楽寮等に用ゐる舞楽の男面。

くがにたのこまおり【平太節季】(冬) 十二月節分の夜、門徒宗の寺々にて平太節(常陸国茨木の人、宗祖親鸞聖人の門弟)に関係す。曾て、夜、講堂に参詣し、参中に講、平太節を唱ひ、終りて、講堂に参詣し、参中に講、平太節を唱ひ、終りて、講堂に参詣し、参中に講、平太節を唱ひ、終りて

其葉紅色にして美白し。＝高花茶。赤茸。圖紅茸や美しい赤茸。

べにつつじ【紅躑躅】（春）ツヽジの一種、花も葉も紅色なるもの。

べにばな【紅花】（夏）草の名。春頃播き下し、夏に到り高さ三五尺、葉に刺多し。秋月、枝の末毎に花を生ず。黄色、花下に刺あり。早晩共に紅花小淡り淡紫に變ず。＝くれなゐ。紅藍花。末摘花（ばな）。圖夕雨やあり之も見ゆる紅の花　芭蕉。

べにばな【紅花】（夏）同前。

べにばな【紅藍】（秋）ヒヤツの一種。頭部深紅にして、底淡紅にヒヤツ類、形巻のヒヤツより小なり。

べにまり【紅花毬】（冬）晩冬、早春の頃、紅の花の蕾を毬ゝ之。圖紅毬や二人持ちたる女の子　以兄。

べにまと【紅巻子】（秋）マツコドリの一種。其羽毛赤きもの。

べにもり【紅百合】（夏）百合の一種。花は紅橙色にして美なり。

べにもり【紅盛草】（春）江戸にて紅橙（紅のかにて橙なり）を呼びて賞せり。

べに【蛇】（夏）蛇の類、夏多く出るものなれば挙ぐ。＝くちなは。

べにがにいも【蛇入穴】（秋）蛇、地虫の類の喪然になりて土中に入る。○地虫穴に入る。穴より蟄居するこゝ。○蛇も穴なくしたり秋のホ　一茶。

べにがにまり【蛇出穴】（春）冬季中地中に蟄居せし蛇、春に至りて穴を出づ。○地虫穴を出て三分の天下かな　子規。

べにもち【蛇苺】（夏）苺の一種、夏生にして原野に多く、冬枯れず。葉は互生し一苺に三葉を出す。春初、葉間に五瓣の黄花を開く。其實赤熟すれども苺のありて食ふべからず。圖がけ縁や高のの中なる蛇苺　通志。

べにもちのまなこ【蛇苺実】（夏）蛇は一年一回、多く五六月頃、其皮を脱し抜殻を草の末の面頭等に残す。＝蛇の殻。蛇の実。圖くちなはの実脱がけし実蛇苺　晩菊。

べにたけ【蛇茸】（秋）菌の一種。初茸に似て黄に斑なきもの。春あり。食ふべからず。圖蛇茸に何のしゝ草屋さび　夷欽。

べにばな【紅花茶】（夏）蛇苺を脱く。

べにまにまの【蛇殻】（夏）蛇苺を脱く。

べにまにまの【蛇苺】（夏）蛇苺を脱く。圖古道や一頭の夕日蛇の苺　古蟾。

べにもぐら【紅盛虫】（秋）蟻、蟻に似て黄赤の光ある甲虫。木の葉を食ひて生ず。飛ぶこゝなくして地上を行くに遇て、人之を捕ふれば音を出して屁臭を放つ。＝くつびり虫。紅蟲。圖御佛の放つ。

べにまじりにたちの【べにまじりの立の字を合して藍れに人の顔の形を書くこゝ。

べん【鞭】古く大政官に屬する庶務を いふ。左右、大中少あり。

べんべんがにまる【千利鞭】殷の人千利、鞭を刑山に持ちて、之を周王、武王の二代に勤むれども皆採ぜず。則（ゆゑ）ち鞭山の下に住ゝ、文王に至り王人をして殷いかしめ美玉を得たり。之を和氏之璧ゝ謂ふ。其後、紂の暴王、此璧を持しが暴の頭王、其後十王璧を以て代ゝ之璧ゝ謂ふ。＝璧天。

べんかい【鞭蓋】鞭蓋の臣。武蓋功ゝいふ。其家勇人口に能炙す。

べんけい【鞭蓋】竹にて作り、圖鞭を活に排す器。

べんけい【鞭蓋】蓮花の蓮華に て野狐同（ノスイコ）をいふ語。

べんけいこう【鞭蓋草】（秋）草の名。葉沿根より叢生し、高さ二三尺。葉面ゝ葉厚ゝ、緑に白粉あり。形ヒの頭の如し。秋、枝に五瓣の小白花集り開く。土を離れ秋蓋に日花ゝ活ゝ故に名ゝ。＝鞭天。清涼草。圖移居に鞭蓋草の強き故　刀光。

べんけいふ【鞭者】アバラ骨の合して一枚の如く見ゆる人。俗に一枚肋骨ゝいふ。

べんこう【遍光忌】　一周忌を云ふ。

べんこう【弁正】支那唐代の人。弁正、鞭國に仕ゝ中書郎となり。大力無双にして敵を征し功多し。晩て玄山ゝいふ山の麓にて二匹の虎に會ひ、直に之を以て之を打殺せしゝいふ。

べんこう【鞭毫】筆先の一語。左屑より右鋭に、ゝくるもの。又、直鋭（ヂキ）のこゝ。

べんこう【鞭鐘】支那、黄帝の時の神鐘の名。

べんこうがいこう【鞭光院】（春）さくら（桜忌）。

べんこうがいこう【鞭光院】（冬）東福寺開山忌。

べんこう【鞭鞭】医学の分りを見せて個を付きすぐる鞭鞭。＝鞭突。

べんこう【鞭突】鞭子出ゝ赤ゝの赤鞭の鞭を一々象句に就て試みしもの。

べんこのまい【鞭内侍】後醍醐帝の女官。後に補正行に賜ふ。正行鞭を試して之を鞭す。正行の戦死したる後尼ゝなりて大和に隠る。

べんぼう【鞭棒】棒鞭に貫肉の生じて六本の如く見ゆるもの。或は四指のみなる人びをいふ。鞭子に鞭棒あり。＝むつゆび。

べんりにたい【鞭唐題】支那鞭國六朝時代に行はれたる文體。四言又は六言の對句和を用ゐる故に四六文ともいふ。我國の和漢朗詠集などに散見す。

べん【蛇】（夏）蛇の一種、形巻の蛇の如く、毛は灰色にて雪丸く起の如く、よく泥を掘り魚を取る。

べん【蛇鞭】（冬）蛇の足につくる鞭。＝蛇。蛇鞭。（蛇のくたすすの鞭参照）

ほ

ほあか【頬赤鳥】（秋）ほあかしり。

ほあかどり【頬赤鳥】（秋）常に活同に棲む小鳥。形雀に似て小さく、頬赤ゝ所白く、背の色雀の如し。＝鶯は青シトヽに似て小鳥。形雀に似て小さく、頬赤ゝ所白く、背の色雀の如し。圖鶯は青シトヽに似て小鳥。形雀に似て小さく、頬赤ゝ所白く、背の色雀の如し。

ほ【布衣】狩衣の素敵なるもの。轉じて無位無官の人のこゝ。

ほあかり【ホイ賀鶴】賀鶴昇の略称。又、ほあかりに同じ。

ほいとん【布団】個人の着る袖無き衣。又、ほいとんの類をいふ。

ほうかたの【布帆】帆を巻の如く作りて、風を受ける装置

ほうきをさめ【鋒起納】(冬) 興福寺 法起納。
ほうけん【龍劍】ハウケン。
ほうこ【反故】ほご。ほうぐ。反古。
ほうこじ【龐居士】ハウコジ。
ほうことり【鳳五郎】鴛鳥のこと。
ほうしばり【棒縛】能狂言の名。
ほうじん【封人】領地の堺を守る番人をいふ。
ほうしん【棒心】古(支那諸暨縣苧羅村の若邪溪を隔てゝ東西に施姓の家あり。西施の女は絶世の美にして、東施の女は極めて醜なり。西施曾て心を病み顰を擧む。東施之を見て其美と稱せらるる所以と思ひ、又其心を棒へ顰せしに却て人の笑を獲しといふ。西施は越王勾踐が吳王夫差に獻じたる女にして、吳王之を嬖し遂に吳國を傾くるに至りしといふ。
ほうしんたん【豊心丹】奈良西大寺より出す藥の名。西大寺の條を見よ。
ほうせんくわ【鳳仙花】(秋) 草の名。高さ二尺餘、莖太く葉桃に似て細毛密生す。葉莖共に淡綠にして、夏より秋にかけ紅紫白等の花を開く。花の形鳳凰の舞へるが如くなれば名くといふ。‖爪根花。つまくれなゐ。圖 鉛豊の笛吹く門や 鳳仙 花 文路。

ほうそう【蓬窓】舟の苫にある窓。
ほうたう【餺飩】蕎麦を擣りて米の粉と練合せ、うどんの如く打ち、小豆の汁に浸して喰ふ食品。
ぼうたん【牡丹】(夏) ぼたん。古語。
ぼうたんのきぬ【牡丹衣】(夏) カサネの色目の名、表白、裏紅梅、又(表薄スハウ、裏白、(季は蘇がサネと同じく四月なれど俳諧には夏とす)
ぼうたら【棒鱈】(冬) 干鱈(ヒダ)
ぼうちやく【寶鐸】ハウチヤク。
ぼうつかひ【棒遣】長さ六尺程の棍棒を使ひて闘ふこと。
ぼうてふり【棒手振】品物を荷ひつゝ聲高く呼歩く商人をいふ。
ぼうねんをせり【豊年踊】(秋) 中秋より晩秋頃まで、稻の豊作を祝ひて各地に行はるゝ踊。多く盆踊に似たり。圖 豊年に江戸の曲輪も踊かな 俳文。

(鳳仙花)

ぼうばな【棒鼻】宿驛のはづれをいふ。
ぼうふら【南瓜】(秋) 瓜の一種。春苗を生じ蔓甚長く、一節毎に根ありて地に着く。葉は中空にして葉はからあふひに似て大く、夏、黄花を開き瓜を結ぶ。形圓く扁くして西瓜の如く竪にヒダあり。初め深綠にして熟すれば赤黄なり。京にてカボチヤ、大阪にてナンキン、江戸にてタウナスといふ。圖 南瓜やすつしりと落て暮寂し 素堂。
ぼうふり【子子】(夏) 蚊の卵の汚水に孵化したるもの。長さ二三分、色赤黑く、水中に浮沈し、後羽化して蚊となる。‖棒振虫。釘頭虫。圖 子子や照日に乾く根無水 太祇。
ぼうふりむし【棒振虫】(夏) 同前。
ぼうへいし【奉幣使】神社に奉幣する勅使をいふ。
ぼうらい【蓬萊】(冬) 新春、三寶盞の上に串柿、野老、橘、橙、榧、蜜柑、柑子、勝栗、梅干、昆布、のし、鶴亀、海老等を飾りて祝儀に用ゐるもの。支那の偽説に渤海の東に蓬萊、方丈、瀛州の三島あり。居る人皆聖仙にして不老不死、金銀珠玉

を以て宮闕とし、遠望すれば雲の如く、之に近けば水面下に見ゆとあるより、それに寄せて萬歳を祝ふ意なり。‖蓬萊盞。蓬萊飾。○掛蓬萊。喰積。圖 蓬萊の山まつりせん老の春 蕪村。
ぼうらいかざり【蓬萊飾】(冬) 蓬萊。
ぼうらいさん【蓬萊山】蓬萊の島をいふ。(蓬萊の條參照)‖よもぎがしま。
ぼうらいじ【鳳來寺】三河南設樂郡にあり、烟巖山と號す。推古帝の勅願所にして、僧利修の開基、天台眞言二宗を兼れたる有名の古刹。
ぼうらいたい【蓬萊臺】(冬) 蓬萊。
ぼうらくづきん【豊樂頭巾】(冬) 丸頭巾の類。
ぼうわうだう【鳳凰堂】びやうどうゐんを見よ。
ぼえかい【寶榮駕】(春) ほふかご。
ぼかけ【穂掛】(秋) 秋の頃、農家にて稻の收穫を祝ひて、新らしき藁に稻の穂を組合せたるものを、門戸又は土藏の扉などに掛くること。又、稻木のこと。圖 東路の世はおさ丸き穂掛かな 万紅。
ぼがひ【亂】いはひ。
ぼかね【行器】餅、强飯などの食物を入れて人に贈り、又は他へ携ふる器。形桂桶に似て三足あり。紐を掛けて蓋に結ぶ。
ぼき【寶蓋】古(支那にて祭祀に、穀を盛るに用ゐし樹。寶は外、方にして内圓く、蓋は外圓くして内、方なり。共に壹斗貳升を容る。
ぼき【寶蓋】一に金烏玉兎集と云ふ。安倍晴明が唐より傳えし暦日の書。
ぼき【崛路】谷にさしかゝれる嶮路。‖岸嶮。
ぼく【發句】俳諧の連句の始の一句、十七字ないふ、後獨立の姿となりて、專ら俳句と稱せらる。‖ほつく。
ぼくし【火串】(夏) 照射(ていさ)の炬火を挿む串。圖 曉は土に燃入る火串哉 闌更。
ぼくし【墨子】支那古代の哲學者。墨翟の兼愛説を述べしもの。
ぼくしいをかなしむ【墨子悲絲】墨翟、曾て白き糸を見て、黄にすべきか、黑にすべきかと言て泣き、其本同じくして末異るを慨きし故事。
ぼくしたんぶつ【北枳南橘】齊の晏嬰(字は平仲)楚に至りし時、楚王之を辱しめんとして、宴中、齊人の盜を犯したる人に謂し、嬰の面前に其鄕國を問ふ。郢人答て曰く、齊人國より盜を善するかと。嬰子席を避て答て曰く、聞く橘は淮南に生すれば則ち橘なり、淮北に生ずれば則ち枳となる。葉徒相似て其實味同じからず。水土異る故なり。今民齊に長ずれば不盜、楚に入れば則盜む。これ楚の水土の民をして盜を善せしむるなりといひ、却て楚王を辱めし故事。
ぼくしん【北辰】北極星をいふ。
ぼくすゐ【墨水】武藏國隅田川の異稱。
ぼくそ【爆】ほくちのこと。
ぼくそづきん【北叟頭巾】(冬) 苧にて作りし頭巾。眼ばかりを出すやう作りしもの。織田信長の被り初めしといふ。
ぼくも【火口】燧火を移すために用ゐるもの。イチビの幹を燒きて消炭としたるもの。又、ツバナ、パンヤなどに酒精と焰硝を加へて黑赤等に染めしもあり。‖ほくそ。
ぼくてい【墨堤】武藏國隅田川の東岸の堤。‖墨田堤。
ぼくてふ【墨翟】周時代の人。世に墨子と稱せらる。常に天下に周歷して道を説く。其著墨子は兼愛を説き儉約を説

ゆ。

ほくさ【北斗】星の名。北極に近く、七星ありて其第七を搖光といひ、一晝夜に十二方を指す。之を斗柄といふ。後、轉りて北極星のことなり。

ほくば【牧馬】花瓶の名器の名。信義、信明の兄弟、玄上、牧馬を彈せしこと拾芥抄に出づ。

ほくばう【北邙】火葬場のこと。古へ支那河南府にありし葬地の名より出づ。

ほくふう【北風】(冬)きたかぜ。

ほくば【木母】(春)梅の異名。

ほくめん【北面】院の御所を守護する武士。白河院のとき西面武士の外に更に此役を置かる。

ほくる【発倉】神社の寶庫。轉じて社のこと。＝祠。

ほけのはな【春蘭花】(春)山中に多き草。葉長さ一二尺、芒に似て短く綠なり。冬凋まず室三角形にて滿の如き筋あり。冬、紅白色の花苞を出し、二三月頃、蘭に似て青紅色の香氣ある花を開く。＝獨頭蘭。 圖 春蘭や狐が化けし女の子 青々。

ほけのはな【木瓜花】(春)古名モケ。山野に多く又人家にも植うる樹。枝葉落葉に似て幹に刺あり。三月葉に先ちて五瓣の花を開く。一重八重あり、色も紅白あり。實は秋季なり。木瓜の實の條參照。 圖 花咲いて木瓜よと思ふ野柴哉 中桂

ほけのみ【木瓜實】(秋)木瓜は秋實を結ぶ。長さ二寸餘、形瓜の如く熟すれば黃なり。 圖 木瓜の實やさられまじとて針の中 雙文。

ほこ【鉾】(夏)祇園會の鉾ないふ。(他の祭の鉾は各其名を冠し詠むべし)

ほこ【架】(冬)たかほこ。

ほごかみこ【反古紙子】(冬)反古にて張りし紙子。

ほこくぜ【鉾圓】(夏)六月六日、祇園會の鉾の順を定むるため、六角堂にて籤引を行ふ。此夜、山鉾の四邊に提灯なかゝげ蛙をなす。之を宵鉾又は宵山と云ふ。十三日又、山の順を定むる圓あり之を山圓といふ。 圖 鉾圓やいづれかちんの布袴 智先 ○月鉾も六日の宵の光かな 其成。

ほこすぎ【矛杉】眞直に生ひたる杉。

ほこたれ【樋垂】(冬)たかほこ。

ほこぬの【樋布】(冬)たかほこ。

ほこのちご【鉾兒】(夏)祇園會。 圖 かしこくも鳴鼓學びぬ鉾の兒 召波。

ほこのちごまをんまつり【鉾兒祇園詣】(夏)六月朔日、祇園會の鉾の兒に當りしもの、祇園社に詣ずること。其行列甚花美なり。

(鉾兒祇園詣)

ほこのちごまだい【鉾兒定】(夏)祇園の兒定め。

ほさ【菩薩】古へ長崎などへ來航せし支那人が、船中に祀る神。(ポサ祭參照)＝天妃。

ほさかのこま【穂坂駒】(秋)かひの駒。

ほさく【祝】祝ふこと。＝ほく。又、轉じて人の喋舌を嘲りて云ふこと。＝呟。

ほさつ【菩薩】佛陀の次に位する人。又、佛道に悟入したること。(サ行、又は行とも書く)

ほさつまつり【菩薩祭】(秋)八月廿二日、長崎在留の支那人、同所の唐人寺(崇福寺、福濟寺、興福寺、聖福寺の四所各、黃檗宗)にて媽祖神(天妃ともいふ。海上を守る神、長崎の俗に船菩薩(ボサ)といふ)を祭り、諸僧唐裝をなして法會を修する式。後酒宴を催し、參詣の唐人等、黑き棒を使ひて踊るを菩薩踊といふ。 圖 枸杞さげて歸船をよぶや菩薩祭 青々。

ほさをどり【菩薩踊】(秋)菩薩祭。

ほし【明星】(冬)神樂の曲名。

ほし【星】(秋)專ら七夕星をいふ。

ほしあひ【星合】(秋)星の契。

ほしあひのはま【星合濱】(秋)伊勢國にある名所。連俳にて名によりて季とす。

ほしいか【干烏賊】(夏)シホイカ。

ほしいね【干稻】(秋)稻干す。

ほしいひ【乾飯】(夏)善く精げし糯を洗ひ、炊きたる後、乾して粗く磨り碎きしもの。夏日水に漬して食ふ。＝糒。道明寺。引飯。 圖 乾飯や雀鳴なる尼が軒 得々。

ほしあ【暮秋】(秋)くれの秋。

ほしうり【干瓜】(夏)瓜を切りて乾し、酒、鹽などに漬て食ふもの。○かみなり干。 圖 乾瓜やうつむけて干す蜑小舟 其角。

ほしか【乾鰯】肥料に用ゐるため、鰯の油を絞りし滓を日に乾したるもの。

ほしかき【干柿】(秋)つりがき。

ほしかぶら【干蕪】(春)冬干して貯へたる葉を春食用とするもの。(干菜を見よ) 圖 魚濱や寺はたしなき干蕪。

ほしくさ【星草】(秋)沼澤、荒田などに生ずる草。高さ四五寸にして、葉は細長く、一株數十葉を叢生し、七月莖端に數蕚を出して小青白花を開く。＝穀精草。みづたま。 圖 露の世や先づ星草の星の露 流之。

(星草)

ほしくや【磯石】天より降り落つる銅鐵分を含める石。小惑星の欠片なりといふ。＝星石。

ほしこ【干海鼠】(冬)いりこ。

ほしこほる【星氷】(冬)冬夜、星の冴えて氷れる如き感あるをいふ。 圖 數の子の水や嵐に星氷る 都雀。

ほしこよひ【星今宵】(秋)星の宵。

ほしさき【星崎】尾張愛智郡本地村に在り。星の宮の社あり。

ほし【脯】干したる獸肉をいふ。＝膳。

ほしじろ【星白】鹿の上毛の白き斑點あるをいふ。

ほしすずし【星涼】(夏)夏の星。 圖 雷の雲をふまへて星すずし 子規。

ほしだいこ【干大根】(春)冬干し貯へたる大根を春になりて食用とするもの。(干菜を見よ) 圖 引延す聽がたくみや干大根 嵐山。

ほしづきよ【星月夜】(秋)秋夜、天晴れて星明に見え月夜の如くなるをいふ。 圖 星月夜空の廣さよ大さよ 尙白。

ほしづめまつり【鎭火祭】(夏)ひしづめまつり。

ほしな【干菜】(冬)冬、蕪、大根等の菜類の葉を、軒などに懸け日に干して貯へ食用とすること。＝懸菜。吊干菜。干葉

(元)釣る。圖 かさ〳〵と鳥のくぐるや 釣干柴　南窓。

ほしなでら【干柴寺】山城國愛宕郡百萬遍の西北にあり。千柴山光福寺ともいふ。古へ此寺より豊臣秀吉に干柴を献じたるより名く。又、六齋念佛の本山として名あり。

ほしのあき【星秋】(秋) 七夕。圖 七株の萩の手本や星の秋　桃青。

ほしのいりにも【星入東風】(冬) 十月吹く風の名。畿内及中國の語。

ほしのかしもの【星貸物】(秋) 星祭に供ふるものを總て貸すと稱すること。○貸小袖。圖 萩桔梗星に貸すべく野は成ぬ　曉臺。

ほしのこひ【星戀】(秋) 星の契り。圖 寄窠して見定めにけり星の戀　青蘿。

ほしのたきもの【星薫物】(秋) 星祭の時、空焚(ソラダキ)の香を供ふること。

ほしのたけ【星竹】(秋) 七夕竹。

ほしのたむけ【星手向】(秋) 七夕の祭。圖 よみ歌をひそかに星の手向哉　几董。

ほしのちぎり【星契】(秋) 七夕に二星の遇ふこと。＝星合ひ。星の戀。圖 星合や歌を詠じて蚊帳に入る　山峰。

ほしのひとよ【星一夜】(秋) 星の夜。

ほしのみやまつり【星宮祭】(秋) 七月七日、筑前國大島にある星の宮(牽牛織女を祀る二社にして、二社の間に天の河といふ川あり)の祭禮。

ほしのゆふ【星夕】(秋) 星の宵。＝星の一夜。

ほしのよ【星夜】(秋) 星の宵。＝星の一夜。

ほしのよひ【星宵】(秋) 七夕をいふ。＝星今宵。星の秋。星の夕。星の夜。圖 賀茂川や離やら渡る星の夕　士朗。

ほしのり【乾海苔】(春) 海苔を漉きて乾したるもの。

ほしのわかれ【星別】(秋) 七夕星の別れないふ。＝別れ星。圖 別れ星やがて木隱れて見ゆる也　曉臺。

ほしふぐ【干鰒】(夏) ひふぐ。

ほしぼとけ【星佛】(春) 年の始、禁裏にて九曜星(羅土水金日火計月木)の内、其年に當れる星の形像を、佛工所より献ぜしめ、陰陽家に命じて之を祭り災危を祓ふ式。民間にも此に習ひて星祭を爲すことあり。○星を唱ふ。圖 月花の願はやさし星佛　道彦。

ほしぼとけうり【星佛賣】(冬) 十二月十三日、民間にて星佛の像を賣るもの。圖 星佛晴明町に賣にけり。

ほしまつり【星祭】(秋) 七夕の祭。圖 風ふく庭に燈や星祭　雲程。

ほしみぐさ【星見草】(秋) 菊の異名。

ほしむかへ【星迎】(秋) 祭の用意して七夕を迎ふる意。圖 稗に笛つきさして星迎　一茶。

ほじん【滿人】(夏) 艾虎(ガイ)を見よ。圖 蓬生によき人かくれ滿人かな　知十。

ほしゅん【暮春】(春) 三月の異名。又、暮の春をいふ。

ほしろ【頬白】(秋) ほほじろ。

ほしをさたよ【星唱】(春) 星佛を祭るとき、星の名を唱ふこと。又、四方拜のとき に主上の星を唱へさせ給ふこと。圖 お物師や星を唱ふる鯨さし　泰清。

ほすすき【穂薄】(秋) 穂の出たる薄。圖 ほすすきや細き心の騒しき　一茶。

ほせつ【蒲節】(夏) 端午。

ほそぢも【蒲落】(夏) 瓜の熟したるを云ふ。

ほそぐわさ【細冠者】妾の柔しく綺めきし男をいふ。

ほそし(秋) ヒヨドリジヤウゴの和名。

ほそどの【細殿】宮殿の周圍にある廊下をいふ。

ほそもの【細物】素麺のこと。女房詞。

ほそをとこ【細男】(夏) 祭のとき、行列の中に、素袍、烏帽子にて笛ひゆき舞蹈など

する男。＝さいのを。

ほた【榾】(冬) 山中などにて薪に用ゐるもの。木の切株などを割きしもの。＝榾柮。骨薫炭(ホタヒ)。○榾火。圖 大津畫の鬼もよこれつ榾明り　閑更。

ぼだいじ【菩提子】(秋) 菩提樹の實。樹は椋の類にして、一樹に二種の葉あり。一は椋の葉に似て厚く大く、一は木犀に似たり。夏、後者の葉に花梗を出し花を開き圓實を結ぶ。淡黑にして堅く念珠などに製す。佛説に佛此樹の下に坐して正覺を成等せし故に名とす。圖 菩提子や終には揃ふ珠數の玉　大雅。

ほたき【火焚】(冬) たほたき。

ほだも【穂立】草などの穂の出ること。

ぼたり【穂蓼】(秋) 蓼の穂。

ほたてがひ【帆立貝】(春) 北海に多く産する貝。殼は開きたる扇子の如くにて一片は窪み一片は平にして、共に縱文あり。水面を行く時、其一方の殼を立て風に乘じて走ること帆の如し。＝海扇。圖 繪の浦や小さくかすむ帆立貝　旨原。

ほだらく【補陀寺】羽後國南秋田郡寺内村に在る寺。藤原藤房遁世の所と傳へいふ。

ほたのひ【榾火】(冬) ほだび。

ほたはら【穂俵】(春) ほだわら。

ほだび【榾火】(冬) 榾を焚きたる火。圖 客僧に狀見てもらふ榾火かな　此后。

ぼたん【牡丹】人家に培養する灌木。高さ二三尺、春葉を生じ夏の初に開花す。花は徑七八寸に至るものあり、紅紫黄白、重瓣單瓣等種類甚多く花中の最も艶美なるものと稱せらる。＝ぼうたん。異名)花の王。深見草。二十日草。客貴草。木芍藥。照咲草。名取草。錦草。圖 方百里雨雲よせぬ牡丹かな　蕪村。

ぼたんのねわけ【牡丹根分】(秋) 仲秋、秋分前後、牡丹の芽を移し植うること。圖 根を分る心久しき牡丹哉　萬嶺。

ぼたもち【牡丹餅】(春) 彼岸の供養に贈答する牡丹餅ないふ。圖 噂すれば牡丹餅來たり宵の春　竹の門。

ほたる【螢】(夏) 夏、水地に生ずる虫。大さ三四分、頭部赤く雄には黑き四羽あり て飛び、雌は這ふのみ。夜、其尻より燐の如き青き光を放つ。○螢火。螢見。螢狩。初螢。螢籠。螢寶。圖 さし汐に雨の細江のほたる哉　蕪村。

ほたるうり【螢賣】(夏) 圖 螢賣樣をぬらして歸りけり　可友。

ほたるかご【螢籠】(夏) 螢を入るゝ小き籠、竹又は曲物を薄布にて張りしもの。圖 水うちて火を灯さずや螢籠　久巴。

ほたるかつら【螢蔓】(夏) 螢草。

ほたるがり【螢狩】(夏) 夏夜螢多き處に遊ぶこと。又は小兒等、篠竹團扇などにて之を捕ふこと。＝螢見。圖 うき舟や落おさへて螢狩　几董。

ほたるさう【螢草】(夏) 山野路傍に自生する草。高さ尺許、葉は卵圓形にして微毛あり。五六月の頃、小花を開く、藍翠色なるもの多し。＝螢カツラ。瑠璃草。圖 觀音に出る古道やほたる草　杏園。

ほたるだに【螢谷】近江國瀬多、石山の間にある名所。夏夜、螢多く群るといふ。

ほたるび【螢火】(夏) 螢。圖 螢火や雀が家の竹のかげ　乙二。

ほたるひやうぶのすけ【螢兵部卿】源氏物語中の人物。源氏の弟。玉葛の君の顔を見んとて螢を集め放ちしよりかく呼ばる。

ほたるみ【螢見】(夏) 螢狩。

ほたるわら【穂俵】(春) ナノリソをいふ。冬時、之を取り、乾して藁にて束ね、俵の形につくり、正月蓬萊臺の飾とす。＝

神馬藻。ホンダワラ。 ㊀ 穂俵に何ぞ咲べき夜の雨　移竹。

ほつえ【秀枝】樹の上部の枝をいふ。

ほつがは【保津川】川の名。源を丹波國桑田郡の東北部より發して、山城に入り大井川となる。

ほつく【發句】ほく。

ほつけう【法橋】僧の位階の名。法眼に次ぐものにして、古へ五位に准ぜり。

ほつしんしふ【發心集】鴨長明の著。發心せる人々の事を書集めし書。

ほつしやう【法性】佛教の語。眞如といふに同じ。

ほつす【拂子】禪宗、淨土宗などの僧の用ゐる具、ハケヤの毛を束ねて柄を附けしもの。

ほつたい【法體】僧の形姿。

ほつそう【法燈】佛家の傳統のこと。

ほつま【秀眞】神代文字の一體をいふ。

ほて【最手】角力の大關のこと。

ぼていふり【墓丁振】ぼうてふり。

ぼてんせん【補天穿】（春）天穿。

ぼてりがき【ボテリ書】筆太に字を書くこと。

ほてる【方光】海に風吹んとする時、沖の方の光るを云ふ。＝颶毋。

ほど【土芋】（秋）芋の類、葉は豆の如く、根は圓くして皮黄み肉白し。黄色の皮の芋を附く。＝ほどいも。

ほどいも【土芋】（秋）ほど。

ぼとろ【暮冬】（冬）十二月の異名。

ほとぎ【缶】土器。中部大く口すぼまりたる瓶。酒を盛り又は打ちて樂器とす。

ほとけ【佛】平清盛の妾。加賀の産にして、もと都の白拍子なりしが、清盛愛妓、祇王を退けて佛を召す。後、祇王の庵に至り薙髪して尼となる。

ほとけかうりき【佛高力】高力清長のこと。德川氏譜代の臣、豫直にして家康の信用厚く、本多、天野と共に三奉行なり、就中、清長は寛仁温厚なるを以て人綽名してほとけ高力といふ。

ほとけたふれ【佛倒】能、又は能狂言などにて、人の切られしごころを演ずるとき、膝を突かずして後ろへ倒るゝをいふ。

ほとけのうぶね【佛産湯】（夏）佛生會。

ほとけのすぶね【佛屋】（春）春七草の一。鶏腸草（カハラ）をいふ。其葉地上に敷きて佛の蓮花座に似たるにより名く。〔異名〕田平子（タビヒ）。 ㊀ 若草となりし佛の御座かな　春風。

ほとけのはら【佛原】越前に在り。古へは加賀に屬す。月窓寺には佛御前の墓あり。

ほとけのはら【佛原】平清盛の愛妓、佛御前が昔語りを叙せし謡曲。

ほとけのわかれ【佛別】（春）涅槃會。

ほとけふみ【佛踏】（春）繪踏をいふ。

ほとゝぎす【保登鳴】（秋）鳴の類、常に杉の樹の下に居るといふ鳥。頭部に黄色の冠ありて頰は青色なり。＝杉鶴。

ほとゝぎす【時鳥】（夏）鳥の名。形ヒヨドリに似て、雄は胸腹共に淡黑、白斑あり。雌は胸翅ともに黑く腹白し。又、口中赤く頭に竪の毛あり。足やゝ青みを帶び、前翅に薄膜あり。自ら巣を營まず、鶯の巣を借りて産卵す。常に山中の樹上に棲み、初夏より日夜啼きて秋止む、其聲叫ぶが如し。俗説に人其聲を聞せば血を吐くといひ、又此鳥鳴くこと八千八聲に至れば血を吐きて死すといふ。＝郭公。霍公。杜鵑。杜宇。子規。蜀魂。〔異名〕不如歸。鷓鴣鳥。冥途鳥。四手の田長。賓手鳥。俱伎羅（クキラ）。謝豹。橘鳥。岐鳥。綱鳥。勸農鳥。時の鳥。アヤメ鳥。戀し鳥。三月過鳥（ミツキスギドリ）。童子鳥（ウナヰドリ）。 ○初時鳥。待時鳥。山時鳥。 ㊀ 鳴かである時や妻戀ふ時鳥　大魯。

ほとゝぎす【杜鵑草】（秋）山草の名、高さ二三尺、葉の形百合に似て秋の初め葉間に莖を出し、筆頭の如き蕾あり、花は六出にして中に一蕊あり花形をなす、葉に小紫點多く、杜鵑の羽の斑に似たり。＝油點草。

（草すぎゝとほ）

ほとゝぎすのはなしぶみ【時鳥落文】（雲）おとしぶみ。

ほとゝぎすのす【杜鵑巣】（春）ほとゝぎすの條參照。 ㊀ 行春を巣から覗くや子規　蕪秋。

ほとゝぎすのはな【杜鵑花】（秋）ホトトギス草の花。

ほとろ【熄】燈火の消えんとするとき、一たび明くなりて後忽ち落つるをいふ。

ほとろ【雹】厳の禮の聞きてほほけたるをいふ。

ほなが【穂長】（春）鼠茅の異名。

ほながうり【穂長賣】（冬）ジダウリ。 ㊀ 昨日來し土器賣や穂長賣　文章。

ほにいづ【穂出】隱れなくなりしこと。

ほねかはしんぼも【骨皮新發意】能狂言の名。

ほねしば【骨柴】刈りたる柴をいふ。其枯れたる狀を形容していふか。

ほねしやうぐわつ【骨正月】（春）廿日正月。（ハツカシヤ）。 ㊀ 山あるゝ骨正月の榾火かな　奇遇。

ほの【仄】僅かにの意ある語。

ほのぼの【仄仄】かすかの意。夜の明るこなどにいふ。

ほのめく【仄】かすかに知らるゝこと。

ほふいん【法印】僧の位階の名。最も高きもの。古へ三位に准ぜらる。又、轉じて俗に修驗者を呼ぶ稱。

ほふかい【法界】佛教にいふ世界一切のこと。

ほふかいまつり【法界祭】惜氣すること。＝界惜氣。

ほふきはじめ【法起始】（春）興福寺法起始。

ほふきをさめ【法起納】（冬）興福寺法起納。

ほふけん【法眼】法印に次ぐ僧位。古へ四位に准ぜらる。後世は繪所に此目を用ゐる。

ほふしやうじ【法性寺】古へ山城國愛宕郡鴨河の東にありし寺院。藤原忠平の建立せしところ。

ほふしやうじのにふだう【法性寺入道】藤原道長をいふ。

ほふしようじだいじやうゑ【法勝寺大乘會】（冬）十月廿四日より廿八日迄、京都岡崎附近にありし法勝寺（六勝寺の一、白川院の御願寺）の大乘會をいふ。

ほふだん【法談】一向宗にて信徒に其教義を説き談ること。

ほふぬん【法然】淨土宗の高僧。源空といふ。黑谷の叡空に從ひ、後源信法師の教を受けて、洛東吉水に戒法を説く。高倉帝の知遇を蒙り、時に活菩薩の稱あり、建暦二年正月、大谷寺に寂す、年八十。

ほふぬんや【法然忌】（春）ぎよき。

ほふぬんやう【法明忌】死後三十五日の間の法會を行ふ日をいふ。

ほふらくじ【法樂寺】摂津住吉郡田邊村にあり。治承二年、平重盛の創立にして水尊は如意輪觀音なり。

ほふりうじ【法隆寺】大和平群郡に在り。南都七大寺の一。古へ斑鳩寺といふ。聖徳太子、斑鳩宮の宮室は此寺の東院にして、寶器什物夥しく、建築も舊形を改

めすといふ。

ほふりうじ祭しき【法隆寺會式】(春)二月廿二日、大和國法隆寺にて開祖、聖德太子の忌を修し會式を行ふこと。

ほふりんじ【法輪寺】山城嵯峨の西にあり。本尊は虛空藏菩薩。天平六年の建立にして、僧道立の中興なり。

ほふりんじざくら【法輪寺櫻】(春)櫻の一種。花八重にして微紅を帶ぶ。

ほふろみそ【法論味噌】燒味噌を干し刻み、是に胡麻、山椒、麻實等を加へし食品。南部の僧、護命といふもの初めて製りしもの。‖ほろみそ。

ほふろみそうり【法論味噌賣】ほろみそうり。

ほほ【厚朴】(夏)ほほのはな。

ほほかしは【厚朴】(夏)仝上。

ほほじろ【頰白】(秋)小鳥。シト、の類。多く原野の地上に巢ふ。形鶯より大く、灰赤色にして脊に黑斑あり。眉と頰と白く、腹部赤黃に、尾と翅ほゝ黑く、尾の兩端に白羽あり。脚は赤黃なり。嘴圓滑にして鈴の如し。‖蒿雀鳥。ホシロ。圖 蓬吹くや秋の細みを鳴くほじろ 三津人。

ほほづき【酸漿】(秋)古名アカカガチ。草の名。春宿根より生じ高さ二三尺。葉

楕圓にして粗き刻あり。六月、葉の間に小白花を開き花の後、莢を結びて垂る。秋、外皮然して赤く、内に鮮紅の圓き實あり。女兒其肉を去り、殼を口に含みて鳴らし玩ぶ。‖鬼灯。圖 鬼灯や物うちかこつ口の内 太祇。

ほほづきのはな【酸漿花】(夏)ほほのき又はほほがしはとも云ふ。深山に多き大木。葉は柏に似て長さ尺餘、枝の梢に簇生す。夏、白木蓮の如き花を開く、大さ尺に近くして香氣多く、花中に紫心あり。秋實を結び紅熟す。圖 やり水の寫葉照すや厚朴の花 常晴。

ほまち【外利】定まりし利以外の益。又、密に金錢を貯ふこと。

ほむぎ【穂麥】(夏)麥の穗。

ぼん【盆】(秋)盂蘭盆のこと。○魂祭。魂迎へ。魂送り。魂棚。棚經。門火。迎火。送り火。施火。施餓鬼。墓參。閻寬參り。六道參り。生身魂(イキミタマ)。攝待。盆踊。盆市。燈籠。蓮葉寶。座幹寶。鼠尾草。圖 盆しばし黃昏さしもあらぬ哉 白雄。

ぼんあみ【本阿彌】德川時代に古筆家と共に、書畫、刀劍鑑定の家として幕府の祿を受けしもの。本阿彌光悅より起る。

ぼんいち【盆市】(秋)七月十日前後に、諸處に市立ちて盆躍の具(太鼓、盆太鼓、手拭、頭巾、作髭等)燈籠(鬼灯提灯、小行灯)獅棚の供物、其他土器、膳等を賣ること。‖草市。手向市。○燈籠賣。提灯賣。蓮葉賣。苧殼賣。盆太鼓賣。圖 草市や柳の下の燈籠店 子規。

ぼんいんばう【本因坊】歷代碁打として、德川氏より祿を受けし家。慶長時代算砂より起る。

ぼんか【本歌】和歌(三十一字のもの)をいふ。俳諧又は狂歌に對して。

ぼんかたびら【盆帷子】(秋)盆踊に着る帷子をいふ。

ぼんく【盆供】(秋)盂蘭盆のこと。

ぼんぐわんじのかどばな【本願寺籠花】(秋)七月七日、京都の東西本願寺にて、門徒、候人より、献上せ

(本願寺籠花)

る籠花(草花にて種々の形に裝ひしもの)を堂上に飾り參詣人に觀せしむること。七夕に供ふ意なりといふ。圖 籠花や年に巧みを盡しけり 春人。

ぼんぐわんじのとうろう【本願寺燈籠】(秋)七月十五日、京都西六條本願寺にて候人、門徒より献れる燈籠種々の人形を置き花を纏ふ)數個を堂内に飾り參觀者甚多し。

(本願寺燈籠)

ぼんどくじのむしばらひ【本國寺虫拂】(夏)六月廿七日、京鄂堀川、大光山本國寺(日蓮宗の本山にして、曆應四年、光嚴帝の勅によりて建立せらる)にて隔年、寶物の虫干を行ひ、日蓮の敎免狀、安國論、曼陀羅等を拜觀せしむること。

ぼんとも【盆東風】(夏)六月中旬の風をいふ。

ぼんない【梵妻】僧の密に畜へおく妻。

ぼんまん【盆山】盆の上に白砂を撒て山水を畫く技。又能狂言の名。

ぼんしませ【盆仕着】(秋)盆に屋人召使などに與ふる衣類。

ぼんしばゐ【盆芝居】(秋)劇場にて盆の頃、興行する狂言をいふ。

ぼんすま【盆過】(秋)盆前を見よ。圖 盆過や紛挽臼にも風の立 道彥。

ぼんだいこ【盆太鼓】(秋)盆踊に用ゐる太鼓。團扇の形したれば團扇太鼓といふ。寬政頃までは六月より七月の末まで玩具屋にて賣りしといふ。圖の如き形にて、竹にて緣を作り、厚き紙を張り、黃に染めて、丹色などにて草花などを畫き、膠を引きたれば打てば音をなす。後は眞の皮にて張りしといふ。

(盆太鼓)

ぼんだいこうり【盆太鼓賣】(秋)盆市。(前條をも見よ)

ぼんたうり【本田瓜】(夏)青瓜。

ぼんたのだんじり【譽田車樂】(夏)四月八日、河內國譽田八幡宮若宮(譽田祭の條參照)の例祭。車樂二輛を出すをいふ。

ぼんだまつり【譽田祭】(秋)八月十五日、河內國古市郡譽田村、譽田八幡宮(長野山護國寺ともいふ。應神帝を祭る)の祭禮。神輿渡幸し舞樂あり。

ぼんだわら(春)櫨佞の轉訛なり。

ぼんち【本地】すゐじやくを見よ。

ぼんぢん【本陣】貴人、大名などの宿る旅宿。

ぼんぢやうちん【盆提灯】(秋)盆會に用ゐる提灯。又、盆燈籠の類。‖岐阜提灯。圖 夕風や盆提灯も棚ばなれ 桃青。

ぼんつぬ【本詰】京祇園にて年增の遊女をいふ稱。

ぼんてうもんかん【本朝文鑑】各務支考の著。俳文の模範として歷代の短文を集めしもの。

ぼんてうもんぶん【本朝文粹】藤原明衡の撰。嵯峨帝より一條院まで二百年間の、高名なる人の詩文を集めし書。

ぼんてん【梵天】佛敎にいふ三界の一部。婬慾を離れて淸淨なる國なりと。

ぼんてんうり【梵天瓜】(夏)しろぼんてん。

ぼんとうろう【盆燈籠】(秋)燈籠。

ぼんともやろ【先斗町】京都鴨河の四岸、三條より四條の間にて、祇園と相對し、鴨川に臨みたる町。寛永四年初めて遊廓

ぼんだいこう 【盆提灯】（秋）盆に用ふる提灯。

ぼんだいこう 【盆大工】（秋）盆の前後に出でて、仏壇・厨子・位牌・棺・墓標・卒塔婆・経机・経箱・数珠・木魚・鉦・鐘・鐘撞木・鐘楼・鐘堂・鐘の音・鐘の響・鐘の声・鐘の余韻・鐘の余響・鐘の余音・鐘の音色・鐘の音調・鐘の音律・鐘の音響・鐘の音声・鐘の音波・鐘の音浪・鐘の音韻

後宮の妃嬪を畫かしめしとき、他の妃嬪、皆、毛に賂せしに、王昭君のみ其美を恃んで贈らざりしかば、毛其貌を醜く畫く。れ、昭君の匈奴に赴くとき、帝始めて其美貌の後宮第一なるを知り、大に悔ゆれども及ばず、因て毛を貴め、之を誅す。

さうか【孟夏】(夏) 四月の異名。

さうか【孟柯】孟子に同じ。

さうかうぜん【孟浩然】盛唐の詩人。王維、張九齢と友たり。曾て雪中、驢に跨りて梅花を尋ぬ。其詩皆自然を以て宗とす。

さうかのじゆん【孟夏旬】(夏) 四月一日、更衣の節會に、天子より臣下に宴を給ひ、一同に扇を頒ち給ふ式。一に扇の拜といふ。圖 給ひたる扇にあふぐ惠み哉　正信。

さうきのふぼく【盲龜浮木】佛說に、遇ひがたきことに遇ふ譬をいふ。＝浮木の龜。

さうし【孟子】支那戰國時代の人。名は軻、字は子輿。孔子の學を傳へて、孟子七篇を著す。

さうしう【孟秋】(秋) 七月の異名。＝初秋。

さうしゐ【申兒】神佛に祈りて設けたる兒。＝啓子。

さうしづま【申妻】神佛に祈願して得たる妻。

さうしでん【申殿】神社のうちにて祝詞を申すところ。

さうしふ【妄執】執念く思ふこと。

さうしぶん【申分】言ひ爭ふこと。

さうしやうくん【孟嘗君】支那戰國時代の人。名は文。齊の宣王の庶弟嬰の子、滑王の時、父に繼きて薛公となる。常に志士を愛養し、楚の春申君、趙の平原君、魏の信陵と相競ひて、天下の賓客を招致し、食客、數千を以て相誇りしといふ。又、嘗て、秦の昭王に囚へられ賢たり。孟嘗君人をして昭王の幸姫に囚を解かんことを乞ふ。幸姫曰く願ほ君の狐白裘を得んと、孟嘗君之を昭王に獻じて無し、即ち其食客の狗盗をなす者なして之を盗ましめ、姫に獻じて釋かるゝ事を得たり。聽せて未明、函谷關に至る、關法鷄鳴て客を出す。孟嘗君の客の中によく雞鳴を爲すものあり。他鷄悉く鳴き、遂に關を出たりといふ。

さうしゆん【孟春】(春) 一月の異名。

さうす【朝子】佛會の時、僧の被る帽子。

さうすう【孟隆】(春) 正月の異名。

さうそう【孟宗】支那廿四孝の一。吳の人。字は恭武。早く父を喪ひ母病篤し。母冬月、筍を食はんことを思ふ。宗、竹林に往きて泣く、時に地遽に筍數莖を生ず。又嘗て、自ら網を結び魚を取り、鮒に作りて母に贈りしといふ。

さうそうちく【孟宗竹】(冬) 竹の一種。支那產の舶來せしもの。莖太く直徑一尺に至るものあり。其筍は他の種よりも早く、冬のうちに生ず。之を寒竹の子と稱す。圖 人の親の年數へけり孟宗竹きせ女。

さうそうやま【孟宗山】(夏) 祇園會の山の一。孟宗が雪中に筍を掘る體を作る。圖 おなじくは孟宗山の雪も數れ　閑更。

さうちゆみ【侍從】天子に侍候する公卿をいふ。＝まへつきみ。

さうとう【孟冬】(冬) 十月の異名。

さうとうのじゆん【孟冬旬】(冬) 十月一日、宮中にて更衣の節會に、天子より、群臣に宴を賜ひ、一同に氷魚をたまふ式。

さうとうや【孟東野】唐の詩人。名は郊、字は東野。性狷介にして世と容れず、日毎に詩を作りて多く公務を見ず。其詩は深微にして後世に推稱せらる。

さうやう【孟陽】(春) 一月の異名。

さうりやう【團扇】影法師に同じ。又、山水木石の畫。＝題鞦。かげぼう。

さうろくづきん【老荒頭巾】(冬) ばうらくづきん。

さがき【薩】粗き竹垣をいふ。又、遊女屋の店格子をいふ。

さがき【薩】大坂新町の遊女。小唄をよくし、遂に一派をなして薩節と稱せらる。万治、正德頃の人。

さがきぶし【薩節】前條を見よ。

さがね【眞金】鐵をいふ。＝くろがね。

さがねふく【眞金吹】鍛冶の鐵をふくこと。より、吉備(ビ)或は壬生(ブ)の枕詞。

さかはんにや【摩訶般若】佛語。摩訶は大、又は勇偉の義。般若は智の意にて、大智識のこと。

さかまくら【眄】まぶた。

さかまくらいまはし、さがなしといふに同じ。

さがみふる【眞髮剃】櫛の枕詞。

さかも【眞鴨】(冬) 鴨の一種。常に暑稱して鴨とのみいふ。

さがり【曲杯】古昔、赤螺などの貝を磨りて作りし杯。後世は木にて造り漆を塗りて繒をつけ設にするもの。＝雁總。

さがりがね【曲尺】工匠などの用ゐる金屬製のものさし。曲りて角形をなせるもの。

さがりしもく【曲四目】圍碁の詞。布石法の一。

さがりみつのとよのあかり【曲水宴】(春) きよくすゐのえん。

さかる【除】俳諧の卷に宗匠の點の掛からぬ句を云ふ。

さき【眞木】羅漢松(イヌ)のことを云ふ。或は檜、杉、樅などの總稱なりといふ。

さき【卷】連俳の用語。連句の一卷をいふ。圖 卷いふ。又、俳諧の句を書集めしものの一綴をいふ。

さきうる【橫賣】(秋) 六道參(ロクダウ)を見よ。

さきえに【卷環】冠の纓の內方に卷きわげたるもの。

さきかふ【橫買】(秋) 六道參を見よ。圖 橫買うて方七戾りの玉祭　召波。

さきかへりとしまみ【卷返曆】(冬) ふるごよみ。

さきぎぬ【卷絹】勅諚により三熊野に納むべき卷絹を運參して、罪にあてられんとせしが、音無天神に歌を捧げし德により助かることを作りし謠曲。

さきのしま【橫島】山城國宇治川、宇治橋の西北に在りしといふ島。

さきのせ【橫尸】橫にて作りし板戸。多く伦住の意にいふ。

さきのは【橫葉】(秋) 魂祭の條を見よ。圖 橫の葉やまた干ぬ露のたま迎　杜右。

さきのを【橫尾】山城葛野郡にある山。山上に西明寺あり。律、眞言を兼ぬ。

さきは【卷葉】(夏) 蓮(ハチ)を見よ。

さきばしら【橫木柱】橫の木の柱。又、ふとときにかけていふ枕詞。

さきふり【卷筆】軸を糸にて卷きたる筆。

さきむくやま【卷向山】大和國城上郡にありて、三輪山の東北に聳ゆる山。

さきをきむしごよみ【卷納曆】(冬) ふるごよみ。

さきをはるしごよみ【卷終曆】(冬) ふるごよみ。

さくことば【幕詞】場所と場合とに由りて詞に高下あるないふ。もと武人などの通語に、味方の幕張れるを打つといひ、敵のは引くといひ、船には走らかす、座敷にはかこふなどと其時々により異りたるより出づ。

さくず【眞葛】(秋) 葛の美稱。圖 猫狩やうらみを返す眞葛原　東順。

さくずがはら【眞葛原】京都東山、祇園の南にあり。名所古跡多く所在す。

さくなぎ【蜂】(夏) 蚋に似たる小虫、夏時群り飛び人をして瞬せしむる故に名く。一にミヅスマシのことなりといひ、カツチムシと名く。＝蠛蠓。圖 蜂

や飛では休む瓶の中　德元。

まくなぎ【眼合】眼を見合すこと。‖めくばせ。

まくは【真桑】(夏)まくはうり。

まくば【耙】水田をからすきにて鋤きたる後、泥をならすに用ゐる鍬。‖馬耙。

まくはうり【真桑瓜】(夏)アマウリともいふ。春種を蒔き蔓を延ひて、大さ數寸の葉を着く。五六月の頃、黄花を開き、七月頃瓜を結ぶ。長さ四五寸、徑二寸餘、楕圓にして末やゝ細し。熟すれば黄にして細き絲道あり。味甘く夏熟する冷を待たず、多く水に冷して食ふ。之を冷し瓜といふ。‖甜瓜。　圖 初真桑

まくはし【美】うつくし。うるはし。

まくらかけ【枕掛】物の勘定を頭割にすること。

まくらがみ【枕上】枕元。枕頭。

まくらかや【枕蚊帳】(夏)ホロかヤ。

まくらごきろ【枕慈童】謠曲菊慈童の別名。

まくらずまふ【枕相撲】兩人にて互に握り拳の上に枕を立て落し合ふて勝負する遊戯。

まくらだんロ【枕關子】死人の枕元に供ふる關子をいふ。味を付けず白きまゝにて土器に盛るもの。

まくらだんす【枕簞笥】箱枕を五箇又は十箇づゝ重ねて入るゝ箱。元祿以前には下賤の者に非ざるし箱枕を用ゐし故、其枕簞笥には金蒔繪などを施したるものありしといふ。又、枕邊に置きて調度などを入れおく簞笥にも此名あり。

まくらつくゑ【枕机】死人に供へたる物を載する机。

まくらのうらし【枕双紙】清少納言の書ける假名文の隨筆。

まくらばこ【枕箱】枕簞笥の類。

まくらびき【枕引】兩人にて枕を指先に挿みて肱なつきしまゝ引合ひて勝負する戯。

まくらものくるひ【枕物狂】能狂言の名。

まくり【海仁草】海藻の名。海中の石上に生じ、長さ一二寸にして岐あり。其煎汁を甘草に合せ、赤兒の生れしとき、乳の出づるまで呑しむ。

まくろ【鮪】(冬)魚の名。大なるは八九尺に及び、全身青黑にして鱗なく、腹白くして頰の下に青き斑あり。頭大く嘴尖り、鼻長く、脊に刺戟あり。肉赤くして味美なり。冬を漁期とす。畿内にてハツと呼ぶ。○シビ。

まけぎり【負鶏】(春)鶏合にて負けし鶏。勝鶏に對して。

まけぼる【負腹】負けて立腹すること。

まこびやくし【孫杓子】孫嬀子とも書く。陸前國南條郡鳴尾峠の嶺にある茶店。疱瘡神の守り札を出すを以て知らる。

まこびらう【孫次郎】若き女の容したる能面。

まこびらう【孫次郎】砧の異名。

まこのて【麻姑手】長き柄の端に竹などにて五指の形を刻みしものを附け背を掻くに用ゐるもの。

まこも【真菰】(夏)まこもかるを見よ。

まこもうま【真菰馬】(秋)ムカヘ馬。

まこもかる【真菰刈】(夏)真菰は池澤に生ずる水草。春舊根より生じ、芽は筍の如し。五六月頃、高さ三四尺となる。葉は互生して長さ二三尺、菖蒲に似て薄く緑甚鋭し。夏莖頭に二尺許の穗を生じ、小き淡紫花多く綴る。夏、刈りて席などに織る。(花かつみの條參照)　圖 水深く利鎌ならずまこも哉　蕪村。

まこもちまき【茭粽】(夏)古へ唐の代の粽の名、カクシロの條參照。

まこものはな【真菰花】(夏)花かつみ。

まこやし【首宿】(春)うまこやし。

まころくやしき【孫六屋敷】古へ刀工、關の孫六が美濃國にて德川家康より賜はりし屋敷。

まさき【正木】(秋)まさきの實。又、まさきのかづら。

まさきく【真幸】さいはひに。

まさきづら【真拆葛】(秋)マサキノカツラ。

まさきのかつら【真拆葛】(秋)俗に正木の蔓と書す。蔓草の一種。蔦の類にて秋の頃紅葉するもの。‖マサキヅラ。」又、蔓草の常緑なるものの總稱。　圖 君が代やまさきの葛いと長し　由平。

まさきのはな【正木花】(夏)正木の實。

まさきのみ【正木實】(秋)實を季とす。樹は高さ二三丈に至り、葉は楕圓にして厚く深緑色、四時凋まず、五月葉間に枝を分ちて小白花を開く、ニシキギの花に似たり。秋實を結ぶ、圓くして南天の實に似、熟すれば自ら裂けて紅肉出づ。‖柾。冬青。ハヒマユミ。　圖 となりから實をこぼしたる柾かな。　冷玉。

まさきもみぢ【正木紅葉】(秋)秋、マサキノカヅラの紅葉したるをいふ。

まさくり【馬逢】さくりを見よ。

まさぐる【弄】手にてなぶること。てすさぶ。

まさご【真砂】海邊の細砂をいふ。

まさつね【雅經】藤原頼經の子。飛鳥井家の祖たり。後鳥羽帝の時、定家卿と共に新古今集を撰す。兼て蹴鞠に巧妙にして、遂に其家統を興す。建保六年薨す。

まさもし【昌俊】佐川田喜六といふ。始め越後長尾家の士、木戸氏に仕へ、後、永井直勝の臣となりて大阪の役に從ひ戰功あり。又和歌を嗜み、吉野山の詠を以て後水尾院より感詞を賜はる。後、山城薪里に隱れ、壺齋と號して專ら歌詠に耽る。寛永二十年歿、年六十五。

まさなひこと【不正事】よからぬこと。又は見慣に類したること。

まさひら【匡衡】たゞひらを見よ。

まさふさ【匡房】ただふさを見よ。

まさまさ【正々】ありありと、まさしくの意。‖目前。

まさむねまつり【當宗祭】(夏)(冬)四月上酉日、及十一月上卯日、河内國南河内郡響田の北、玉水町なる、當宗神社（字多帝の外祖父なる當宗忌寸の祖神三座を祀る）の祭禮。上午日、朝廷より奉幣使、本社と杜本社を兼ねて下向す。

まさりくさ【優草】(秋)菊の異名。

まし　未來を想像していふ助働詞。

まじ【西南風】西南の風をいふ。船人などの語。

まじど【益子】下野芳賀郡の地。西明寺とふ觀音の札所あり。

ましど【猿】さるの異名。

ましど【猿子鳥】(秋)ましこどり。

ましどり【猿子鳥】(秋)シトドの類。大さ雀の如く、全身灰黑、翅に黑斑あり。胸腹淡紅にして頭部より胸まで白圈あり。嘴短くして赤黑く、脚黑し。性剛にして聲喧し故に名く。‖突厥雀。○テラマシコ。紅マシコ。　圖 詳れて來て猿子や寺の大銀杏　優々。

まじみづ【真清水】(夏)清水に同じ。まは發語。

ましら【猿】さるの古名。

ましらげのよね【真精米】よく舂きたる米をいふ。古語。

まじろぐ【瞬】(春)またたく。

ますず【鱒】(春)東北地方に多く產し、淡鹹相交る水に棲む魚。大なるは三尺に餘れるあり、性强健、形鮭に似て鱗細く腹白く、脊青くして赤斑あり。春夏子を產むため河に溯る。肉の紅きこと鮭の如く味更に勝れり。　圖 夕川や鱒に打れし獺の聲　閑更。

ますず【座】いますの略。

まうす【申】まうすの略。

まうす【老長】おとなびたること。＝ませる。

まうだおし【桝落】鼠を捕るため、餌を置きたる桝を横に立ておき、鼠來りて桝を踏めば、桝は倒れて鼠を被ひ伏するやう仕掛けしもの。

まうかがみ【眞澄鏡】よく澄み光る鏡をいふ。＝ますみのかがみ。十寸鏡。

まうかふ【升買】(秋)實の市を見よ。 ㊀ 升買ふて分別かはる月見かな　桃青。

まうつき【升搗】(春)元日。北國地方にて、烏の聖を聞きて、其年の豊凶を卜することなりといふ。

まうつぶり【桝頭巾】(冬)頭巾の一種。頂を四角に作りしもの。

まうのいち【升市】(秋)實の市。 ㊀ 飯干して桝を枕や市の月　柳居。

まうほ【十寸穂】(秋)まそほのすすき。

まうみかがみ【十寸見河東】江戸品川の人。姓は伊藤氏。江戸中太夫の門に遊び浮塵子を學び、遂に一派をなして河東節といふ。享保十年歿。

まうを【十寸緒】(秋)まそほのすすき。

まを【苫】竹垣の低きものをいふ。

まをがき【間狭垣】(秋)魂棚に供ふるもの。杉の葉などを結びて垣の形に作りしもの。

まをほ【十寸穂】(秋)まそほのすすき。

まをほのすすき【十寸穂芒】(秋)薄の穂に出でたるをいふ。穂の長くして赤き意にて眞麻緒(マヲ)、眞森芳(マヲ)等の字をも當てれども皆根據詳ならず。 ㊀ 垣くぐる薄一本ますほなる　葉村。

まを【眞麻緒】(秋)まそほのすすき。

まだ【未】時早きこと。

またげ【跨】股を開くこと。

またげ【股毛】奥州、出羽地方にて獵師の熊狩に出る時、熊の皮を全身に着て、熊の如く扮裝するをいふ。(熊突の條參照)。

またろう【又五郎】徒然草に見えたる衛士の名。年老いてよく朝儀に明らかなりしといふ。

またし【未】いまだ時はやきこと。

またたびのはな【木天蓼花】(夏)深山に蔓生する灌木。葉は楕圓にして末尖り、細き鋸齒あり。春其若葉を食用すれば味辛し。仲夏、梢の葉變色し、葉間に五瓣の白花を開く形梅花に似たり。實は細長く梭の如く、内に細子あり、味辛く食用、藥用にしも。世に猫の薬とす。＝夏梅。 ㊀ また、びに花見顔なる小猫

哉　存義。

またね【又寝】夜中眠覺めて再び眠ること。

またへい【又平】元祿頃、近江國大津に住せし畫工。粗末なる彩色を以て浮世畫を描き、大津畫の祖をなす。世に大津又平、浮世又平といふ。

またらかみ【摩多羅神】(秋)うづまさのうしまつり。

またろく【又六】酒屋の異稱。

まちかど【町駕籠】辻などにて賃錢を定め人を乗する駕。左右の戸なき故、戸無駕ともいへり。

まちぎよろう【待女郎】婚禮の時、窮の方に在りて新婦を迎ふる侍女。

まちはづれ【町外】町を出外るところ。

まちん【番木鼈】熱地に產する毒草。瓜哇島の產多く舶來し、毒藥とせらる。

まちやつこ【町奴】德川時代の始めに、浪人又は町人の男伊達が、奴の伊達風を眞似しもの。六方組など稱するも此類にして、其言語に一種の風あり、奴言葉、六方言葉などいへり。

まちわかしゆ【町若衆】町にある若衆。

まつ【松明】たいまつ。＝炬火。繼松。

まつり【松實】(冬)飾松實。

まつり【抹香】樒の葉と皮とを乾して刻み、

しもの。佛前に供ふる香とす。

まつかげのすすり【松陰硯】平清盛が支那より將ひしといふ古硯。鎌倉光明寺の什物なり。

まつかさ【松笠】松の實を包みたる球狀の殼。＝松ふぐり。

まつかさいり【松笠煮】鯛の身を鱗形に切り恵丁目を入れて松笠の如き形とし湯びきて、味噌煮としたる食品。

まつがさき【松崎】山城國愛宕郡高野村にあり。古へ氷室のありしところ。

まつがさきにいもくさきり【松崎題目踊】(秋)題目踊。

まつかさにんぎやう【松笠人形】元祿頃流行せし小兒の飯具。松毬を胴にして首手足を付け彩色したる人形。

まつかざり【松飾】(春)門松。

まつかぜ【松風】在原行平が須磨にて寵愛せし松風、村雨の姉妹の靈、旅僧に昔を語ることを作りし謠曲。

まつかぜのしぐれ【松風時雨】(冬)松吹く風を時雨と聞たがへたるをいふ。 ㊀ 住吉は左右に松風時雨哉　嵩雅。

まつかはうら【松川浦】今の岩城國相馬郡に屬す。東奥屈指の勝地にして、浦に十二景の勝あり。

まつかはぎし【松皮鮒】(夏)じやすし。

まつかはぼうし【松皮帽子】鷹飼が犬を牽く時に着る帽子をいふ。製作定まらず。

まつがをか【松岡】相模國鎌倉にある地。古へ、こゝに尼寺ありて、女が夫の放蕩なるため離縁を求むるも、夫の應ぜざる時、寺に、この寺に入り三年間籠居するときは、夫も之に交渉する能はざる掟ありきといふ。

まつかん【松阪】伊勢飯南郡にある市街。

まつぐさらの雲母【松模衣】(春)カサネの色目の名。表紫。裏薄紫。

まつしぐら【驀地】わき目もふらず、一散に。意。＝驀直。驀忽。

まつしたぜんに【松下禪尼】北條時賴の母。賢婦の名高く、時賴の治世多く其教によるといふ。嘗て手づから障子を切張して訓誡をなしゝこと人口に膾炙す。

まつしま【松島】陸前宮城郡に屬する勝地。日本三景の一。

まつしや【末社】幣間。たいこもち。

まつすぎ【松過】(春)正月の松の内を過ぎて松飾を取りし後をいふ。＝注連過。

まつだけ【松茸】(秋)山中の雌松多き處に生ずる茸。蓋の上は紫黑色にして裏は白く、莖の皮は淡褐色なり。低きは一二寸、高きは尺に至る。香氣多く味美なり。中秋より晩秋を季とす。山城の北山の產最も名あり。○鶏茸。 ㊀ 松茸やひさつ見つけし闇の星　素堂。

まつたけめし【松茸飯】(秋)きのこ飯。 ㊀ 松茸の目黒廻りや飯時分　半斗。

まつたつる【松立】(春)門松。

まつちやま【待乳山】江戸淺草今戸にある小丘。觀喜天の祠あり。隅田川を隔てゝ向島を眺望す。

まつとる【松取】(春)飾取る。 ㊀ 松取て春や昔の門の月　浮大。

まつな【松菜】(春)草の名。杉菜の類、葉は松葉に似て秋花を開く。春の頃、其苗葉を食用とすれば季とす。

まつなかのはなびまつり【松永煙火祭】(秋)八月廿七八日、備後國沼隈郡松永村、潮崎神社の祭禮。同所鹽濱にて大銃の煙火を打揚げ、神輿を船に載せて渡御す。

まつなへうらる【松苗植】(春)一月の頃、松の苗を植うること。

まつのうち【松内】(春)正月元日より十五日迄、門戸の飾物を存する間をいふ。江戸にては七日迄とす。＝注連の内。

㊀ 口紅や四十の顔も松の内　子規。

まつのおく【松奥】山口素堂が紀行を記したる書。

まつのたもと【松落葉】(夏) 常盤木の落葉。 ㊀清瀧や波に散り・む青松葉 桃青。

まつのくるね【松位】遊女の太夫をいふ。秦の始皇の狩に出し時、俄雨に遇ひしを、松陰に寄りて避けしかば、松に太夫の位を與へし故事より出づといふ。

まつのせい【松之精】能狂言の名。

まつのは【松葉】元祿頃の小唄を集めし書。著者詳らかならず。

まつのはな【松花】(春) 松は二三月の頃、粉の如き青黄の花を出す。(古へ一月の季とす)。＝十返花(トカヘリ)㊀ 夕風や松の花散る海邊 冬季。

まつのはる【松春】(春) 歳旦の祝語。松に寄せて祝ふ意。 ㊀ 住の江や花ともいはす松の春 蕉太。

まつのみどり【松實】(秋) シンチャリ。

まつのみどり【松緑】(春) 若松。

まつのを【松尾】松尾明神の神饌を述べたる謡曲。

まつのをだいり【松尾御出】(春) 三月中卯日。山城葛野郡松尾社(松尾祭參照)の神輿七基、桂川を渡り四七條の御旅所に幸し、四月の酉日まで留ること。

まつのをしんぜんのすまふ【松尾神前角力】(秋) 八月朔日、京都松尾社にて行ふ神事の相撲。力士を京方、嵯峨方に分つ、古は禁裏の角力の節會に擬し行はれしといふ。

まつのをのう【松尾能】(夏) 夏の土用の頃、京都松尾社にて行ふ能樂。

まつのをまつり【松尾祭】(夏)(冬) 四月上申日(後世上酉日とす)及び十一月上卯日、山城國葛野郡松尾神社(祭神大山咋命、市杵島姫命)の祭禮。神輿七基、内一基を武御輿、又は俗にネボレの宮といひ、毎年白木にて新造す。神幸の後桂川の東に捨つ、翌日兒童再之を舁き、後之を破碎して木片を持歸り厠に挿みて疫を祓ふ呪とす。 ㊀ 松の尾の神輿豆び ぬ参の中 秋水。

まつばしく【松葉敷】(冬) 冬、松の落葉の赤く枯れたるを庭上、路次などに敷き地上の霜除とすること。＝敷松葉。

まつばぼたん【松葉牡丹】(夏) 草の名。高さ三四寸枝繁く、葉細くして厚く、其枝に豆びつきたる狀松葉の如し。夏美しき花簇り開く。色種々あり。 ㊀ 敷石の眞畫を松葉牡丹哉 蓼人。

まつばやし【松囃】(春) 謡ひ初を見よ。＝松拍子。 ㊀ 住の江の波の鼓や松拍子 令德。

まつふぐり【松球】まつかさ。

まつほとゝぎす【待時鳥】(夏) 時鳥の鳴音を待つ・こと。 ㊀ 子規またわ心の折もあり 尚白。

まつまへかへる【松前歸】(秋) 松前渡るを見よ。

まつまへわたる【松前渡】(夏) 古へ南部、津輕地方の商人、交易の爲め、蝦夷松前へ渡るに、冬季は風波高きを以て、四月始めて渡り、九月限りに歸國す。松前渡は夏季にして松前歸るは秋季なり。 ㊀ 船數も揃ふ松前渡かな 定武。

まつみどり【松見草】(春) 藤の異名。

まつむし【松虫】(秋) 野草、松杉の蘿などに多き虫。形コホロギの如く、褐色にして腹黄なり。秋夜鳴く聲チンチロリンといふ如し。＝金鐘兒。(古は鈴虫を松虫といひて全く相反せり)。 ㊀ 松虫や灯青き西の對

(虫松)

弄我。

まつむし【松虫】松虫を愛せし人の置、津の國阿部郡に菊花の酒を酌みて昔を語ることを作りし謡曲。

まつむしり【松毫鳥】(春) 菊戴鳥(キクダキ)の類、形小く、翅灰色にして、山中に棲み、春松の絲する頃、人家に近く來り松の葉を食ふ。 ㊀ 飛むで又絲に入るや松むしり 惟然。

まつもとまつり【松本祭】(夏) 五月一日、江州大津松本神社(祭神仁德天皇。離波の平野社を移すところといふ)の祭禮。 ㊀ 松本の祭やいつも雑魚鱠 真昌。

まつやま【松山】伊豫温泉郡の市街。久松氏の舊城下なり。

まつやまかがみ【松山鏡】越後の松の山家の女、母の笹の鏡に我影のうつるを見て母と思ひ悲むことを作りし謡曲。

まつゆづりは能狂言の名。

まつよひ【待宵】(冬) 八月十四日の夜をいふ。十五夜の月を待つ意なり。○待宵の月。 ㊀ 待宵や女主人に女客 蕪村。

まつよひぐさ【待宵草】(夏) つきみ草。

まつよひのじじゆう【待宵侍從】高倉院の侍女、阿波局のこと。「待宵に更行鐘の聲きけば飽わ別の鳥は物かは」の歌を詠せしより名を得たり。

まつよひのつき【待宵月】(秋) 小望月ともいふ。八月十四日の月をいふ。＝待宵。 ㊀ 待宵や日の影殘る萩湯 杜音。

まつらがた【松浦潟】肥前國松浦の海邊をいふ。佐用姫が狹手彦の船に別れし古跡あり。

まつらさよひめ【松浦佐用姫】大伴狹手彦の妾。宣化帝の二年、狹手彦、命により任那に航せんとて肥前國を發す。姫別離を悲みて山に登り、船を見送りて領巾を振り船を麾きて號泣す。後人其山を領巾振山(ヒレフリヤマ)といふ。

まつらぶね【奉】服從すること。

まつらぶね【松浦船】肥前國松浦の海邊にある舟。

まつり【祭】(夏) 俳諧にて單に祭といへば、加茂祭をいふ。其他の地方の祭を夏祭、里祭といふ。 ㊀ 里の子の宵宮にいさむ祭かな 其角。

まつりのくるま【祭車】賀茂祭の時に用ゐる輦。

まつりのはな【茉莉花】(夏) 熱帶地方に產する樹。高さ一二尺葉は圓くして對生し、夏五瓣の鐘大の花を開く。夕に開き朝に落つ。クチナシの花に似て香氣高く、初め白く、後黄に變ず。

(莉茉)

まつをだし【松尾】梨】(秋) 岩代會津松尾に產する梨。實の形、觀音寺梨に似て水氣多く味甘し。

まつりごとはじめ【政事始】(春) せいじはじめ。

まて【左右】みぎひだり。兩手のこと。

まて【馬刀】(春) 海中の沙泥に生ずる貝。長さ三四寸、太さ指位にて、兩殼合ひて竹筒の如く首尾少く平し。殼は青黑くして黄を帶ぶ。肉は蠣に似て細長し。捕りて食用とす。＝ナガタ貝。 ㊀ 馬刀むくや阿波の公方の蔵所 春甫。

まてとり【馬取】(春) 干潟の時、海邊の砂中なる馬刀貝の穴を擂り、

(刀馬)

之に潮を注げば、貝は再び潮來りしと思ひ浮び上るを棒にて突き捕ふ。＝まで突。まで堀。國まで堀を並べて照らす朝日かな　大峨。

まどころ【政所】政事を執行ふ所。

まどせん【窓錢】寶永の頃加賀國にて、農家の窓一つに、錢二百文づゝの賦税ありしをいふ。

まとのはる【窓春】（春）歳旦の祝語。家の春。

まとはじめ【的始】（春）弓始。

まとり【眞鳥】雄略帝以下四朝に歷事せし大臣。鯖威な恃みて驕暴度なかりしかば、大伴金村、命を奉じて大和國平郡に之を誅す。

まとりす　船頭のこと。龜語より出し語。

まなかつを【眞鰹】關四の海に多く産する海魚。形圓く扁平にして、鯖に似、全身白くして鱗極めて細し。＝鰹。

まなきりはじめ【俎切始】（春）正月二日の夜、京都禁裏御厨所、高倉、大隅兩家にて行ふ俎板始の式。＝庫那切始。

まなこ【眞名子】實子のこと。

まなばし【俎箸】魚を料理する時に用ゐる箸。

まにをぎり【摩尼節】（秋）紀州高野にて行はるゝ盆踊をいふ。

まののいりえ【眞野入江】近江國堅田の北方の湖邊。

まはりずみ【廻炭】（冬）茶道七事の一。茶席にて其席の上座より詰までの人、交るがるに爐中に炭をつぎ、炭手前の手練を競ふこと。　國　春かよふ爐中の雪や廻炭　青々。

まはりぢうろう【廻燈籠】（秋）小兒などの弄ぶ燈籠、影繪などの廻轉するもの。（夏季に多く行へども、燈籠の字によりて秋とす）＝舞灯籠。走馬燈。國　折ふしは急いで廻灯籠哉　雁宕。

まはりばな【廻花】（冬）茶道七事の一、茶席にて上座より詰までの人、交るがるに花を挿し、其手前を競ふこと。國老若きとり〴〵よろし廻り花　青々。

まびきな【間引菜】（秋）蕪菁の類、八月種を下し、九月苗を生じ、其群生せる中より間引きて食用とするもの。＝摘まみ菜。小菜。○貝割菜。國　間引菜の露提げてくる目籠哉　知足。

まびく【間引】ところ〴〵引拔くこと。又、貸家などにて子女多きとき、生兒を親自ら殺すこと。

まひぐるま【舞車】遠州見附の宿の祇園會の時、相別れゐたる男女の再會すること を作りし諸曲。

まひとのはな【舞子演】播州明石の東方の海濱。松樹多くして風光佳絶なり。

まひとゑん【舞御覽】（春）正月十七日、鶴の庖丁の式了りて、禁裏清涼殿の庭上に舞臺を構へ、左右百二十番の舞樂を御覽ぜらるゝ式。德川時代に行はれたり。

まひとめ【舞初】（春）正月、舞樂を司る家に舞人、樂人來集して樂初の式を行ふ事。又、俗間の舞踊の舞初をなすことにもいふ。　國　舞初や大人になりし足拍子。

まひたけ【舞茸】（秋）濕處又は朽木に生ずる茸。形細長くして、上部黑く下部白し、食用とす。　國　舞茸や御帝のあとの眉つくり　其角。

まひづる【舞鶴】丹後國加佐郡にある湾。

まひどうろう【舞燈籠】（秋）まはり燈籠。

まひは【舞羽】糸を繰るに用ゐる枠。臺に短き竿を立て上に車軸の如き木匡ありて廻るもの。＝繰車。

まひひばり【舞雲雀】（春）雲雀の空高く上ること。

まひびと【舞々】足利時代の末より、幸若、

大柏など、扇拍子にて物語樣の舞をなし、役者。陣中の無聊を慰むる爲多く舞はしめしといふ。又、まひまひ虫の略。

まひまひむし【蔵虫】（夏）川池の淵に生ずる虫。形豆大にして甲あり。常に水底に伏し、時に水面に浮び旋轉する事甚速なり。＝ミヅスマシ。舞々。國　舞々や水に物書く風情あり　垂耳。

（まひまひむし）

まひらど【間平戸】表面に横木を繁く打たる戸。多く玄關などに建て、或は廊下口などに用ゐる。

まふくた【麻福太】古へ大和の國の某長者が門守の子、庭中の芹を摘む時、長者の姫に戀想したるに、姫之を憐みて種々人となるべき道を命じ、麻福太命のまゝに行ひ終に法師となり、姫より藤の袴を贈られし後、戀は遂げ得ずして姫死せしかば、無常を感じて身は高德となりしといふ故事。

まぶし【射鼓】獵師の柴など折りかけて身を隱し鳥獸を射ること。

まぶします【眞柴差】狩などに柴を折かざすこと。轉じて小手など脱して日を遣る

を云ふ。

まぶす【塗】塗りくるむこと。

まぶついちにょ【寃佛一如】佛説に、寃といへども佛性を具へてあれば、佛に異ることなしといふこと。

まへがき【前書】詞書（ことばがき）ともいふ。歌俳の前に附する文章。

まへがみ【前髪】未だ元服せぬ男子の額に結びし髪。轉じて少年、丁稚などの稱。

まへく【前句】連歌、連俳の上の句。即ち十七音の句。

まへくづけ【前句付】俳諧の下の句を出し上の句を付ること。きりたくもあり切たくもなし」に「盜人を捕へて見れば我子なり」を付くる如し。其秀逸にほ景品を與ふるもの。享保頃盛んに行はれたり。

まへだれかぶり【前垂被】（春）出代の頃にふる雨をいふ。出代の男女の傘なきため、前垂を被りて行くを以てかくいふ。京都地方の語。

まへわたり【前渡】戀ふる人の住める前を事によそへて屢々通ること。

まへをり【前折】能狂言の大名など冠る烏帽子。山高くして丸く前の方へ傾さしもの。

まほ【眞帆】順風の正面に帆を張ること。

まほ【眞方】ただしきこと。

まま【眞間】下總國葛飾郡市川の邊にあり、眞間の入江といふ。繼橋の舊蹟、手古奈の故事有名なり。（ままのてこなの條參照）

ままこだて【繼子立】すごろくの一種。黑白の碁石を一つ置に數限りなく並べ、十に當る石を取ゆく小兒の遊戯。

ままのてこな【眞間手兒奈】舒明帝時代に下總國葛飾の眞間にありし美女。婦を求むるもの多きを厭ひ、眞間の入江に投じて死す。山邊赤人の此事を詠じ、歌、萬葉集に出づ。

まみ【貒】（秋）狸の一種。狸よりも肥えて、色淡黑く、常に穴居す。

まむしぐさ【蝮草】（夏）天南ジャウ。

まんえふかな【萬葉假名】萬葉集に用ゐたる假字。漢字の音或は訓を假りて假字に當るもの。

まんえふしふ【萬葉集】奈良朝時代の歌を集めたる書。廿卷七千餘首あり、橘諸兄の撰なりと傳へらる。

まんがも【萬勝】我先にと進むこと。

まんく【萬句】連句の一鉢。百韻を百卷重

れたるもの。

まんりきさいし【萬石通】千石通の大なるもの。千石通を見よ。

まんず【滿座】座中の全ての人をいふ。又、連俳の一座の終りしこと。

まんざい【萬歳】(春)新年、風折烏帽子に素袍を着、才蔵(サイゾウ)を伴れて人の家に來り祝詞を云ひつゝ舞ふもの。其祝詞は多く屋舍造營のことを節つけて謠ふ。古へは其祝詞のうちに千秋萬歳といふ詞ありたれば、千秋(センジュ)萬歳法師、又は千秋萬歳と名け、後暑して萬歳といふ。古の男踏歌(タフトコ)の餘風にして、關東にては多く尾張、三河、地方より出づ、之を三河萬歳といひ、又京阪地方は古へ大和國筒田、答尾の兩村より出でしといふ、之を大和萬歳といふ。‖鶴太夫。圖 萬歳や 笛の 短き 鶴太夫 剛更。

まんざいおふぎ【萬歳扇】(春)一名ガラ扇ともいふ。鶴龜などを版にしたる組製のもの。前年の暮に賣り來れるを買置て、新年の年玉に用ゐ、又は毎年來る萬歳に與ふるを例とす。

まんさん【滿腔】よろめき歩くこと。

まんじゅさげ【曼珠沙華】(秋)原野墓地等に多き草。一根に數葉を生ず。

(曼珠沙華)

葉蒜に似て厚く夏枯れ盡し、秋に至り根より圓き莖を出すこと尺餘、彼岸の頃莖端に數花撰り開く。六瓣、細條にして深紅色、反り卷く。實熟すれば莖腐りて蕾葉を生じ冬を歴て枯れす。根は水仙に似て茶褐色、毒あり。‖石蒜。死人花(シビトバナ)。彼岸花。圖 山科や 藪は茂りて曼珠沙華 志計。

まんだいいしやうじん【萬代精進】(春)古へ泉州萬代村の八幡宮の氏子、例年大晦日には、他國にあるものも前日までに家に歸り居籠し、元日より七日まで 精進をなすこと。

まんだいおんじつかふ【萬塔院十講會】(冬)たきぎのさん。

まんだら【曼陀羅】佛語。色相上の雜種を寄集めたる義。淨土の有様を描きし圖をいひ、又日蓮宗には丸の中に誦文を書たるを曼陀羅と稱ふ。

まんだらげ【曼陀羅華】(秋)朝鮮朝顔。

まんだらまる【曼陀羅丸】在原業平の幼名。

まんぢう【滿仲】六孫王經基の子。攝州多田に居り、源家中興の祖と稱せらる。

まんぢうくびし【饅頭喰】能狂言の名。

まんな【眞字】まな。假名に對して漢字をいふ。

まんぱも【萬八】虚言のこと。一萬中に實らしきは八の數に出でずといふ義。

まんび【萬媚】喜色を帶べる顔の女の能面。

まんりやう【萬兩】(冬)灌木、高さ尺餘、葉は常綠にして莖端に叢生し、緣に尖らぬ鋸齒あり。秋圓き實を結び冬紅熟す、實を觀賞す。

まんいた【豆板】古き貨幣の名。小き銀塊のもの。

まんのうゑ【豆植】(夏)夏至の頃、大豆の苗を畑又は田の畔等に植うること。圖 豆植し 嗜や誰が子の指の跡。

まんのうも【豆打】(冬)豆まき。

まんのうもし【豆甘】(秋)まめまはし。

まんのうら【豆占】(冬)節分の夜、豆マキの豆を焼きたる音にて、翌年の晴雨豊凶を占ふこと。

まんのがら【豆殼】豆の莢より豆を出したる殼。‖莢。

まんのおり【豆鳥】(秋)まめまはし。

まんのごはし【豆粉飯】黄粉(キナコ)をふりまぶしたる飯。‖きなこめし。

まんのはな【豆花】(夏)(春季ともす)豆類の花の總稱なり。蚕豆、そら豆は春、隱元豆、なた豆は夏なり。又、專ら大豆の花をもいふ。

まんひく【豆引】(秋)晩秋、大豆の類を引きて收穫すること。圖 日のあるに虫鳴く宿や豆を引 碓嶺。

まんびな【豆雛】(春)極て小き雛人形。‖芥子雛。

まんまき【豆撒】(冬)節分の夜、家々にて熬豆を撒き、高聲に「福は内、鬼は外」と唱へ、疫鬼を祓ふ。又其豆を各人の年齢の數だけ紙に包みて、厄拂に與へ、或は食ふ。古は大晦日の夜行ふ。‖豆打、豆燒(ハ)す、○鬼打ち豆。年取豆。福豆。おにやらひ。追儺(ツイナ)。豆占。圖 豆を打つ 聲の中なる笑哉 其角。

まんまつはし【豆廻】(秋)深山に棲む小鳥。大さ鶸の如く、全身灰色、翅の端黑くして黄褐を帶び、頂黑く尾は褐色を帶ぶ、嘴黄にして短く、好むで豆を食ひ、口に含みて旋轉す。囀る時ヒシコキリといふ如し。桑鳳。斑鳩(イカガ)。豆鳥(マメ)。まめうまし。圖 豆廻まはしに出たる日方哉 支考。

(豆廻)

まんめいげつ【豆名月】(秋)後の月。圖 豆ひいて兎の寄き月見かな 魯隱。

まんをはやす【豆燒】(冬)豆まき。

まんやくらう【摩耶九郎】(夏)雲の峯の異稱。

まんやとんぶ【摩耶昆布】(春)摩耶參。

まんやのあきり【眞屋餘】軒庇のこと。

まんやふじん【摩耶夫人】古へ印度の淨飯王の后、釋迦の母なり。

まんやまおり【摩耶參】(春)二月初午の日、攝津兎原郡畑原村の山上なる、佛母摩耶山忉利(トウリ)天上寺の十一面觀音に詣で、福を祈る。又、飼馬の無難を祈る爲め近國の人、馬を曳きて參詣す。土産として昆布を買ふを摩耶昆布といふ。

まゆ【繭】(夏)蠶の繭を收藏する刷毛。

まゆはき【眉掃】(夏)蠶の繭を收藏する刷毛。

まゆはき【眉掃】(夏)蠶の別名。

まゆはす【繭干】(夏)夏、蠶の繭を收藏するため、之を席に排列して紙を被ひ、太陽に曝すこと三四日、繭中の蛹死する後之を納む。又一法に熱竈、焙爐にて

まゆかひ【繭買】(夏)繭の出來たる頃、各地を歩きて之を買出す商人。

まゆだま【繭玉】(春)柳の枝に大さ繭ほどの餅を多くつけ、或は小判、寶の玩具を結びたるもの。正月初卯に龜井戸妙義社などにて賣り、養蠶の豐なることを、財寶の多きことなどを祝ふ。圖 繭玉を祭捨たる貧家かな 屠龍。

まゆだまいはふ【繭玉祝】(春)正月十四日、農家にて、廿日團子を繭玉に造り、養蠶の宜きを祝ふこと。近畿の俗。

まゆつくりのはな【眉作花】(春)蘭(アヤ)。圖 仁和寺や蘭の名をも眉作り 壬斗。

まゆとじぬ【眉刀自女】催馬樂の曲名。又、美女のことをいふ。

まゆにる【繭煮】(夏)糸取りを見よ。圖 繭や煮る糸ぬき川の手引鍋 不角。

まゆねかく【眉根搔】耻ちふこと。又俗說に眉根痒きは人に思はれし兆なりといふ。

まゆはき【眉掃】化粧に用ゐる刷毛。

まゆはき【眉掃】(夏)蘭の別名。

まゆはす【繭干】(夏)夏、蠶の繭を收藏するため、之を席に排列して紙を被ひ、太陽に曝すこと三四日、繭中の蛹死する後之を納む。又一法に熱竈、焙爐にて

藩し紀すもあり。　圖　うるはしや童の藩の手あがり　夢子。

まるま【圓】（ばな）清米、苦さ大苦、葉長さ一寸、葉面にして尖り筋無あり。花たくさんして尖り大さ二分餘、狀熟して紅色出づ、其葉あに及び紅、葉に淡みて紅美し。葉圓にて綿木（見宿）といふ。又て一種苦さ五六尺にて、四月頃葉花を開くものあり。

まるま【圓言】清米にて造れる言。

まるまるのは【圓光】（ばな）カサキの色目の名、紫紅葉色、黃色。

まるみのはな【圓花】（植）マユミ。

まるみのもみぢ【圓紅葉】（ばな）マユミを見よ。＝ミシキモミヂ。

まるなかつき【滿月中月】（ばな）中三夜の月をいふ。

まるとり【鞠取】鞠蹴に用ゐる者。

まるりうまつ【鞠書法師】能る注言の名。

まるし【鞠子】鞠河安倍郡の轉。ごろう汁の名物あり。

まるしこえ【鞠河文天】天竺の古藩。唐僧ごの譯す。日月の前を過ぎ、帝釋天の先語を生ずる諸國感覺の前ごす。

まるのぼ【鞠坪】鞠蹴の場をいふ。四方を組ごの線手にて圍み、内に松、竹、柳、楓の四種を植う。之を四本ガリといふ。

まるはじめ【鞠始祭】（季）正月四日、京都、飛鳥井、錦淡の兩家にて行ふ鞠蹴始の式。

まるばな【鞠花】（ばな）椿の異名。

まるあうぼ【丸合羽】湖湖縣にて造り、身裾等の別なく著る雨具。＝引羽とし。

まるあけ【丸衍】圓く丸くくけて中に綿を入れし帯。

まるがた【丸腰】刀を帶せぬこと。

まるきんえ【丸頭巾】（季）丸く袋形に作り縫ある頭巾。一に丸無頭巾ともいふ。

まるくつ【丸靴】圓の中に丸くいろは、一二三、甲乙丙等の文字を糸に連々の彩糸にて縫た小雜の小雜。黃、紫、黃、（しくつろま）に流行せるもの。

まるた【圓梨】（ばな）梨の一種。彩圓く皮清くして色青く、味甘美なり。

まるは【丸葉】蓮茎を着くずに能ること。

まるはなな【圓葉菊】（季）菊の一種。葉は

柳に似て、葉圓く緑色あり。

まるめる【鞠停】（ばな）草椿の實。其林樹に白毛あり、春五月葉が出る。大さ一寸餘、又白花なるも紅花を開くり。之を結ぶ、クッタリンに似て熟すれば裏綿にし、蒲團、ふとんに用ゐる。＝ばな多く砂糖漬ごす。＝ばな多く砂糖漬ごふで藥の藥　文語。

まるやま【丸山】肥前國長崎の遊廓の名。

まるやま【圓山】京都東山の一部の轉。

まるやまもみぢ【丸山主木】圓山應善の紅葉。

まるぶ【丸岡】鞠前坂井郡の市名。有馬氏の城城下。

まるはつかまつり【丸岡火祭】（季）正月十三日、四月の日、鞠前坂井郡丸岡、秋葉權現に、各所より紙製に彩色したる新鞠を火消人足等出にて、社前に大なる左義長の火を立て盛火として燃すといふ。

まる【圓】自分を卑下して云ふ言葉。多くは公用の用ゐる所ごなれり。

まるは【丸腰】まるこ江。

まるあり【鞠停】（ばな）椿の實。

まるはる【丸腰】米、貴なごにて腰に著る作れる袋。

み

み　サ三又は巻に二を置くテニヲハ。「山遊かな」は山遊ごいの巻、「桜咲かな」は桜咲ごいの巻なり。又「言らしかな」「嬉しかな」は言らしん、嬉しくの如く巻すること多し。

み【巻】巻物を巻てアラカハを巻ふ具。竹を編みて三方に巻を掛けしもの。

みあがつき【御蔵初】（季）六月一日より入蔵物は、天子御蔵の米、御蔵物の事あり。（冬）十二月朔日ごと赤行はせらる。＝かんあがつの。圖　一息の御蔵物や千代の鶴　宗鶴。

みあらつる【美蔵】酒を國る注語。

みあれ【御生】（季）かもにのび。

みあれのひ【御祭日】（季）賀茂祭を見よ。圖　清中から夏長く國るや御祭の日　業政。

みいなりさま【御稲荷様】（季）ミカヅ祭。

みうち【御大人】國語御大人を見よ。

みうらや【三浦屋】江戸吉原にあり、し者樓。遊女屋屋のあり、しを以て名あり。

みえいざん【御叡山】叡山に作物を供す。

みえいざんえ【御叡山会】（季）三月十一日、京都の寺院にて國國弘法大師の忌を修し、其夜に御叡山を行ふ。京都仁和寺、東寺等は詣ずる人數多し。＝弘法大師御忌。圖　御叡山や考て見給ふ有力武士　李峯。

みえいざんの【御叡山】京王線東の西にあり。新東京名寺といふ。本尊は釋迦如來、慈林寺后の御願にて弘法大師の開せしごいふ。此寺の宿尼藤子を經り、て賀ごいふ。此寺の御叡祈といふ。

みえいざんのかぐらつ【御叡山面舞会作】（季）にしうたをうり口入ぶ。

みえいざんり【御叡祈】かえいざんを見よ。

みお【蓮】蓮の別名といふ。古語。

みおかしの【美岡紙】（季）巻の一種。實藤にして蓮の寄紙、厚きもの。又、鞠前寺巻ともいふ。圖　茶室に美は紙にて今の茶岡紙　巻甘。

みかどもり【御門守】禁中の御門を守れるもの。＝衛士。

みかんまつり【御蜜祭】（季）四月中午日、京都下賀茂社の境社御蜜社（吉野川の東に御りり）の祭禮。一にミアン祭ともいふ。

みかんの【三柑】説り前の一種。説の初句を三種に出して、各句の以下を前くるもの。正徹説より起りすといふ。

みかのやま【三笠山】大和奈良上春日神社の後方にある山。＝春日山。

みかはのくに【三河國】東海道諸國の名にあり。古事、引馬野（ひきまの）を今、八橋三河國川、矢田部郡、三河國を歌ひしもの。

みかづき【三日月】（ばな）三日の月をいふ。＝新月。圖　三日月に会ふ夜を長しつ　業雪。

みかづき【三日月】能面の名。

みかづき【蜜柑】能注者の名。

みかのはらつり【御幸祭】（季）六月及十二月の晦日、禁中にて蓮葉を流ふたかり行はせらるノ祭式。

みかん【蜜】みかのこと。

みかのはら【御原】山城國綴喜郡木津の東北にある地。＝三浦原。

みかはまつり【三河祭礼】（季）賀茂。

みかはまつり【御幸大】内裏の御幸の賀國にある祭。

みくりや【見栗屋】江戸、吉原遊廓の入口にある門。又、吉原遊廓の出口の門にもいふ。

みかまき【御薪】（春）古へ正月十五日、佳例として、百官より禁中へ、御料の薪を奉る式。 ㊀ 御薪に忍び笑の聞えけり　樹石。

みかみやま【三上山】近江野洲郡に在り。一に峰松山と云ふ。藤原秀郷の蜈蚣の怪を射たりと傳ふる山。

みかん【蜜柑】（秋）柑の一種。實の甘くして上品なるもの。樹は花葉共に橘に似て、實は秋黄熟して皮厚く肌粗にしてやゝ扁し。 ㊀ 埋み置く灰に音きくみかん哉　召波。

みかんかざる【蜜柑飾】（春）蜜柑を蓬萊などの新年の飾に用ゐること。

みかんのさる【蜜柑猿】小兒の戯に、蜜柑の肉の袋を裂き翻して指頭に被せ弄びつつ食ふこと。一に蜜柑獅子ともいふ。

みかんのはな【蜜柑花】（夏）蜜柑。 ㊀ 春過てはや咲く蜜柑柑子哉　大江丸。

みから【蟻】（夏）夏、井水に生ずる小虫。白くしてシミの如し。水虫の類なり。

みからかさ【御傘】松永貞德の著したる連俳季寄の書。此書よりして連句の法式定まるといふ。

みきにぎくじよみ【右巻暦】（冬）ふることよみ。

みくしあけ【御髪上】（冬）十二月中午日（或下午日）宮中にて、高貴の御髪を梳りし屑を燒く式。 ㊀ 庭上に几帳たれたり御髪上　志計。

みくすりをぐらす【御藥供】（春）正月三箇日、御髪上に天子清涼殿の東廂に出御し、齒固の式ありて後、御藥を奉る。此時未だ嫁せざる少女に先づ飲ましむ。之を藥子といふ。第一献に屠蘇の酒、第二献に白散酒、第三献に度嶂散の酒なきを召し給ふ。此式民間に移りて、新年に延命屠蘇散の酒を用ゐるなり。 ㊀ 藥子に少なからざる櫻鯛哉　青々。

みくにたうげ【三國峠】越後國南魚沼郡浅貝村より、上野國利根郡久賀村に通ずる峠。

みくら【御倉】奈良東大寺の正倉院ないふ稱。

みくり【御厨】伊勢神宮にて贄を貯ふるところ。

みけも【御結髪】（春）住吉御弓。

みけんじやく【眉間尺】古へ支那の楚王、怪鳥の工干將、莫耶に造らしむ。干將造る所の劍を惜んで、一口を献じ、竊に他の一口を潛藏す。此事告ぐる者あつて露はれ、捕へられて刑戮せらる、時に其子に眉間尺と云者あり、身の丈一丈五尺、額の廣さ尺餘、力五百人を兼ぬ。父の讐す所の劍を携へて逃れ山中に潛む。道々一旅客あり、山を過ぎて尺と會し、楚王の逼を求むる事急なるを告ぐ。尺終に遇るべからざるを知て自己の首級と寶劍を與へ、而して仇を復さんことを乞ふ。旅客諾して其首級及劍を携へて楚王に見ゆ、王尺の首を觀るに怒髪逆に立ち眼光烱々射るが如し、旅客王に勸めて其首を煮さしむ、盤中沸々撃あり、王之を蒞く所を旅客劍を鈇て王の首を斫り直に自刎して死す、釜中三個の首級迭に反目廻轉して巴狀を爲せりと云ふ故事。

みこかも【ミヨ鴨】（冬）鴨の一種。ミコアイサともいふ。

みこたたし【神輿落】（夏）山王祭。

みこたくさ【神輿草】（夏）ゲンノシヨウコ。

みこしぢ【三越路】越前、越中、越後の總稱。

みこしぶね【神輿船】（夏）山王祭を見よ。 ㊀ 神心いづれ乘勝て御輿船　貞徐。○夕立に面もふらす神輿船　之道。

みさかも【御鴨】（夏）山王祭を見よ。 ㊀ 御

賢木や枝する軒の釣行燈　猛虎。

みさくら【實櫻】（夏）櫻の實。

みさご【鶚】鷲の類。形鳶に似て大く色淡黑にして黄を帶び、高く翔りて擊鳶の如し。常に山中の水邊に棲み、魚を捕りて食ふ。俳諧に其巣を夏季とするは、水邊にあるを以て水鳥と同じく見たるならんか。‖睢鳩。鵰。

みさごずし【鶚鮨】鶚が魚を捕りて、之を海邊の巖の窪などに積み重ね、潮の自ら浸りて鮨の如く熟したるもの。其味人の作れる鮨に似、漁夫など之を喜ひ食ふといふ。

みさごのす【鶚巣】（夏）みさご。 ㊀ 朝風や魚の血こぼす鶚の巣　大江丸。

みさざき【山陵】天皇の御墓所をいふ。

みさごえ【水鯖江】水邊の浮べる江。‖水鯖江。

みさいやまかり【御狩山狩】（秋）御狩山祭。

みさいやまさつり【御狩山祭】（秋）七月廿七日、信濃國諏訪明神（祭神建御名方命（タツミナカ）（タノミナカ））の祭禮。古は勅使の參向ありて、神殿、假屋等に簿を賚き、簿を以て幣とし、人家にも又之を賚く。（故に簿をミクサ（御草）といひ、賚きたる屋を應屋といふ）又田獵を司る神なりとて、遠笠懸を射る神事を行ひ、鷹狩を催す。之を御狩山祭といふ。‖御射山祭。 ㊀ 闇更。○かり衣の袖も簿とふく日哉　許六。

みじかよ【短夜】（夏）夏の夜の短くして明易きをいふ。‖明易し。夏の夜。 ㊀ 短夜や淺井に柿の花を汲む　我則。

みしはせ【鶴恒】朝鮮の鴨綠江邊の古稱。

みしぶ【御修法】（春）眞言院御修法。

みしま【三島】伊豆國君澤郡にあり。東海道の驛次。三島神社あり。

みしまたたうまつり【三島御田打祭】（春）正月六日、伊豆三島神社の祭禮。

（三島御田打祭）

みしまつり【三島祭】（秋）八月十六日、東海道三島驛、三島神社（大山祇命を祭る）の大祭にて、勅使の參向あり、甚だ壯麗なりといふ。古へは三島四の市、及び正月六日の御田打祭を早に三島祭と俗稱せり。

みじめ【見濕】見て哀れなる態をいふ。

みじろぐ【身動】躰を動かすこと。

みすかる【三篠刈】信濃の枕詞。

みすのぜに【御簾錢】（春）二月上子日、山城伏見稲荷に諸人參詣し、社殿の御簾に寶錢を投げ、御簾に錢のかゝりて止りしを吉とし持歸りて祈ること。

みしまつり【三島祭】（秋）八月十六日、東海道三島驛、三島神社（大山祇命を祭る）の大祭にて、勅使の參向あり、甚だ壯麗なりといふ。古へは三島四の市、及び正月六日の御田打祭を早に三島祭と俗稱せり。

みしまのいち【三島四市】（春）（冬）四月中四日、及十一月中四日。伊豆國三島明神の祭禮。此日諸國より商人來りて市を行ふ。 ㊀ 大磯の君も來ませり四の市　月巣。

みしまのいもの【三島西市】（春）（冬）四月中四日、及十一月中四日。伊豆國三島明神の祭禮。此日諸國より商人來りて市を行ふ。 ㊀ 大磯の君も來ませり四の市　月巣。

みしまたたうまつり【三島御田打祭】（春）正月六日、伊豆三島神社の祭禮。

みしまつり【三島祭】（秋）八月十六日、東海道三島驛、三島神社（大山祇命を祭る）の大祭にて、勅使の參向あり、甚だ壯麗なりといふ。古へは三島四の市、及び正月六日の御田打祭を早に三島祭と俗稱せり。

みじめ【見濕】見て哀れなる態をいふ。

みじろぐ【身動】躰を動かすこと。

みすかる【三篠刈】信濃の枕詞。

みすのぜに【御簾錢】（春）二月上子日、山城伏見稲荷に諸人參詣し、社殿の御簾に寶錢を投げ、御簾に錢のかゝりて止りしを吉とし持歸りて祈ること。

みそぎぼし【御修法】(春) しんごんゐんみしほ。

みぞかけ【衣架】いかう。

みそかほうし【密法師】青法師(アヲホウシ)。

みそぎ【御祓】(夏) 身の罪穢を浄め祓ふこと。神代に紫菱烏帽が罪を請神に贖ひし事より起ると云ふ。俳諧にては專ら夏越(ナゴ)の祓をいふ。 國 四の宮の鎮宜も出らるゝ御祓かな 許六。

みそぎがは【御祓川】(夏) 御祓する川。又、古へ京都に川合、耳敏(ミ・)川、東の濱、松が崎、石影(イハカゲ)、四の瀬、大井川の七瀬を御祓川と定めしこと。 國 白鷺し幣に立てりや御祓川 春波。

みそさざい【鶺鴒】(冬) 小鳥。雀に似て小く嘴尖りて錐の如く、全身灰色にして黒褐の斑斑あり。冬來りてよく囀る。其巣を山中の樹枝に懸け營むに毛髪、麻の類を拾ひ來り極めて巧緻に造る。故に巧鳥(タクミドリ)と呼ぶ。＝三十三才(ヤソヂ)。サヽギ。桃雀。 國 から堀や木の葉に交るみそさざい 宗議。

みそぢんぎ(春) さぎちやう。

みそはぎ【溝萩】(秋) 田野に生ずる草。莖は、暖くして水の如く四稜あり。葉は柳の如く、初秋、梢の間に穗をなして淡紫花を開く、萩の小なるが如し。魂祭に水を手向くるに用ゐる故に水掛草の名あり。＝鼠尾草。 國 泉尾草の秋にかゝる涙かな 桃妖。

みぞるる【霙】(冬) 雪の降ること。 國 みぞるるや雪に荒れたる小笹原 道彦。

みぞれ【霙】(冬) 雪の降る時、地上の氣にて温められ半ば雨となりて落つるもの。 國 馬の尾を引すつて行く霙哉 蝶夢。

みぞれざけ【霙酒】(冬) アラレ酒。

みぞろのいけ【御泥池】山城國愛宕郡上加茂の東方にある池。＝鹽呂池。美曾呂池。

みたえぐさ【水堪草】(夏) 蓮の異名。

みたけ【御嶽】大和國金峯山の別稱。

みたけやま【御嶽山】信濃國西筑摩郡にある高山。

みたびぐり【三度栗】(秋) 野州地方に產する山栗、一年に三度實るものなりといふ。さき栗の一種か。

みたらし【御洗水】みたらしがは。

みたらしがは【御手洗川】神社の傍にある池。川ないふ。又、山城國糺川の別稱。

みたらしたんぢ【御手洗團子】(夏) 御手洗詣に賣る團子。小串に數箇の團子を連れたるもの。

みたらしのそう【御執奏】(春) 正月七日、宮中にて兵部省より御弓奏(ハヨンコー)を奉ること。御弓はミタラシと訓す、主上兵器を閲し給ふ始なり。 國 射場殿の雪は消たり弓の奏 竿秋。

みたらしまつり【御手洗詣】(夏) 六月十九日より晦日迄、山城國愛宕郡下鴨社にて、川合の社前、住吉社の東の川邊に於て六月祓をなす、參詣甚多く、糺川の兩邊にて納涼の遊をなす。御手洗團子を賣る茶店多く出づ。之を糺の涼みといふ。 國 笹の葉の戰ぐ御手洗團子哉 朴二。

みたらしまつり【水垂祭】(秋) 九月廿三日、攝津國淀城西北の水垂社(祭神淀姫大明神)の祭禮。七日前より御旅と稱して社前に勅使角力あり(淀祭の條參照)。

みたれぐし【亂箱】衣服など疊みて入るゝ淺き箱。古くは髮を梳る時の亂毛を入るゝに用ゐしもの。

みちあへのまつり【道饗祭】(夏)(冬) 六月、十二月の晦日に、京都の四堺(和邇、會坂大枝、山崎)の路上に饌を供へ、疫神を祭りて疫鬼の京中に入るを防ぐための祭をいふ。 國 道饗の供物にかゝる埃故 百合。

みちしば【路芝】路傍に生ひたる芝。

みちつなのはは【道綱母】藤原倫寧(トモヤス)の女、道綱の母なり。東三條兼家が未だ兵衛佐たりしとき之と通じ、後其妻となる。容色美にして才藻あり。永朝三美人の一と稱せらる。後拾遺集には其詠多く入れり。又、天曆八年より天延三年までの間にかき記したる日記を蜻蛉日記といふ。

みちとせのもも【三千年桃】西王母の傳を見よ。

みちのき【道記】旅行の日記。

みちのく【陸奥】古昔は常陸、磐城、岩代、及び奥州一帯の稱。中世より陸前、陸中、陸奥の三國の總稱とす。

みちのくがみ【陸奥紙】檀紙(ダンシ)。

みちのせに【道狹】路もせばきほどに。

みちのまめぐさ【道來草】(夏) 卯の花の異名。

みちもり【道盛】一谷の合戰に討死せし平通盛と小宰相局の幽靈出て、昔を物語り吊ひを乞ふことを作りし謠曲。

みちよぐさ【三千代草】(春) 桃の異名。

みつ【三津】難波のこと。＝御津。

みつ【美豆】山城國久世郡の地。淀の東南十町ばかりにあり。古へ美豆の御牧と稱して天皇の御料馬を放養せし牧場ありしところ。＝御牧(みまき)

みつあげ【水揚】鰹節の始めて人と交接するを云ふ。＝上頭。

みつあはせ【水合】(夏) 夏の土用の入に、禁中に陰陽師參りて內裏の井邊に祓を修し、其水を各自に移し合すこと。

みつあびせ【水浴】(春) 水祓ひ。

みつあふひ【水葵】(夏) あさざ。 國 さんぼうの燃見付たり水葵 桃雪。

みつあめ【水飴】(春) 正月、奈良春日の社家にて飴を煉製し、宮中堂上、地下の公卿に贈る。一に滑糖(シルノ)といふ。現今の水飴と同じ製なり。

みつはらひ【水祓】(春) 正月。前年新に妻を迎へたる男の家に、朋友等相集りて酒肴を携へ行き、水を浴せ祓ふ。此事後に官より禁ぜらる。＝水あびせ。 國 こりずまの世に聲ありて水祓 白雄。

みついりな【水入菜】(春) 略して水菜。菜の一種。水地に生ずるもの。山城壬生村の產所名なり。京都にて壬生菜、東京にて京菜といふ。 國 川のべの水菜に春の水鶺鴒 乙二。

みつうちは【水團扇】(夏) 團扇の一種。ツヤ漆又はドウサなどを引き、水を注ぎて扇ぐやう造りしもの。

みつうつ【水打】(夏) うち水。

みつうまや【水驛】水路の湊にありて船を備ふる驛。又、俗言に雙蹄の殺けなくて歎符せぬをいふ。

みつうり【水賣】(夏) 江戸の俗。夏の頃、冷しげに飾りたる屋臺を荷ひて砂糖水などを賣り歩くもの。 國 月涼し冷水賣の踏るかた 陵山。

(水賣)

みつえせ【水餞】(夏) みづあそ。

みつか【三日】(春) 正月三日をいふ。 國 春もやゝ三日たちけり暮の月 花鳥。○正月も三日過れば人古し 關更。

みつかぼし【三日星】(春) 二日星を見よ。 國 宋玉は三日星ほめて去にけり 青々。

みつかめ【瑞龜】神社の周圍に設けし垣。＝玉垣。

みつかけあひ【水掛合】(夏) 夏日、半晴の小兒等炎暑を凌ぐ爲め、水邊にて左右に分れ水を浴せかけて勝負する戲。

みづかけいはい【水掛盃】(春) 水盃。
みづかけぐさ【水掛草】(秋) みそはぎの異名。
みづむしは【水柏】(春) 水草。宿根より生じ一坪三葉にして、葉は半夏に似て大く、春二尺餘の莖を出し、五六瓣の白花を開く。＝睡菜。
みづかはなし【三津湯】伊豫國温泉郡松山の港。
みづかひ【水貝】(夏) 鮑の生肉を薄く切り、三杯酢にし、又は水にて冷し、もの。夏季の料理。＝ナマ貝。 圖 水貝の鉢に小鳥や松島や 屠龍。
みづかる【水潤】(冬) 冬、河泉などの水の涸るゝこと。 圖 水潤て石のみ高き川 逸歌 阿誰。
みづき【水木】(秋) 山中に生ずる喬木。高さ二三丈に至り、葉はウメモドキに似て厚く、初夏、枝頭に傘狀の小白花を簇生し、秋赤色の實を結ぶ。熟すれば、紫黑なり。實を賞して季とす。＝玉美豆木。 圖 火と燃てわびぬ 水木の身ぞ 浮世 井蛙。

(水木)

みづきすのこぶり【三月過鳥】(夏) ほとゝぎすの異名。＝三月巣子鳥。
みづくき【水莖】文字のこと。
みづくさ【水草生】(夏) 春の末に水草の生び初むること。＝浮草生初る。
みづくさのはな【水草花】(夏) 水中に生ずる諸草の花をいふ。＝浮草の花。 圖 水草や鎌倉人の摺衣 朱明。
みづけばしら【見付柱】能舞臺の右手にありて大臣柱と並びし柱の名。
みづし【御厨子】櫃を立てし如き形にて、戸棚あり、樂器、書籍など載せおくもの。又、佛龕のこと。
みづしげ【光茂】土佐光信の男。狩野元信の男にて、正五位上左近將監畫所預となり、後刑部大輔より 土佐守を兼ね、名技を以て喧傳せらる。享保頃の人。
みづしたたる【水滴】(夏) 滴るを見よ。
みづしどころ【水仕所】禁中にて、供御のものを調ふるところ。
みづしも【水霜】(秋) 露霜。
みづすまし【水澄】(夏) マヒマヒ虫。
みづせん【水錢】(夏) 大阪天滿祭の鉢流神事に、攝津福島村より集めて 獻する神供料。
みづたにぐさ【水酒草】(夏) 蓴の異名。
みづたま【水玉】(秋) 星草。
みづち【蛟龍】大蛇の類にて 四脚なるもの。
みづちか【光親】藤原光雅の子。官は權中納言に至り、陸奥出羽按察使を兼ね。後鳥羽上皇の北條氏を討つに際し上書して之を諫めしが納れられざるを以て、止みなく詔書を作り義時の罪狀を擊らす。官軍敗るゝに當り駿河加古城に斬らる。時に年四十六。
みづちやら【水帳】古へ民部省にて戶籍、田圃を書きし記錄をいふ。＝御圃帳。
みづてうし【水調子】三味線を極めて低音なる調子に彈くこと。又、遊女玉菊の道普に、岩木乾什が作りし河東節の曲名。
みづてつぽう【水鐵砲】(夏) 竹又は金屬にて筒狀のポムプの如く作りたるものにて、水を吸上させ樑を壓して、水を發つもの。夏日小兒の玩具なり。
みづてる【御津寺】大阪四天王寺の別稱。
みづとけい【水時計】水を用ゐて時刻を量る

器。漏壺と稱する銅壺に箭を立て、他の壺より水の滴り入るやうにして、其水の增すに隨ひ、箭の刻(漏刻)の上りゆくやう作れるもの。一晝夜を四十八刻に分ち、四刻を一時とす。
みづとり【水取】(春) 二月堂の行ひ。
みづとり【水鳥】(冬) 水禽類をいふ。特に季あるものを除く外、水鳥とのみは概れ冬なり。○浮雁鳥。 圖 水鳥や形に影の腹合せ 旨原。
みづとりまへづる【水鳥朝】(春) 水禽類の鳴くをいふ。(鳥朝るを見よ) 圖 水鳥の浮きし拍子に朝るか 松字。
みづとりのす【水鳥巢】(夏) 夏季水禽類、水邊の草蔭等に巢を營み育兒するをいふ。又、鳩(ハト)の類の如く、其巢を水上に浮ぶるものあり。之を浮巢といふ。○鳩の浮巢。鴛鴦の巢。みさごの巢。 圖 青柳の原にも結ぶ浮巢哉 玉屑。
みづな【水菜】(春) 水入菜。
みづなし【水梨】(秋) 梨の一種。實に水分多きもの。 圖 水梨や幾秋の夜の露の味 乙州。
みづぬるむ【水温】(春) 春日の暖氣に水の温むをいふ。 圖 水温む南に鯉のつどひけり 子規。
みづね【躬恒】凡河内氏。詠歌に巧みにして、宇多帝の時、紀貫之と共に古今集の撰者となる。
みづねがた【躬恒形】硯の名。形、鹿の足跡に似たるもの。
みづのあま【三朝】(春) 三朝。
みづのえ【水江】丹後國與謝郡の海邊。浦島の故事ありしところ。
みづのくるま【三車】法華經譬喩品に出づ。長者の家の火事に兒の逃げざるを見て、方便に羊、鹿、牛の三車を造りやらんと嘯し、火宅を逃れしめしといふ故事。
みづのこ【水粉】(夏) 夏日、麥を水飛して製したる粉を、冷水にてかきたて砂糖を加へ飲むもの。 圖 水の粉のきのふに變きぬ草の庵 蕪村。
みづのはじめ【三始】(春) 元日をいふ。
みづのはな【三花】(冬) 霜の花と同じ。一說に六の花(雪)に對してかくいふと。
みづのぶ【光信】藤原弘周の子、土佐宗家五代の人にして畫所預右近將監刑部大輔となる。其畫最も氣韻を重んじ、當時、狩野元信と相並んで畫名噴々たり。又、連歌を宗祇に學び其妙を得たりといふ。大永五年歿。
みづのをまつり【水尾祭】(春) 三月九日、山城國葛野郡水尾社(祭神清和天皇、同所に清和帝の陵あり)の祭禮。 圖 水の尾の祭見によれ花屁り 鶯角。
みづば【三葉】草木の萌ゑ出でゝ、葉の三ツ四ツ付きたるをいふ。又、三ツ葉芹のこと。
みづばうぶ【三葉卯木】(夏) 卯木の一種。
みづばぜり【三葉芹】(春) 芹の一種。水地、水田等に生じ其葉圓くして三葉に分れたれば此名あり。略して三葉(ミツ)ともいふ。春の半に苗を叢生し、高さ尺に至り、莖圓くして香氣あり。夏、細黃花を開き、豆の如き子を結ぶ。 圖 七草にもれたる芹の三葉哉 碧盞。
みづばち【蜜蜂】(春) 蜂の一種。形常の蜂よりも大く、微黃色にして毛あり。背は薄黑く、羽は灰色なり。人を刺すことなく、常に花間を徘徊して蜜を醸す。故に人之を箱に養ひ蜜を採る。
みづはちまんまつり【三津八幡祭】(秋) 八月十五日、大阪三津寺町の八幡宮の祭禮。同所島の内の藝子、種々の扮裝をなし、練物等を出して頗る賑ふ。
みづはな【水洟】(冬) 寒き時、水の如き鼻汁の出づること。 圖 もたいなや水洟

みづはな

みづはな【水鼻】（夏）五月頃流るゝ水鼻多く流れて流れ出ずるを指す。「鼻」は大鼻より大和こゝろに流るゝ水を指す。「鼻」は大鼻より大和こゝろに流れ出ずる水を指す。

みづはな【水鼻】（夏）五月頃流るゝ水鼻多く流れて流れ出ずるを指す。「鼻」は大鼻より大和こゝろに流るゝ

みなみかぜ【南風】(夏) 南風夏に多し。近代季とす。＝なんぷう。

みなみまつり【南祭】(春) 石清水(イハシ)臨時祭。

みなむすび【蟒結】貝桶などの紐の結び方、結びたる形の蟒貝に似たるより名く。

みなれさぶね【水馴棹】船を漕ぐに用ゐる竹棹。

みなわ【水泡】水のあわ。

みにしむ【身入】(秋) 秋冷の人の肌に入むないふ。圖 身に入むや宵曉の舟しめり 其角。

みぬかまつり【敏馬祭】(秋) 八月十三日、摂津莵原郡岩屋村、敏馬神社(一に三大女に作る。同處の土地神なり)の祭禮。

みねいり【峯入】(春) 往昔役行者が入峯の跡を慕ひ、山伏修驗者の輩、毎年三月に熊野より葛城大峯に入り吉野に出づ。之を順の峯入といひ、本山方(聖護院門室管す)の山伏之を行ひ、七月吉野より大峯に入り、熊野に出づるを逆の峯入といひ、當山方(三寶院門室管す)の山伏之を勤む。(峯入とのみは春なり) ○谷行。瀧飛び。圖 見つれる法の浮世ぞ順の峯 言水。

みのお【箕面】摂津豐島郡にある山。山上に龍安寺ありて辨財天を安置す。又、有名なる瀧布あり。紅葉の名所とす。＝みのも。

みのおのまふ【箕面宮】(春) 摂州箕面山瀧安寺にて正月元日より七日間祈禱を修し八日朝寅の刻同寺の辨財天へ參詣せる者を集め宮藏を行ひ、一番に當りしものは福を得るとなす。其式、寺僧數千の木札を藏置き、參詣の人の名を札に記し、辨財天の像前に置ける箱に入れ、之を轉回して箱の穴より錐にて突き取り、其初めに出たるを以て一番當りとなす。○箕面二の宮。圖 宮取つて行末たのむ箕面哉 俊治。

(箕面宮、一番當籌途之圖)

みのおのにのまふ【箕面二宮】(春) 二月三日、摂津箕面山辨財天にて修二會を行ひ宮藏を出す。正月の宮と同じ。圖 二の宮や慾の世にみのおきところ 才登。

みのがめ【蓑亀】亀の老いて背に綠毛の如き苔の附生したるもの。

みのひのだうしや【巳日道者】江島辨財天に參詣する道者。＝島道者。

みのひのはらひ【巳日祓】(春) 三月上巳日、水邊にて闕を執り、御祓(ハラヒ)すれば疫疾を去るといふ支那の古俗。我國にも早くより傳はる。源氏物語に、源氏須磨にて陰陽師に命じ祓したる事を記せり。＝上除。須磨の御祓。圖 折にあふ花や巳の日のはらへ草 宗因。

みのぶ【身延】日蓮上人、身延山にて女人の亡靈を濟度することを作りし謠曲。

みのぶさんかいさん【身延山開山忌】(冬) 十月十三日、甲州身延山久遠寺にて開祖日蓮上人の忌を行ひ、通夜讀經する式。圖 願はくや戀をばせじと日蓮忌 何之。

みのむし【蓑虫】(秋) 諸木の葉廷びたる頃、老葉の卷けるもの生ずる中に棲む蛾の幼虫にして、樹葉を食ひ糸を吐きて巣を作り、晝は隱れ夜に入れば盛に移動して嫩葉を食ふ。虫は赤黑くして皺節あり首尖りて袋を着たる翁の如し。元來鳴くことなければ、古より秋に「父戀し」といふ如く鳴くと言ひ傳ふ。(古は蓑虫鳴くといはされば秋季に非ずとせり) 圖 蓑虫に竹取が宿は荒にけり 几董。

みのも【箕面】みのお。

みのわだのとんぼり【箕和田鯉取】(冬) 常州箕和田にて、寒中鯉を漁す。大なるは三四尺ありて漁人之を抱取るといふ。圖 箕和田や鯉取る男老もせず 奇淵。

みのを【箕尾】みのお。

みぶぎやうけん【壬生狂言】(春) 壬生念佛。

みぶでら【壬生寺】京都四條の西、壬生村にあり。心淨光院寶惟寺又は地藏院といひ、俗に壬生寺といふ、眞言宗にして大和國唐招提寺に屬し、正暦年間近江國三井寺の快覺僧都の開基、本尊は定朝作の地藏菩薩なり。

みぶな【壬生菜】(春) 京四條の西、壬生村の壬生寺にて、三月十四日より廿四日迄(今は四月廿一日より五月中旬迄)社會を行ひ、堂前の舞臺にて念佛踊を能す。正安の頃、圓覺上人、融通念佛を修せしより始り、毎年同寺の課中の人集りて狂言をなし、無智の輩を誘ひて菩提に導く方便とするものなりと。

(壬生念佛桶取)

狂言は桶取、花盛人、紅葉狩、狐釣、猿、愛宕詣、賴光山入、盲人川渡、節分、鵺、閻魔角力、鉞鬼賣鯊、引、賽河原、替我、性慳坊主、羅生門、棒縛、棒振、奏上、熊坂、花見、男伊達、渦立、炮烙割等數十番あり。一日に數番宛を行ふ。多く地藏尊の利益を說けるものにて、假面を被り、言語なく所作にて其意を會得せしむ。樂器は鉦、太鼓、笛を用ゐ、絶えずガンデン〳〵〳〵と喧しく囃す。京中の小兒群りて見物し、境内に張子の面、紙の太刀、棒、槍などを賣る店多く出づ。＝壬生師。壬生狂言。念佛踊。圖 何事もいはですみけり壬生念佛 盛三。○うれしいか念佛踊の挨拶ぶり 嵐雪。

みぶのさる【壬生猿】(春) 壬生狂言の猿に扮するもの。圖 染めし焚宿を持けり壬生の猿 如錦。

みふゆつき【三冬月】(冬) 十二月の異名。

みふゆつく【三冬盡】(冬) 初冬、仲冬、季冬の三冬盡くること。年暮のこと。

みぶをどり【壬生踊】(春) 壬生念佛。

みほのまつばら【三保松原】駿河安倍郡に在り。江尻より續きて海上へ突出したる松原。

みほまつり【三保祭】(春) 正月十五日、駿河國庵原郡、三保明神(祭神三穗津媛命)の祭禮。十四日に筒粥の神事あり、粥占の一風にて、其年の五穀の豊凶を卜ふ。圖 筒粥や今年もみのれ三保七保 寥左。

みまき【御牧】美豆(ミ)に同じ。

みまも【巳待】巳の日に辨財天を祭ること。

みまつり【箕祭】(冬) 冬、農家にて收穫の了りし後、米穀を振ふ箕を祭り祝ふこと。＝箕納。圖 箕の祭すめば安堵の雪がふる。

みそぎつき【御禊月】（春）御禊は四月の中の酉の日に行ふ。

みそぎつき【御禊月】（夏）御禊は六月の中の酉の日に行ふ。

みそぎつき【御禊月】（秋）御禊は十月の中の酉の日に行ふ。

みそぎつき【御禊月】（冬）御禊は十二月の中の酉の日に行ふ。

みそぎつき【御禊月】（春）御禊は四月下旬より出初め、早暁に都上に出で、賀茂川の中に入り、身を清め、禊を

いい僧を〜り。

みやうゐ【三井寺】 園 三井寺の山法師に對して寺法師と

みやうゐ【三井寺】 園 三井寺に籠れて園に來りて劍を揮ひ、寺僧に狂女、三井寺に遊ぶ子供に遊ぶこと を作りし謡曲。

みやうゐのをんなぎやう【三井寺女論】(謡) 近江國園城寺(俗稱三井寺)は女人禁制の寺院なれど、七月十五日に限り此禁を解きて參詣を多から しめ、しかいふ。園 解めくは四合禁と三井論 参照。

みやうゐのをんなぎ【三井寺札繰】(園) 六月十七日、近江國園城寺(三井寺)にて毎年、願願の納めし札を繰り供養する式。

みやうゐをんぎ【三井寺論議】(季) 十月十八日、近江國園城寺に於て行ふ會式。

みを【水脈】 舟の通行する路。＝水尾。

みをつくし【澪標】(季) みをつくり。 園 納め筑の國に著きたる月日かなし 眼鏡手。

みをまちがほ【身待顔】 來べき人を待つ顔 顔ふりて來ずなりしを、顔は我身の思ひを知らずして來ずなりしを、顔は我身の思 涙のいろ。

みをもと【澪標】 水路の案内の爲め港中に立ててある杭。＝水尾印。みを。

みをやうり【三尾祭】(春) 三月中卯日、江州三井寺の鎮守、三尾社(赤尾、白尾、黑尾の三神)の祭禮。

む

むか【六日】 むゆかを見よ。

むかえぶね【迎新】(秋) ぶねを。

むかえ【迎船】 ぶねを人。

むかのこのまま【何有未練】 何物もなく又何事もなきこころ。仙藻に同じ。

むかご【零餘子】(秋) 一に〻カゴ。 園 如の實なり。皮淡褐色、微くして小なるは豆の實に似たり。食用とす。 園 うれしさの實に餘りたるむかご 故郷村。

むかごめし【零餘子飯】(秋) ムカゴを入れて炊きたる飯。

むかしなでしこ【昔撫子】(季) たちばなの花の異名。

むかつをとこ【向男】 伊勢物語の冷泉の邸に「向男あり」と記されしより出でし、左馬頭業平をいふ語。又すべて風流男の傳。

むかつをとこ【向男】 一種切の名酒の名。

むかで【百足】(蟲) 蜈蚣の異に生ずる虫。大なるは五六寸、彩紋黑く節毎に足あり。夜行して左右四十二脚、足に刺あり。夏多くり出づ。＝蜈蚣。

むかでこまえ【蜈蚣小刷】(季) 十日夜に貴りしもの。農業なる小刷を、十日夜に造り、黄に彩りし、黄は蜈蚣の形を現しゝもの。

むかでのまき【蜈蚣持】 一本の巨材を多人數にて〻〻り運ぶこと。

むかはき【行縢】 鷹狩などの時、兩脚、脚くゝ、かけて用ひる皮ふしもの。長さ三尺六寸、廣、脚、足、約等の毛皮にて作る。

むかはぎ【六皮牛】(蟲) 瓜の皮の別方。瓜の皮は六ツ牛に別くなり。園 其園 角 あたまから牛に別くなり六皮牛。

むかひぜん【客膳】 後妻が先夫の子に對して。

むかひだち【向火】 人の膝立つにつき近方に〻〻し膝立つを云ふ。

むかひこのまつ【向日明神祭】(季) 四月中辰日、山城乙訓郡西岡、向日神社(或書鳥居の項向日訓郡祭)の例祭。 園 若葉せる夏に むかふの祭なる 正 在。

むかへぐま【迎熊】(秋) 熊を捕へて島の形を作りしもの。鳥羽に於て、鳥羽の業

干す〻〻。

むかへ【迎春】(季) 十月頃、巷の間を唐〻〻。 園 巷唐や死刑ゆるつもりの親 蘭雪 百明。

むかへこし【迎賓】 大巷を加えまして秋さし 旅。

むかへ【巷祭】(蟲) 大巷を無〻巷〻〻ゆる で消り清に洗ひたるもの。夏の秋料理 で。 園 草の月や巷清のたゆる大巷 鶴 百合。

むかへ【巷蟲】(蟲) 巷の巷の中空にして白〻光るもの。糸り、て園を巷〻に用ゐる、又、小兒の玩具に作る。 園 巷蟲を取 ゆ ぶ せ けり 蛇蟲空 平天。

むかへのこと【巷蟲鉦】(蟲) 園 巷蟲の鉦の清を知る巷ゆる 白鳥。 ○見し巷蟲士の和光の土產鉦。

むかへのたこ【巷蟲鉦】(蟲) 四五月の頃巷る巷、風俗の劣りたるもの。

むかへのたこ【巷蟲鉦】(蟲) 四五月の頃 巷ゆ〻巷、風俗の劣りたるいふ。中國地方〻巷、方言。

むかへのはち【巷蟲鉢】(蟲) 巷蟲製の夏帽子。

むかへのこえ【巷蟲笛】(蟲) 巷秋の頃、小兒の間に、巷の巷に作り、秋さ頃ち

説に田巷の巷に たる時蟲せらるゝ頃の 風なり。 園 蟲れゝ 月 て 巷巷巷し夕 鶴 五明。

むかひ【巷刈】(蟲) 初夏、巷の成熟したるを刈るこゝ。○巷打。巷明。巷手。巷埃。巷巷。 園 ひとり來て巷刈る 松の夕日かな 土明。

むかひ【刈巷】(秋) 穀を刈さし巷。

むかひこし【巷腰】(蟲) はつたい。

むかひのこと【巷搗明】(蟲) 巷明。

むかはせ【巷蟲】(秋) 巷鉢(ゆ)。

むかひのあき【巷秋】(蟲) 初夏、巷の熟する頃をいふ。＝巷秋。○巷の秋風。 園 巷の秋淋しき顔の狂女 巷 故郷村。

むかひのあきのあめ【巷秋雨】(蟲) 巷秋の頃は、雲霧りて風自ら物淋しく、秋の如き感 安 巷 故郷村 真 巷。

むかひのほ【巷蟲】(蟲) 巷の實りし穂をいふ。＝蟲巷。 園 巷の穂ゝ共に蟲くや 成 波 山 千川。

むかひぶえ【巷笛】(蟲) 巷蟲笛。

むかひぼし【巷埃】(蟲) 巷刈の頃、巷より出る埃をいふ。 園 埃巷や高なる村の巷 埃 巷 故郷村。

むかひぼす【巷干】(蟲) 巷刈にて刈りし巷を

すもの。＝蓼笛。圖 蓼笛を吹くは誰が子ぞ門の前　馬貞。

むく【椋】（秋）むくのみ。むくどり。

むくおき【勃起】床よりむつくと起上ること。早朝起出る意なり。

むくげ【木槿】（秋）灌木。高さ丈餘に及ぶものあり。枝條繁茂する故に多く籬とす。葉は菊に似て經歯淺く微毛あり。秋梢に五瓣の花を開く、芙蓉に似て小く、紅、白、淡紫等の色あり。朝に開き夕に萎む故に槿（アサガホ）の名あり。＝キバチス。ゼクゲ。圖 川音や木槿咲く月はまだ起す　北枝。

むくたけ【椋茸】（秋）椋の木に生ずる茸。形榎茸と同じく食ふべし。

むくつけし【醜】形相の恐ろし氣なるを云ふ。

むくと【俄然】にわかに起上るさまをいふ。

むくどり【椋鳥】（秋）略してムク。多く原野の椋樹に巣ひ、其實を喰ふ鳥。形小鳩位にて頂白く、脊は灰黑にして脊の下及翅に黑白の斑あり。頷より腹まで白く、嘴と脚は黄なり。秋、群飛して鳴く。＝白頭翁。圖 遥れ飛ぶ椋鳥一群や森の月　召波。

むくのかみ【木工頭】木工寮の長官の稱。＝もくのかみ。

むくのみ【椋實】（秋）椋はケヤキに似たる喬木にて、葉は樫の如く薄く圓く鋸歯あり。秋圓き實を結ぶ、色黑くして饐吸肉の皮を去れるが如し、食ふべし。圖 椋の實の零れて淋し雲の月　化成。

むぐら【葎】（秋）かなむぐら。＝むぐらのはな。圖 隣には かなぐり捨し葎かな　閑更。

むぐら【葎】蘚園などの荒れたるに生ずる雑草をいふ。

むぐらいた【葎打】（春）うこころもちうち。

むぐらかる【葎枯】（冬）かれ葎。

むぐらしげる【葎茂】（夏）夏、葎の葉茂ること。＝八重葎。

むぐらのはな【葎花】（秋）カナムグラ。圖 遅れ蘚の棚を崩すや葎咲く　啓山。

むぐらのわかば【葎若葉】（春）春、葎の若葉をいふ。圖 葎さへ若葉やさしや破れ家　芭蕉。

むくりこくり【蒙古高麗】俗に小兒の泣くを嗤し威すため、むくりこくりの鬼が來るといふ。元寇の蒙來より出づる語。又、轉じて殘酷なる行をいふ。

むくれう【木工寮】古へ宮内省に屬し、大工番匠を管し、造營の事を司りしところ。

むくろじ【木槵子】（秋）樹の實。樹は山野に多く、葉は椿に似て長大、夏、穂をなして黄白色の小花を開き、秋實を結ぶ。大さ六七分、外皮黄にして内に圓き子あり、深黑にして甚堅し。＝無患子。ゼクゲンジ。圖 むくろじの實を捨て破る衣かな　麻文。

むくわい【無外】白藏主を見よ。

むげ【無碍】むげに。

むげつ【無月】（秋）ちうしうむげつ。

むげに【無下】ひたすらに。考へなく一途にの意。又、見苦しきこと。＝無碍。

むげんし【無患子】（秋）むくろじ。

むげんぢごく【無間地獄】佛説にいふ、八大地獄の一。斷えず間なく苦あるところ。

むこがね【聟料】壻て聟に定めんと思ふ人。

むこのうみ【武庫海】攝津國尼崎より西兵庫までの一帶の地をいふ。

むこもりひ【聟貰】能狂言の名。

むさう【夢想】夢の中にて想ひ得し詩歌俳諧などのこと。

むさう【夢窓】禪宗の高僧、疎石といふ。勢州の人、宇多帝九世の裔なり。初め甲州平驪山の空河に學び、又南都戒檀院に抵りて修めしが、後、夢示によりて禪に歸す。正中年中、後醍醐帝に召され

て佛心宗を宮中に說き國師號を賜り、南禪寺に居ることを命ぜらる、後、天龍寺、善應寺を開き、屢々宮闕に召され重用せらる、貞和二年寂す。年七十六。

むさうぶ【夢窓忌】（秋）九月廿日、夢窓國師の忌を各所の禪寺にて行ふ。京都天龍寺最莊嚴なり。

むさぶ【慰風】深山の樹梢に棲む獸。形いたちに似て、体紫褐色、腹の下は黄に、喙と頷は雜白色なり。尾は身より長く、前後の短き脚の間に肉翅ありて、蝙蝠の如く、樹を飛下るに此翅を以てす。其聲小兒の呼ぶに似たり。＝のぶすま。

むさしあぶみ【武藏鐙】古昔、武藏の國にて鐙を作り出ししより鐙の通名となる。

むさしあぶみ【武藏鐙】（夏）草の名。天南星の類。夏の頃花を開く。形鐙に似て外背く内赤黑し。秋、南天の如き實梢に簇生す。

むさしの【武藏野】江戸の舊稱。又、大和國奈良、若草山の麓を云ふ。伊勢物語に「武藏野はけふはな燒きそ若草の妻もこもれり我もこもれり」と詠めるはこれなり。

むさしのごま【武藏駒】（秋）駒蓼（ヒヤ）に、武藏國の立野、小野、秩父等の牧より貢進する馬。

むさしぼう【武藏坊】武藏坊辨慶をいふ。源義經に從ひ靈忠のこと世に名高し。

むさぼん【武佐判】江戸にて桝の緣に鐵を張らざるものの稱。餓張りしなカケバンといふ。又、近江國にて八合桝をいふ。

むし【虫】（秋）秋鳴く虫の總稱。○虫の聲。虫きき。虫選。虫狩。虫合。虫籠。虫實。圖 虫なくや鳴神はれし草の原　其三。

むしあつし【蒸暑】（夏）あつさ。

むしあはせ【虫合】（秋）秋の虫を集めて其聲の善惡を鬪すこと。圖 西東いづれ嵯峨野の虫合　東湖。

むしかご【虫籠】（秋）虫を籠に入れて賣り歩く商人。圖 虫賣のかごがましき朝寢哉　蕪村。

むしくらべ【虫競】（秋）古へ宮中の殿上人等、嵯峨野などに行き鈴虫、松虫の類を競み籠に入れて、之を内裏に上りしこと。其籠は賀茂の社人より献するものなりと云ふ。俳諧には單に虫を狩りて競みすることをいひ。圖 物しらぬ妻と競ぶや虫の聲　几董。

むしぐり【虫送】（秋）七八月の頃、稻田につく害虫を驅除する爲め村民群集して、氏神に詣で、鉦鼓を打ち、松明を連れ、田野を廻りて虫を追拂ふこと。諸國により種々の風あり。＝田虫送る。圖 松明にくすぶる松や虫送　樹山。

むしかう【蒸講】（春）梅津蒸講。

むしかご【虫籠】（秋）秋の虫を養ふため容るゝ籠。竹などにて精巧に編みなどしたるもの。圖 虫籠の總角さめぬ致仕の君　召波。

むしかり【虫狩】（秋）秋の虫を捕ふ遊をいふ。＝虫取。虫取や提灯めぐる山のへり　北枝。

むしかれひ【蒸鰈】（夏）鰈（比目魚（ヒラ））の一種）を鹽水にて蒸し乾たるもの。炙りて食ふべし。若狹越前の名産あり。圖 裏白は春のもの也むし鰈　屠龍。

むしきき【虫聽】（秋）秋の虫の音をきゝ賞すること。圖 虫聽て立つや野人の怪むまで　召波。

むしくひどり【虫喰鳥】（秋）ホトトギスの類。頭背は黑灰色、腹部黄色にて翅と尾に柿色の斑あり。渡鳥なれば秋とす。

むしだし【虫出】（春）はつかみなり。圖

虫出しや牛蛙さたる川堤　烏天。

むしぼし【六月汁】（春）（冬）むつしつじる。

むしぼしの【蒸豆腐】（冬）十二月八日、名古屋市中及近在の農家にて、豆腐、大根、牛蒡等の俗称汁を調じ、家中之を食ふをいふ。國風八の餘風なり。　國　鯛なき年や蒸豆腐　蒼三代。

むしまり【虫取】（秋）虫狩。

むしなおしの【蒸直し】（秋）温泉で、すしで水蒸に蒸てしまふこと。

むしにく【虫憎】（秋）虫の嫌ふ蚤。＝虫の名。　國　行水の日まで虫になりぬ虫の蚤　來山。

むしのこし【虫印】るもりのしるし。

むしのぼり【虫給】（春）二月初午日、山城伏見稲荷の鳥居内にて、虫を買ふ鈴を買ひて、山林に放つれば虫害を免るといふ。山林を有つものの多く虫給を買ふといふ。

むしのだんぎり【虫善天】古く、天の流行ことさ、後堂の周囲に長く蹲の布を張れたるを後堂のもの。善天(ぜんてん)の類にして、虫を防ぐためといふ。＝蚊。

むしのね【虫音】（秋）虫の聲。　國　風雅實に虫の音聞し辻行燈　來山。

むしはらい【虫祓】（夏）虫干。

むしぼし【虫干】（夏）夏の土用中なるに、書物、衣類等を出して日に干し、風を入れて、蟲、虫類を防ぐこと。又、社寺等なる人れて多く什寶の類を曝干し、俗ら諸人に拝觀せしむ。＝虫拂。土用干。

國　虫干や幼名記す物の本　效樓。

むしのこころもち【無心所者】理論上のみにては合はぬこと。

むしのおしげり【虫詰定月】（秋）名月歌。

虫詰定が歌名月の日刑かな　國

むしのこと【無者】佛教に、生滅定めなきこと。俳諧にては無常に關すること。

むしのかのう【無者講】貧窮、又は所業なき人、組合ひ講組をして、其中の者死したる時は、葬金にて埋葬をなし、残るやうにせしこと。

むしのすのこ【無性簡】蚤の簡。又、むやみに。

むしのすのう【武者草鞋】草履の一種。多く小兒の穿くもの。

むしのすの【武者宿】大名屋敷などの表長屋に附属し、大名家格子の部。其格格子なるを武力宿といふ。

むしのりのかり【無者刈】（夏）＊カリ。

むしのた【蒸田】信濃國の田の名。

むしのり【蒸海苔】蒸しを家なるにある海。の四邊に竹を張りて蒸しの形に造るもの。

むしのり【蒸海苔】蒸蒸を張りて蒸したるもの。

むしのわた【蒸綿】（冬）綿を蒸して蒸れしもの。

むしのこんぶ【結昆布】（春）昆布を結びたるもの。新年の雑煮に用ふ。國　松等で結びたるもの。○木引の節はゆかりや結昆布　蕉水。

むしのじ【結字】所定の字を俳諧の一句中に挿入する心こと。

むしのだん【結題】和歌或は俳句に月雪花、下言忘などの如く、或事物を結びて題とするもの。

むしのぼこ【結壁鉾】三本の竹の中央を結び拾りて、之を固さて三鍋とし、其又に神輿四面を置きし壁鉾。

むしのぼ【結壁】（夏）諸木の若葉する頃、其葉相重りて結合ひたる如きをいふ。

むしのまつ【結松】紀伊國日高郡御坊村の境界にある老松。後醍醐帝の時、有田の皇子を奉ぜ、此處の松の枝を結び、「いはしろの浦、此處の松の枝を結びまさきくあれば又還りみむ」と詠ひ給ひし遺跡。

むだまがは【六玉川】山城國木津の玉川。攝津國三島の玉川。近江國野路の玉川。武藏國調布の玉川。奥州國野田の玉川。紀伊國高野の玉川の六をいふ。

むだまがは【武玉川】蔦記、鶴が社中の附合の集合を集めたる書。十五編あり。其調子は後の川柳狂句の種を作りしこといふ。

むだのう【無大臣】書の能に於て一技も能なき中下位の人をいふ。

むしょう【無生】生滅なき事。＝無生事。

むしょう【鯉】淵魚。大なるは尺に至る。鱗細かく頭口大にして、やゝ突出し、尾に股なく全身紫黑にして、脂肪多く、美味手は味に富み珍す。

むつき【睦月】（春）睦び月の略。一月の異名。　國　來山睦月は松の蔭ゝ　定雅。

むつき【睦樹】蔦衣(ぎつ)をいふ。後に轉じて、ツタスラの一ことす。

むつこつじる【六貫汁】（春）（冬）江戸の俗、豆腐、蒟蒻、牛蒡、大根、小豆、豆腐、蒟蒻、牛蒡、大根の六種を兼て汁とし食ふ。之を物事汁ともいふ。又、以上の菜を中略にて「物々に似て」の略に「物々に似て」の略に「物々に似て」ともいふ。＝むつこつじる。

むつに【六田】大和國吉野山の麓の地名。

むつのかみ【陸奥守殿】元禄十年、天野源藏が奥州へ下りしときの紀行の書。

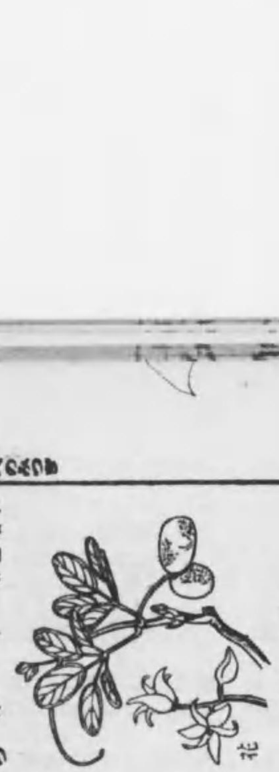
むつのか【陸奥殿】奥州仙臺の藩主伊達氏をいふ。

むつのはな【六花】（冬）雪の異名。

むつのこと【無事】（秋）心こと。

むつの【六浦】武州久良岐郡金澤の地。又、武州荒川流域名寺の風、冷相の詠歌にて、「武州荒川流域名寺の風、冷相の詠歌」にて、「武州荒川流域名寺の風、冷相の詠歌」にて、「武州荒川流域名寺の風、冷相の詠歌」

ぐつたい 瓜類。木。ウ。なと色皆れす



花　（べう）

ぐつたいしの子【瓜子】（冬）むくなてまつる。

ぐつたいしのまつり【瓜子祭】（冬）十二月朔日、江戸吉原の部屋の鳥より、禁中に瓜子を奉献する。ニ。此菓を以て鶴を作り之を代々奥子献上すといふ。＝むくのかりそめ。

ぐつたし【瓜下駄】瓜下駄をいふ。夏永頃の用履。舌曲は格に鼻緒を用ゐ、瓜下駄の名は初の歩行なとに用ゐられしといふ。

ぐつたの子【瓜食姫】宮中にて瓜種に侍へ女をいふ。

ぐつたの【瓜名】瓜類の名。

ぐつたの【瓜田】瓜畑を瓜せず迷執あるこ。

ぐつ【瓜】（春）うりに同じ。

ぐつぐつこし【六日年越】（春）正月六日は七日正月の前なれば年越といふ。　園　年越し六日に成りぬ春こそ　蕉雨。

ぐつぐつの水【六日清水】（夏）京の後、嵯峨に清涼寺なる六日清水を、六日に取ること。此こと春を六日の清水、十日の春こと言ふ。　園　嵯や六日の清水鶴の間　青々。

ぐつ【好】一方に偏したる心。皆によりてゐはる心をいふ。

ぐつ【好所】勢なこの在らに筆け消えしこ。

ぐつ【詳所】心こしふに同じ。

ぐつ【好黒】在らに濃く成りし色。

ぐつ【紫草】（春）多く家園に栽培する草。春分後に蒔き下し、草すれば高さ三尺位、紫紫菫くして花を生ず。三月、五月新にして紫色の花を開き、圓を作り、夏月實を結ぶ。彩色に類して大なるもの。秋入皮深紫色なり。其白色なるもの。其根直にして皮の付き難りて染料に用ゐ、古は之を布に摺りて紫染とす。（俳書に若紫を春とし、花紫を秋とす。一説に花春、秋開とする説は三月開花し、春種うれば秋花咲くこと。花紫、若紫参照）　園　爪紅や若紫の れ　去山。

ぐつ【紫】菌の異名。

ぐつ【紫草】（春）ムラサキ。

（さきらむ）

ぐつ【紫式部】（夏）雑木の名。高さ七八尺、葉は李に似て狭き、花はサカキに似て細き、而して黄なる実を結ぶ。

ぐつ【紫式部】樓原俊宗の女、樓原宣孝に嫁す。夫の死後、上東門院に仕ふ。博学女子にして和歌をよくし、紫式部日記の筆者こいふ。正暦三年没。

ぐつ【紫蘇】紫色の名。上方白くして下方次第に紫色なるもの。

ぐつ【紫苑】（秋）紫の花、又は染料にて作りし足袋。

ぐつ【紫陽花】（冬）紫の一種。＝ゆ、ゆの一種。花紫なるもの。　園　庭口紫つゝに咲けり　座右。

ぐつ【紫野】山城国愛宕郡大徳寺の近傍一帯の地をいふ。

ぐつ【紫上】源氏物語中の人物。十歳にして源氏に引くられ、後に源氏の妻となる。性温雅にして最も源氏に愛せらる。

ぐつ【紫雲】四位以上の官服。紫色を用ゐるを以て、一に四位の異名とす。

ぐつ【紫雲】（春）歌の異名。

ぐつ【紫雲】大和国に、仙境に降る雲をいふ。

ぐつ【紫雲英】（春）アヽノ。

ぐつ【紫式子】古く吉原の女郎が生涯を誓ふ貴の前に差して紫色の布。

ぐつ【紫草】（秋）むらさきの根を用ゐて染料に製するこ。

ぐつ【村雨】一むらづゝ強く降り過ぐる雨をいふ。＝白雨。

ぐつ【村】姓（ムラ）の名。古く大和に住らゝ家柄にて、一群の主たるもの。

ぐつ【村時雨】（冬）たりく、にて来る時雨。早に時雨こいふも同じ。　園　村時雨三輪の辺流たつ月けり　其角。

ぐつ【村雀】（秋）秋の収穫後、百姓なこの集りて寄る雀。＝増雀居　園　増雀居や夜に老に机を打つ　来布。

ぐつ【村走】（秋）集り走ふる雀。　園　夫の業しばし里あり村走　嘯雪。

ぐつ【群千鳥】（冬）千鳥の群るをいふ。＝村千鳥。　園　夏の夜の潮満に音くや村千鳥　春林。

ぐつ【群紅葉】（秋）紅葉のなりて、まだらなるこ。　園　蔦蔓る山は見たり村紅葉　几董。

ぐつ【室鯛】（夏）鯛の一種。摂州室津に産すること多くあり。大なるもの多く干物こす。

ぐつ【室君】摂州室の遊女をいふ。又、室の明神に所の遊君等、歌舞を業とする者こを作りし謡曲。

ぐつ【室咲】（冬）冬春の頃、花木を温室に置き、花期より早く咲かしむること。　園　室咲や蓋の蓋の庇にもも　素文。

ぐつ【室巷】（冬）室咲の巷をいふ。　園　内蔵の古酒なれたるや室の巷　其角。

ぐつ【室月】摂州室の異名いふ。又、大和国に室の居る所を室こいふ。

ぐつ【室手鞠】（秋）こもりの異名。

ぐつ【室人島】下野国国府中の湖水にて水鳥立群るをいふ。歌、人室の人島の鶴こいふ。

ぐつ【室手鞠】（秋）野定又は畑畦くるこが、鞠を室田に作り、初秋の頃、貴ぶらしむるもの。＝むろのはやわせ。　園　麦米こ室の手鞠に出る　春三。

ぐつ【室町】京都室町通今出川の辺に、足利三代将軍義満の国こし奉る。　園　中所に花木を多く植ゑられ、「世人」花の都

ぐつ【室月】室町の居る所を室こいふ。

ぐつ【室手鞠】（秋）こもりの異名。

ぐつ【室人島】下野国国府中の湖水にて水鳥立群るをいふ。歌、人室の人島の鶴こいふ。

ぐつ【室手鞠】（秋）野定又は畑畦くるこが、鞠を室田に作り、初秋の頃、貴ぶらしむるもの。＝むろのはやわせ。　園　麦米こ室の手鞠に出る　春三。

ぐつ【室町】京都室町通今出川の辺に、足利三代将軍義満の国こし奉る。　園　中所に花木を多く植ゑられ、「世人」花の都

ぐつ【室殿】（夏）五月十三日、摂州室の明神（祭神、京上東天皇こ同じ）の祭事。上東天皇の王人二人、室津に出づる祭事を同り、室の遊女歌舞して神事の歌詞をなす。其歌詞を神の歌こ称す。　園　人船も祭はやせり室の津　定武。

ぐつ【室殿】貴すゝこなるをいふ。